

関越自動車道関係発掘調査報告書

いわっ ばら
岩原 I 遺跡
じょう りん づか
上林塚 遺跡

1990

新潟県教育委員会

関越自動車道関係発掘調査報告書

いわっ ばら
岩 原 I 遺 跡
じょう りん づか
上 林 塚 遺 跡

1990

新潟県教育委員会

序

昭和60年10月に全線開通した関越自動車道は、上越新幹線と共に新潟と首都圏を結ぶ一大動脈として本県の発展に寄与し、経済・文化活動に及ぼす影響は多大なものがある。しかしその反面、開発行為の増加による自然破壊や文化的な一化などによって、地域社会で永々として受け継がれてきたものが失われてきていることも、また事実である。

関越自動車道の通過する地域には、先人達の生活のあかしとなる数多くの遺跡が存在している。そのうち路線にかかる遺跡については、建設工事に先立つて記録保存のための発掘調査が実施され、調査報告書として刊行されている。調査によって明らかにされた成果は、学術研究に供されるのはもちろんのこと、地域の歴史や文化を見つめ直すことによって、より良い地域社会を創造していくための資料として、有効に活用しなければならないものと考えている。

本書では、岩原I遺跡・上林塚遺跡の発掘調査によって得られた、多くの貴重な事実を報告している。その中でも特に、岩原I遺跡で検出された133基に及ぶ縄文時代の陥穴状土坑と、両遺跡で出土した縄文時代早期の土器群については、他地域との比較・検討によりその重要性が明らかにされた。今回の調査成果が、今後の新潟県における縄文文化研究に資すると共に、ひいてはより具体性のある歴史資料として、広く役立てられることを願うものである。

最後になったが、発掘調査に際して多大なる御協力・御援助を賜った湯沢町・塩沢町の両教育委員会並びに地元有志の方々、また、調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮を賜った日本道路公団新潟建設局・同六日町工事事務所の各位に対し、深甚なる謝意を表する次第である。

平成2年3月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

例　　言

1. 本報告書は新潟県南魚沼郡湯沢町大字土樽字市上に所在する岩原I遺跡、同町大字土樽字川原に所在する上林塚遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は関越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、岩原I遺跡が昭和57年度に、上林塚遺跡が昭和59年度にそれぞれ実施した。
3. 整理および報告書作成にかかる作業は昭和63年・平成元年度に実施し、新潟県教育庁文化行政課理藏文化財係職員および曾和分室作業員がこれにあたった。
4. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて新潟県教育委員会が保管・管理している。遺物の注記号は岩原I遺跡を「WI」、上林塚遺跡を「JR」として出土地点を併記した。
5. 本書の作成は北村亮(文化行政課文化財専門員)が担当したが、岩原I遺跡の遺構は佐藤俊幸(同文化財専門員)がこれにあたった。このほか、岩原I遺跡の花粉分析についてはパリノ・サーウェイ株式会社、年代測定は学習院大学木越邦彦氏、火山灰分析は群馬大学新井房夫氏、黒曜石の産地同定は野田市郷土博物館金山喜昭氏ほかにそれぞれお願いした。
6. 土器の実測図および拓本断面図の網目は、胎土に纖維を含んでいることを表わしている。また、石器の使用痕については種類ごとに異なる網目で表示し、各図版に凡例を付した。
7. 各遺跡における遺物番号は土器・石器ごとに通し番号とし、挿図と写真図版の番号は一致している。
8. 石質の鑑定については、新潟県立教育センター地学研究室村松敏雄氏に御教示を賜った。
9. 文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、第III章5を除いて卷末に一括して掲載した。
10. 本書は北村を中心に分担執筆したもので、ほかに藤巻正信(文化行政課主任)、高橋保(同主任)、佐藤俊幸(同文化財専門員)、岡本郁栄(前文化行政課副参事、現県立新潟東高校教諭)がこれにあたった。分担は第II章・第III章2Aが岡本、第III章3A-C・第V章1が佐藤、第III章4A-5)~6)・第V章3が高橋、第III章4B-12)が藤巻で、それ以外については北村である。なお、本書の編集は北村が行った。
11. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。(敬称略、五十音順)
阿部朝衛・池田 亨・石坂 茂・石橋宏克・今井正文・小熊博史・国島 聰・駒形敏朗・齊藤基生・佐藤雅一・関根慎二・谷藤保彦・寺内隆夫・富樫雅彦・早津賢二・毒島正明・細矢菊治・丸山雄二・領塚正浩・渡邊朋和

目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制と整理作業	2
A. 調査体制	2
B. 整理作業	3
第 II 章 遺跡の環境	4
1. 位置と地理的環境	4
2. 周辺の遺跡	6
第 III 章 岩原 I 遺跡	9
1. 調査の概要	9
A. 調査の方法	9
B. 調査の経過	12
2. 層序と遺物の出土状況	13
A. 層序	13
B. 遺物の出土状況	15
3. 遺構	17
A. 陥穴状土坑	17
B. フラスコ状土坑	24
C. その他の土坑	25
D. 壁穴状遺構	25
E. 土器集中区	25
F. 掘立柱建物	25
4. 遺物	46
A. 土器	46
B. 石器	82

5. 各種分析結果	118
A. 花粉分析	118
B. 放射性炭素年代測定	120
C. 火山灰分析	120
D. 黒曜石产地同定	121
 第 IV 章 上林塚遺跡	122
1. 調査の概要	122
A. 試掘調査	122
B. グリッドの設定	123
C. 調査の経過	123
2. 層序	125
3. 遺構	127
A. 配石	127
B. 土坑	131
4. 遺物	138
A. 土器	138
B. 石器	148
C. その他の遺物	154
 第 V 章 調査の成果とまとめ	165
1. 陷穴状土坑について	165
2. 繩文時代早期の土器について	170
3. 繩文時代中期の土器について	182
要約	185
引用・参考文献	186

挿 図 目 次

第1図	傾斜区分と遺跡分布(旧石器・縄文)	5
第2図	位置と周辺の遺跡(旧石器・縄文)	7
第3図	旧石器時代文化層確認位置	9
第4図	岩原I遺跡周辺の地形図	10
第5図	岩原I遺跡グリッド設定図	11
第6図	調査(左 調査風景、右 引き渡し後の土取り風景)	12
第7図	土層柱状図(C 35)	13
第8図	地形断面と層序	14
第9図	岩原I遺跡遺物分布図	16
第10図	陥穴状土坑配置模式図(A・B・C I・C II類)	19
第11図	陥穴状土坑配置模式図(D I・D II・E I・E II・F類)	21
第12図	陥穴状土坑法量分布	24
第13図	岩原I遺跡遺構全測図(1)	29
第14図	岩原I遺跡遺構全測図(2)	30
第15図	岩原I遺跡遺構全測図(3)	31
第16図	岩原I遺跡遺構全測図(4)	32
第17図	陥穴状土坑(1)A類	33
第18図	陥穴状土坑(2)A類	34
第19図	陥穴状土坑(3)A類	35
第20図	陥穴状土坑(4)A類	36
第21図	陥穴状土坑(5)B類	37
第22図	陥穴状土坑(6)C I・C II類	38
第23図	陥穴状土坑(7)D I類	39
第24図	陥穴状土坑(8)D I・D II類	40
第25図	陥穴状土坑(9)E I類	41
第26図	陥穴状土坑(10)E I・E II・F類	42
第27図	フ拉斯コ状土坑・その他の土坑(1)	43
第28図	その他の土坑(2)	44
第29図	その他の土坑(3)・陥穴状遺構	45
第30図	出土遺物の内訳および各群土器の構成比	46

第31図	第I～III群土器グリッド別分布図	50
第32図	第IV～VI群土器グリッド別分布図	60
第33図	第I群土器(1)	65
第34図	第I群土器(2)・第II群土器(1)	66
第35図	第II群土器(2)	67
第36図	第II群土器(3)・第III群土器(1)	68
第37図	第III群土器(2)	69
第38図	第III群土器(3)	70
第39図	第III群土器(4)	71
第40図	第III群土器(5)	72
第41図	第III群土器(6)・第IV群土器(1)	73
第42図	第IV群土器(2)	74
第43図	第IV群土器(3)	75
第44図	第V群土器(1)	76
第45図	第V群土器(2)	77
第46図	第V群土器(3)	78
第47図	第V群土器(4)	79
第48図	第V群土器(5)・第VI群土器(1)	80
第49図	第VI群土器(2)・第VII群土器・底部圧痕	81
第50図	剥片接合資料	94
第51図	ナイフ形石器・尖頭器・石鏃・石錐・石匙	98
第52図	匙状石器	99
第53図	打製石斧(1)	100
第54図	打製石斧(2)	101
第55図	磨製石斧・不定形剥片石器(1)	102
第56図	不定形剥片石器(2)	103
第57図	不定形剥片石器(3)	104
第58図	不定形剥片石器(4)	105
第59図	不定形剥片石器(5)	106
第60図	不定形剥片石器(6)・楔形石器・使用痕のある剥片	107
第61図	三角錐形石器	108
第62図	環器	109
第63図	石核	110

第64図	特殊磨石(1)	111
第65図	特殊磨石(2)	112
第66図	特殊磨石(3)	113
第67図	磨石類	114
第68図	石皿・台石(1)	115
第69図	台石(2)	116
第70図	砥石・板状石器・块状耳飾・块状耳飾未成品・擦切具・滑石原石・その他	117
第71図	上林塚遺跡周辺の地形図	122
第72図	調査風景	123
第73図	上林塚遺跡グリッド設定図	124
第74図	上林塚遺跡土層柱状図	126
第75図	上林塚遺跡遺構全測図	127
第76図	配石集中区実測図	133
第77図	配石(1)	134
第78図	配石(2)	135
第79図	配石(3)	136
第80図	土 坑	137
第81図	出土遺物の内訳および各群土器の構成比	138
第82図	上林塚遺跡遺物分布図	139
第83図	第I・II群土器	146
第84図	第II・III群土器	147
第85図	第III-VI群土器	148
第86図	石鏃・打製石斧・磨製石斧	157
第87図	不定形剝片石器(1)	158
第88図	不定形剝片石器(2)・使用痕のある剝片	159
第89図	礪器(1)	160
第90図	礪器(2)・石核(1)	161
第91図	石核(2)	162
第92図	特殊磨石	163
第93図	石皿・台石	164
第94図	各地における階穴状土坑の法量分布	167
第95図	新潟県内における押型文土器変遷(案)	174
第96図	岩原I遺跡における中期土器編年(案)	183

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧(第2図に対応)	6
第2表	岩原I遺跡遺構一覧表	26
第3表	岩原I遺跡石器種別出土数	82
第4表	岩原I遺跡石器観察表	95
第5表	岩原I遺跡花粉・胞子化石産出数	119
第6表	岩原I遺跡土坑覆土中の火山灰分析表	121
第7表	上林塚遺跡石器種別出土数	149
第8表	上林塚遺跡石器観察表	155

図 版 目 次

図版1 遺跡周辺空中写真

岩原I遺跡

図版2 遺跡遠景 遺跡遠景 遺跡と東側の沢

図版3 E~I・I~16付近完掘状況 C~K・24~35付近完掘状況 D~F・24~37付近完掘状況

図版4 1 調査風景 2~5 土壌 6 ローム土層 7 旧石器時代文化層確認状況
8~10 遺物出土状況

図版5 1 遺物出土状況 2 F~H・1~5付近完掘状況 3・4 壱穴状遺構完掘状況 5 1号掘立柱建物跡 6~8 陽穴状土坑(A類)配列状況

図版6 遺構 1・2 TPA-1 3・4 TPA-3 5 TPA-8 6 TPA-18
7・8 TPA-22 9・10 TPA-23

図版7 遺構 1・2 TPA-28 3・4 TPA-31 5・6 TPA-32
7・8 TPA-40 9・10 TPA-43

図版8 遺構 1・2 TPA-44 3・4 TPA-47 5・6 TPA-48
7・8 TPA-50 9 TPA-52 10 TPA-55

図版9 遺構 1・2 TPB-2 3 TPB-3 4 TPB-4 5・6 TPB-5
7・8 TPB-6 9・10 TPB-7

図版10 遺構 1・2 TPC I-3 3・4 TPC I-5 5・6 TPC I-6

- 7・8 TPC I-8 9・10 TPC II-2
図版11 遺構 1・2 TPD I-1 3・4 TPD I-4 5・6 TPD I-6
7・8 TPD I-8 9・10 TPD I-13
図版12 遺構 1 TPD I-16 2 TPD I-20 3・4 TPD I-21 5・6 TPD I-24
7・8 TPD I-25 9・10 TPD II-8
図版13 遺構 1・2 TPE I-1 3 TPE I-2 4 TPE I-3 5・6 TPE I-6
7・8 TPE II-1 9 TPF-1・2 10 TPF-1
図版14 遺構 1・2 FP-1 3・4 FP-4 5・6 FP-5 7・8 FP-9
9・10 FP-11
図版15 遺構 1・2 P-12 3・5 P-8 6～9 P-13
図版16 土器 1・2 第I群1類A 3・4 第I群1類B 5 第I群2類A
6 第I群2類B・C
図版17 土器 1 第II群1類A 2 第II群1～3類 3 第II群3類
図版18 土器 1 第II群3類 2 第II群4類 3 第II群5類、第I・II群底部
図版19 土器 1 ミニチュア土器 2・3 第III群1類A 4 第III群1類B
図版20 土器 1 第III群1・2類 2・3 第III群3類 4 第III群4～6類
図版21 土器 1・2 第III群6類 3 第III群7類
図版22 土器 1 第III群7類 2 第III群3類 3 第III群底部 4 第V群4類
5 第IV群1～3類
図版23 土器 1 第IV群4類 2 第IV群5類 3 第IV群6・7類
図版24 土器 1 第IV群8～11類 2 第V群1類D 3 第V群1類E
4 第V群1類
図版25 土器 1 第V群1類 2 第V群1類G 3 第V群1類H
4・5 第V群2類A
図版26 土器 1～4 第V群2類
図版27 土器 1 第V群2・3・5類 2 第V群4類 3 第V群4類ほか
図版28 土器 1 第V群4類 2 第V群6類 3 第VI群
図版29 土器 1 第VI群 2・3 第VII群 4 底部圧痕 5 格条体压痕文陽型
図版30 石器 1 ナイフ形石器 2 尖頭器 3 石鑿 4 石錐・石匙 5 楔形石器
6 塗状耳飾 7 板状石器・塗状耳飾未成品 8 擦切具 9 滑石原石
図版31 石器 1 施状石器 2 打製石斧
図版32 石器 1 打製石斧 2 磨製石斧 3 不定形剥片石器I類
4 不定形剥片石器II類

- 図版33 石器 1 不定形剥片石器 III類 2 不定形剥片石器 IV類 a
3 不定形剥片石器 IV類 b
- 図版34 石器 1・2 不定形剥片石器 IV類 c
- 図版35 石器 1 不定形剥片石器 IV類 d 2 不定形剥片石器その他
3 使用痕のある剥片 4 三角錐形石器 5 碓器
- 図版36 石器 1 碓器 2 石核 3 特殊磨石
- 図版37 石器 1・2 特殊磨石
- 図版38 石器 1 磨石類 I・II類 2 磨石類 III類 3 石皿
- 図版39 石器 1 石皿未成品 2~4 台石
- 図版40 石器 1 砥石 2 剥片接合資料
- 上林塚遺跡
- 図版41 遺跡遠景 確認調査風景 発掘調査風景
- 図版42 配石群・礫検出状況 遺構完掘状況 C5配石群
- 図版43 1 C5配石下土坑群 2~5 土層 6・7 旧石器時代文化層確認状況
- 図版44 造構 1・2 1号配石 3 3号配石 4 5~8号配石 5 5号配石
6 5号配石下土坑 7 6号配石 8 6号配石下土坑 9 8号配石
10 8号配石下土坑
- 図版45 造構 1 9号配石 2 10号配石 3 11号配石 4 11号配石下土坑土層断面
5 11号配石下土坑 6 12号配石 7 12号配石下土坑内礫出土状況
8 12号配石下土坑 9・10 13号配石
- 図版46 造構 1 16号配石 2 16号配石下土坑 3 17号配石(一枚目)
4 17号配石(二枚目) 5 1号土坑 6 4号土坑 7 2号土坑土層断面
8 2号土坑 9 5号土坑土層断面 10 14号土坑土層断面
- 図版47 造構 1 9号土坑 2 11号土坑 3 13号土坑土層断面 4 13号土坑
5 17号土坑土層断面 6 17号土坑 7 21号土坑土層断面
8 23号土坑土層断面 9 27号土坑土層断面 10 27号土坑
- 図版48 土器 1 第I群1・2類 2 第II群1類
- 図版49 土器 第II群2・3類
- 図版50 土器 第III群1・2類
- 図版51 土器 1 第III群2~4類 2 第III群5類、第IV・V群 3・4 第VI群
- 図版52 石器 1 石鏃・石鏃未成品 2 打製石斧 3 磨製石斧 4 不定形剥片石器 I類
5 不定形剥片石器 II・III類 6 不定形剥片石器 IV類
- 図版53 石器 1 不定形剥片石器 IV類・使用痕のある剥片 2 碓器

図版54 石器 1 石核 2 特殊磨石 3 磨石類

図版55 石器 1 石皿 2 台石 3 その他の遺物

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

関越自動車道新潟線は東京都練馬区を起点とし、埼玉・群馬の両県を経て新潟市に至る、総延長約306km(長岡～新潟間は北陸自動車道と重複)の高速道路である。岩原I・上林塚遺跡に係る区間は、それぞれ昭和46年6月(湯沢町神立一六日町間)と昭和47年6月(湯沢町土橋～同町神立間)に工事施行命令が出され、法線内の遺跡分布・試掘調査等取扱いに関する協議が本格化したものである。

岩原I遺跡の立地する台地は、湯沢工事区内の本線と湯沢インターチェンジの盛土採取候補地として上げられており、昭和53年2月に日本道路公団新潟建設局(以下公団)から新潟県教育委員会(以下県教委)に埋蔵文化財の分布調査依頼があった。分布調査の結果、縄文時代の遺物が若干採集され、遺跡の取り扱いについて協議が必要となった。その後、昭和54年11月に県教委で再度分布及び若干の試掘を実施したところ、台地の西側半分では遺物・遺構とともに検出されず、土取り事業に支障はないとの判断された。但し、慎重を期するために表土層(ロームより上の耕植土層)処理にさいしては、県教委の立ち合いをする旨公団へ通知された。公団からは昭和56年度中に東側半分の発掘調査希望が出されたが、県教委の体制などから昭和57年度に持ち越すことでの協議が成立した。

台地西側半分の立ち合いは昭和56年8月に実施された。その結果、縄文時代早期の押型文土器片・剥片類や燒土様のものが検出され、この部分も調査範囲に含める必要があると判断された。これにより要調査面積は約25,000m²に及ぶこととなったが、現状が雜木林・茅原のため遺跡の規模や性格がなお不明確であることから、対象地全域に25%程度の確認調査を実施し、その結果によって範囲を確定し本調査に移行することとした。調査は昭和57・58年の二ヶ年にわたり、台地は中央から南側半分と北側半分とを分けて実施する予定で57年4月に着手したが、公団側の工事工程の都合から昭和57年度中に全城調査終了の希望が出され、県教委では体制などを検討した結果、これを了承することとした。

一方、上林塚遺跡については昭和54年11月に実施した関越自動車道法線内の分布調査で新たに発見された遺跡で、昭和55年3月に新発見の遺跡として公団に通知され協議対象になったものである。昭和56年11月に県教委が確認調査を実施した結果、縄文時代早期の土器片・石器や時期不明の配石遺構が検出され、約1,000m²(調査期間約一ヶ月)について本調査が必要と判断さ

れた。

公団からはできるだけ早い時期に調査を終了してもらいたい旨依頼があったが、県教委内で調整の結果、清水上遺跡(堀之内パーキングエリア)など大規模遺跡の調査を継続中であり、また、昭和57年には新たに岩原1遺跡や金屋遺跡(六日町インターチェンジ)の調査開始が予定されるなど、昭和57・58年度中の調査実施は実質的に無理であると回答された。その後、公団との間で度重なる協議が行われ、上記遺跡の調査進捗状況をみて昭和59年度に調査を実施することで合意した。

2. 調査体制と整理作業

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、それぞれ下記の体制で実施した。また、報告書については岩原1・上林塚の両遺跡が位置的・時期的に近接していることや、協議経過が重複することなどから合本とした。

A. 調査体制

【岩原1遺跡】 昭和57年4月19日～11月5日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 久間健二)

管 理 総括 南義昌(新潟県教育庁文化行政課長)

管 理 取代莊平(* 課長補佐)

庶務 飯口猛(* 主任)

若杉幸三(* 主事)

調 査 調査指導 金子拓男(* 理藏文化財係長)

調査担当 北村亮(* 学芸員)

調査職員 岡本郁栄(* 文化財主事)平成元・3転出

佐藤雅一(* 駆逐)昭和57・11退職

調査員 細矢菊治(新潟県文化財保護指導委員)

調査参加者 富樫雅彦(国学院大学々生)・小林裕(立正大学々生)・

中山真治(明治大学々生)

作業員 南魚沼郡湯沢町・塩沢町の有志

協 力 湯沢町・湯沢町教育委員会・塩沢町教育委員会

【上林塚遺跡】 昭和59年6月4日～7月7日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 久間能二)

管 理 総括 高橋 安(新潟県教育庁文化行政課長)

管 理 大越敏夫(✕ 講師補佐)

庶 務 高橋幸治(✕ 主事)

調 査 調査指導 中島栄一(✕ 埋蔵文化財係長)

調査担当 北村 亮(✕ 学芸員)

調査職員 石原 悟(✕ 文化財主事)昭和60・3転出

国島 聰(✕ 嘱託)平成元・3転出

作業員 南魚沼郡湯沢町の有志

協 力 湯沢町教育委員会

B. 整理作業

出土遺物の水洗・注記作業は、原則として各現場で発掘調査と並行して実施した。その後の本格的な整理作業は、両遺跡の発掘調査に係わった職員の転出・退職があったことや大規模な遺跡の整理作業が相次いだことなどから、整理体制の縮少を余儀なくされ当初の予定を大幅に変更せざるを得なかった。最終的に整理に要した期間は17ヶ月間となり、整理職員1～2名で文化行政課曾和分室において実施し、報告書は平成2年3月に印刷・刊行した。

遺物の復元・実測、写真撮影、図版作成および遺構図版の作成などの主要な作業は、北村(文化行政課文化財専門員)を中心に曾和分室の作業員がこれにあたったが、岩原1遺跡の遺構図版については佐藤俊幸(同課文化財専門員)が担当した。また、整理から原稿執筆に至る間に、文化行政課職員から協力を得た。

第II章 遺跡の環境

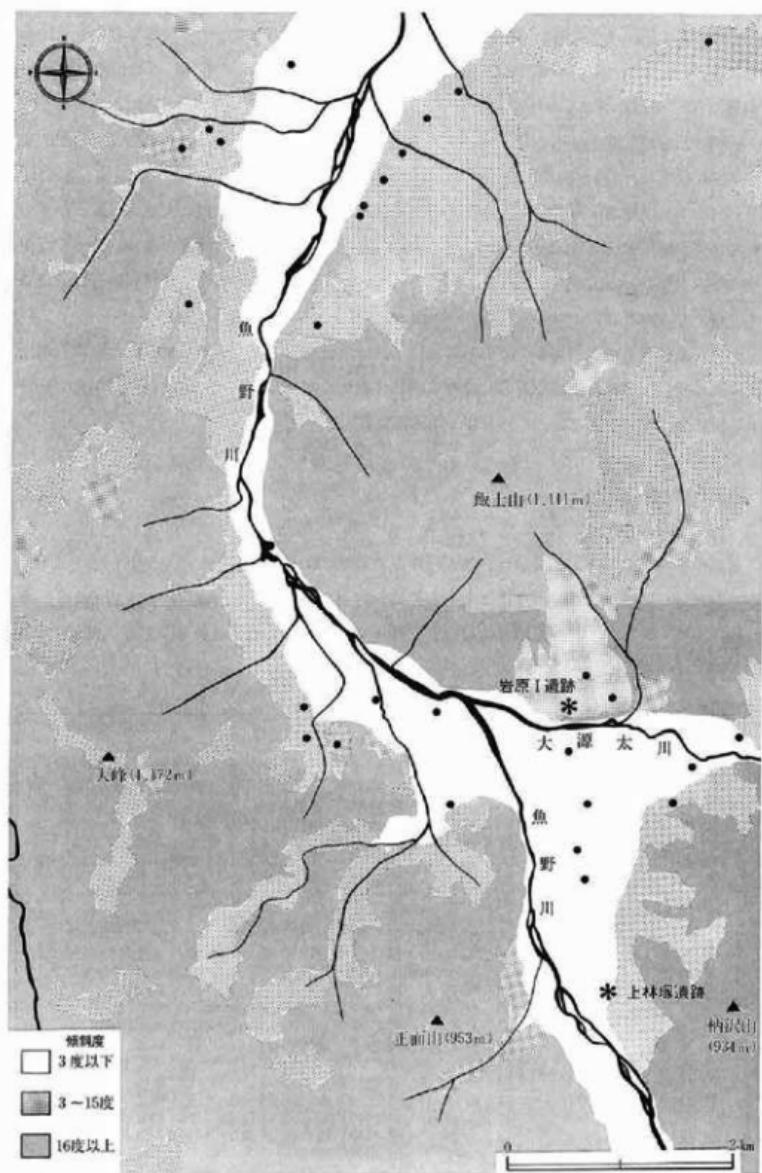
1. 位置と地理的環境

岩原1遺跡・上林塚遺跡はともに魚野川の源流に近く、上越国境地域の山岳地帯山麓に所在する。遺跡の位置する魚沼地方の地勢は、本県の石油構造といわれる南南西～北北東へ延びる明瞭な地質構造を反映し、主要な山並みや河川がこの地質構造に沿って尾根や谷を形成している。魚沼丘陵を挟んで信濃川とほぼ平行して南から北へ流れる魚野川と、北から南へ流れる波間川は北魚沼郡堀之内町で合流して流れを大きく西に変え、川口町で北流する信濃川に注ぎ、この三つの河川で大きなH形を構成している。

地形的には、新潟県を大きく東西に分ける中部平野山地丘陵区と東部山地区の境でもあり、中部山地丘陵区の縁辺部にあたる魚沼丘陵と、東部山地区の巻機山から谷川岳に連なる三国山脈が起伏に富んだ地形をつくりだしている。三国山脈と魚沼丘陵との境は、この地域を通る地質構造の新発田一小出構造線を反映して極めて直線的であり、標高1,800～1,900mあまりの古生代・中生代の古い地質からなる三国山脈と、新第三系から第四系の新しい地質で構成される標高1,000m以下の魚沼丘陵が、景観的にも異なった姿を見せている。

遺跡の近くに源を発する魚野川は、第四紀を通じて隆起を経て開拓する三国山脈・魚沼丘陵に挟まれ、相対的に沈降地帯を構成しており河岸段丘の発達は極めて悪い。隆起を続ける左右両岸の山脈・丘陵地帯から魚野川に流入する各支流は、河川勾配が大きく山麓地帯に扇状地を形成している。これらの扇状地の大半は沖積段丘化しているが、段丘崖の発達は悪く、三国山脈の駒ヶ岳・八海山山麓から流下する水無川のつくる八色原の扇端部に比較的大規模に存在するほか、塩沢町より上流部でわずかに認められるにすぎない。

岩原1・上林塚両遺跡の存在する地域(第2図)は、周囲を標高900～1,000m級の山並みに囲まれた小盆地状を呈している。盆地北側には第四紀の古い火山である飯土山が、魚野川の谷を塞ぐようにそびえ、南側は谷川岳に源をもち三国山脈を侵食した魚野川の谷が広がっており、飯土山山麓で東側の大源太山から流入する大源太川が合流して比較的広い平坦面を形成している。この小盆地の平坦面は、魚野川の氾濫源、沖積段丘面もしくは大源太川のつくりだした段丘面のみで、河川の両岸は主に斑紋岩・花崗岩・花崗閃緑岩など堅い岩質の急斜面となっている。しかし飯土山山麓では様相が異なり、大規模な火砕流による緩斜面が、山体北部の塩沢町五十島や舞子、東側の塩沢町奥添地牧場、南東部の湯沢町岩原スキー場などに発達している。



第1図 傾斜区分と遺跡分布(旧石器・縄文)

2. 周辺の遺跡

斜面先端部は魚野川や大源太川によって侵食され、比高5~50mの急崖をなしており一見段丘状の地形をつくりだしている。火碎流斜面は飯土山自身や他の火山の噴出した風化火山灰(ローム)層で厚く覆われており、信濃川流域の谷上・米原・貝坂の各ローム層に対比されている。ローム層とこれを覆う黒色土層の境界には、今から約11,000年前に浅間山の噴出した特徴的な草津黄色鉄石(YPK)層が挟在されていることが多く、鍵層として機能している。岩原I遺跡は、飯土山南東部山麓の火碎流斜面先端に立地しており、遺跡の南側と東側は大源太川およびその支流の奥添地川と比高約50mの急崖をもって接している。遺跡背後には飯土山頂に連なる尾根へ続く広大な斜面が広がり、岩原スキーランドとして利用されている。遺跡は東西両側を火碎流斜面に源をもつ解釈谷によって限られ、細長い台地状地形を構成している。

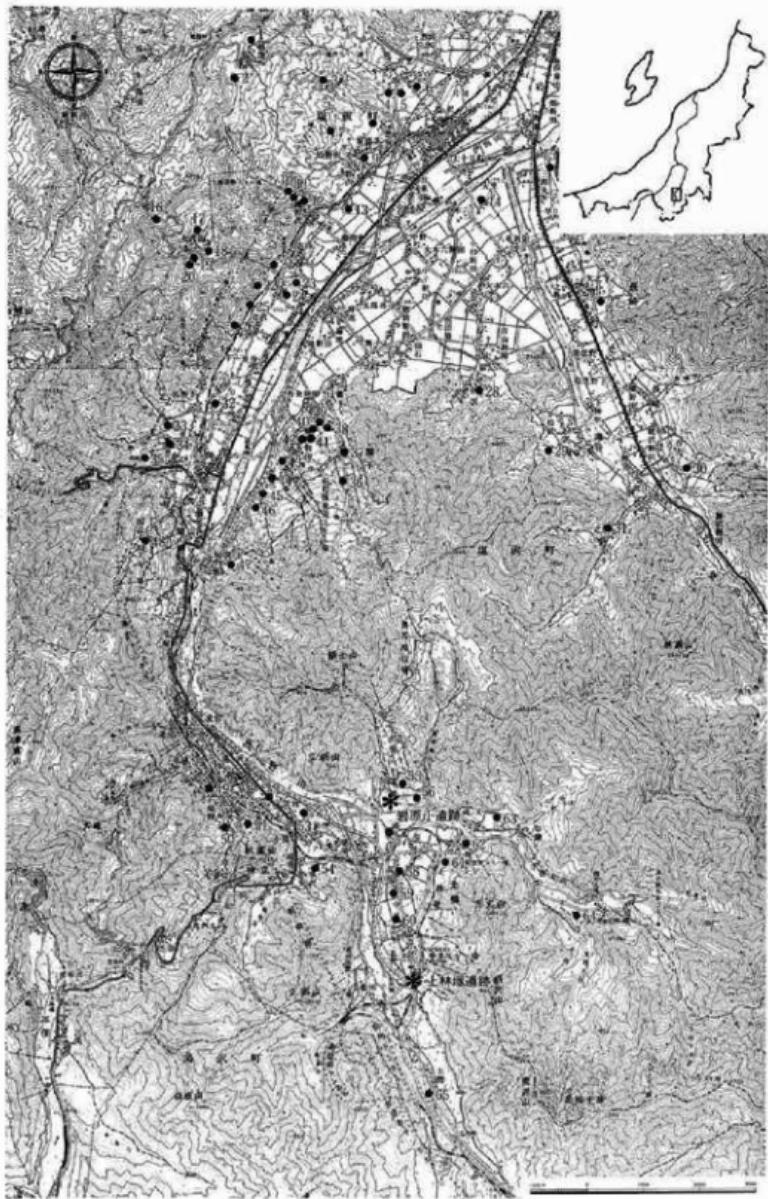
また、上林塚遺跡は岩原I遺跡よりさらに上流の魚野川右岸で、東側の柄沢山から流れ出す沢によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。この扇状地は遺跡周辺で魚野川に侵食され、比高3mほどの段丘崖で氾濫源と接している。

2. 周辺の遺跡

遺跡の存在する魚野川上流域は、第四紀中期更新世に活動した飯土火山を境として上流と下流の二地域に区分できる。飯土山より上流部は魚野川と大源太川の合流点付近を中心とする小盆地状地形を呈し、大源太川流域には段丘が発達している。下流部は飯土山北方に向かって谷

第1表 周辺の遺跡一覧 (第2図に対応)

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	椿下	縄文(中・後期)	23	八竜原	縄文(中・後期)	45	惣ヶ沢	石器・石斧
2	新宮皇子山	縄文(中・後期)	24	諏訪原	縄文(中期)	46	十二木	縄文(早~中期)
3	北山	縄文(前・中期)	25	八幡	縄文土器・石器	47	上ノ平	縄文(前・中期)
4	堂林	縄文(中期)	26	堂沢	縄文(前~後期)	48	丸山	石器
5	妙丸	縄文(中期)	27	上平	縄文土器・削片	49	一本杉	石器
6	糠塚	縄文(中期)	28	防坂	縄文(中期)	50	大刈野	旧石器・糞文(早~後期)
7	滝谷	縄文(中期)	29	柳平	縄文(中・後期)	51	城	縄文(中期)
8	南山	縄文(中期)	30	台上十二本	縄文(前・中期)	52	川久保	縄文(中期)
9	前田	縄文(中期)	31	一之沢	縄文(後期)	53	官舎	縄文(早・前・後期)
10	梨ノ木平	縄文(早~中期)	32	神明原	縄文(前・中期)	54	荒谷	縄文(中期)
11	寺林A	縄文土器	33	天台	削片	55	岩原Ⅲ	縄文(中・後期)
12	寺林B	縄文土器	34	花岡	縄文(中・後期)	56	岩原Ⅱ	縄文(早~中期)
13	畔上	縄文(中期)	35	南方山	縄文(前・中期)	57	添名	縄文土器
14	登	縄文土器	36	大原A	縄文(中期)	58	萩原B	縄文(早期)
15	お江作り	縄文(中期)	37	大原B	縄文(中期)	59	萩原A	縄文(中期)
16	楽平	縄文(前・中期)	38	万条寺林	縄文(早~後期)	60	宮ノ下	縄文(中期)
17	谷地頭	縄文(中期)	39	坂田	縄文(中期)	61	小坂A	縄文土器・削片
18	大沢御平	石器	40	万条	縄文(中期)	62	小坂B	削片
19	登立	打製石斧	41	切石	縄文(前~後期)	63	満ノ又	縄文(中期)
20	芹半	打製石斧	42	林	縄文(中期)	64	向原	縄文(中期)
21	地蔵堂	石器・削片	43	五丁歩	縄文(中~晚期)	65	巾	打製石斧
22	山岸	縄文土器	44		縄文(早~後期)			



第2図 位置と周辺の遺跡(旧石器・縄文) 地上地理院発行 1:50,000 地形図
「追波荒沢」(昭和60年)「十日町」(昭和59年)

が開け、左右両岸には魚野川に注ぐ各支流により扇状地が形成されている。遺跡が多く分布する15度未満の緩斜面(第1図)は、ほぼ平坦な各河川の氾濫源のほか、扇状地面・段丘面・山地斜面の崩壊面・飯土山山麓の火砕流斜面などである。飯土山より上流部の魚野川・大源太川合流地域に分布する遺跡は、合流点よりやや下流の魚野川左岸と合流点上流部付近に集中する二つの遺跡群からなるよう見える。これに対して下流部の遺跡は、魚野川に面した飯土山の火砕流斜面先端部と魚野川左岸に延びる魚沼丘陵東斜面に遺跡の集中が認められる。飯土山山麓の火砕流斜面は、南北両斜面ともに分布する遺跡の数が多く、また縄文時代草創期から後期までの遺物が出土しており、魚野川・大源太川に面した高燥地形が、縄文時代を通じて好んで利用されたことを物語っている。このほか、魚野川に南東から合流する一大支流の登川流域にも遺跡は散在するが、その数は多くない。

これらの遺跡の大部分は、山地斜面・段丘面などの高燥な地形面上に立地するが、一部は沖積面上に立地しているものも存在する。飯土山より上流部の沖積面上に立地する遺跡では、下位に草津黃色輕石層が堆積しており、萩原B遺跡(58)ではその上位に燃糸文系土器が存在することや、宮林B遺跡(53)では礫層の上位から押型文土器が出土することなどから、縄文時代早期には既に段丘化が始まっていたものと考えられる。しかし、宮林B遺跡のように押型文土器包含層と諸磯b式土器包含層の間に、洪水堆積物と考えられる層が存在することから、完全な段丘化は縄文時代前期前半以降と推定される。

飯土山より下流域の沖積面には、魚野川左岸に妙丸(5)・糠塚(6)・畔上(13)・八竜原(23)・諏訪原(24)・神明原(32)など多くの遺跡が存在しており、右岸の登(14)・お江作り(15)の二遺跡を圧倒している。これらの遺跡群はすべて扇状地上に存在するが、左岸の遺跡が扇状地の谷口部や扇尖に立地しているのに対し、右岸の二遺跡は扇端部に位置しており、登川の作る扇状地が魚野川に対して大規模で比高の高いことを示している。なお、左岸の扇状地には魚野川や扇状地内の河川によって侵食され、段丘化したものも存在する。この地域の扇状地上に分布する遺跡の年代が、一部縄文時代前期は存在するものの、大半が中期以降に属することから、扇状地の形成および段丘化が始まった時期は縄文時代中期以降であり、その後安定した状態を保っているものと推定される。一方、登川左岸谷口から飯土山北方の火砕流平坦面までは、沖積面上にまったく遺跡が分布していない。このことは、この流域が魚野川・登川の氾濫源であるためと考えられる。

飯土山周辺の縄文時代遺跡は、時期により分布状況が異なっている早期には遺跡の数も少なく魚野川・大源太川の合流地域と、飯土山北西の山麓斜面・魚沼丘陵の比高の大きい東斜面の一部に分布するのみであるが、前期になると飯土山北方の魚野川左岸にも広がり、中期には地域一帯にその数を飛躍的に増加させている。そして、後期から晩期にかけて遺跡数が減少するが、この傾向は信濃川流域の場合と同じであり、また中部地方の遺跡分布状況とも一致する。

第 III 章 岩原 I 遺跡

1. 調査の概要

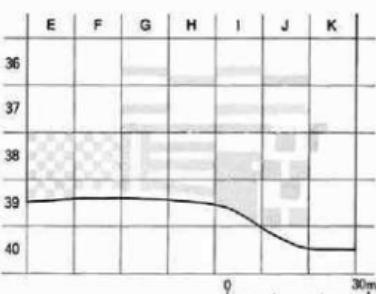
本遺跡は飯士山(標高1,111m)から南へ派生する広大な台地の先端部で、東西を二つの小沢に限られた幅広の尾根状台地に位置している(第4図)。南側は大源太川の侵食によって形成された比高約70mの急崖になっており、台地の幅は60~80m、長さは約400mで標高470~510mを測る。土取り対象地は東西の沢を含んだ台地全体に及ぶ計画であったが、遺跡の範囲は第1章で述べたように不明確であり、規模・内容を把握する意味でもかなりの高率で確認調査を実施して、本調査範囲を確定する必要があった。しかし、既に業者への工事発注が済んでいるなど土取り工程の都合で、調査期間中に本調査に先立つ形で確認を行い、範囲を確定してそのまま本調査に移行することとした。なお、公團からの強い要望で対象地を二地区に分けて引き渡すことになり、それぞれの地区で確認調査→本調査の繰り返しとなった。

A. 調査の方法

グリッドの設定(第5図) グリッドは本調査区域が未確定であったことから、土取り対象地内の台地上平坦面と東西の沢を含む範囲で設定する必要があった。幸いにも、公團側で土量計算用に台地の長軸方向とこれに直交する形で、図上に10m方眼が組まれており、これをそのまま利用して大グリッドとした。杭の打設は測量業者に委託したが、台地上でも平均約10%の傾斜があるためすべての杭頂と地表面の標高を算出し、調査の効率化を図った。

大グリッドは北西隅から東西方向をアルファベットでA~L、南北方向を数字で1~40として両者の組み合わせによって表示した。各大グリッドはさらに2m方眼で1~25の小グリッドに分割し、それぞれ「A1~15」「H39~21」のように呼称することとした。

試掘調査 台地上の平坦面を中心に、小グリッドに合わせて基本的に2m間隔で2×2m(約25%)の試掘坑を設定し、人力で調査した。この結果、出土量の多少はあるもののほぼ全域から縄文時代早期~後期に



第3図 旧石器時代文化層確認位置

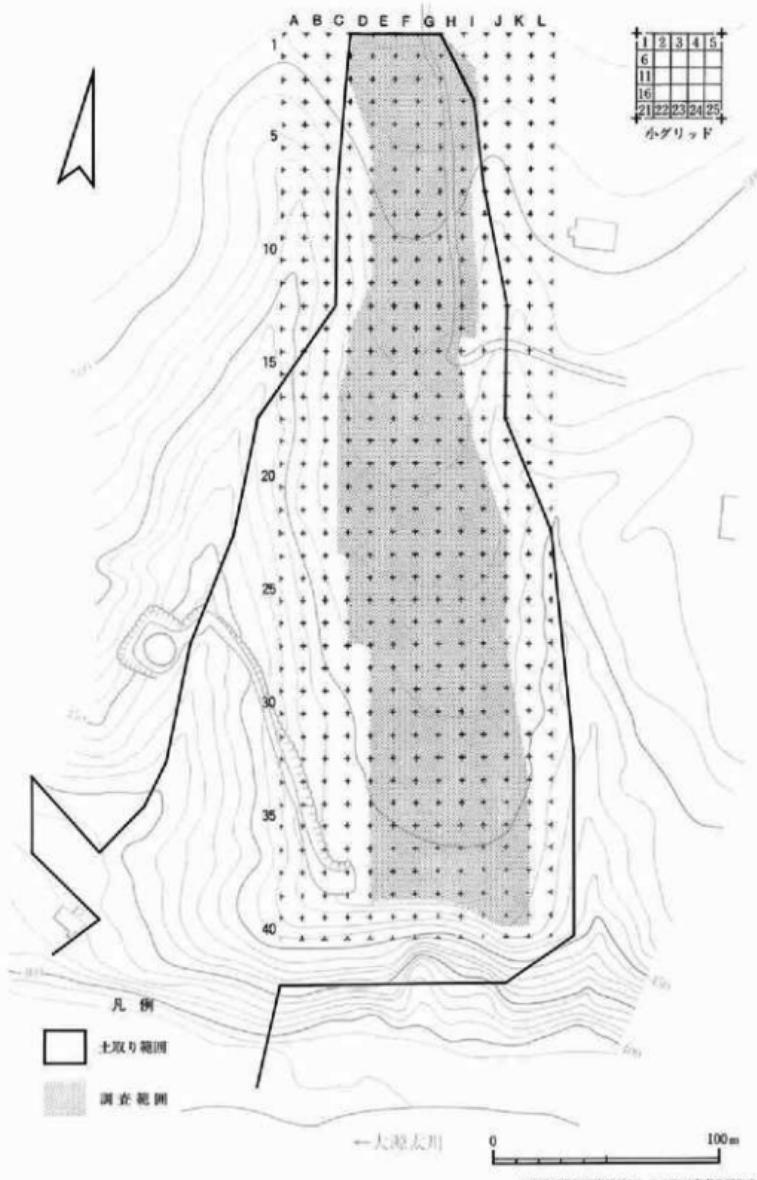
1. 調査の概要

かけての土器・石器が出土し、陥穴と思われる土坑が列をなして存在することも予想された。これによって表土層をすべて人力で掘削する部分と、一部重機を使用して排土する部分とを区別し、最終的に約23,000m²について本調査を実施することになった。



第4図 岩原I遺跡周辺の地形図

湯沢町役場作成 湯沢市計画部編図
1:10,000 昭和57年12月測図

第5図 岩原I遺跡グリッド設定図 日本道路公団新潟建設局 六日町工事事務所作成
1:500 昭和65年8月調査

B. 調査の経過

発掘作業は昭和57年4月19日から同年11月5日までの間、実労127日、延作業員数7,445名を費やして実施した。当初、4月中旬に調査開始の予定であったが雪消えが予想より遅く、公団に除雪を要請してようやく調査可能になった。

4月19日、現場事務所及び作業員休息所用のプレハブ建設に立ち合った後、公団六日町工事事務所・湯沢町教育委員会へ調査開始の挨拶を行う。翌日、プレハブ内の整理や確認調査用のグリッド設定を行い、21日より作業員を投入して発掘調査に着手した。確認調査は第1回引き渡し予定の24列以南から実施し、5月11日には終了している。この結果、遺物・遺構の検出がほとんど無かったC列及びD列の28以南は本調査除外地区とした。また、D-F 24-27とE・F 28-35については遺物の出土が稀薄で、なおかつ表土層が遺物包含層まで25cm程度あるため、表土は重機(バックホー)によって排土することにし、重機排土と人力による掘削を同時並行で本調査に入った。出土遺物は37列より南の台地先端部で多く見られ、大半はIV層中よりの出土であった。時期的には縄文時代早期を中心とするもので、該期の遺構の存在が期待されたが、黒色土が存在しない部分が多く平面的に遺構を捉えることは難しいと考え、この地域の遺物についてはすべて平面位置と標高を記録し、整理段階で検討することとした。また、遺構はD 25からK 32とF 34からK 39で、1~3m間隔で並ぶ陥穴状土坑が検出されたほか、G-J 37~39で焼土様の赤褐色土を伴う浅い土坑群が多く見られた。これは、当初早期の炉穴と言われているものとも考えられたが、赤褐色土が土坑底部ではなくて暗黄褐色土の堆積後に見られるこことや、規模や形態的に規則性が見いだせず、遺構とすることに疑問もあった。最終的には調査員間で協議の結果、小形の風呂木痕であるとの結論に達し、遺構として取り扱わないとした。この間、6月3日にはD-F 24-27の調査を終了して公団に引き渡し、11日より調査と並行して土取り作業が開始されている。

7月29日より8月22日まで、県内遺跡詳細分布調査と夏期休業のため発掘作業を中断する。この間、8月1日の台風により現場プレハブ二棟が倒壊し、実測図面・出土遺物の一部が西側



第6図 調査(左 調査風景、右 引き渡し後の土取り風景)

の沢へ吹き飛ばされる被害にあった。その後大部分は回収されたが、遺構実測図面数枚と遺物の一部が不明のままであった。

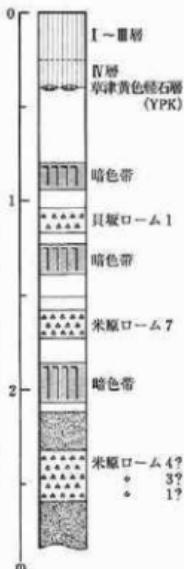
後半の調査は、23列以北の確認調査から再開した。出土遺物は大きく分けて二ヶ所に集中地区が見られ、それぞれ時期を異にしている。D～H 9～12では早期後葉の条痕文系土器が多く出土しているが、点数的にはこの時期が最も多い。また、E～G 3～5では前期後葉と中期前葉の土器の集中が見られた。また、石器類も土器の集中域には重なる出土傾向を示す。出土層位は地表下10～20cmの黒色土(III層)から地山漸移層(IV層)の間で、この地域は基本的に表土層は重機による抜根・排土の後に、人力で地山まで下げる遺構を検出することにしたが、遺物の出土量がごく少ない部分については重機により地山直上まで排土した。遺構については前半調査地区と同様に陥穴状土坑が大半を占め、調査区のはば全城に分布していた。形態的には大きく分けて六種類が確認でき、それぞれのタイプで配置状況が異なることが予想された。

なお、H・I 1～3は湯沢町有地(公団用地外)であったが、ほとんど傾斜のない平坦面で遺構の存在が予想されたことから、湯沢町総務課に相談の結果一部を調査することができた。9月23日、17～23列の調査を終了して公団に引き渡す。16列以北の調査は、当初10月29日をもって終了する予定であったが、F・G 3・4で予想外に遺構が多く検出されたため一週間延期することとした。10月25日、前日夜半からの降雪で現場でも約5cmの初積雪を記録する。11月4日、16列以北の完掘状況写真を撮影して現場での全作業を終了し、翌日発掘器材の撤収の後、関係機関へ終了の挨拶をして引き上げる。

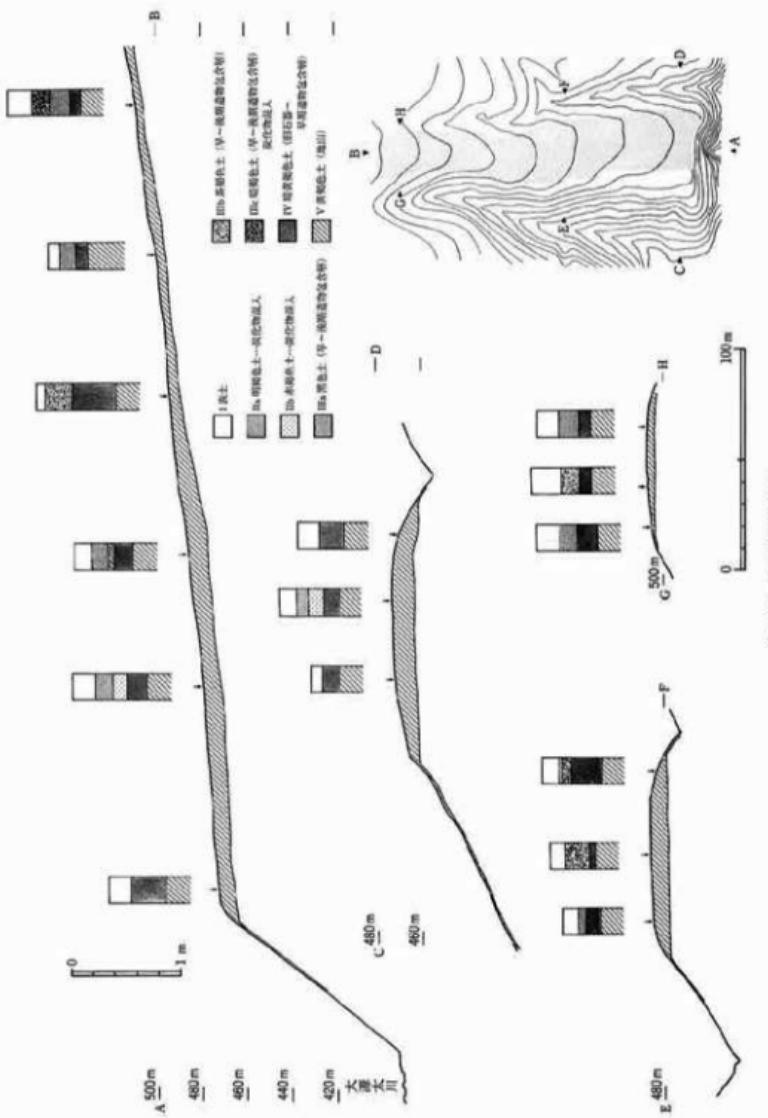
2. 層序と遺物の出土状況

A. 層序(第7・8図)

遺跡の立地する斜面は、火碎流と火碎流を覆う層厚数メートルのローム層が堆積している。ローム層の最下部は信濃川ローム層の谷上ローム層相当層で、上位にはスコリア層ないしは軽石(バミス)層が挟在され、信濃川流域のローム層との対比に有効な鍵層となっている。スコリア層ないしバミス層は大別すると三層からなり、最も下位の層は赤褐色・黒色などの有色スコリアを多く含み、信濃川流域の米原ローム層のM1～M4層に、中位層は黄色軽石質で米原ローム層のM7層に対比される。最上位の黄色バミスはM7層によく似ており、信濃川流域の貝坂ローム層中のK1層に対比できる。ローム層の最上部(黒色土層直下)には、浅間火山の噴出による草津黄色軽石(YPK)層が部分的に堆積しており、



第7図 土層柱状図(C 35)



第8図 地形断面と層序

今回の調査で重要な鍵層の役割を果たした。ローム層を覆う黒色土層は、数10cmから約1mの層厚を持つもので、下位からIV層・III層・II層・I層の四層に区分される。IV層はローム層との漸移層で暗黄褐色を呈し、台地先端部で厚く堆積している。この部分では、縄文時代早期の土器を中心に包含する。III層は黒色土層で色調から三層に細分される。IIIa層：黒色を呈しやや粘性が高く、主に台地中央付近から上部(南半)にかけて堆積している。IIIb層：茶褐色でIIIa層の下位に存在し、台地中央部に分布する。IIIc層：暗褐色でIIIa層の上位に位置し、調査区北側の一部でわずかに認められる。なお、IIIa～IIIc層とも縄文時代早期から後期の遺物包含層である。II層は上位の明褐色土層と下位の赤褐色土層に区分される。下位の赤褐色土はくぼ地に堆積する傾向が認められ、火山灰の影響が考えられる。I層は腐植性に富む表土である。

B. 遺物の出土状況(第9図)

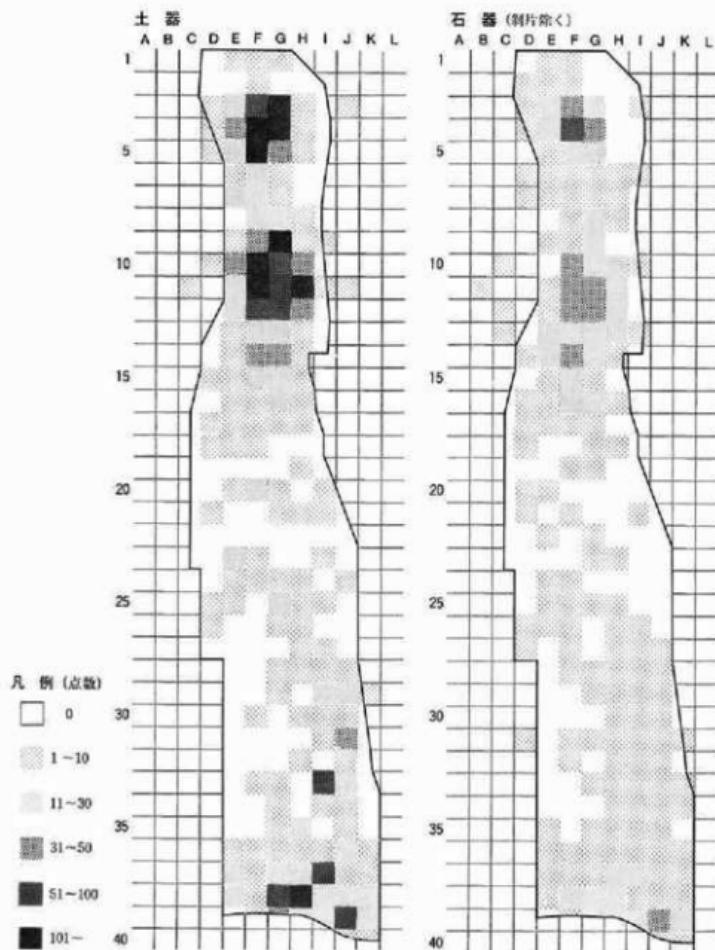
本遺跡での出土遺物数は土器・石器(剣片類含む)を合わせて約9,500点に及ぶが、その大半は包含層からの出土で、遺構に伴うものは少ない。ここでは平面的な分布と、出土層位について概観する。

グリッド別数量分布を見ると土器・石器共に大きく分けて三ヶ所(E-G3～5・E-H9～12・G-J37～39)に集中地域があり、それぞれの地域で時期的に異なることが看取された。また、集中地域はいずれも台地中央部で南北方向の傾斜がやや緩くなった部分にあたり、東西の沢に向かって傾斜がきつくなるにつれて急激に出土量が減る傾向にある。ただ台地先端部のK38・39では、東側の沢に向かってかなりの傾斜地でも早期の遺物が出土している。これらのことは、長大な台地の中でも時期によって生活の拠点が移動したことを物語っており、遺跡内での時期的な占地を考える上で興味深い。

次に出土層位を見ると、おおむね36列を境にして以南と以北ではかなりの差が認められる。先述したように、台地先端部では表土下に黒色土層(III層)がほとんど堆積しておらず、暗黄褐色土(IV層)が堆積している。厚い部分では約20cmにも及び、遺物のほとんどはこの層から出土している。この地域では時期的には縄文時代早期に限られることもあるが、出土遺物の垂直分布を注意して観察したが、古いものがより下位から出土するという傾向は認められず、層位的に分層することは不可能であった。しかし、この区域では早期の土器が出土する最下層より5～10cm下から、草創期と思われる尖頭器が3点出土しており、二時間には若干の無遺物層を介在させるようである。

これに対して、36列以北ではIII層が比較的厚く堆積しており、3～5列付近では40～50cmにおよぶところがある。しかし、遺物は層位的に分けることはできず、早期から後期まで渾然一体となって出土している。土層観察でも風倒木痕や木根などの擾乱が多く確認されており、これらの影響によるものとも考えられるが詳細は不明である。なお、F・G3・4の数ヶ所で

中期前葉の一括土器が潰れた状態で検出され、住居跡や土坑などの存在が考えられたが、黒色土中での検出はできなかった。



第9図 岩原I遺跡遺物分布図

3. 遺構

岩原 I 遺跡では陥穴状土坑 133 基、フ拉斯コ状土坑 5 基などのほか、多くの土坑・ビットが検出されている。しかし、遺構内からの遺物の出土は少なく、明確に時期を特定できるものは数えるほどである。ここではそれぞれ代表的なものを図示するが、基本的には個々の説明は行わず、種類毎に規模・形態・覆土などの特徴をまとめて記すこととする。

A. 陥穴状土坑

本遺跡では様々な形態を有する陥穴と考えられる土坑が、台地全体に散在して検出されている。総数 133 基におよぶこれらの土坑は、従来「T ビット」や「陥穴状遺構」などと称されてきたものであるが、ここでは「陥穴状土坑」(罠穴の意味の「Trap-Pit」から略号を「TP」とする)と呼称することとする。これらの土坑は平面形や断面形の特徴から A~F の六種類に分類されるが、各類でその配置などに差異が認められる。

A 類(TPA) 上端の平面形はほぼ円形で、下端は隅丸長方形を呈するもの。断面形は上部が鋸鉢状で、下部が円筒形を呈する。

B 類(TPB) 上端および下端の平面形が円形を呈するもの。断面形はほぼ円筒形を呈するが、上端寄りの中間部が幾分狭く、その上下で広がりオーバーハングしている。

C 類(TPC) 上端および下端の平面形が梢円形を呈するもの。断面形は円筒形(TPC-1・3 など)ないし、やや上端の広がる逆台形のバケツ形(TPC-6 など)を呈する。坑底部小ビットの有無により、C I 類・C II 類に分ける。

D 類(TPD) 上端の平面形は梢円形を呈するものが多いが、ほかに隅丸長方形や円形も見られる。下端は、中央部のやや狭まった隅丸長方形(蝶ネクタイ形)を呈するものが多い。断面形は確認面下 10cm 程まで広く、それ以下は狭くなりほぼ垂直に掘り込まれる。坑底部小ビットの有無により、D I 類・D II 類に分ける。

E 類(TPE) 上端の平面形は中央部が狭く、両端が広がる長梢円形を呈する。下端は中央部が幾分狭い隅丸長方形を呈する。短軸方向の断面形は、開口部が広く中程から急に狭められた漏斗状のもの(TPE-6 など)、開口部から徐々に狭められたバケツ状のもの(TPE-1 など)などがある。長軸方向の断面形は上端より下端が長く、片端ないし両端がオーバーハングする細長い袋状を呈する。坑底部小ビットの有無により、E I 類・E II 類に分ける。

F 類(TPF) A~E 類に属さないもの。

なお、開口部付近が広く以下がほぼ垂直に掘り込まれるのが、陥穴状土坑各類に共通する形態である。以下、各類毎に規模、配列、覆土、長軸方向(D~F 類)について概観する。

1) A類(第17~20図、図版6~8)

陥穴状土坑の約半数にあたる62基が検出されている。上端の平面形が円形を呈するものが約9割を占めるが、隅丸長方形のもの(TPA-50など)もわずかに見られる。下端は隅丸長方形(約53%)のものが最も多いが、TPA-31・40などのように円形(約8%)や隅丸方形(約32%)のものもある。隅丸長方形・隅丸方形を合わせた四角形が85%以上を占めることから、下端の平面形は基本的に隅丸の四角形として規定されていた可能性が強い。

上部が摺鉢状で、下部が円筒形となる漏斗状断面を呈するものが全体の82.3%を占めるが、ほかに上端からほぼ垂直に掘り込まれた円筒形のもの(TPA-50など)もある。

規模 上端の長軸は平均128.4cm、短軸は平均111.4cmである。下端の長軸は平均63.3cm、短軸は平均51.9cmで、深さは平均155.9cmを測る。

坑底部小ピット 坑底部に小ピットを有するものはTPA-16・32の2基のみで、いずれも坑底中央に1個しか持たない。C~E類に比べると小ピットを有する割合が極端に低く、A類は基本的に小ピットを持たない土坑と考えて良いであろう。深さは平均9.5cmと浅い。

配列 台地中央より南側に分布し、等高線に沿うように列状に配置されている。TPA-8~28はD25からK29の間で65mの列を形成し、土坑の間隔は平均3m程度である。この列のTPA-24からさらに南東に向かって、TPA-29~37が33mの列をなして配置されている。さらに南側のF35~K38で、TPA-39~62が2~3m間隔に50mに渡って並ぶが、南東の台地端部では直角に南側へ曲がっている。

覆土 上半部がレンズ状堆積で、下半部は水平堆積のものが多い。壁際には崩落によると思われるローム系の埋土が認められる。水平堆積部分はローム系埋土と黒色土系埋土の互層をなすものが多く、特にTPA-20・23・41・47などで顕著である。ローム系埋土には黒色土が混入し、逆に黒色土系埋土にはローム粒やロームブロックを含むものが多い。また、上半部のレンズ状堆積は黒色系の埋土が主体となるが、特に最上層中央部には同一層の厚い堆積が認められる。

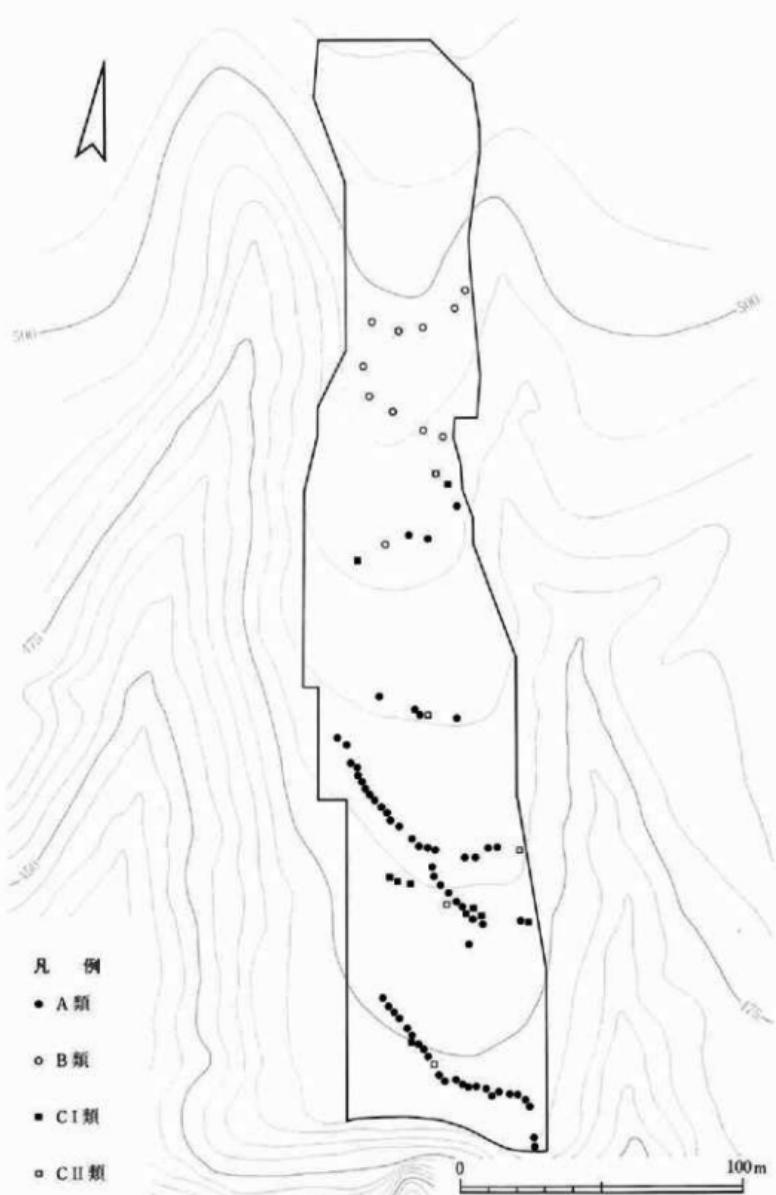
2) B類(第21図、図版9)

B類は総数11基が検出されている。

規模 上端の長軸は平均122.0cm、短軸は平均105.6cmである。また、下端の長軸は平均102.5cm、短軸は平均94.2cmで、深さは平均132.3cmである。

坑底部小ピット 坑底部に径10cm程度の浅いくぼみを有するものが4基(TPB-4・7・8・10)存在するが、C~E類のような小ピットとは異なる。それぞれ坑底中央部に1個有する。

配列 B類は大半が15列以北で、それ以南では1基検出されているだけである。基本的にはTPB-1~5とTPB-6~10の二列のグループに分けられ、いずれもほぼ等高線に沿うように弧状に台地を横断している。各土坑の間隔は一様ではないが、約7~14mでA類に比べて広い。



第10図 陷穴状土坑配置模式図(A・B・C I・C II類)

覆土 A類と同様の堆積状態を示し、上半部がレンズ状堆積、下半部が水平堆積である。下半部ではローム系埋土と褐色土系埋土が互層をなしている。壁際にはローム系埋土が存在するが、壁の崩落により堆積したものと思われる。

3) C類(第22図、図版10)

C類は総数15基確認されているが、坑底部に小ピットを有するC I類は10基、有しないC II類は5基である。

規模 上端の長軸は平均128.5cm、短軸は平均108.1cmである。下端の長軸は平均83.5cm、短軸は平均62.3cmで、深さは平均97.3cmを測る。

坑底部小ピット C類は坑底部に小ピットを有するものが、15基中10基(66.1%)と多い。小ピットの数はTPC I-3・4のように1個の土坑が7基(70%)と最も多く、次いで2個(TPC I-8)、3個(TPC I-1)、4個(TPC I-5)がそれぞれ1基ずつ認められる。小ピットの位置は1個のものについては6基までが壁際で、坑底中央付近にあるものは1基(TPC I-2)のみである。小ピットが2個のものは坑底直上の壁面に、斜めに掘り込まれている。また、3・4個のものは坑底のはば中央に位置する。小ピットの平面形はほぼ円形を呈し、上端で平均16.0cm、下端で平均8.5cm、坑底からの深さは平均15.5cmとやや浅い。

配列 C類の多くは台地南側に分布するが、明確な列をなさずに散在する。

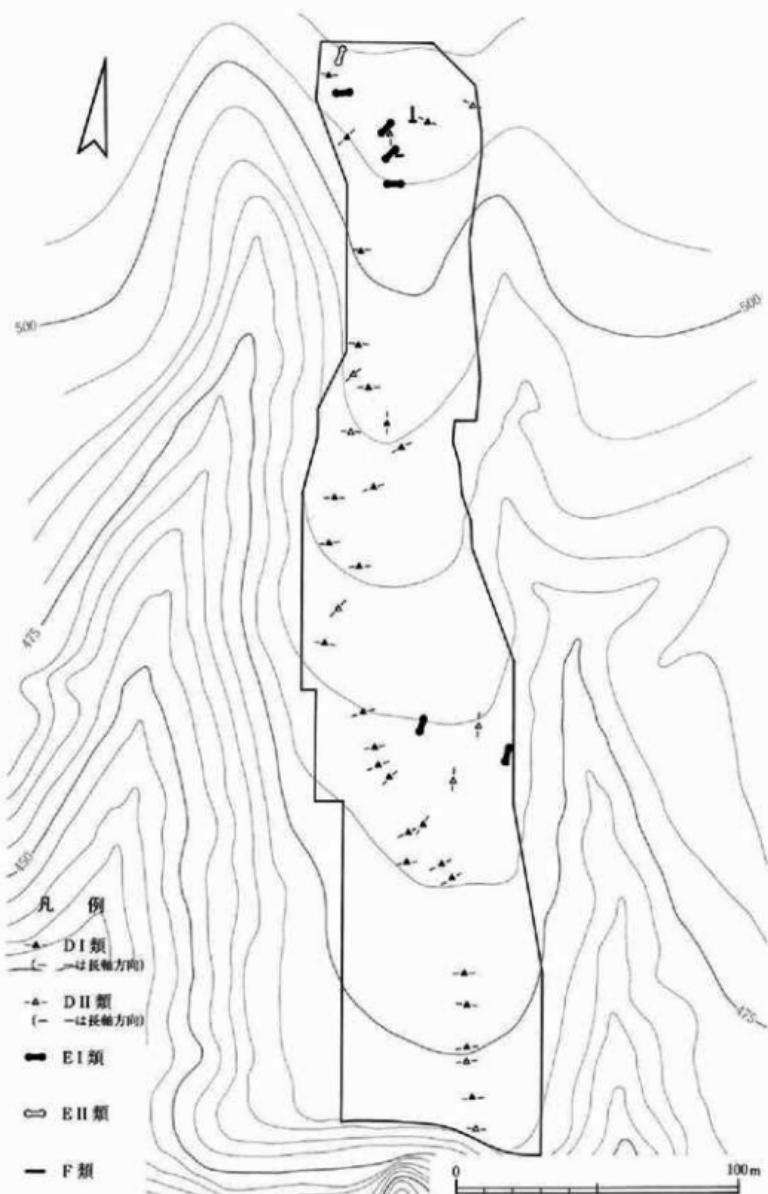
覆土 覆土は黒色土系および褐色土系の埋土がレンズ状に堆積しており、中には壁の崩落によると思われるローム系埋土を含むもの(TPC I-8・TPC II-1)もある。A・B類に見られるような、ローム系埋土と黒色土系・褐色土系埋土の互層は認められない。

4) D類(第23・24図、図版11・12)

D類は35基確認されており、坑底部に小ピットを有するD I類は26基(74.3%)、有しないD II類は9基(25.7%)である。C類と似たような形状を呈するが、C類が上端・下端ともより円形に近い梢円形であるのに対して、D類は上端が中央部の幾分狭まった葉ネクタイ状、下端が隅丸の長方形を呈する。また、C類は上端・下端とも長軸と短軸の差がそれほどないが、D類はその差が顕著で、特に下端は3割程度である。

規模 上端の長軸は平均142.2cm、短軸は平均89.8cmである。下端の長軸は平均102.9cm、短軸は平均36.8cm、深さは平均110.1cmを測る。なお、D I類はD II類に比べて、上端・下端とも大きいものが多い。

坑底部小ピット 35基中26基(73.4%)に小ピットが確認されている。小ピットの数はTPD I-1・4のように1個のものが24基(92.3%)と大半を占め、2個(TPD I-21)・3個(TPD I-2)のものがそれぞれ1基ずつある。1個の土坑はすべて坑底中央に位置する。また、2個のものは



第11図 陷穴状土坑配置模式図(D I・D II・E I・E II・F類)

坑底を三等分した位置に1個、壁際に1個存在する。壁際に近いビットはかなり浅く、くぼみのようなものである。3個のものは壁間に掘り込まれている。小ビットの平面形はほぼ円形を呈し、上端で平均18.2cm、下端で平均11.8cm、坑底からの深さは平均31.8cmである。C I類の小ビットに比べると、長軸はあまり変わらないが深さは約倍である。

配列 D類は調査区の北端から台地先端部へほぼ南北に連なるように検出され、台地中央付近で西側から東側に位置を変えている。これは北から南へ傾斜する台地の最も高い部分、つまり等高線の先端部を結ぶ線に一致している。このほか、調査区北側では等高線に沿って、台地を横切るように数基が存在する。土坑の間隔は規則性に乏しいが、10~20m間隔とほかの類に比べて広い。D I類とD II類は配列から見ると区別されておらず、D I類の中にD II類が組み込まれているように思われる。

覆土 D類はA類の堆積状態に類似しており、上半部がレンズ状堆積、下半部が水平堆積となるものが多く、壁際には崩落を思わせるローム系埋土が存在する。また、TPD I-6・9の覆土中には、灰色火山灰の堆積が確認された。TPD I-6では最下層の黒色土系埋土とその上のローム系埋土の間から検出されている。新井房夫氏の分析によれば、妙高山大田切火山灰に対比されるものである（分析結果については第III章5参照）。

長軸方向 平面形態的に円形に近いものを除いて、その長軸方向は地形と密接な関係を有していると考えられる。D類土坑の長軸方向を見ると、北側の一部で等高線と直交するが、多くは等高線と平行である。つまり、台地全体の傾斜方向に直交しており、D類の連続する方向に對しても直交する。

5) E類(第25・26図、図版13)

いわゆる「Tビット」や「溝状土坑」とは異なり、開口部が聞く岩原I遺跡の陥穴状土坑に共通して見られる形状で、7基が検出された。坑底部小ビットの有無により、E I類(6基)とE II類(1基)に分けられる。

なお、TPE II-1は中央部がかなり狭く、両端が広くなる瓢箪形を呈している。小ビットの有無によりE II類としたが、別種の土坑の可能性も考えられる。

規模 上端の長軸平均は307.1cm、短軸は平均65.7cmで、長軸に対して短軸が極めて短い。下端の長軸は平均323.0cm、短軸は平均24.7cmであり、上端以上に短軸が短い。短軸方向の断面形を見ると、下端は上端の5割以下の長さである。深さは平均111.1cmである。

坑底部小ビット E類は7基中6基に小ビットを有する。小ビットの数は2個(TPE I-1・4)・5個(TPE I-2・3)のものがそれぞれ2基、1個(TPE I-6)・3個(TPE I-5)のものがそれぞれ1基ずつ存在する。1個のものは坑底中央付近に位置する。また、2個のものは坑底を三等分した位置に存在する。3個のものは中央に1個と、その左右に1個ずつ配している。5

個のものは中央に 1 個と、その左右に 2 個ずつ確認される。小ビットは上端の平均径が 15.9cm、下端の平均径 9.8cm で、深さは平均 30.4cm を測る。

配列 調査区北端に 5 基が列をなすように位置するほか、中央南寄りに 2 基が確認された。北側 5 基の間隔は 10~20m で、さらに調査区外に延びる可能性も考えられる。

覆土 A 類と類似し、上半部がレンズ状堆積、下半部が水平堆積を示すものが多い。TPE I~I のように、ローム系理土と黒色土系理土が互層をなすものもある。

長軸方向 等高線に直交するものと平行するものが見られるが、調査区北端の 5 基は配列方向に直交している。しかし、検出例自体が少ないこともあって、一般的な傾向は不明である。

6) F 類(第26図、図版13)

上端の平面形が細長い溝状の土坑が 1 基(TPF-1)、橢円形の土坑が 2 基(TPF-2・3)の計 3 基である。

TPF-1 の上端は、長軸 380cm に対して短軸が極端に短い 24cm で、深さは 96.3cm を測る。坑底部に小ビットは検出されなかった。この種の土坑は東日本を中心で検出されている、いわゆる「T ビット」といわれる陥穴状土坑と同形である。本遺跡では 1 基のみである。

橢円形の土坑は上端の長軸平均が 164cm、短軸平均が 74cm である。短軸方向の断面形は、開口部が幾分広く徐々に狭まる細い逆台形を呈する。

覆土断面の観察によれば、TPF-1 が TPF-2 によって切られていることから、溝状土坑が新しいことが分かる。F 類の坑底部には、小ビットが確認されていない。覆土はロームブロック・ローム粒を含む黒色土・褐色土が互層をなす。

ここで、規模について類別に比較し、その特徴を列記してみたい。第12図は A~F 類土坑の特徴を端的に表わすと思われる長軸と深さについて、その法量分布を示したものである。なお、長軸に関しては開口部の崩落などで旧形を留めにくい上端の値は使用せず、変化の少ない下端の値を採用した。

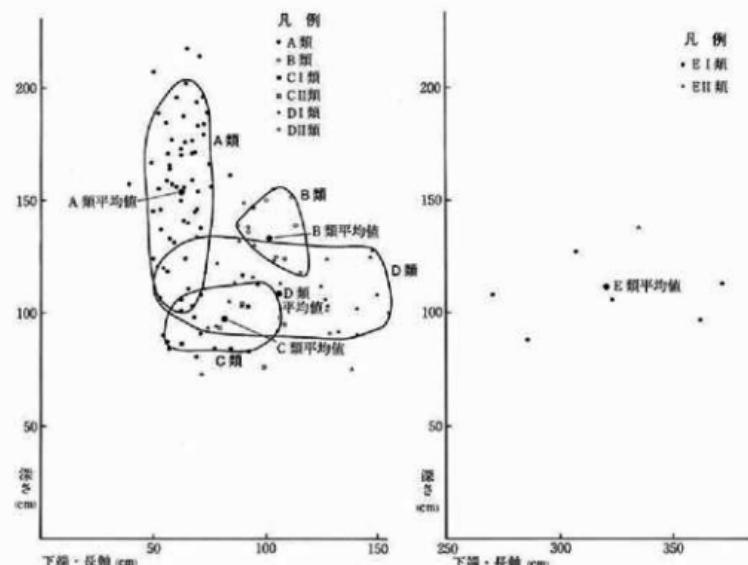
- ① A 類の長軸はほぼ画一的であるが、深さにバラエティーが見られる。これに対し、D 類は長軸ではバラエティーに富んでいるが、深さにおいてはほぼ画一的である。
- ② A 類はほかに比べて長軸は短いが、深いものが多い。
- ③ A 類と B 類は平面形が似たような土坑であるが、法量的な分布状況が異なる。A 類は深さにおいてばらつきが目立つが一般に深い。一方、B 類は長軸において画一的であり、A 類より大きな値を示す。
- ④ C 類は長軸・深さともほかより小さいものが多く、小形の土坑である。
- ⑤ E 類はほかに比べて長軸が極めて長いが、深さにおいては D 類に近い値を示す。

⑥ 長軸と深さに相関関係が認められる。即ち、長軸が長い土坑は、短い土坑に比べて一般的に浅い(E類が典型的)。逆に、深い土坑は長軸が短い(A類が典型的)。その中間に位置するのがD類であり、この長軸と深さの値が陥穴状土坑の標準的大きさといえる。また、D類の長軸と深さの最低値が、ほぼ陥穴状土坑の最低限の規模を示すものであろう。

B. フラスコ状土坑(第27図、図版14)

岩原I遺跡では5基が検出されているが、このうち4基はF8付近で確認され、周辺には多くの小ビットが見られる。残る1基はE32で検出された。平面形は円形を呈するものが多く上端の直径は平均114.8cm、下端の直径は平均142.6cmで、深さはFP-1を除いて平均48.8cmを測る。断面形は袋状を呈し、下端が上端より大きくオーバーハンプしている。

FP-1はフラスコ状土坑の典型的な形態を示し、確認面下約30cmの部分が狭められ、その上下で広くなっている。上端の長軸が104cm、下端の長軸が121cmで、確認面からの深さは約85cmとほかのものよりも深い。坑底部中央には、円形の小ビットが1個認められる。上端径24cm、下端径14cmで、坑底部からの深さは30cmを測る。土坑内からは早期の条痕文系土器片・縦条体圧痕文土器片・無文土器片・打製石斧・不定形剥片石器などが出土しているが、他遺跡例から考えて第V群土器の時期に伴うものと思われる。



第12図 陥穴状土坑法量分布

C. その他の土坑(第27~29図、図版14・15)

陥穴状土坑・フラスコ状土坑のほかに多数の土坑・ビットが検出されているが、その位置は遺物の分布集中域とほぼ同じである。土坑の規模は上端長軸で100cm前後、深さ50cm前後のものが多い。土坑内からは縄文時代早期から中期の土器片、石鎌、打製石斧、不定形網片石器、特殊磨石、台石などの石器が出土しているが、土坑の構築時期を決め得る資料に乏しい。土坑覆土は黒色系埋土にローム粒が混入したものであり、その堆積状況から自然堆積による埋没と思われる。ここでは一括土器の出土したP-8と、集石を伴うP-13について概要を記す。

P-8(第29図、図版15) H 11の北東隅に位置し長軸46cm、短軸42cm、深さ10cmのほぼ円形を呈する。坑底の西隅には坑底から深さ9cmの小ビットが確認されている。土坑確認面から若干浮いた状態で、中期前業の五領ヶ台式土器(387)が底部を上にして斜めに潰れた状態で一括出土しているが、これは本土坑に伴うものと考えられる。

P-13(第29図、図版15) H 38の南東隅に位置し長軸131cm、短軸111cm、深さ14cmの不整形円形を呈する。碟は1層より上部で検出され、大半は台地の基盤を構成する火碎流疊であるが、火熱を受けた様子は認められない。出土遺物は集石下の1層下部から2層にかけて検出されており、早期沈線文系土器(田戸下層式期)を中心である。

D. 壺穴状造構(第29図、図版5)

H 38中央西寄りで検出されたもので、長軸373cm、短軸210cm、深さ約5cmの不整形を呈する。底面は台地の傾斜に沿ってやや南に傾いており、壁は南西部で不明瞭になっている。壺穴内には大小4基のビットが検出されたが、直接伴うものか不明である。覆土は暗黄褐色土の単一層で、覆土内からは早期の押型文土器や条痕文系土器が出土している。調査時には住居跡とも考えられたが、焼土が検出されないことなど確証が得られず、ここでは壺穴状造構とした。

E. 土器集中区(図版4・5)

縄文時代早期土器の一部(撲糸文・押型文・沈線文系)は、36列以南の台地先端部で集中して検出されたため、基本的に全点について位置・標高を記録した。この結果、G・H 38やJ 39区などで集中が認められたが、層位的な前後関係を把握することはできなかった。

F. 掘立柱建物(第16図)

I・J 34で検出されたもので、ほぼ同規模のものが2棟並んでいる。遺跡の存在する台地は近年まで茅場として利用されており、作業小屋が建っていたということなので、これに関する遺構の可能性が強い。

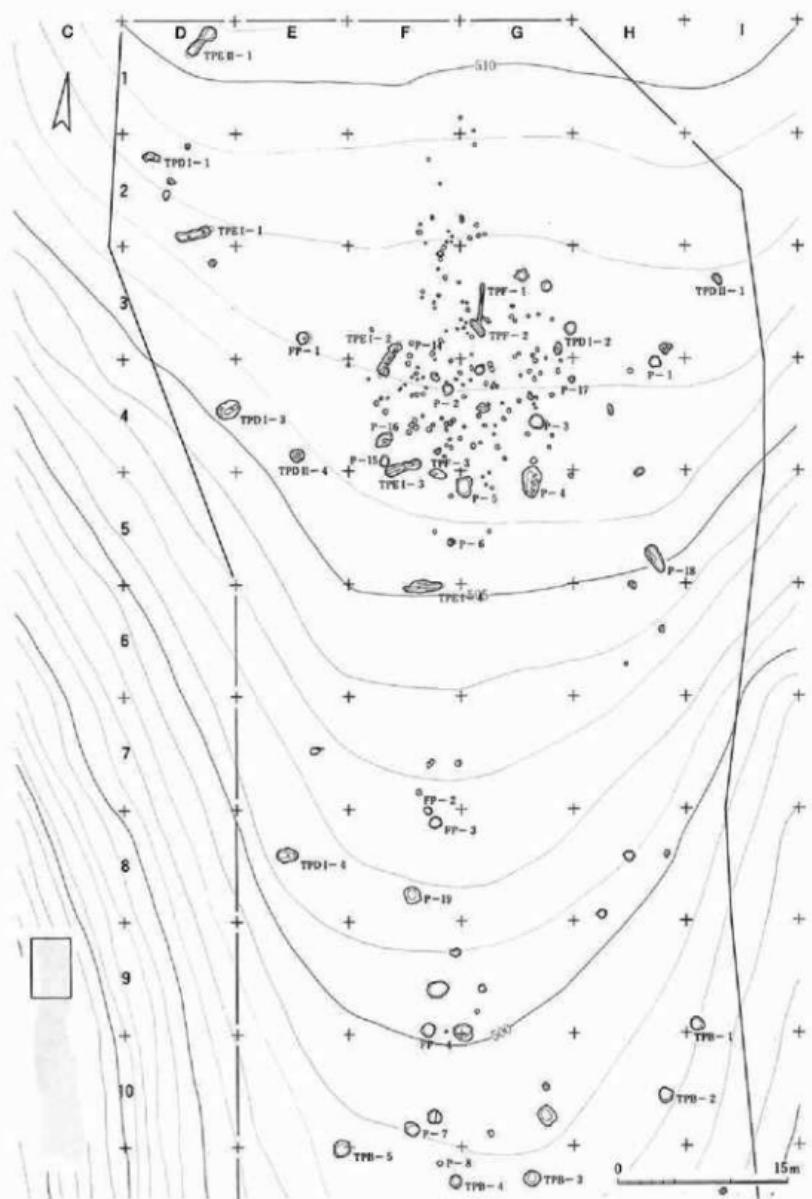
第2表 岩原I遺跡造構一覧表

〔単位はcm. () は現存値を示す〕

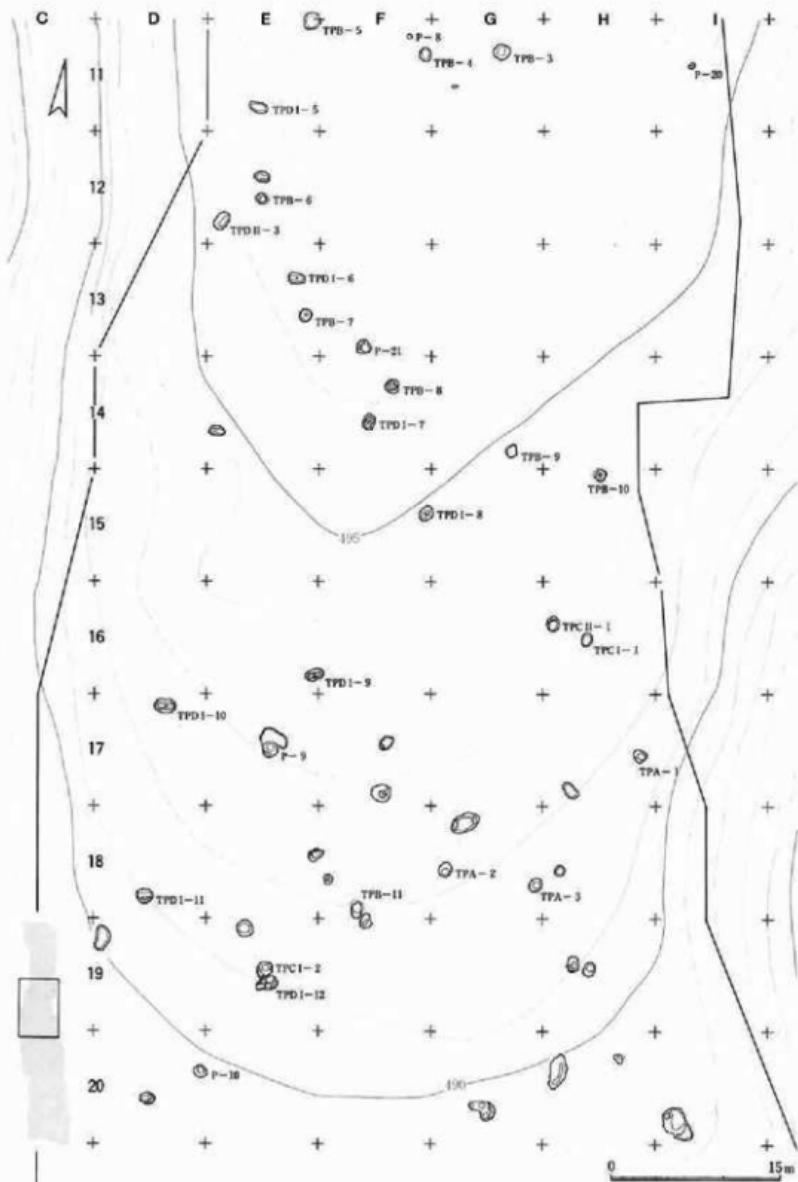
造構 No	棟出位置	上 端		下 端		深さ cm	横面 数	出土 遺物 () は遺物No	備 考	掲載 図版
		長軸	短軸	長軸	短軸					
TPA-1	H17	120	115	68	56	171				第17回
TPA-2	G18	125	112	72	59	196				第17回
TPA-3	G18	136	108	67	58	171				第17回
TPA-4	F24	153	132	94	88	147				
TPA-5	G24	135	91	68	50	145				
TPA-6	G25	108	86	57	24	166				
TPA-7	H25	104	95	57	43	133				
TPA-8	D25	129	124	64	52	176				
TPA-9	E26	158	116	63	54	187				
TPA-10	E26	132	111	64	59	202				
TPA-11	E26	127	107	84	65	161				
TPA-12	E27	140	104	75	64	166				
TPA-13	E27	136	129	52	47	188				
TPA-14	E27 (166) (105)	65	45	217						
TPA-15	E27	124	96	50	41	207				
TPA-16	F28	179	129	60	54	196	1			
TPA-17	F28	119	118	58	42	157				
TPA-18	F28	116	113	58	55	177				
TPA-19	F28	151	132	72	63	184				
TPA-20	F28	115	97	75	75	156				
TPA-21	G29	139	131	62	58	173				
TPA-22	G29	120	116	72	60	179				
TPA-23	G29	122	118	49	45	167				
TPA-24	H29	118	114	62	58	170				
TPA-25	I30	106	86	69	63	81				
TPA-26	I30	124	118	71	64	138				
TPA-27	I29	127	113	63	62	141				
TPA-28	I29	133	122	55	46	184				
TPA-29	H30	113	91	56	36	87				
TPA-30	H30	116	80	56	31	118				
TPA-31	H31	150	148	39	39	157				
TPA-32	H31	133	119	53	48	137	1			
TPA-33	H31	103	99	50	41	124				
TPA-34	H31	121	92	67	62	103				
TPA-35	I32	93	87	54	30	90				
TPA-36	I32	107	93	62	50	101				
TPA-37	K32	120	104	71	53	91				
TPA-38	I33	109	99	65	41	111				
TPA-39	F35	149	114	67	53	159				
TPA-40	F35	145	132	69	60	193				
TPA-41	F35	122	114	69	54	154				
TPA-42	F35	118	99	59	53	131				
TPA-43	G36	131	121	63	48	156				
TPA-44	G36	121	101	70	51	214				
TPA-45	G36 (93) (82)	69	33	146						
TPA-46	G36	134	123	69	52	183				
TPA-47	G37 (123) (104)	74	56	189						
TPA-48	H37	148	134	53	48	146				
TPA-49	H37	134	130	60	50	156				

遺構 No	検出位置	上 端		下 端		添 き	発掘セグメント	出土遺物 () は遺物No	備 考	掲載図版
		長軸	短軸	長軸	短軸					
TPA-50	H 38	119	99	57	49	164				第20図
TPA-51	I 38	96	75	64	50	124		フレーク		第20図
TPA-52	I 38	135	119	67	53	177				第20図
TPA-53	I 38	(98)	(90)	50	45	145		条痕文系(258)		
TPA-54	I 38	169	138	89	68	117		フレーク	上部擾乱	
TPA-55	J 38	146	119	56	52	159				第20図
TPA-56	J 38	132	113	62	56	150		条痕文系(63)		第20図
TPA-57	J 38	176	167	56	52	171		条痕文系・フレーク		第20図
TPA-58	J 38	148	117	52	48	155				
TPA-59	K 38	—	—	—	—	—			台風により実測面積失	
TPA-60	K 38	—	—	—	—	—			*	
TPA-61	K 40	—	—	—	—	—		尖底部(141)・フレーク	*	
TPA-62	K 40	—	—	—	—	—		土器片	*	
TPB-1	I 9	119	111	100	95	150				第21図
TPB-2	H 10	130	120	103	95	155		条痕文系		第21図
TPB-3	G 11	148	132	92	80	138				第21図
TPB-4	F 11	117	108	87	66	139	1	条痕文系・フレーク		第21図
TPB-5	E 11	138	115	115	105	118				第21図
TPB-6	E 12	93	84	108	95	124		沈縞文系(134)		第21図
TPB-7	E 13	116	109	104	93	125	1			第21図
TPB-8	F 14	125	116	92	87	136	2	条痕文系(173)		第21図
TPB-9	G 14	117	96	111	107	152				第21図
TPB-10	H 15	94	88	103	103	123	1			
TPB-11	F 18	(145)	(83)	113	108	95			上部擾乱	第22図
TPC I - 1	H 16	111	92	92	70	103	3			
TPC I - 2	E 19	161	127	68	54	86	1			
TPC I - 3	F 30	104	96	92	80	83	1			第22図
TPC I - 4	F 30	118	80	68	62	98	1			第22図
TPC I - 5	G 30	98	82	84	64	84	4			第22図
TPC I - 6	I 32	131	112	96	42	113	1	フレーク		第22図
TPC I - 7	I 31	122	112	57	54	84	1	条痕文系		第22図
TPC I - 8	I 32	120	119	77	57	84	2			第22図
TPC I - 9	K 32	143	110	71	60	108	1			
TPC I - 10	G 36	133	127	62	36	106	1			
TPC II - 1	H 16	136	111	89	71	104		尖底部		第22図
TPC II - 2	G 25	136	116	105	71	98				第22図
TPC II - 3	K 29	151	118	113	84	139				
TPC II - 4	H 31	109	90	79	57	93		条痕文系		第22図
TPC II - 5	H 37	155	130	99	72	76		土器片・フレーク		
TPD I - 1	D 2	146	72	147	35	128	1	条痕文系		第23図
TPD I - 2	G 3	106	64	53	20	107	3			
TPD I - 3	D 4	205	150	127	39	124	1	打製石斧(123)		
TPD I - 4	E 8	181	124	154	52	100	2			第23図
TPD I - 5	E 11	167	82	132	57	92	1			第23図
TPD I - 6	E 13	146	96	128	43	91	1	特殊磨石		第23図
TPD I - 7	F 14	142	98	78	47	94	2	尖底部		第23図
TPD I - 8	F 15	144	106	89	51	104	2			第23図
TPD I - 9	E 15	162	91	105	19	92	2			第23図
TPD I - 10	D 17	190	122	140	37	102	2			第23図
TPD I - 11	D 18	146	117	127	40	103	1			第23図
TPD I - 12	E 19	192	76	140	34	90	1			第23図

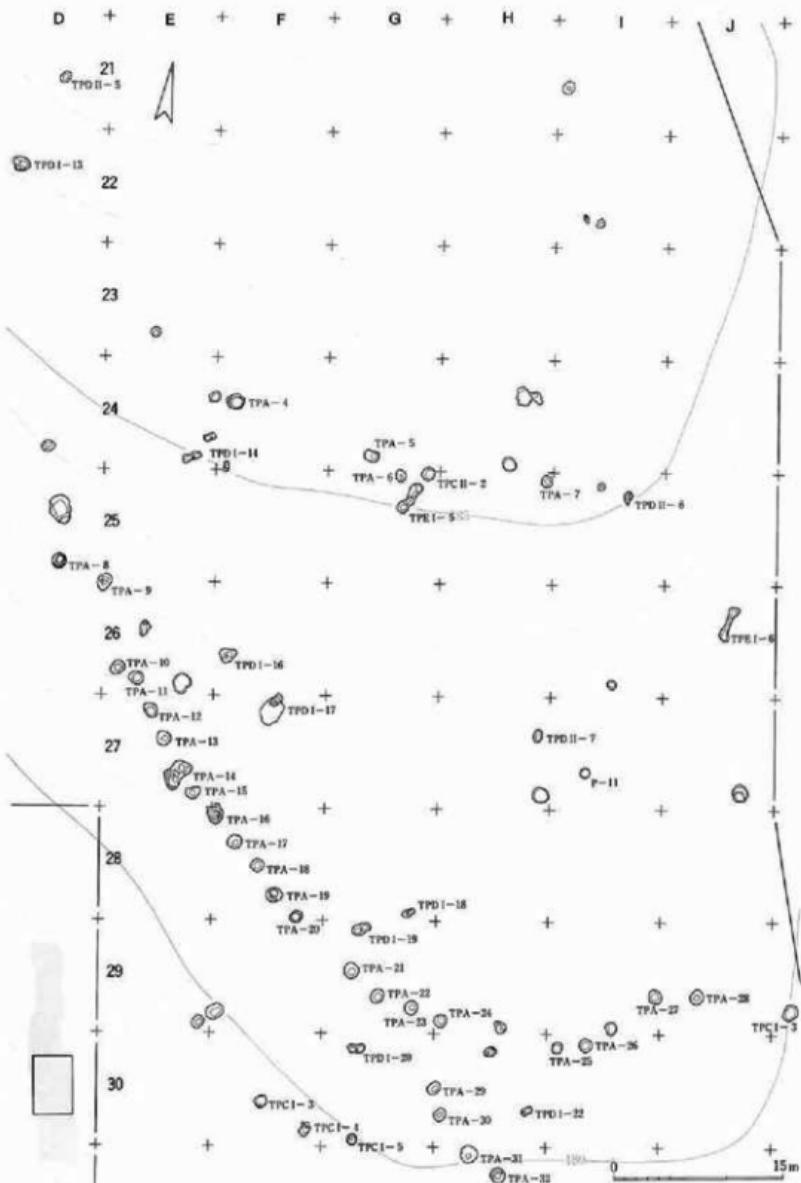
遺 墓 No	検出位置	上 置		下 置		深さ	底面リット数	出 土 遺 物 () は遺物No	備 考	掲載 回数
		長軸	短軸	長軸	短軸					
TPD I - 13	D 22	159	126	146	43	125	1			第24回
TPD I - 14	E 24	170	64	149	35	108	1			第24回
TPD I - 15	F 26	—	—	—	—	—	—			第24回
TPD I - 16	F 26	140	124	78	43	132	1			第24回
TPD I - 17	F 27	(100)	(68)	73	40	118	1		上部擾乱	
TPD I - 18	G 28	118	42	74	22	93	1			
TPD I - 19	G 29	167	92	124	41	112	1			
TPD I - 20	G 30	144	67	126	36	106	1			第24回
TPD I - 21	H 30	110	78	83	33	105	2			第24回
TPD I - 22	H 30	101	59	78	38	122	1			
TPD I - 23	I 34	—	—	—	—	—	—			
TPD I - 24	I 35	156	109	94	48	116	2	不定形剥片石器		第24回
TPD I - 25	I 36	94	91	54	40	120	1	条痕文系(240)		第24回
TPD I - 26	I 38	149	108	65	37	140	1	沈線文系(105)・フレーク		
TPD II - 1	I 3	106	55	94	34	130				
TPD II - 2	F 4	—	—	69	35	134			T P E - 2 と切り合う	
TPD II - 3	E 12	167	111	106	40	113		条痕文系		第24回
TPD II - 4	E 14	142	78	138	26	75				
TPD II - 5	D 21	108	83	71	36	73				
TPD II - 6	I 25	114	75	127	16	102				
TPD II - 7	H 27	110	76	90	35	149				
TPD II - 8	I 37	101	83	52	24	121				
TPD II - 9	I 39	135	84	86	38	113				
TPE I - 1	D 2	300	69	308	43	127	2	鐵石		第24回
TPE I - 2	F 3	310	76	373	18	113	5	沈線文系(109)・フレーク	T P D II - 2 と切り合う	第25回
TPE I - 3	F 5	316	70	324	30	106	5	前期(281)・フレーク		第25回
TPE I - 4	F 6	295	64	363	20	97	2			第25回
TPE I - 5	G 25	307	58	271	22	109	3			
TPE I - 6	J 26	314	52	286	16	88	1			
TPE II - 1	D 1	308	61	336	25	138				
T P F - 1	G 3 (380)	24	377	12	85			土器片・打製石斧	T P F - 2 と切り合う	第26回
T P F - 2	G 3	182	68	160	23	97		無文	T P F - 1 と切り合う	第26回
T P F - 3	F 5	146	80	71	15	107		チップ		第26回
F P - 1	E 3	104	87	121	115	85	1			第27回
F P - 2	F 8	72	69	75	69	20		後期(474a)	¹⁴ C資料採取	第27回
F P - 3	F 8	104	88	118	106	35				第27回
F P - 4	F 9	117	115	116	116	45	2			第27回
F P - 5	E 32	177	161	163	160	59				第27回
P - 1	H 3	105	103	92	91	40		中期(376)		第28回
P - 2	F 4	93	78	70	70	50		土器片・フレーク		第28回
P - 3	G 4	129	124	105	99	19		沈線文・条痕文系		第28回
P - 4	G 5	289	166	204	42	64		条痕文(159)・前期(279)		第28回
P - 5	G 5	177	131	133	96	31		前期(326)・中期(416)		第28回
P - 6	F 5	69	57	28	19	122				第28回
P - 7	F 10	141	109	104	81	58		条痕文(178a)・中期(396)		第28回
P - 8	F 11	46	42	34	33	34		中期(387)		第28回
P - 9	E 17	134	119	65	61	79		条痕文(251)		第28回
P - 10	D 20	117	103	64	56	80				第28回
P - 11	I 27	91	84	78	72	61		前期(327)		第28回
P - 12	F 36	178	157	154	119	47				第28回
P - 13	H 38	131	111	107	95	14			集石土坑	第29回



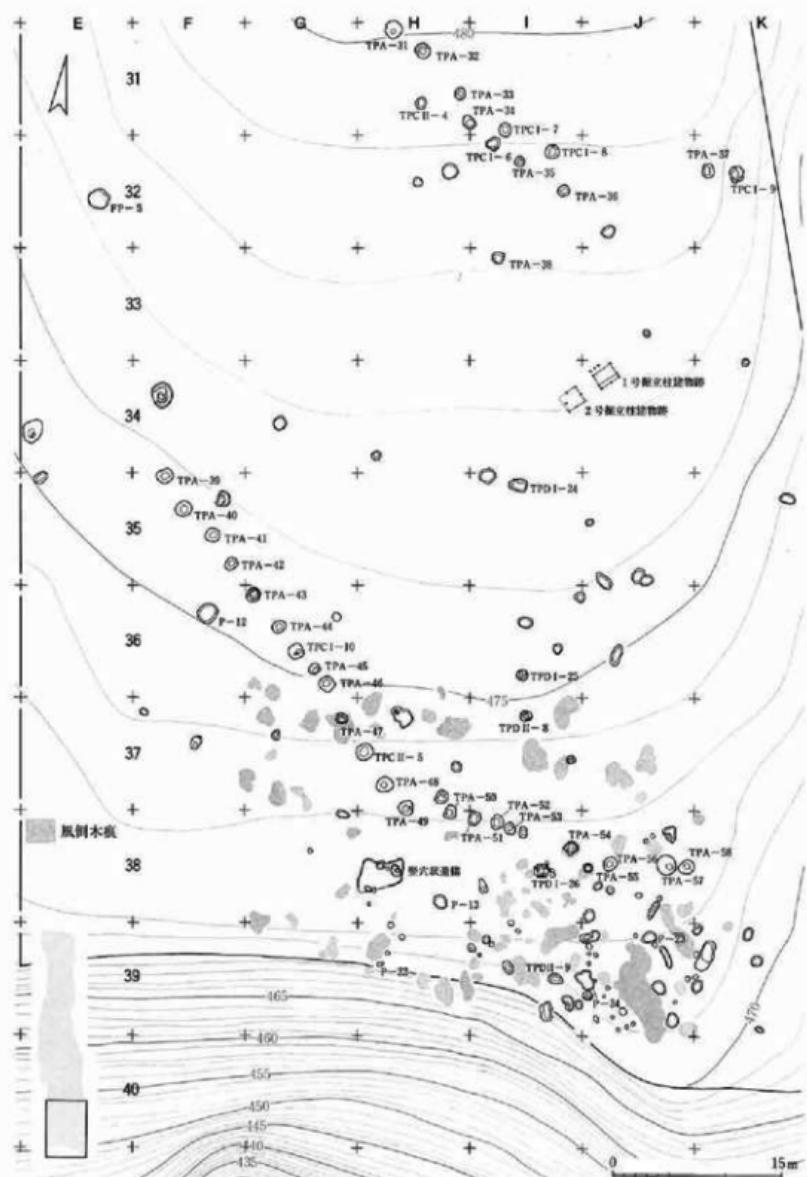
第13図 岩原I遺跡遺構全測図(1)



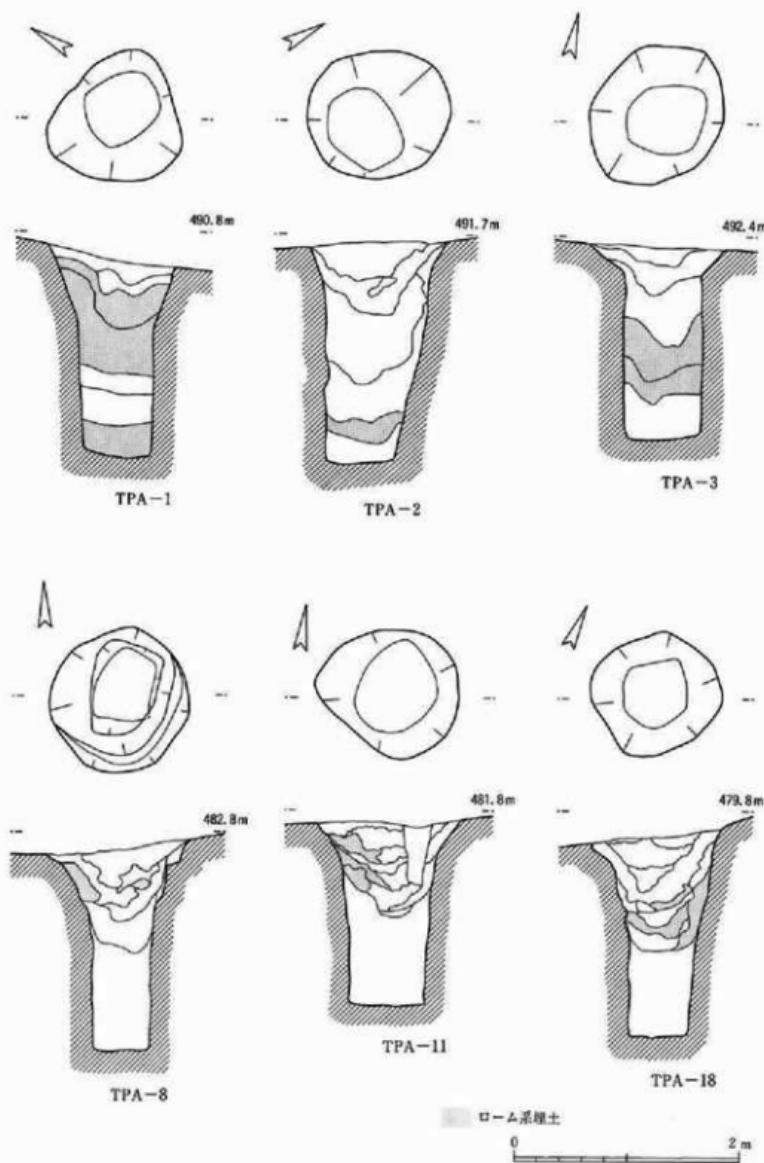
第14図 岩原I遺跡遺構全測図(2)



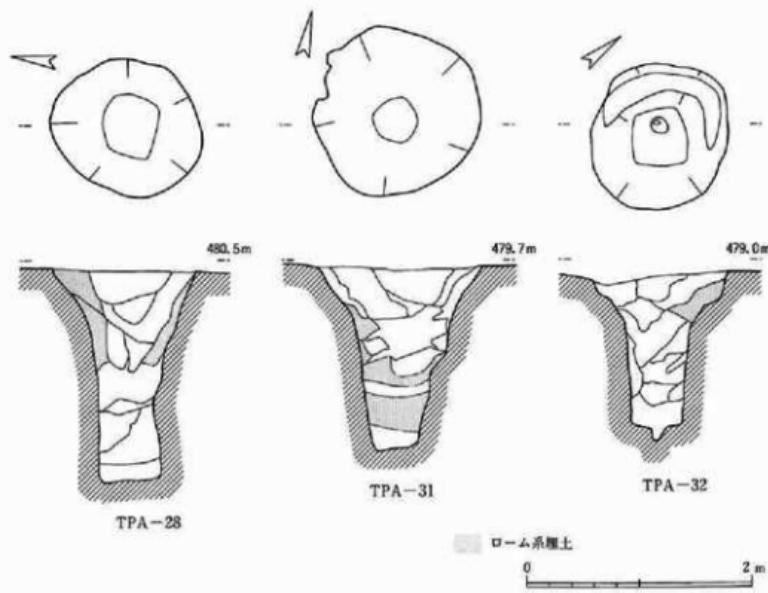
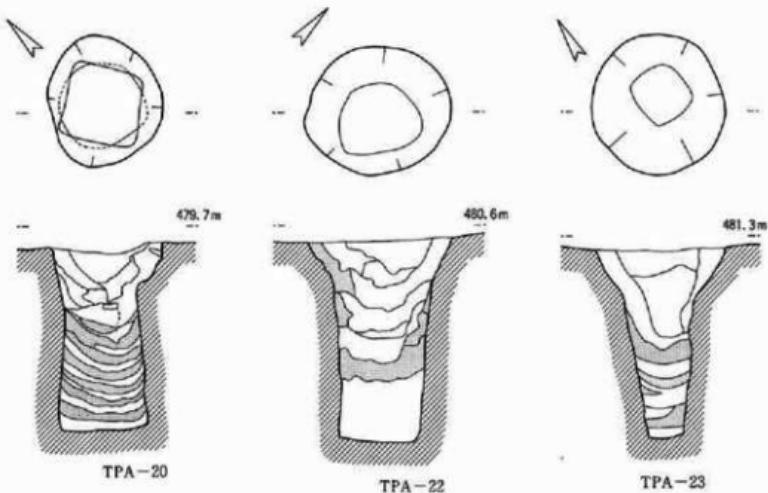
第15図 岩原 I 道路造構全測図(3)



第16図 岩原1遺跡遺構全測図(4)



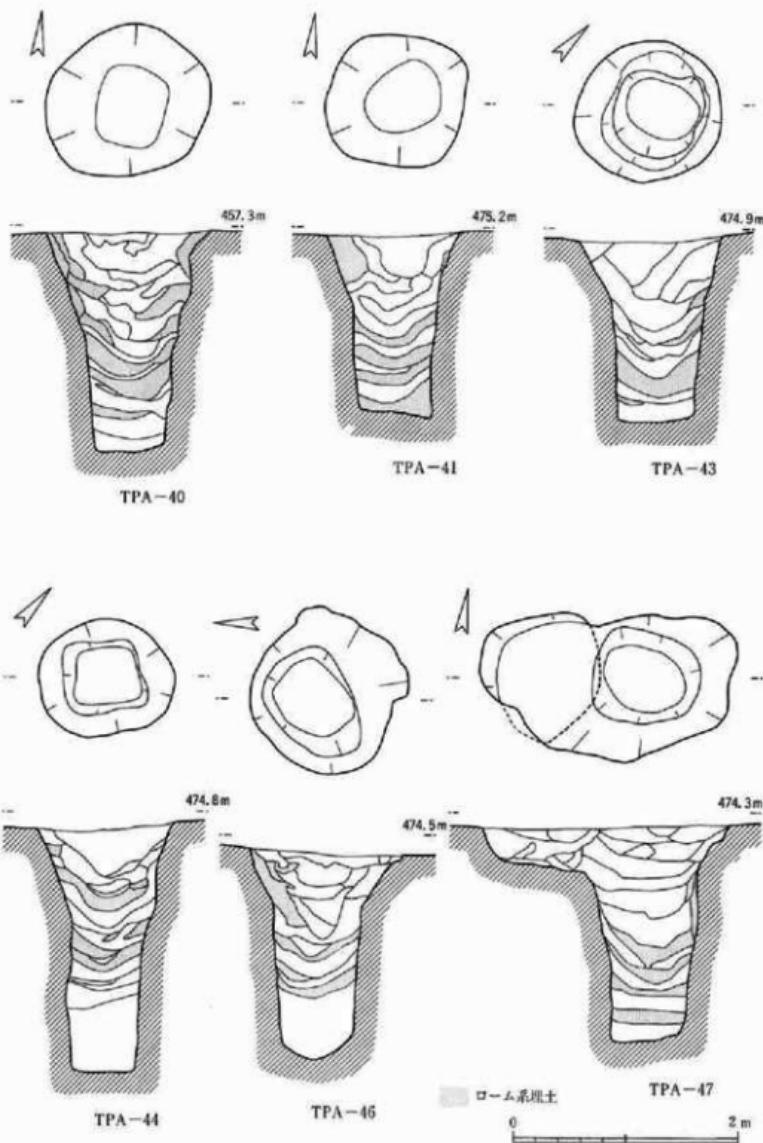
第17図 陥穴状土坑(1)A類



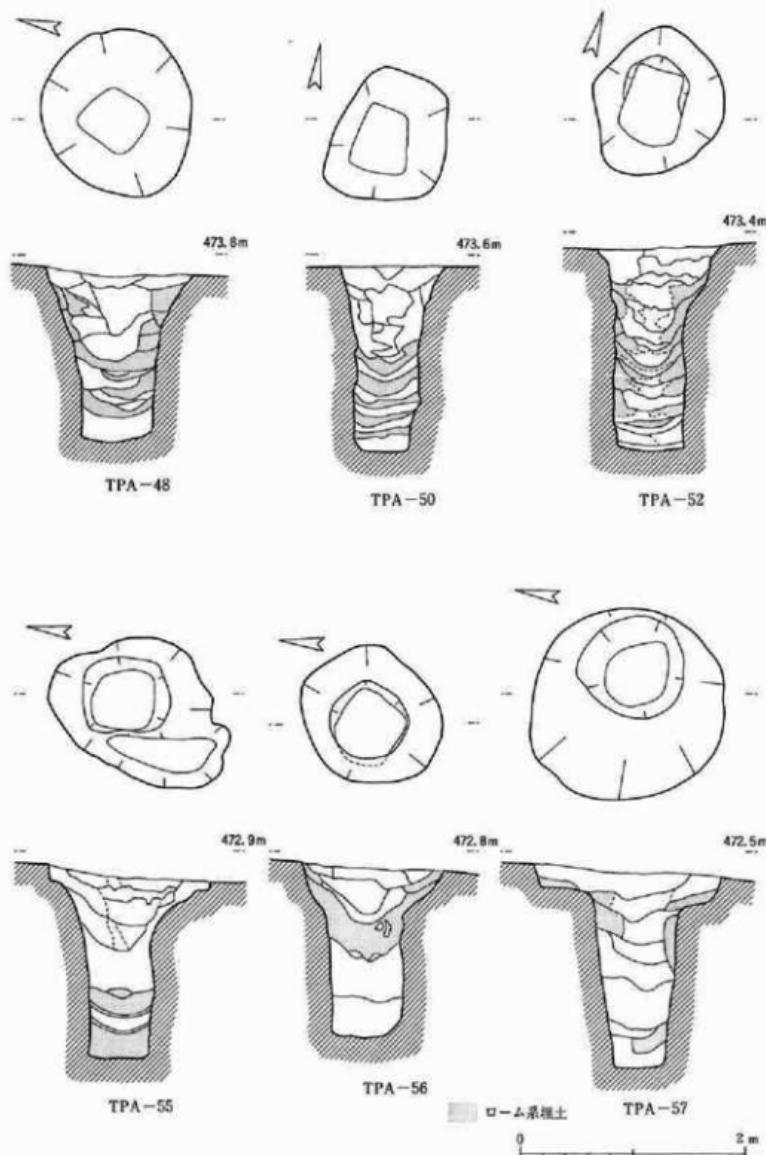
ローム系層上

0 2 m

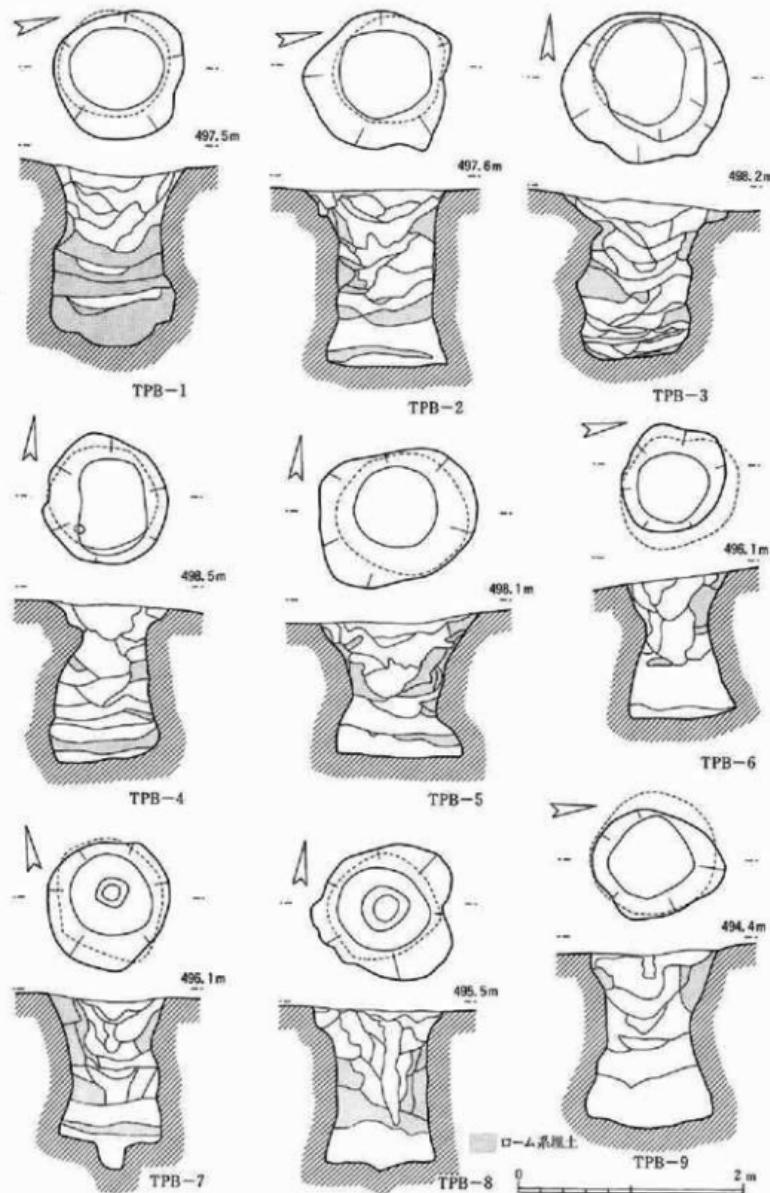
第18図 陥穴状土坑(2)A類



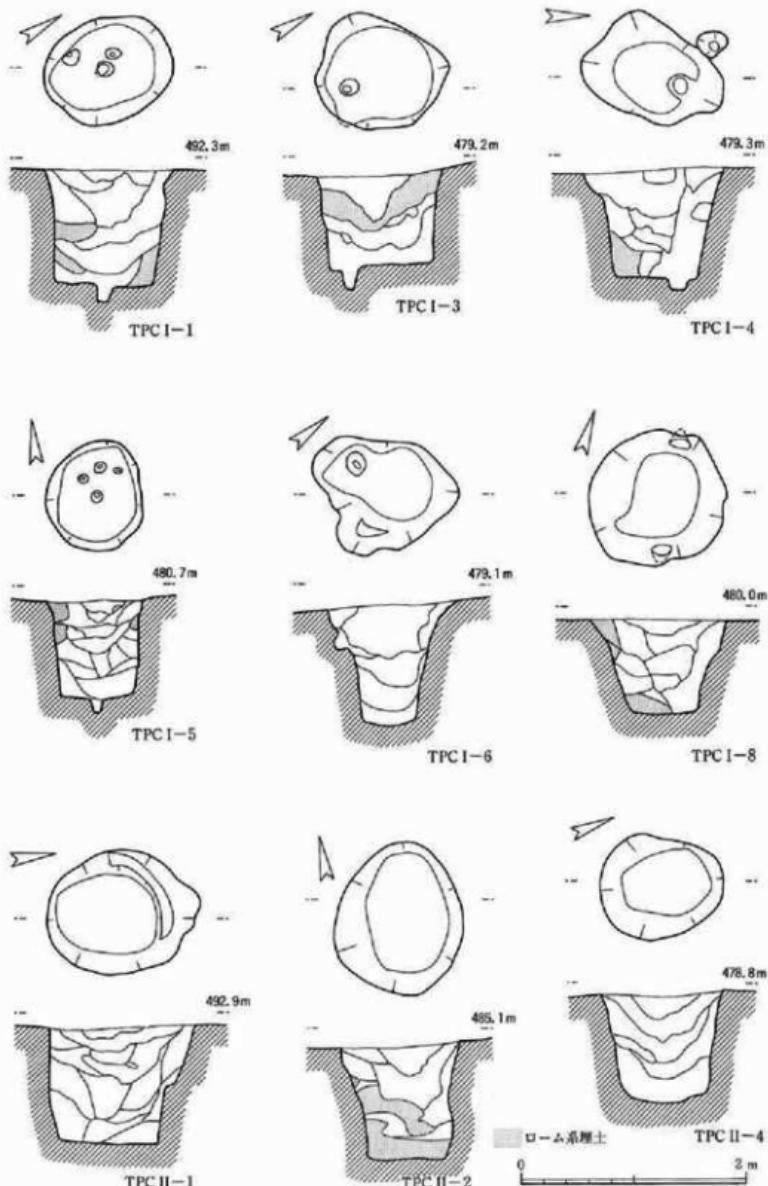
第19図 陷穴状土坑(3)A類



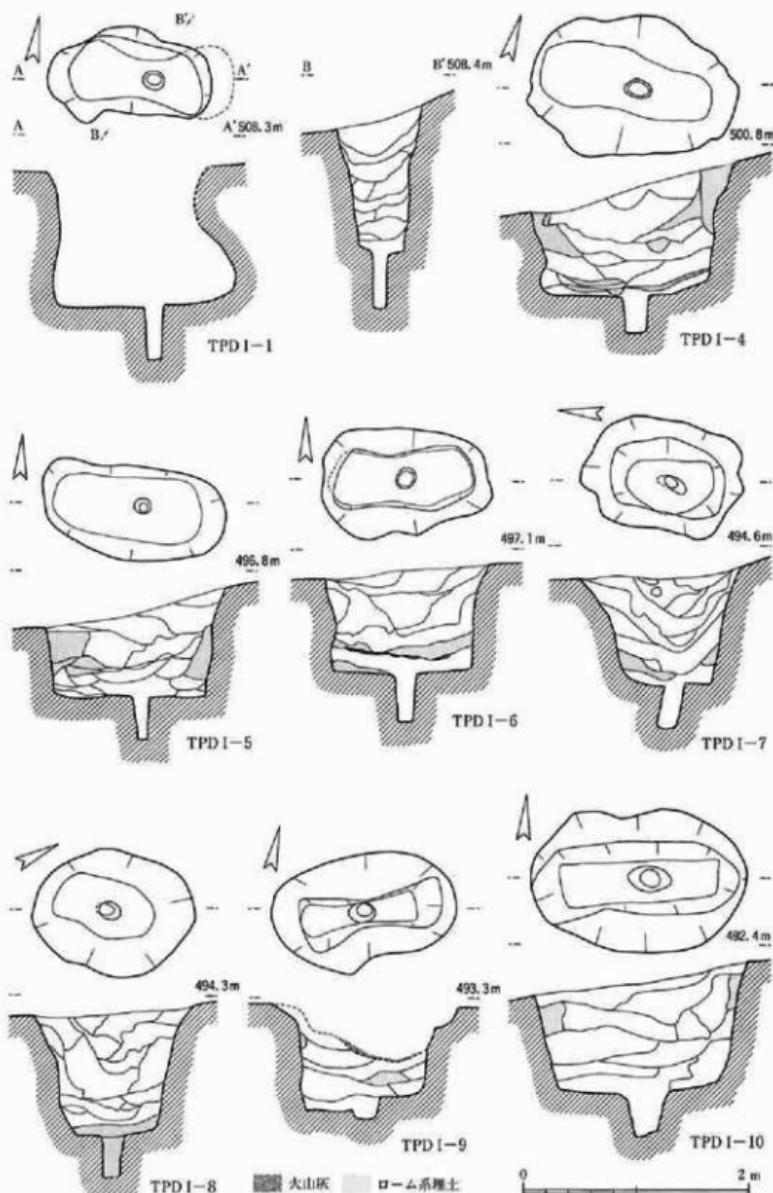
第20図 陥穴状土坑(4)A組



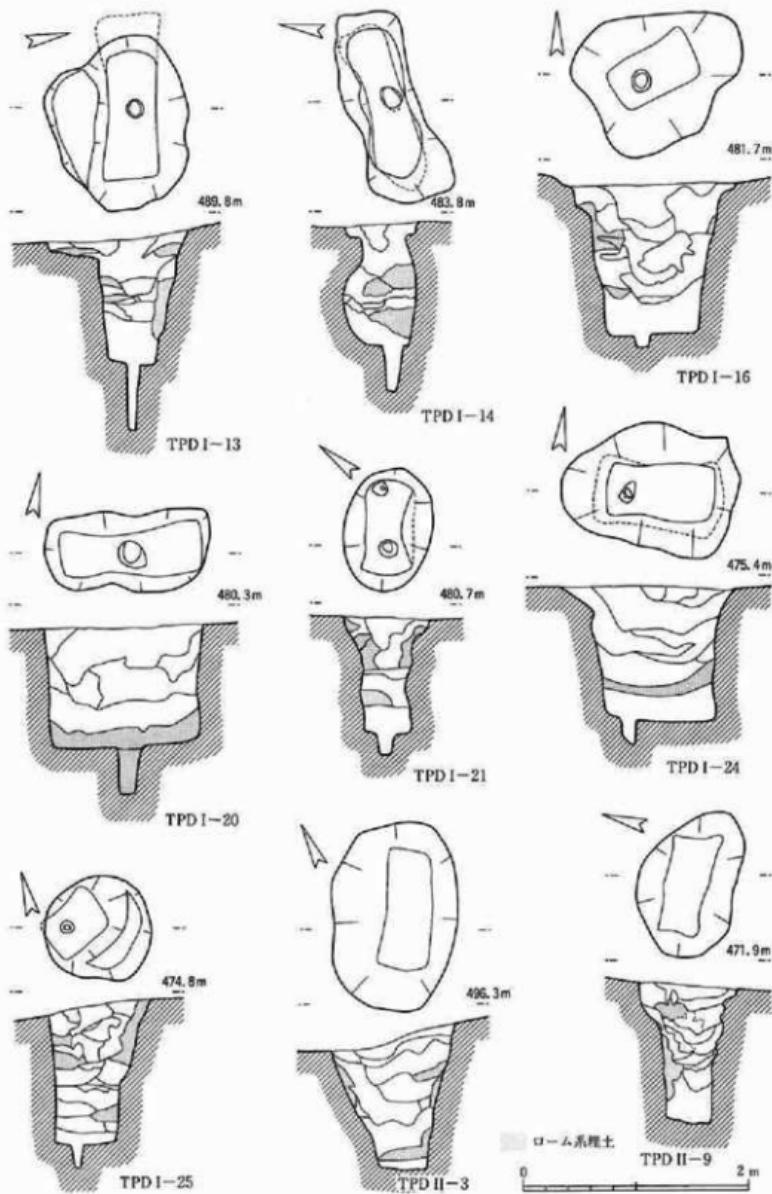
第21図 竪穴状土坑(5B類)



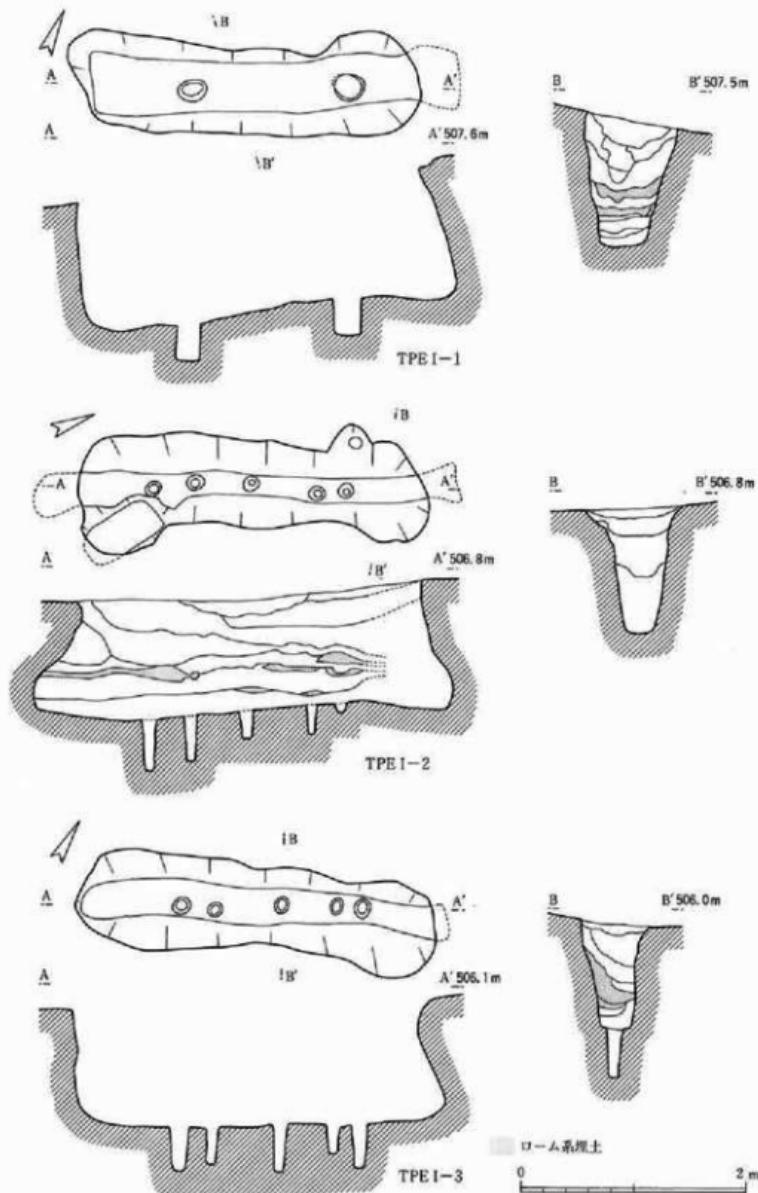
第22図 圓穴状土坑(6C I・C II類)



第23図 陥穴状土坑(7)D 1類

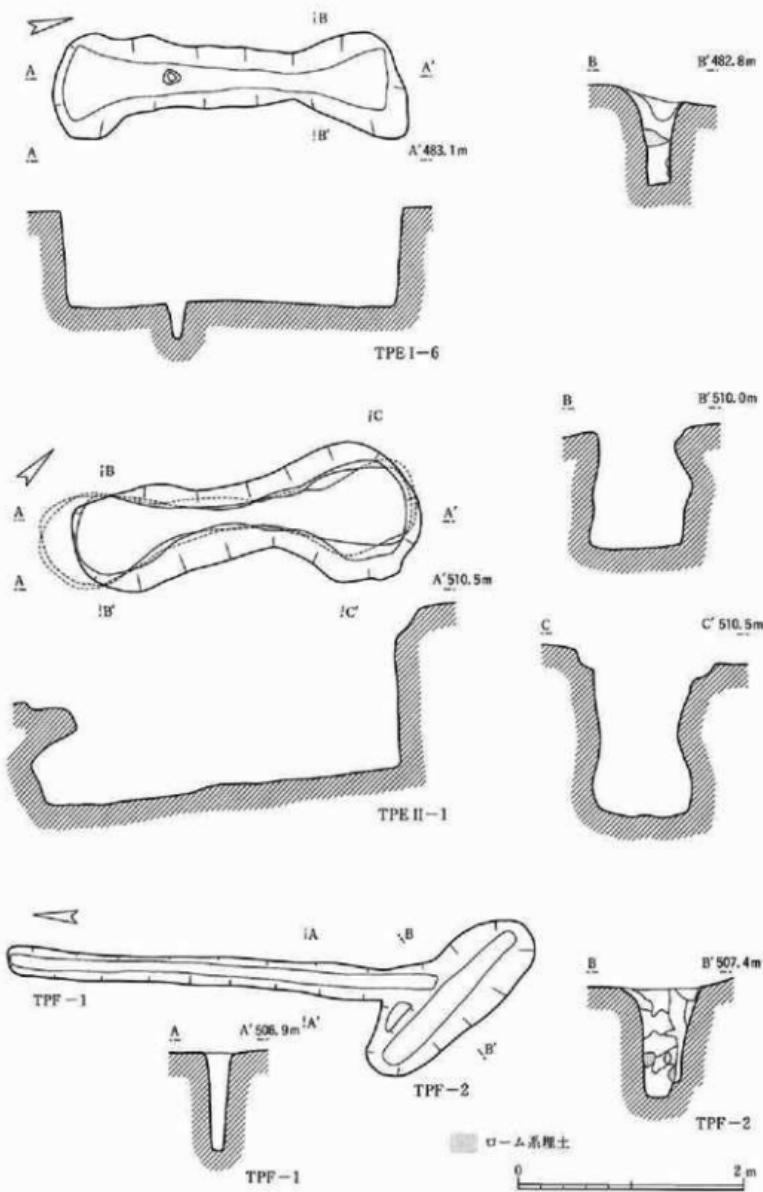


第24図 陪穴状土坑(8)D I・D II類

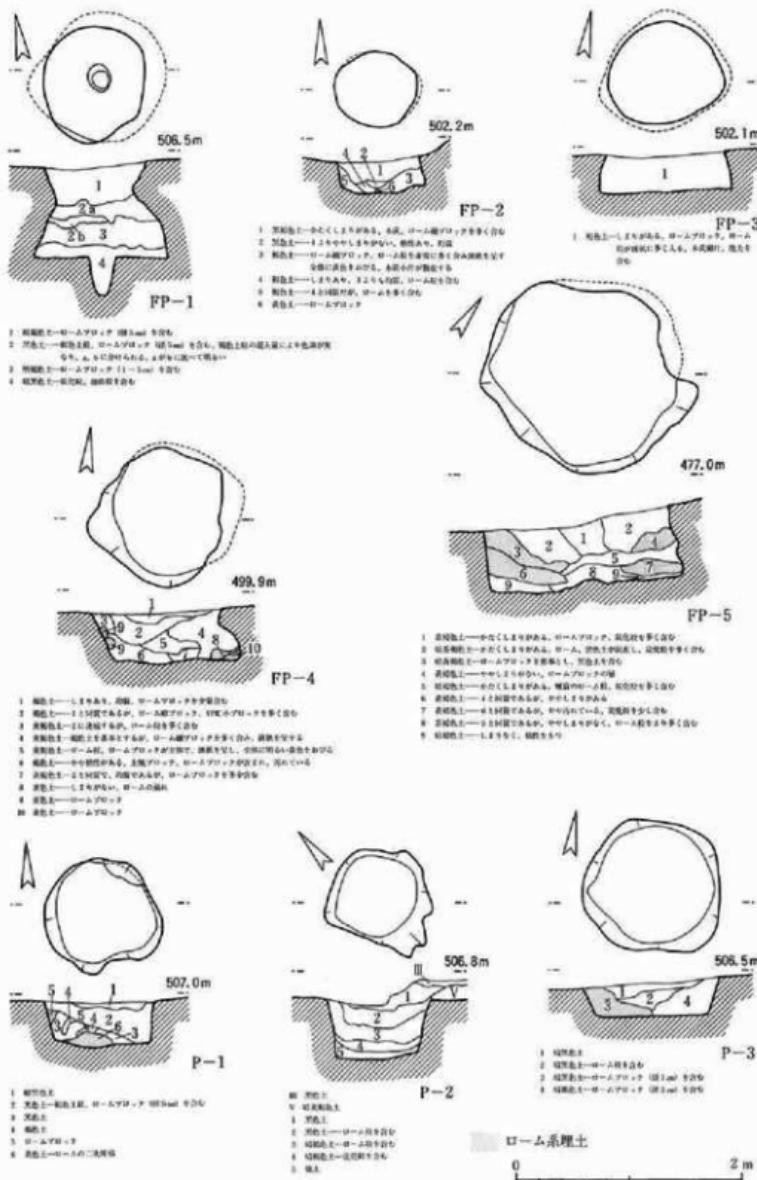


第25図 陷穴状土坑(9)E I類

3. 造 壁

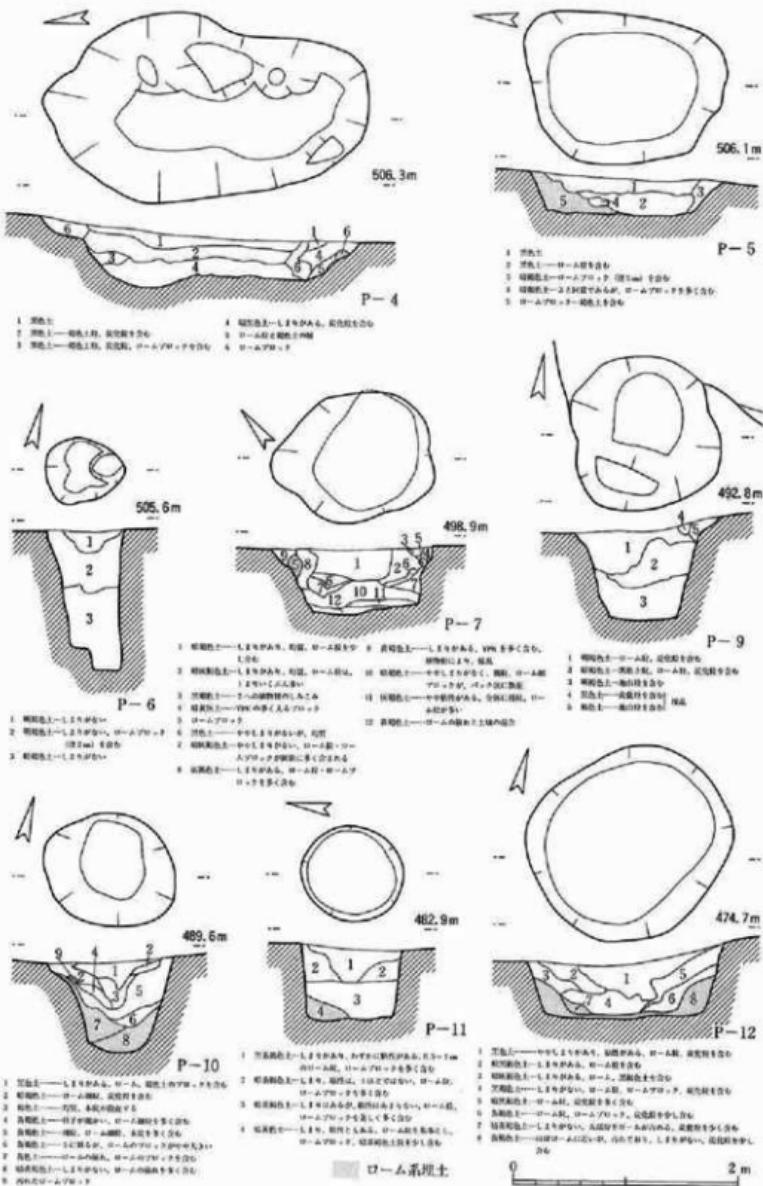


第26図 窑穴状土坑(10)E I・E II・F類

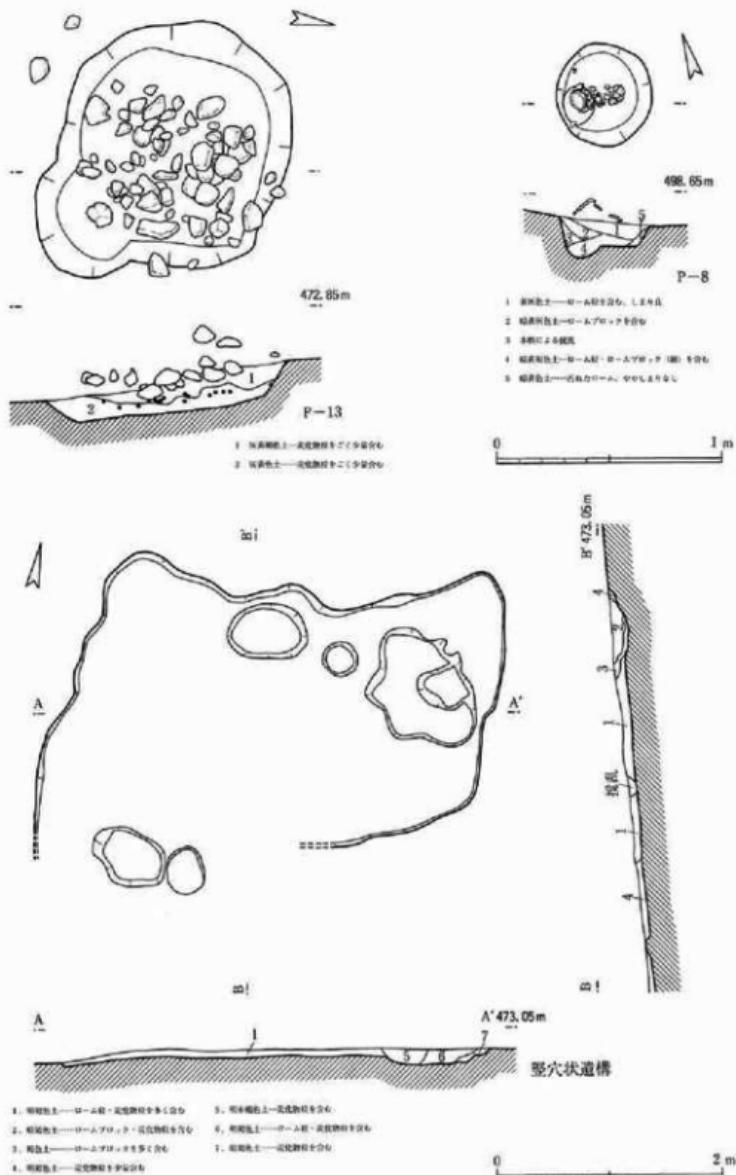


第27図 フラスコ状土坑・その他の土坑(1)

3. 真 情



第28図 その他の土坑(2)



第29図 その他の土坑(3)・豊穴状造構

4. 遺物

岩原I遺跡で検出された遺物は、旧石器時代から縄文時代後期までの各時期にわたり、土器・石器・貝片類を含めた総数は9,563点にのぼる。これらの出土状況は先述(第III章2)のとおりその大半が遺物包含層(III・IV層)中からの出土で、明確に造構に伴うと判断されたものはごくわずかであった。このため、造構出土と包含層出土の遺物を分けて扱うことはせずに、所轄時期(土器)及び器種(石器)別に分類して報告する。なお、報告に際しては以下の点を考慮して、包含層資料であってもできるかぎり多くの資料を抽出・図示するように努めた。

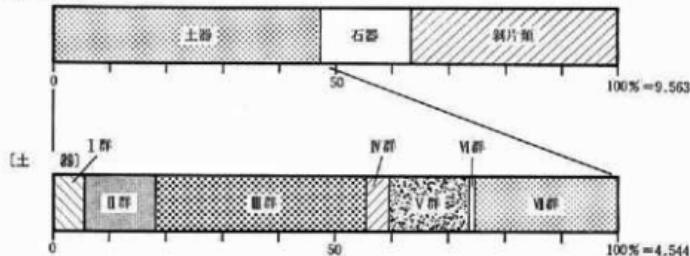
- ・土器については、新潟県内の報告例が少ない時期(特に早期)のものが多く、編年を考える上で重要となること。
- ・石器の出土量が調査面積の広いことを差し引いても極めて多く、分布状況や器種内細分などの検討を通じて、時期別の石器組成を知る手掛かりを得る可能性があること。

A. 土器(第33~49図、図版16~29)

縄文時代早期から後期に属するもので、時期不明の細片を含めると4,544点を数える。群別の出土割合は第30図のとおりであるが、半数以上(約55%)を早期(第I~III群土器)が占め、本遺跡の主体を成していることが分かる。また、時期不明のもの(第VII群土器)が約1,200点と多いが、その内訳は文様観察のできない細片と磨耗片が大半であり、これに粗製深鉢の脇部片(縄文・無文)を加えたものである。なお、出土土器のほとんどは中・小破片のため、全体の器形・文様構成を推定できるものはわずかであった。

分類にあたっては先ず時期別に七群に大別し、それぞれ必要に応じて文様・胎土などの個々の属性と、これらの組み合わせによってさらに細分した。このため、各群毎の細分基準は不統一なものとなった。また、報告順序は必ずしも時期的な前後関係を表わすものではない。各群

〔遺物全体〕



第30図 出土遺物の内訳および各群土器の構成比

の概要是以下のとおりである。

- 第I群土器……早期前半の土器(撚糸文系土器、押型文系土器)
- 第II群土器……早期中葉の土器(沈線文系土器)
- 第III群土器……早期後葉の土器(条痕文系土器)
- 第IV群土器……前期の土器
- 第V群土器……中期の土器
- 第VI群土器……後期の土器
- 第VII群土器……所属時期不明の土器

以上の繩文土器のほかに、中世珠洲系陶器の小片が1点表採されている。

1) 第I群土器(第33・34図、図版16)

早期前半の撚糸文系土器と押型文系土器を一括して本群とした。出土点数は255点で、土器全体に占める割合は5.6%と低い。

第I群1類土器(1~23)

撚糸文を施文するもの(A)と縄文を施文するもの(B)に分けられ、総数78点が出土している。

1類A(1~11・13) 撥糸文を縦位もしくは斜位に施文するもので、器厚は7~8mmと比較的に薄手である。胎土は緻密で砂粒の混入が少ないものが多く、3・4のように2類土器に類似するものもある。5は白色砂粒を多く含み、また8・9は金雲母を少量含むことで特徴的である。焼成は良好なものが多い。原体はL撚りのものがほとんどであるが、1・2・6・10のようにR撚りのものもわずかに見られる。1は口縁端部でわずかに外反しながら立ち上るので、口唇直下から細かく条間のまばらな撚糸を縦位に施文する。また、口唇部にはこれと同一原体と思われる圧痕が、口辺と平行して一条施される。2は口縁端部が外側に肥厚し、ナデによって口唇中央部がわずかにくぼむもので、比較的細かい撚糸を斜位に交互施文する。6は脣部から直線的に立ち上り口縁端部でわずかに外反する深鉢で、やや丸みを帯びた口唇部は内面にかけてよくナデられている。撚糸は基本的には右下がりであるが、一回の施文単位は短くて施文方向にもばらつきが見られる。3~5は条間の比較的広い縦位施文、7~9は条間が密な縦位施文である。10・11には斜行する一条の沈線が認められる。13は0段の撚糸を横位および斜位に回転させたものである。2・5・13の外面には炭化物の付着が見られる。

1類B(12~14~23) 縄文を施文するものであるが、口縁部形態や胎土・施文方法で特に共通する特徴は見い出せない。器厚も5~9mmとばらつきが認められる。縄文原体は17を除いて、16・23がLRのはかはすべてRLである。12は灰白色を呈する口縁部で、口唇部は内削ぎ状となり内面にかけて平滑にナデされている。口唇部から縄文(RL)を弱く回転させ、部分的に強く押し付ける。14は口縁端部で外折するもので、口唇部下にLRの原体を押捺した後、以下に

回転施文している。15は胴部から内湾気味に立ち上り口縁端部に至る、口径約17cmの比較的小形の深鉢と思われる。器厚は5mmと薄く、胎土には石英・長石・白色砂粒を多く含む。口唇部から細かい繩文(RL)を施文するが、方向にはばらつきが見られる。赤褐色を呈する。17はやや大粒の砂粒を多く含み赤褐色を呈する口縁部片で、異種の繩文(RL・LR)を羽状に施文する。18は灰黒色を呈し、胎土に纖維を混入する。原体は单節(RL)と考えられるが明確ではなく、口唇部には同一原体と思われる圧痕が観察される。22は胎土に微細砂粒を中量含み黄灰色を呈する土器で、2類土器に類似する。23は底部付近の破片であろう。16の外面には炭化物の付着が認められる。

第1群2類土器(24~53)

押型文を施文するグループで、楕円文と山形文を併用(A)、山形文のみ(B)、楕円文のみ(C)の三つに細分される。出土総数は177点である。

2類A(24) 楕円文と山形文を併用するものは本例のみである。器形はやや外傾する口縁部から乳房状の尖底部にいたる深鉢と思われ、器厚は6mmと薄い。胎土には長石粒・スコリア粒・白色砂粒を比較的多く含むほか、纖維を少量混入する。色調は、灰褐色から部分的に暗褐色を呈する。文様は口唇部下に2~3mmの無文部を挟んで横位楕円文帯を配し、その下にやはり横位に山形文を施文する。横位楕円文帯の幅は6.4cmを測るが、これは楕円文の観察から原体の長さに一致するものと考えられる。また、楕円文は原体の長軸に対して直交するように長い。全体の文様構成は不明であるが、横位楕円文帯と山形文帯が底部付近まで交互に密接施文されるものであろう。津南町卯ノ木遺跡〔中村1963〕で、併用押型文土器として分類されたものと同じ文様構成をとるものと思われる。

2類B(25) 山形押型文を横位に施文したもので、1点のみ出土している。2類Aのように楕円押型文と組み合わされる可能性も考えられるが、小片のため明確でなくここでは分けて考えた。胎土には微細砂粒を中量含み、灰黄褐色を呈する。焼成は不良でややもろい。

2類C(26~53) 楕円押型文のみを施文するもので、2類土器の大半を占める。器厚は5~10mmとばらつきが見られ、胎土には白色砂粒・スコリア粒・黒雲母などを含むもの(26~47)と、緻密で混入物をほとんど含まないもの(48~53)に大きく分けられる。また、34・40のように纖維を混入するものもわずかに見られる。焼成は概して良好で、色調は灰黄褐色のものが目立つ。文様は42・53を除いて基本的には横位密接施文と考えられるが、原体の長さなどは不明である。楕円文を観察すると原体の長軸方向に長いものが大半であるが、長軸方向に直交して長いもの(41)や円形を呈するもの(29・30)も存在する。26は口縁部片で、胴部から口縁端部にかけて薄くなりほぼ直線的に立ち上がる。口唇部直下に幅1.3cmの無文帯を持ち、以下横位に楕円押型文を施文する。51・52は交差する条が直線状に見えるが、これは原体回転時の押し付け強度の差によるものであろう。53は楕円文が菱形を呈し、その断面もカマボコ状ではなく平坦な

点ではかとは異なる。また、破片下半には文様が施文されない部分が観察され、無文帶を持つ可能性がある。42・44・50の外面には炭化物が付着するが、特に42・44は著しい。

第I群土器の分布(第31図)

本遺跡での遺物分布傾向として、大きく分けて三ヶ所の集中域が存在することは既に述べたとおりである。第I群土器はこれらの中でも、台地先端部の傾斜がやや緩くなった部分に分布の中心が認められた(1・2類共)。調査グリッドでいえば、ほぼ36列以南にあたる。このほか、出土数は少ないが13列以北にも分布している。各類の分布を見ると、1類Aと1類B・2類の間には若干の差が存在することが分かる。即ち、13列以北で出土するのは1類Aに限られ、その他はE5区の梢円押型文土器1点を除くと36列以南にのみ分布するということである。このことは、1類Aでも36列以南から出土するものの中に、胎土・色調が2類押型文土器に類似するもの(3・4など)が多いという事実と共に、撫系文系土器と押型文系土器の関係を考える上で注意を要することであろう。なお、36列以南の分布状況は、後述するように第II群土器や第III群土器は数メートルの範囲に集中する傾向が見られるが、本群は比較的散漫な分布を示す。層位的にはIV層中から渾然一体となって出土しており、各類ごとの上下関係を捉えられるような状況ではなかった。

2) 第II群土器(第34~36図、図版17~19)

縄文時代早期中葉の沈線文系土器を一括して本群とした。基本的には三戸式・田戸下層式・田戸上層式土器に対比されるものであるが、大半が小片のため全体の器形・文様構成を知り得るものは少ない。このため、破片に表われた文様を構成する要素や施文技法によって細分することにした。出土総数は569点である。

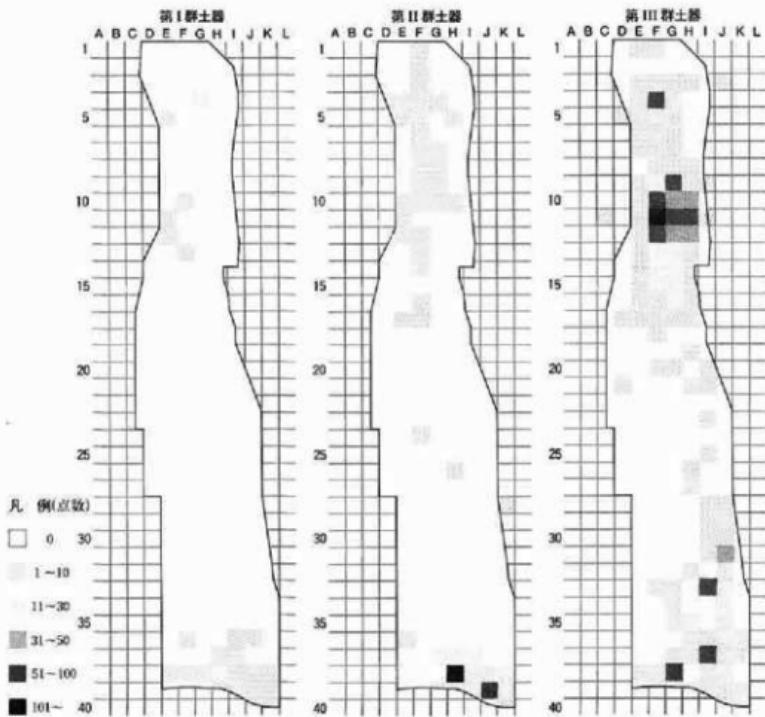
第II群1類土器(54~62)

横位・斜位の平行沈線文を主体とし、沈線間及びこれによって区画された内部に刺突を施すもの。

1類A(54) 横位数段の平行沈線を区画文として、多段構成をとると思われるものである。胴部上半でやや外傾して直線的に立ち上り、胴部以下はそのまま緩く湾曲しながら尖底部に至る器形と思われるが、底部は復元図より鋭角に尖る可能性も考えられる。口縁は平縁で端部は丸味を帯びており、器厚約7mmと比較的に薄い。胎土は緻密で白色細砂粒を多量に含むほか、石英・長石・スコリア粒をわずかに混入する。焼成は良好で内面は暗褐色、外面は灰黄色から暗灰色を呈するが、外面は消耗が著しい。文様は口縁部文様帶と胴部文様帶に二分される。口縁部文様帶は一条の横位沈線とヘラ状工具によると思われる爪形の刺突文を交互に二段施文する。胴部文様帶は二~四条の横位平行沈線文を区画文とし、区画内に斜位の短沈線を「ハ」の

字状に充填するもので、三段までは確認されるが以下は不明である。口縁部外面には、所々に炭化物の付着が認められる。本例のように横位数段にわたる平行沈線文を区画文とするものは、竹之内式土器〔馬目1982〕として三戸式土器の前段階に位置付けられている。

1類B(55~62) 横位・斜位の平行沈線文を組み合わせて区画文とし、区画内及び沈線間に刺突文を施すもの。胎土は白色細砂粒を多く含むが54に比べて混入の割合は少なく、58・61には少量の纖維を混入する。色調は62を除いて黄灰色を基調とする。器厚は58が11mmとやや厚手のほかは6~8mmで比較的薄い。文様は55・57・60・61のように平行沈線間に刺突を施すものと、58・62のように沈線で区画された内部に刺突を充填するものが見られる。なお、沈線と刺突はいずれも同一工具によるものと思われ、丸棒状(55・56・58・61)、角棒状(57)、ヘラ状(62)などがある。55は口縁部資料で54と類似する文様構成をとる可能性もあるが、一応分けて考えた。57は頸部でやや屈曲して腹部に至る器形であろう。62はほかに比べて沈線が細く、色調も黒灰色と異質である。57・58・62の外面には、炭化物の付着が認められる。



第31図 第I~III群土器グリッド別分布図

第II群2類土器(63~66)

刺突文のみを施文するもの。器厚は8~9mmで、胎土・焼成・色調は1類土器に類似し、66を除いて1類土器の一部になる可能性も考えられる。63・64はヘラ状工具による爪形の刺突、65は細い丸棒状工具によると思われる短沈線様の刺突である。66は波状口縁になると思われ口辺に平行して、竹管による円形刺突文が施される。外面には炭化物の付着が認められる。

第II群3類土器(67~116)

基本的に沈線文のみで文様を構成すると思われるもの。

3類A(67~93・103・104) 一本引きの沈線で施文するもの。胎土・焼成・色調は1類土器と似たものが多いが、87~89のように白色細砂粒をほとんど含まず黒褐色から暗褐色を呈するものもある。また、繊維を含むものが比較的多い。器厚は8~10mmと極端なばらつきは見られない。口縁部形態を見ると、69~72のようにやや外傾して直線的に立ち上がるものと、67・68・74~79のように口縁端部に向けて外反しながら開くものに分類できる。また、外反するものは小波状口縁と平縁が存在するが、直線的に立ち上がるものには平縁しか見られない。文様的には口唇部下に若干の無文帯を持ち、以下に横位・斜位に比較的不規則な沈線を施文するものが多く、それによって鋸歯文などの図形文様を構成するものは少ない。ただ、86は鋸歯状、90・91は横位と斜位の組み合わせによって文様を構成しているようである。また、93は格子目状に沈線を施文している。104は口縁部資料であるが、口唇部から不揃いの沈線を縦位に施文し、同一工具によると思われる刻みを口唇部に施す。

3類B(94~102) 半截竹管状工具による二本同時施文の平行沈線文を施すもの。胎土には白色細砂粒を比較的多く含むほか、石英・スコリア粒を少量混入し、器厚は6~11mmとばらつきが見られる。焼成は概して良好で、色調は暗褐色から黒灰色を呈するものが多い。文様構成は比較的単純で、縦位もしくはやや斜位に施文するものがほとんどであるが、101は横位に施文した後に縦位に施文し、102は比較的短い曲線を重強状に施文する。94~96は同一個体の可能性が強く、二本同時施文か疑問が残る。

3類C(106~116) 第II群3類土器のうち、A・B以外の施文技法のものを一括した。106・107はほぼ似た器形を示すもので、胴部から口縁部に向かって大きく外反しながら立ち上がるものであろう。口縁部は平縁で、底部は尖底か丸底になる可能性が強い。器厚はいずれも6mmと薄く、胎土には比較的多くの繊維を含む。107は口縁端部に向かってさらに薄くなる。胎土にはやや大粒の砂粒や微細石英粒を多量に混入する。色調は106が暗褐色、107は茶褐色を呈する。焼成は良好で、特に106は硬く焼き締まる。文様について見ると、106は四本同時施文と思われる平行沈線を口唇部直下から胴部にかけて、横位・縦位・斜位に密接施文し、口唇部には同一工具による刺突が施される。胴部以下は無文で、丁寧にナデられている。107は二本一组の棒状工具による平行沈線で横位に四条の区画文を施文し、一段目と三段目には対向する横位

鋸歯文を重ねて菱形の文様を描き出している。また、これらに挟まれた二段目には、一本引きで縦位の短沈線を充填している。口唇部には同一工具により刺突が施される。107bは三段目の破片と思われるが、胴部以下は無文になる可能性が強い。108・109は同一個体と思われ、四単位の小波状を呈する口縁部片である。胎土には微細石英粒を多量に含み、暗灰色を呈する。ヘラ状工具により細く深い沈線を施文するが、粘土が柔らかいうちに施文したものと思われる。口縁部内面には同一工具による爪形の刺突が施される。110は比較的小形の土器で、器厚も5mmと薄い。111-116はモチーフ的には同様であるが、111-114では平行沈線間に斜位の短沈線を充填し、115・116は充填していない。いずれも胎土に纖維は含まず、褐色から暗褐色を呈する。

第II群4類土器(117-134)

平行沈線文と貝殻腹縁による刺突文を併用するもので、図示したものがすべてである。胎土には石英・長石・白色細砂粒を含むが、纖維を混入するものは1点もない。焼成はいずれも良好で、褐色から暗褐色を呈する。器厚は5~8mmである。基本的には一本引きの平行沈線で横位・斜位に区画し、沈線間にやや間隔をおいて貝殻腹縁による刺突文を充填している。貝殻腹縁文には縦位施文と斜位施文の二種類が見られる。126は器壁に対して貝殻をやや寝かせて施文している。また、132は曲線による区画で、口縁は波状になる可能性も考えられる。130・134は口縁部内側に貝殻腹縁による刺突が施される。

第II群5類土器(105・135-138)

沈線や刺突文以外の要素を含むもので、図示した5点のみである。105はやや外反しながら立ち上がる口縁部で、先端の丸いヘラ状工具による押し引き文が施文される。口唇部には同一工具による刻みを施す。135・136は小波状を呈すると思われる口縁部である。135は外面に口唇部と平行する三条の細沈線を施し、これに直交するかたちで刻みを入れている。また、口縁内側には纖維(L)の側面圧痕を刺突文風に施す。136は波頂部から垂下するように隆帯を張り付け、隆帯上に押し引き風の沈線を縦位に施文する。また、波頂部から口縁に沿って四条の平行沈線を施す。137には小突起が見られる。

第I・II群土器底部(139-146)

I群及びII群土器の底部をまとめた。いずれも尖底で、乳房状(139-141)、薄い丸底状(142)、鋭角に尖るいわゆる天狗の鼻状(143・144)、棒状(145・146)などが見られる。胎土には白色細砂粒を多量に含み、黄灰色から灰褐色を呈することは第I群2類土器や第II群1~3類(一部)土器に共通するものである。143には横位及び斜位の沈線が、また146の先端部からは、焼成前に開けられたと思われる直径1.5mmの穴が観察される。

ミニチュア土器(147)

尖底深鉢形土器を模したと思われるミニチュアで、類例の少ないものである。胎土には微細石英粒・スコリア粒・白色細砂粒を含み、灰褐色を呈する。

第II群土器の分布(第31図)

本群土器の分布域は37列以南と17列以北の二ヶ所で確認されているが、それぞれの地域で出土状況や土器に差が認められる。先ず37列以南では、H 38・J 39区のように集中出土域が存在するほか、かなり狭い範囲で密集して出土する傾向が見られる。これとは逆に17列以北では広い範囲で散漫に出土しており、集中域のようなものは認められない。また、各類ごとの分布範囲を見ると、1類～3類Aの一部は37列以南、3類Aの一部～5類は17列以北での出土が大半を占め、数点の例外を除いて他地域からはほとんど出土していない。これら二つの土器群には胎土・色調などに大きな違いが観察され、出土地域の差を考え合わせると時期的な前後関係を把握できる可能性がある。

3) 第III群土器(第36～41図、図版19～22)

縄文時代早期後葉の条痕文系土器¹⁾を一括して本群とした。胎土には纖維の混入が顕著で、本土器群を特徴付けている。総点数は1,698点で出土土器の中では最も多いが、大半は表裏に条痕文を施すだけの胴部破片である。ここでは条痕文以外の文様要素を持つものと、口縁部資料を中心に図示して説明する。

第III群1類土器(148～162)

格条体压痕文を施すもの。

1類A(148・149) 口唇部に比較的太い格条体压痕を施文したもので、二個体ともほぼ同様の器形を呈すると思われる。底部はやや肉厚な丸底と考えられ、ここから外傾しながら直線的に立ち上がってそのまま口縁部に至り、口縁には四単位の山形突起を持つものと思われる。胎土には褐色小礫・纖維を多量に混入し灰褐色を呈する。器厚は148が10mm、149が8mmである。文様は口唇部の格条体压痕のほかは、148の口縁部外面に同一原体による格条体压痕を斜位に施文するのみである。148は胴部外面に条痕は認められず丁寧なナデによって整形され、内面も胴部では条痕が顕著でなく底部付近にのみ明瞭に観察された。また、149は内外面ともほぼ全面に条痕が施されている。いずれも条痕幅は約3.5mmで格条体压痕の節幅と一致することから、格条体原体による条痕であろう。炭化物の付着は内面底部付近に顕著で、148は口縁部外面にも若干認められる。

1類B(150～157) 比較的太い格条体压痕文を施すもので、154を除いて胎土には纖維を多く含む。150は口縁端部でわずかに外反して立ち上がり、胴部からすばまって小さな平底に至る器形を呈するものであろう。器厚は11mmと厚く、胎土には微細砂粒・灰色小礫・纖維を多量に

1) 肋脈のある二枚貝を用いた条痕を表裏面に施すことを特徴とすることから、貝殻条痕文土器とも呼ばれる。しかし、第III群1類土器のように格条体原体による条痕を施すものもありその判別は難しい。このため、本書では単に条痕文系土器とした。

含む。焼成は比較的良好で、灰褐色を呈する。文様は絡条体圧痕文を頸部に二列横位施文して口縁部文様帯を作り、そこに斜位の絡条体圧痕文をはは等間隔に施文する。また、口縁端部から垂下する隆帯を貼り付け、両側から同一原体を押し付けて断面三角形状にしている。内外面とも絡条体によると思われる条痕が施されるが、底部外面にも条痕が観察された。151は別個体であるが、150と同様の絡条体圧痕を施文する隆帯が見られ、隆帯上にも施文されている。断面は台形を呈し、胎土への混入物は150に比べて少なく緻密で、色調も灰黄色である。152・153は絡条体圧痕を横位に二列施文するもので、このほか、不規則施文(154)や斜位施文(155)のものがあり、154は内面にも絡条体圧痕文が観察される。

1類 C(156~158) 口唇部に細かい絡条体圧痕文を施文するもの。いずれも口縁部資料で、器厚は5~7mmと薄い。胎土には微細砂粒を中量含むが纖維は混入しておらず、暗灰色を呈する。156・157は同一個体の可能性があるもので、やや丸味を帯びた外削ぎ状の口唇部に斜位の絡条体圧痕文を施し、以下に平行細沈線を施文する。また、156の口唇部下には断面カマボコ状の細隆起線文が貼り付けられている。器面が磨耗しているため明瞭ではないが、内面には横走する条痕が観察される。158は逆に内削ぎ状の口唇部に施文される例で、外面にはかすかではあるが条痕が残る。

1類 D(159~161) 細かい絡条体圧痕文を横位数段にわたって施文するもの。159・160は口縁部資料で、口唇部にも同一原体による施文が見られる。器厚は5~6mmで、胎土には白色細砂粒を多量に含むほか、若干の纖維を混入する。159は暗褐色、160・161は橙灰色を呈し同一個体の可能性が強い。

1類 E(162) 口唇部直下から短い原体の絡条体圧痕文を斜位に施文し、器厚は7mmを測る。胎土には微細な石英・長石・スコリア粒を多量に含むが、纖維は混入しない。色調は暗褐色を呈し、外面には炭化物の付着が顕著である。また、口唇部にはヘラ状工具による刻みが施されているが、内外面ともに条痕は認められない。

第III群2類土器(163)

断面三角形の細隆起線文を持つもので、本例1点のみである。胎土には微細な石英・長石・スコリア粒を多く含むが、纖維の混入は認められない。細隆起線貼り付け後に両脇をなぞっており、その後に浅い平行細沈線を充填する。内面には条痕を施す。

第III群3類土器(164~169・174~178・259)

沈線文を主体に施文するもの。胎土には174を除いて纖維を含み、色調は暗褐色を呈するものが多い。164は頸部で外側に屈曲して聞く口縁部を持つもので、胎土には微細砂粒・纖維を中量含む。器厚は7mmと薄く、明褐色を呈する。棒状工具と思われるもので頸部に密接する四条の平行沈線を巡らして口縁部文様帯と胴部文様帯を区画し、それぞれに斜位の平行沈線を充填した後、口縁部文様帯には交差する斜位の沈線文、胴部文様帯には一条の横位沈線文を巡ら

す。また、外傾する口唇部には同一工具によると思われる圧痕が施される。内面は条痕が明瞭に観察されるが外面には認められず、炭化物の付着が著しい。このほか、比較的浅い沈線で格子・斜格子目文を施すもの(165～167)、太い沈線を縦位平行施文するもの(168)、先端のさくられたような竹管状工具で浅い波状沈線を施すもの(174・175)などが見られる。また、169の口唇部には棒状工具による刺突が見られる。178は脣部に屈曲をもつ器形で、口唇直下から屈曲部にかけて半截竹管状工具による平行沈線をまばらに施文する。259は一本引きによる四条の平行沈線を脣部に波状に巡らし、その後に極めて細い沈線を鋸歯状に重ねたものである。胎土には微細砂粒・繊維を混入し、第III群土器の中では最も堅緻な焼成である。内外面とも淡黄灰色を呈する。

第III群4類土器(179～193)

沈線文と刺突文を併用するもので、いずれも胎土に繊維を多量に含み焼成は良好である。口縁部形態は、波状口縁(188～190・192)と平口縁(179・191・193)が存在する。文様構成としては、頸部付近に横位に巡る刺突文列を一～数段施して区画し、これと口辺の間に直線・曲線・波状の沈線を縦位に施文するもの(179～184・188・190・191)が多い。このほか187のように刺突列を縦位に施文して区画するものや、刺突列と沈線で図形文様を構成するらしいもの(193)が見られる。なお、沈線文と刺突文は179・194を除いて同一工具によるものと思われ、半截竹管状(180・181・188・191・193)、多截竹管状(182～184・189・190・194)、ヘラ状(185)、先丸棒状(187)などが観察された。179は頸部に深い沈線を巡らして沈線内に円形竹管文を施文する。口縁部には一本引きの細沈線を縦位に平行施文する。180・181・184・186・188の沈線は二本同時施文で、184・190・194は押し引き状の連続刺突である。

第III群5類土器(195～197)

押し引き文を施文するもので、図示した3点がすべてである。文様は三列以上平行して施文するもの(195・197)と横位に一列施文するもの(196)があり、施文具は先端の丸いヘラ状(195)、多截竹管状(196)、先端を折り取ったような棒状(197)などが見られる。

第III群6類土器(198～239)

刺突文のみを施文するもの。多種多様な施文技法や施文具が見られるが、文様構成の判明するものはほとんどない。

6類A(198～203) 円形竹管による刺突文で、器面に対してほぼ直角に施文するもの(198・199・201・202)と45度位の角度で施文するもの(200・203)がある。198は波状口縁の波頂部から断面三角形の短い隆帯を貼り付けて、その上に刺突を施している。200も同様のものであろう。また、199～202は二本一組の工具による刺突である。外面の条痕は明瞭なものはないが、内面は200を除いて比較的はっきりしている。

6類B(204～223) 半截竹管状の施文具によるもの。背の部分で、器面に対して浅い角度を

もって連続刺突するものがほとんどであるが、218・223のように反対側を使って二個一対の連続刺突を施すものもある。また、208は施文具の両側を使った二種類の刺突を施したもので、口縁部文様帯に逆「U」字状の刺突列を横位に連ねるものであろう。外面には炭化物が多量に付着する。口縁部資料を見ると、平口縁と波状口縁が存在するが、212は小波状の頂部に受口状のくぼみを作り、ここから隆帯を垂下させるもので、口唇部には刻みが施される。209は口縁内側にも刺突による列点文が施文される。

6類 C(229~231) 多截竹管状工具による逆「コ」の字状の刺突を横位に連続施文するもので、器厚は11~14mmと厚い。内外面の条痕はいずれも顕著ではなく、229の外面にわずかに観察される程度である。

6類 D(224~228) 先端のやや尖った棒状工具によるもので、横位施文と斜位施文のものが見られる。224は平口縁と思われ、口辺に沿って二列施文する。226は端部のやや肥厚する小波状口縁になるものと思われる。

6類 E(232・234) 二本一組の細い棒状工具によると思われるもの。232は横位に、234は縱位と横位に施文する。

6類 F(233・235・236) ヘラ状工具によるもの。233・235は爪形の横位連続刺突で、236は梢円形の横位連続刺突である。

6類 G(237~239) 先端がさざくれたような細い工具を二本一組にして施文したものと思われるが、詳細は不明である。いずれも赤褐色を呈し、出土地点はかなり異なるが同一個体の可能性が高い。

第III群7類土器(170~173・240~258)

内外面に条痕のみを施文するもの。胴部破片が大半を占めるが1~6類の胴部片と区別することは不可能で、ここでは口縁部資料を中心に図示した。器厚は4~10mmとばらつきが見られるが、7~9mmのものが中心を占める。口縁部形態は平縁のものと波状口縁のものがあり、端部の形態は多様である。また、内外面ともに条痕が比較的はっきりしたものが多く、249・250・253・254のように口唇部にも条痕を施すものを見られる。このほか、口唇部に棒状工具による刺突を施すもの(170~172)や、ヘラ状工具による刻みを施すもの(240~243)などがある。258は胴部破片であり、条痕文と撲糸文を併用しているものと思われる。

第III群土器底部(260~265)

条痕を施す底部及び底部付近の破片をまとめた。260・261は丸底になるものと思われる。ほかは平底で、比較的まっすぐに立ち上がるものの(263・264)と外傾しながら立ち上がるものの(262・265)がある。なお、264は底面にも条痕が施されている。

第 III 群土器の分布(第31図)

本群土器の分布は第I・II群土器に比べて広範囲にわたるが、あえて言えば28列以南と17列以北に分けられる。ただ、図示したものの大半は17列以北からの出土で、ここに第III群土器の分布の中心が存在すると見て良いであろう。また、1類C・D・Eと2類は出土数こそ少ないが159を除いて38列以南からの出土で、第I・II群土器の分布域にほぼ重なる。いずれも条痕文系土器の中でも古段階に属すると思われるもので、出土地点がほかと200m以上離れていることは時期差を裏付ける資料となろう。

4) 第IV群土器(第41~43図、図版22~24)

縄文時代前期に属すると思われるものを一括したが、出土点数は192点と少ない。

第IV群1類土器(266~271・274~276・278~289)

縄文のみを施文するもので、胎土に繊維を混入するもの(A)としないもの(B)に細分される。

1類A(266~271・274) 胎土に繊維を混入するもの。いずれも焼成が悪く器面の粗れが著しいため詳細は不明であるが、複雑な原体を施文するものが目に付く。266は丸底に近い尖底部で、単節縄文(RL)を底部付近まで施文している。267・270は同一個体と思われ、0段多条縄文(LR)を施す。内面には炭化物の付着が認められる。268は原体不明。269は前々段合燃りと思われるが、明確ではない。271は器厚12mmとほかに比べて厚く、粘土の乾燥が比較的進んだ時点での縄文を施文したものと考えられるが、原体は不明である。胎土には微細な金雲母片を多量に含み、焼成も良好である。274は器厚が6mmと薄い波状を呈する口縁部片で、比較的小形の土器と思われる。波頂部から隆帯を垂下させ全面に単節縄文(RL)を施文するが、隆帯上にも同一原体を斜位に押圧している。

1類B(275~276・278~289) 胎土に繊維を混入しないもの。暗灰色から黄灰色を呈するものが多く、器厚も8~9mmと比較的揃っている。口縁部形態には平縁(282~288)、小波状(279~281)、波状(275~276・278)などが見られるが、平縁のものには内湾気味に立ち上がるものが多く、その他は頸部でくびれる器形である。279は折り返し口縁風の端部で、波頂部から二本の短い隆帯が貼り付けられる。原体を観察すると、RL(275~288)、LR(276・282~287)、無節L(278~281)、R(284~286)、前段多条LR(283)、附加条(289)などが見られる。なお、281・283・285・286・288を除いて外面には炭化物の付着が認められる。

第IV群2類土器(272)

半截竹管状工具による平行沈線文とコンバス文を施文するもので、本例1点のみである。内湾気味に立ち上がる大きな波状口縁で、胎土には繊維を含み暗褐色を呈する。外面には炭化物の付着が著しい。文様の特徴などから、黒浜式土器の中段階(奥野1989)に比定されるものと思われる。

第IV群3類土器(273)

貝殻背圧痕文と思われるが、小片のため明確ではない。胎土には纖維を含まず、焼成は比較的良好である。輪積み痕が明瞭に残り、外面には炭化物が付着する。

第IV群4類土器(290~306)

半截竹管状工具による連続爪形文を、文様の主要要素とするものである。胎土には微細砂粒を多量に含み、暗褐色から茶褐色を呈する。焼成は不良でもろい。諸磯b式の古段階【今村1982】に比定される。

4類A(290~300) 爪形文のみにより文様を構成するもの。290~293は口縁部資料で、いずれも平線でやや外反しながら立ち上がるものであろう。文様は連続爪形文による直線文や弧線文を組み合わせたもので、平行沈線で文様を描いた後、沈線間に爪形を充填したものである。

4類B(301~305) 平行する爪形文間にヘラ状工具による斜めの刻みを施すもので、基本的な文様構成は4類Aと同じと思われる。爪形文を観察すると円弧状ではなくて波形を呈しているが、これは施文具先端の加工方法による違いであろう。303は口縁部で、緩く大きな波状を呈するものと思われ、口唇部にも刻みが施される。

4類C(306) 平行する爪形文間に横長「D」字状の刺突文を施したもので、306bには円形刺突文が加えられている。平線の口縁部で4類Aと同様に、やや外反して立ち上がる器形であろう。外面には炭化物が付着する。

第IV群5類土器(307~320)

浮線文を施すのをまとめた。胎土に微細砂粒を多く含むのは4類と同様であるが、焼成は良好で堅緻なものが多く、内面も良くナデされている。色調は、暗褐色から黄褐色を呈する。器厚は6~8mmと比較的薄い。

5類A(307~312・319) 幅3~4mmの浮線を横位に二本一組で貼り付け、浮線上にヘラ状工具による細く鋭い刻みを矢羽状に施すもの。地文には基本的に繩文(LR)を施文するが、309・311・319には見られない。これは307で部分的に磨り消しが観察されることから、同様の手法による磨り消しの可能性も考えられる。また、307aの縦位・斜位の浮線文や309・319の太い縦位の浮線文には、刻みが施されていない。諸磯b式の中段階に比定される。

5類B(313~317) 器面をナデすることによって両側にできた低い隆帯状の盛り上がりに、5類Aと同様な刻みを施すもので、314のように平坦面に直接刻みを施文するものもある。地文の繩文は、314(RL)を除いて観察されない。また、315は浮線間に竹串状工具による刺突文が施される。諸磯b式の新段階に比定される。

5類C(318~320) 幅4mm前後の厚みのない薄い浮線を、横位に二本一組で貼り付けるもの。浮線上には刻みを施さず、繩文(LR)を浮線上を含めて全面に施文するが、磨り消されている部分もある。318は平線の口縁部資料であるが、器面の粗れが著しい。諸磯b式の中段階に比定

される。

第IV群6類土器(321~327)

半截竹管状工具による平行沈線で文様を描くもの。胎土には微細砂粒を多く含み褐色を呈するが、全体の印象は4類に近い。諸磽b式の中段階に比定されるものである。

6類A(321~326) 器形は口縁部の内湾したいわゆるキャリバー形の深鉢と思われ、緩やかな波状口縁を呈する。地文には縄文(RL)を施文するが、不明瞭な部分が多い。321・322・326の外面には炭化物の付着が著しい。

6類B(327) 波状口縁の波頂部に、薄い円形の突起を貼り付けるもの。

第IV群7類土器(328・329)

集合細沈線で文様を構成するもの。胎土は比較的緻密で、黄灰色を呈する。地文には細かい縄文(RL)を施文し、二一四条一單位の集合沈線を間隔を開けて平行施文する。器形は口縁部が「く」の字状に内折して、大きな波状を呈するものであろう。329はやや外湾する底部付近で、横位の平行沈線を密に施文している。328の外面には、炭化物が付着する。諸磽b式の新段階に比定されるものであろう。

第IV群8類土器(331・332)

横位の平行沈線を密接施文するもの。やや外傾して直線上に立ち上がる口縁部で、口唇部外側には、梢円形の刺突が連続して施される。諸磽c式の古段階に比定される。

第IV群9類土器(330)

推定口径16.4cmと比較的小形の鉢形土器である。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。器形は口縁端部で短く内折するもので、内外面ともに丁寧にナデられている。口縁の屈曲部には、指頭によると思われる梢円形の圧痕が施される。

第IV群10類土器(333~340)

口唇部直下に数条の平行沈線を巡らすもの(333~338)や、細い粘土紐を貼り付けるもの(339)。胎土は4類土器に類似し、赤褐色を呈するものが多い。口縁部は内湾気味に立ち上がるるもの(333・334)と、ほぼ直線的に立ち上がるもの(336~339)、「く」の字状に外折して外面に太い沈線を一条巡らすもの(340)が見られる。339は波状口縁であろう。地文にはいずれも縄文(RL)を施文する。334・337~340の外面には、炭化物の付着が著しい。諸磽b式に伴う粗製土器であろう。

第IV群11類土器(341)

いわゆるソーメン状の貼付文を施文するもので、本例1点のみである。胎土には石英・微細砂粒を多く含み、黒褐色を呈する。器形は口縁部が「く」の字状に外折して聞く平縁で、胴部がやや膨らむものであろう。文様は無文地に細い粘土紐を横位や麻手状に貼り付け、粘土紐上に細かい刻みを施したものである。関東地方の十三菩提式に比定されるものであるが、器形の

特徴から吹浦式との関連も考えられる。

第IV群土器の分布(第32図)

28列以北のほぼ全域で散漫な分布を示し、E～G 3～6でやや集中する傾向はあるが、これといった特徴は見いだせない。ただ、6・7類土器は出土数こそ少ないものの、24～27列付近で比較的まとまって出土している。

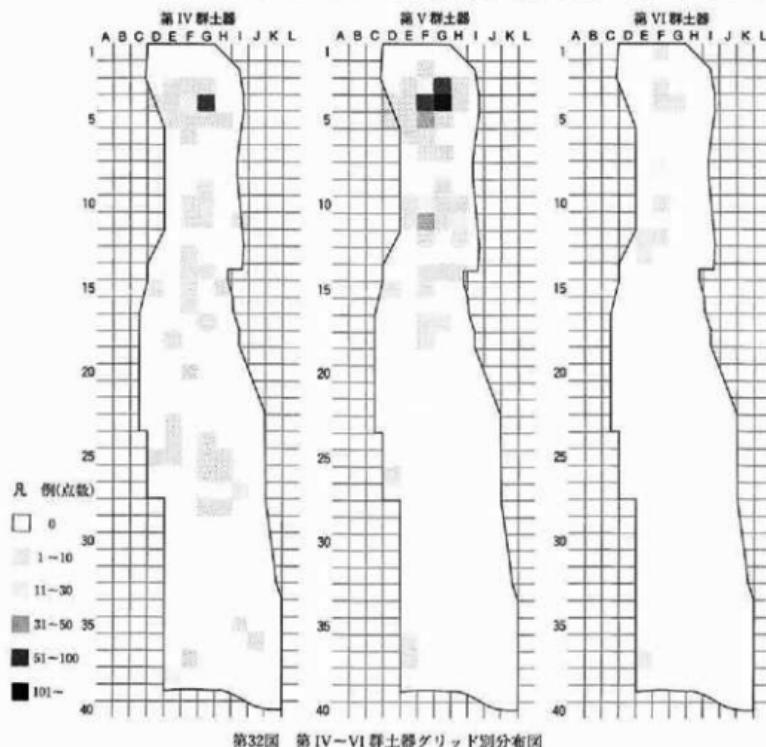
5) 第V群土器(第44～48図、図版24～28)

縄文時代中期の土器を一括する。総数623点が出土しているが、大半は中期前半に属し、後半の土器はごくわずかである。

第V群1類土器(342～385)

北陸系の土器で、新保・新崎式土器に対比されるものである。

1類A(350・351・355・379) キャリバー状の口縁部を持ち、胴部は筒形になると思われるも



第32図 第IV～VI群土器グリッド別分布図

ので、口縁部に縱位の平行半隆起線文を施すものである。350は灰白色に近く、焼成堅緻である。口縁部上端には、三角形陰刻による蓮華文が一周する。また、下半の縱位半隆起線は縄文地上に密に施され、沈線部は深い。379は平行半隆起線が浅く、やや稚である。胴部は縄文地上に縱位の半隆起線文を施した後、同一工具で曲線を描いている。351は小尖起を持つもので、突起部に円孔があり三叉陰刻が見られる。竹管工具は細い。

1類 B(345・346・373) 1類 A と同様の器形であるが、口縁部下半に斜格子を持つもので、3点は同一個体と思われる。口縁部は無文帶で、その下に刺突状の爪形文が見られ、下半部にはヘラ状工具による斜格子文が見られる。

1類 C(344) 口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものである。口縁部に小突起を有する。連続爪形文および半隆起線が横位に一周し、それを同一工具により縱位に切っている。

1類 D(342・343・347-348) 筒状の胴部にやや外反気味の口縁が付くもので、半隆起線文および爪形文の施されるものである。342・343は口縁部に刺突状の爪形文が巡り、頸部が無文帶となるものである。342の場合、その下に五~六条の半隆起線束が巡り、それを「J」字状の突起が四単位に区切っている。以下は縄文地上に、縱位の半隆起線が密に施される。

1類 E(352-354) 1類 D と同様の器形で、三角形陰刻による蓮華文が施されるものである。352は頸部無文帶で、蓮華文は二段構成をとる。以下は撚糸であるが、L と R を両用している。353も頸部に無文帶を有するもので、三角形陰刻は小さく間隔がある。また、小円形刺突も見られる。354は無文部に縄文が施される。

1類 F(356-359・361・362) 1類 D と同様の器形で、口縁部に縱位集合型沈線が施されるものである。半隆起線文を連続させるもの(357-359)と、一本一本の沈線を連続させるもの(356・361・362)の二種がある。いずれも頸部に無文帶があり、356では以下に縄文(RL)が見られる。

1類 G(380) 筒形の胴部に「く」の字状に緩く外反する口縁部の付くものである。爪形文は見られず、半隆起線のみである。頸部および口縁部に半隆起線文が巡り、口縁からは「J」字状の半隆起線文が垂下する。縄文は RL である。

1類 H(385) やや膨らみのある胴部に、緩く外反する口縁部の付くもので、半隆起線のみで文様を描いている。基隆帯による渦巻文が垂下して文様帶を三分し、区画内は矢羽状の半隆起線文を充填する。口縁部には小突起が見られる。

1類 I(364-368・371・372・375) その他の胴部破片を一括する。縄文地上に半隆起線文を施すもの(364-368)や、区画内にヘラ描きの格子目文が施されるもの(371・372・375)などがある。

第 V 群 2 類土器(386-436・440-442)

2類土器はいわゆる五領ヶ台系統の土器を一括するが、全体の器形を把握できるものは少ない。器形や文様から三種に細分される。

2類 A(386・387・402・405-407・411・413・419・420・422) 胴部にやや膨らみを持ち、頸部が

「く」の字状に外反し、頸の短いものである。387は口縁部に綫位の沈線が密に施され、口唇部にも刻みが見られる。頸部には多条に沈線が巡り、部分的に交互刺突が施される。胴部は綫位隆帯により四単位に区画される。隆帯の両脇には四一五条の沈線が添えられ、部分的に交互刺突が見られる。また、この沈線の外側には、円形竹管状工具による斜方向の刺突が見られる。頸部には四個の突起が添えられる。胴部は無文である。386は波状口縁で、口縁部に沿って沈線による刻みが巡る。胴部の文様構成は、387と同じである。同様の文様構成を持つものに、402・405・407・411・413・419・420・422がある。いずれも地文に繩文を持たないものである。底部破片では、419・420・422のように横沈線の入るものもある。

2類B(388・389・391~401・404・408~410・414・415・417・418・421・423~426) 地文に繩文を持つもので、文様構成は2類Aと同じである。繩文は斜繩文のものと羽状繩文(414・415)とがある。その他では刺突文を多用するもの(391~395・397)、交互刺突を用いるもの(396・398~401)などがあるが、いずれも胴部は2類Aのようになるものと考えられる。388・389は刻みおよび刺突であるが、下半部は不明である。417・418は胴部上半の破片で、斜格子目文が見られる。425・426には爪形文・半隆起線文が見られるが、全体の文様構成は不明である。409・410の胎土には、金雲母の混入が顕著である。

2類C(428~436) 2類Aに比べてやや厚手で、口縁部に明確な文様帯を持つものである。429は四単位波状口縁の土器で、頂部を欠損する。筒形の胴部に「く」の字状に外反する短い口縁が付く。口縁沈線部には円形の突起があり、その下に対称に三角形陰刻が見られる。口縁に沿って角押沈線が巡っている。また、口縁部には刻みが巡る。頸部は格円区画で、区画内側に沿ってやはり角押沈線が巡っている。胴部には、隆帯およびそれに沿った角押沈線が見られる。地文は繩文(RL)である。428・430・434は頸部破片で、隆帯および角押沈線が見られる。436も波状口縁の土器で、山形状の太い隆帯と、それに沿った角押状の沈線および三角形陰刻が見られる。431~433は把手部である。

その他、五領ケ台系統として440・441がある。440は台形状の波状口縁で、水平端部には叉状の刻みが施されており、角押状の有筋沈線が見られる。このほか、口縁部に刻みの施される土器は、454~456がある。442は薄手の小形土器で、隆帯格円区画であり隆帯に沿って刻みが施される。どの系統に属するのかは不明である。

第V群3類土器(437~439・443~446)

阿玉台式系土器を一括する。437は金雲母および長石粒を多量に含む。口縁部には、竹管状工具による刺突文が巡る。口縁部は、角押文による文様である。438も口縁部破片である。隆帯および角押文が見られる。439は胴部破片である。断面三角形の隆帯および角押文が見られる。445・446はヘラ状工具による押えが認められる。

第V群4類土器(448・457・462・464・277)

縄文のみのものを一括する。448は折り返し口縁の土器で、頸部には半隆起線が見られる。縄文はRLである。457は小突起を有する深鉢で、縄文はRLである。462は底部から直線的に開いて肥厚する口縁部に至る深鉢で、高さ約37cm、口径約31cmを測る。縄文はRLである。463も同様の器形で、やはり口縁部が肥厚する。口縁部にはRL、胴部には縱の羽状縄文が施される。464は口縁部直下に圧痕隆帯が巡っている。277は342・385と共にした土器で、胴部にやや膨らみを持ち、波状四单位と思われる口縁部は短く外反する。頸部には円形の粘土紐の貼り付けがある。

第V群5類土器(435)

中期中葉の土器である。波状四単位のキャリバー状を呈する大形の土器で、主要モチーフには太い隆帯を用いている。口縁部に沿っては、二条の刺突列が巡っている。

第V群6類土器(465・468)

中期後半の土器を一括する。465・467は波状口縁の土器で、渦巻文が見られる。沈線部は良くナゾられている。466は渦巻文が縱方向に流れている。468も波状口縁の土器で、沈線による文様である。468bは隆帯による渦巻文である。

6) 第VI群土器(第48・49図、図版28・29)

後期の土器を一括するが、出土数は42点と極めて少ない。469は無文土器で、口縁に沿って沈線が巡る。470は壺形土器になるものと考えられ、頸部のくびれが大きい。頸部に沿っては、沈線および刻みが巡る。地文は無文であるが、文様は沈線によっている。471-473は、縄文地上に沈線を段階配したものである。471は内面に幅広の沈線および縄文が見られる。474は頸部から大きく聞く波状口縁を有する土器である。胴部は縄文(RL)地上に横沈線が走る。頸部から口縁部にかけては無文で、口縁直下には波状に沿う二列の刻み列が認められる。475は粗製の深鉢で、口縁部はわずかに肥厚し、この部分には縄文(RL)が施されている。また、その下には鎖状の網縄文が施され、以下胴部は網縄文である。476は無文の深鉢で、口縁部に沿って沈線が見られる。なお、475・476は晩期の可能性を考えられる。

第V・VI群土器の分布(第32図)

いずれも台地中央から北側(18列以北)に分布するが、特にF・Gの3・4に集中域が認められる。第V群土器について見ると、北陸系の新保式土器(1類)と関東系の五領ヶ台式土器(2類)が、ほぼ前記の集中域で同じような分布傾向を示す。層位的には包含層(III層)中で渾然一体となって出土しているが、編年的に併行関係にあると認識されている異系統の土器が、広大な台地の中で比較的狭い範囲でまとまって検出できたことは、時間的な同時性をある程度示し

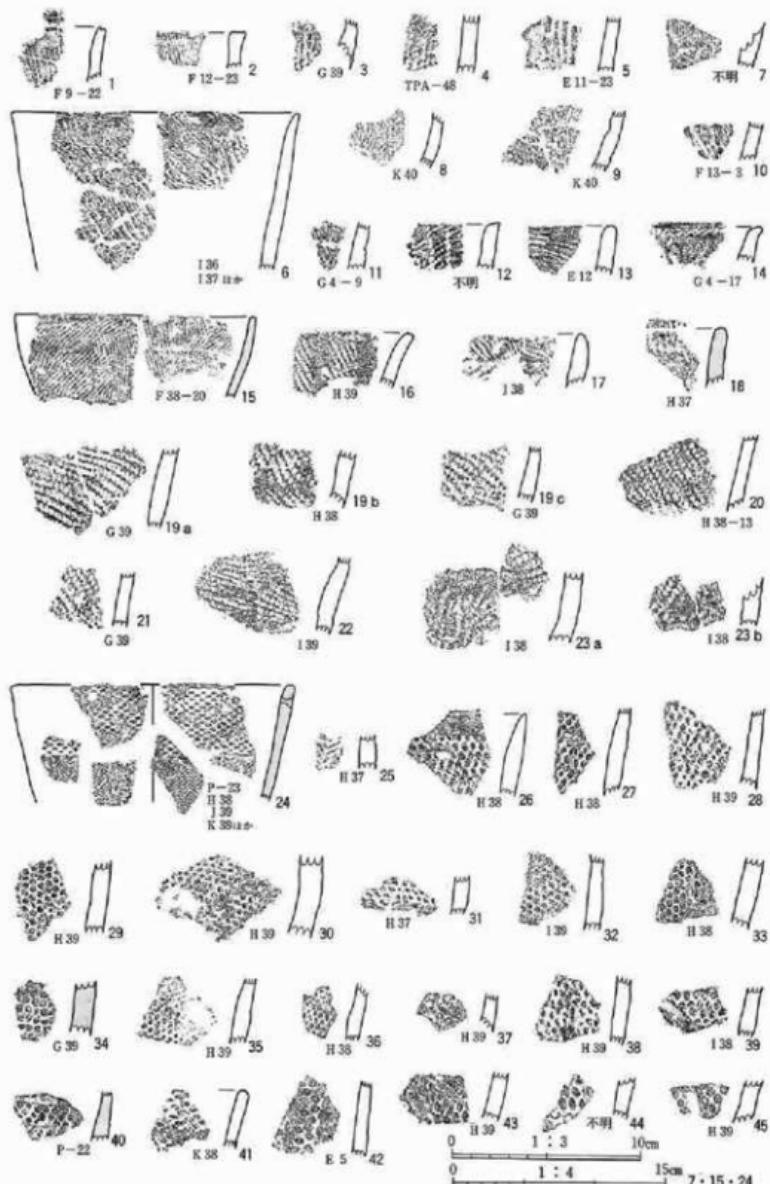
ている可能性が高い。

7) 第VII群土器(第494、図版29)

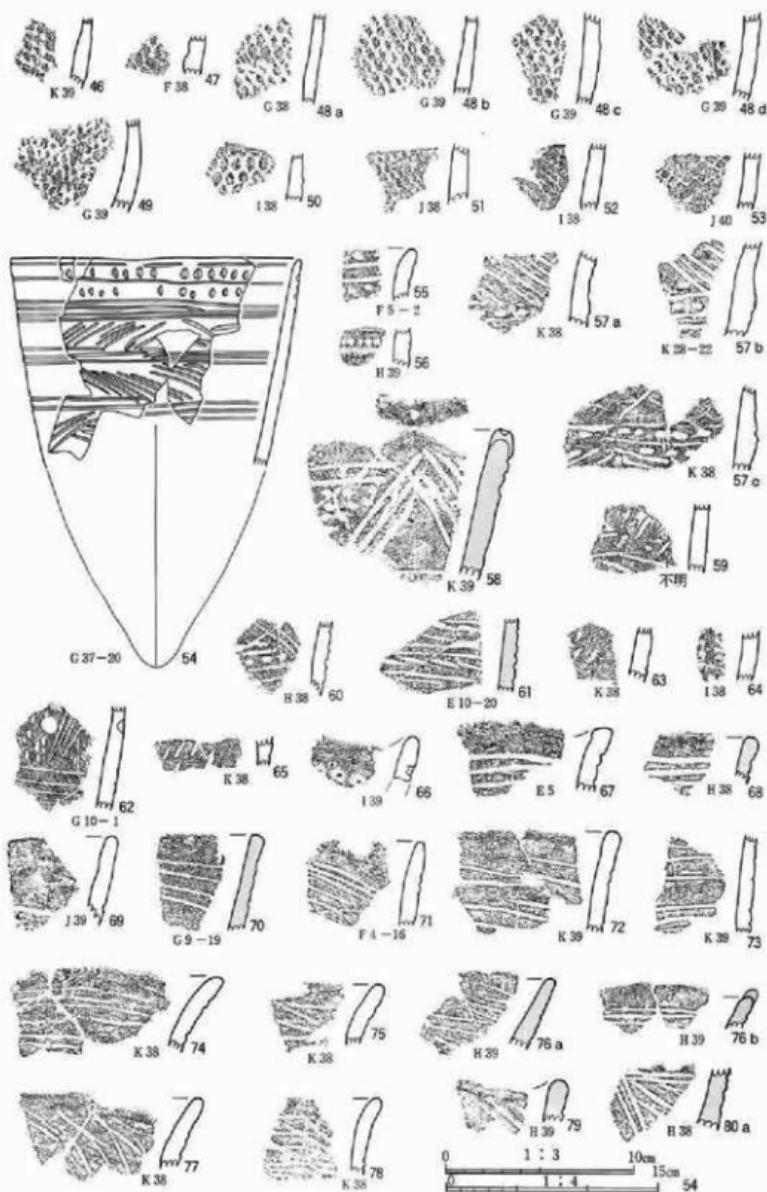
所属時期不明のものを一括した。477は胎土に石英粒を多量に混入するもので、黒褐色を呈する胴部片である。浅い横位平行沈線が四条観察される。478は明褐色を呈する非常にもりい土器で、直線・曲線状の平行沈線文に刺突文を組み合わせている。479は口縁端部で内折するもので、縄文(RL)がまばらに施文されている。480~487は無文の口縁部片で、端部が丸みを帯びて外反するもの(480・481)、端部は平坦ではば直線的に立ち上がるもの(482~485)、やや内湾気味に立ち上がるもの(486)などが見られる。486・487を除いて、胎土に白色細砂粒やスコリア粒を含むことなど第I・II群土器に類似する点があり、縄文時代早期に属する可能性も考えられるが、明確ではないため本群とした。なお、483は胎土に纖維を混入する。488~493は底部片であるが、大半は第V群土器の底部と思われる。

底部圧痕(494~498)

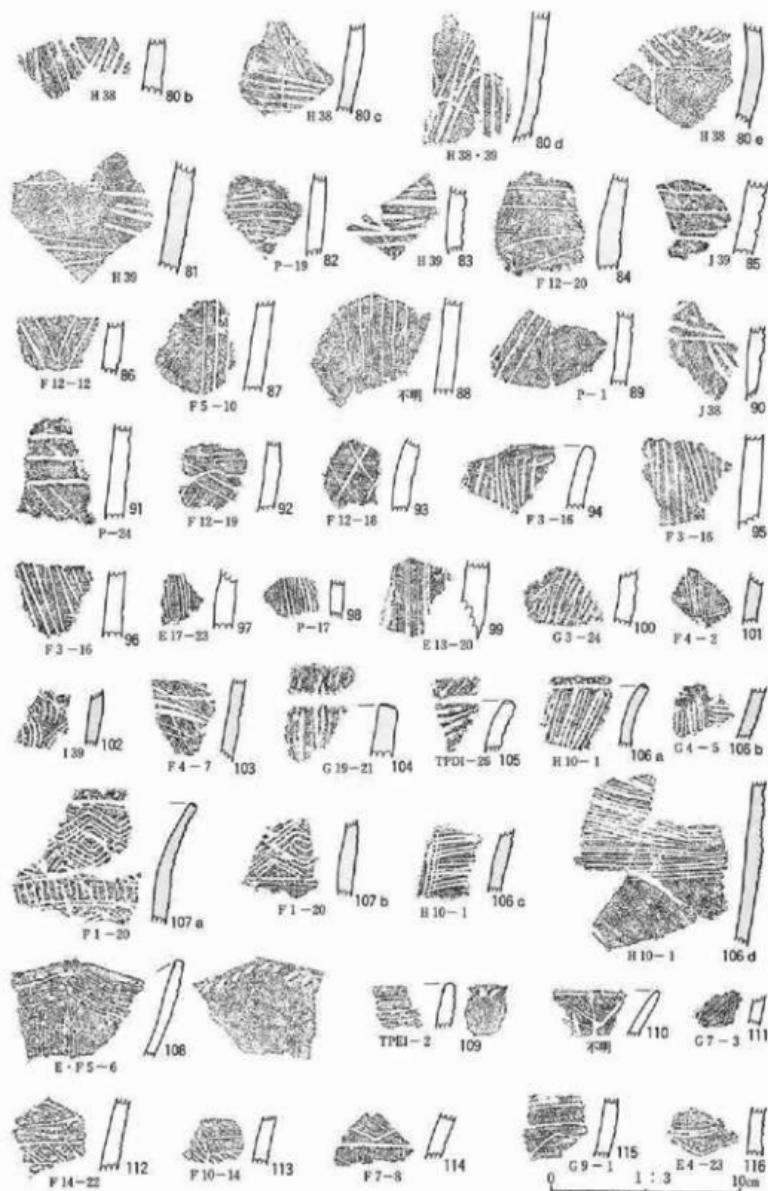
比較的明瞭に観察されるものを図示した。底部圧痕について詳細に検討した埼玉県高井東遺跡の報告【吉川1975】によれば、494~496はタテ材にヨコ材をひとまわりずつ絡ませていく「絡み編み」に、497はタテ材を固定してヨコ材を適宜織り込んでゆく「ザル編み」に、また498は磨耗のため明確ではないが、タテ・ヨコ同じ幅の薄いヒネを用いて密着させて編む「アジロ編み」にそれぞれ相当するものと思われる。



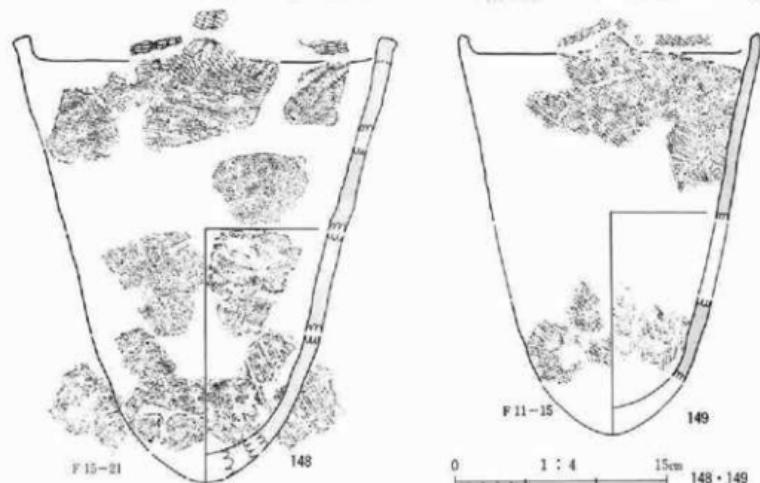
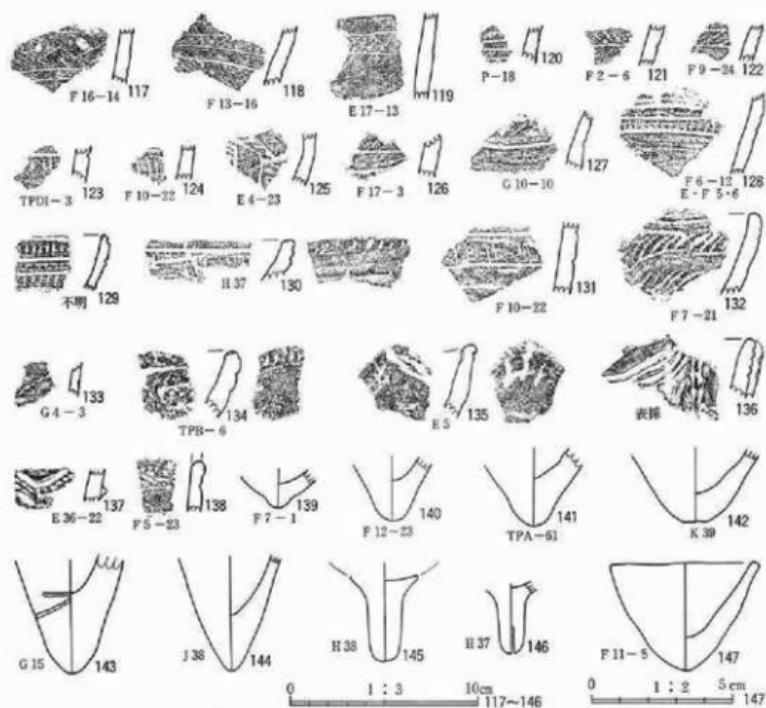
第33図 第I群土器(1)



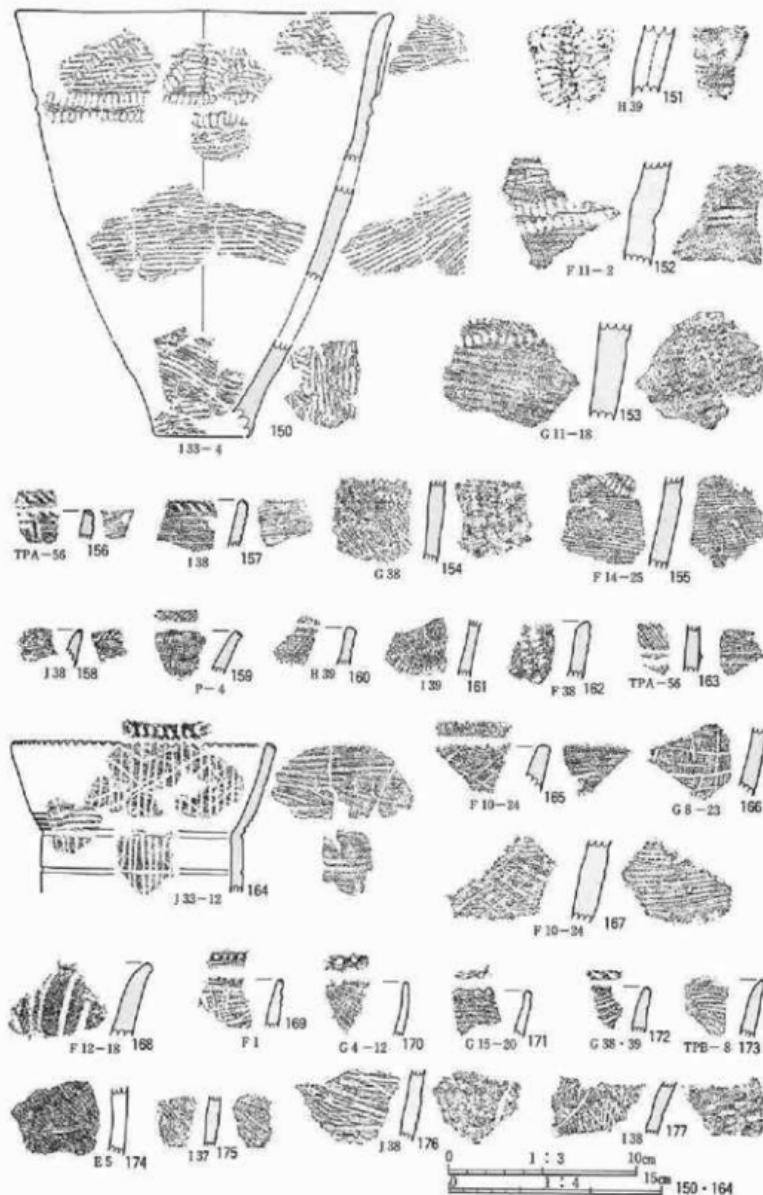
第34圖 第I群土器(2)・第II群土器(1)



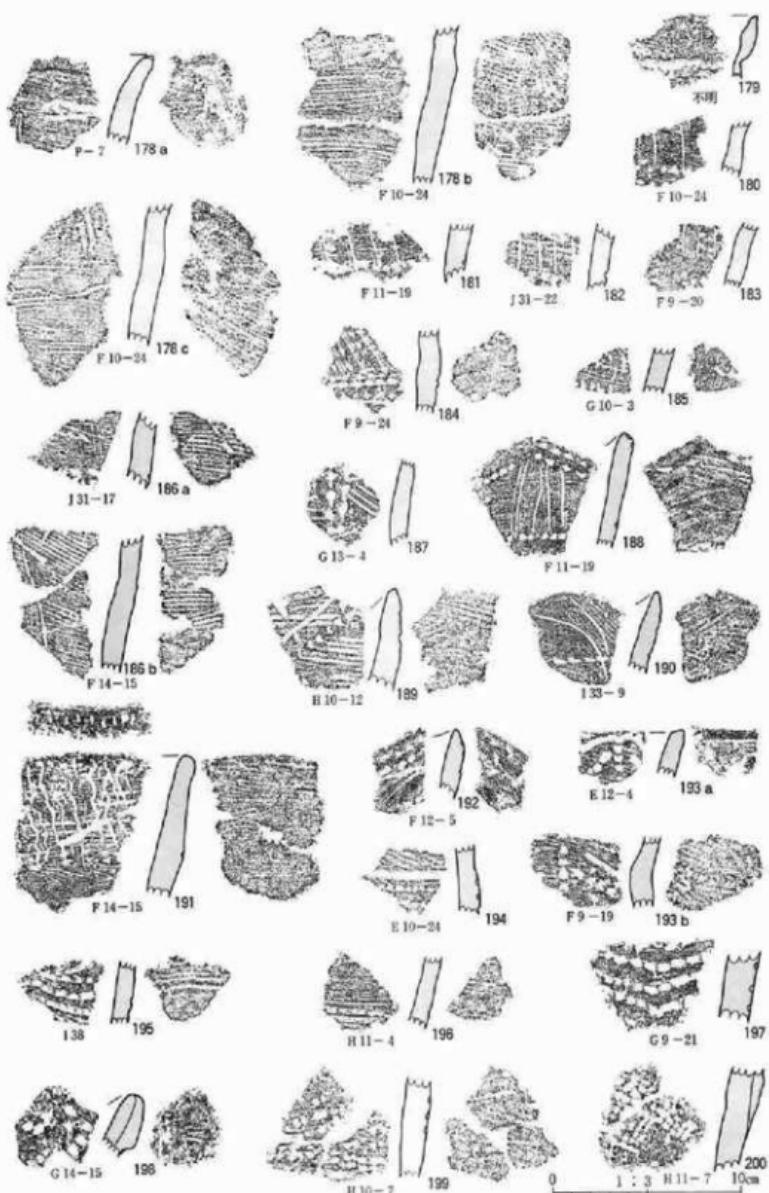
第35図 第II群土器(2)



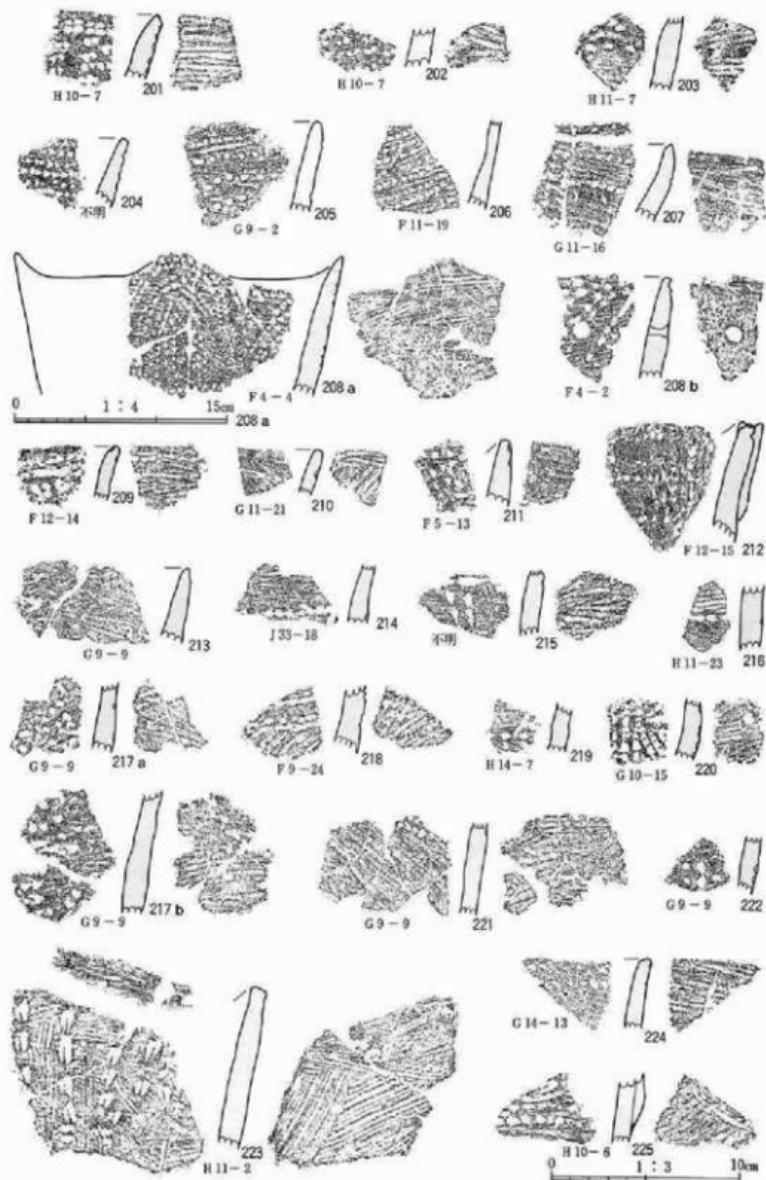
第36図 第II群土器(3)・第III群土器(1)



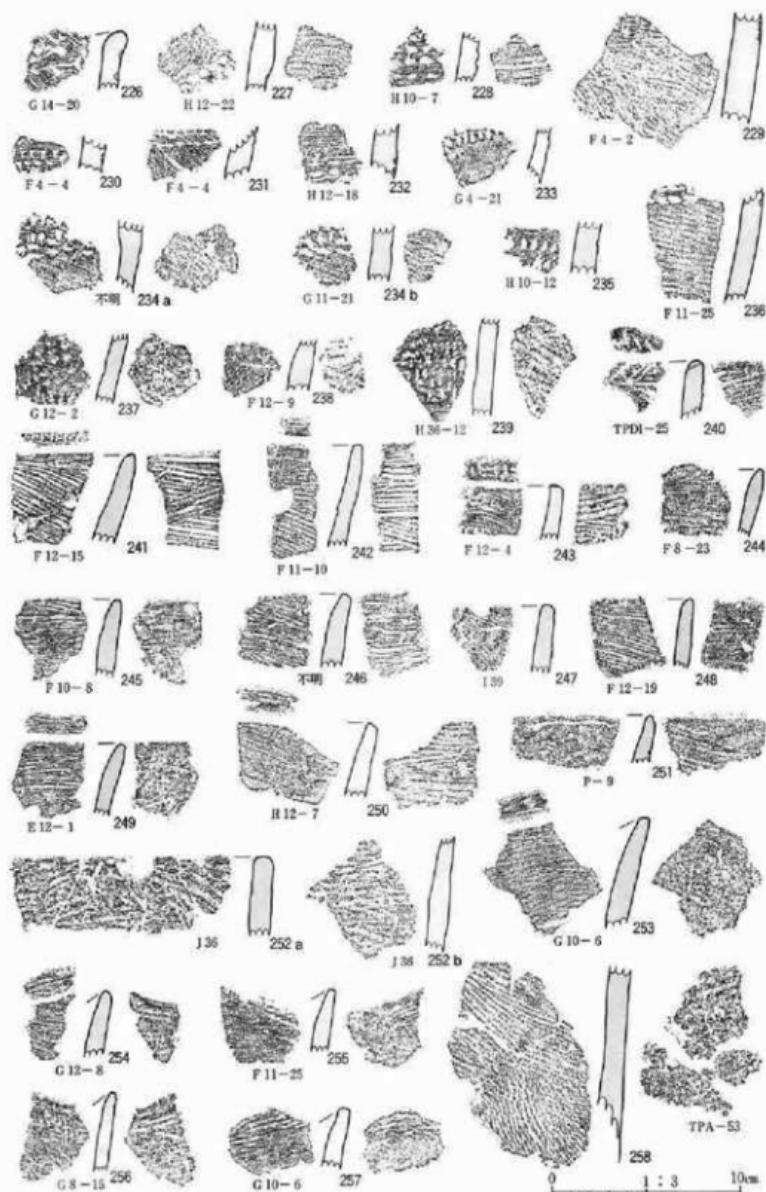
第37図 第III群土器(2)



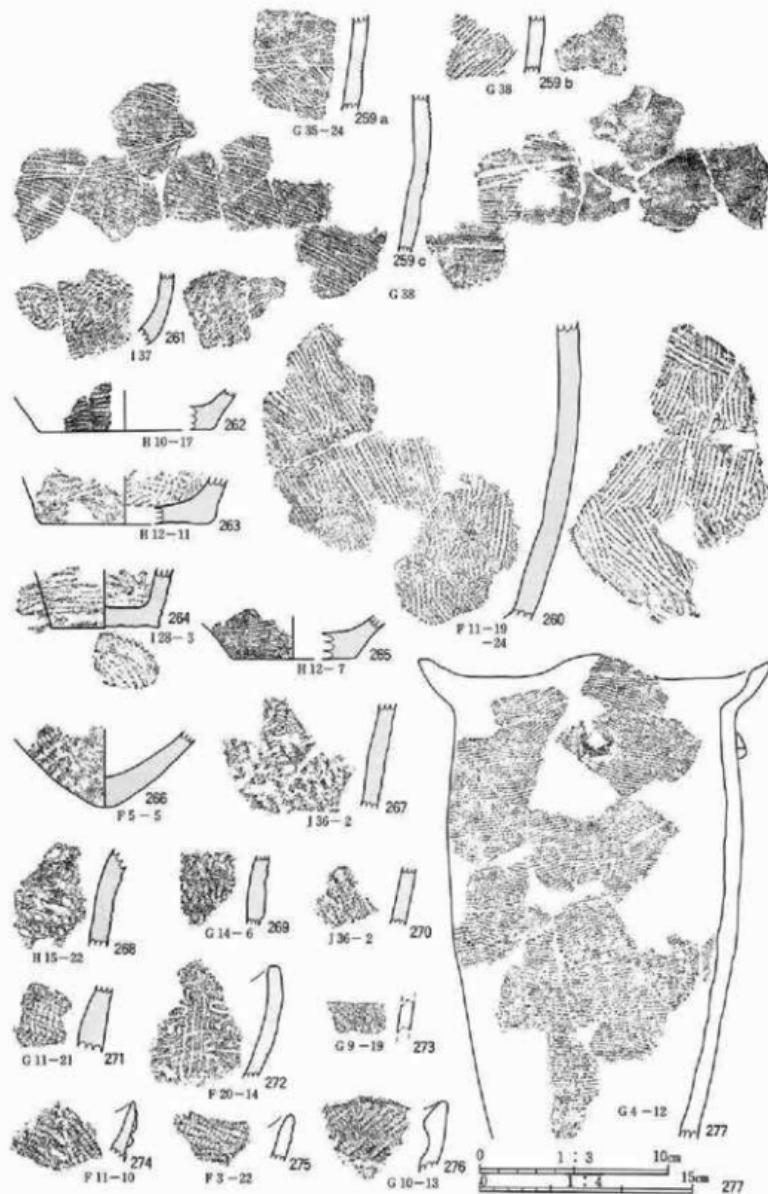
第38図 第III群土器(3)



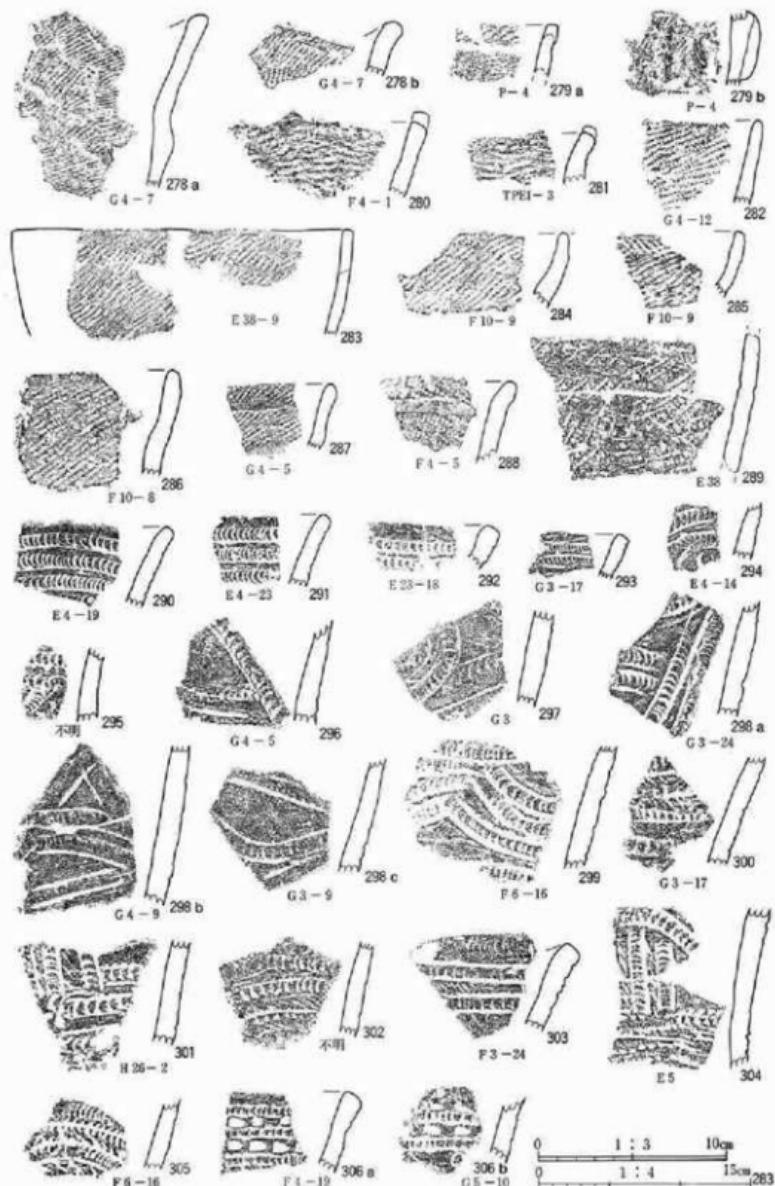
第39図 第III群土器(4)



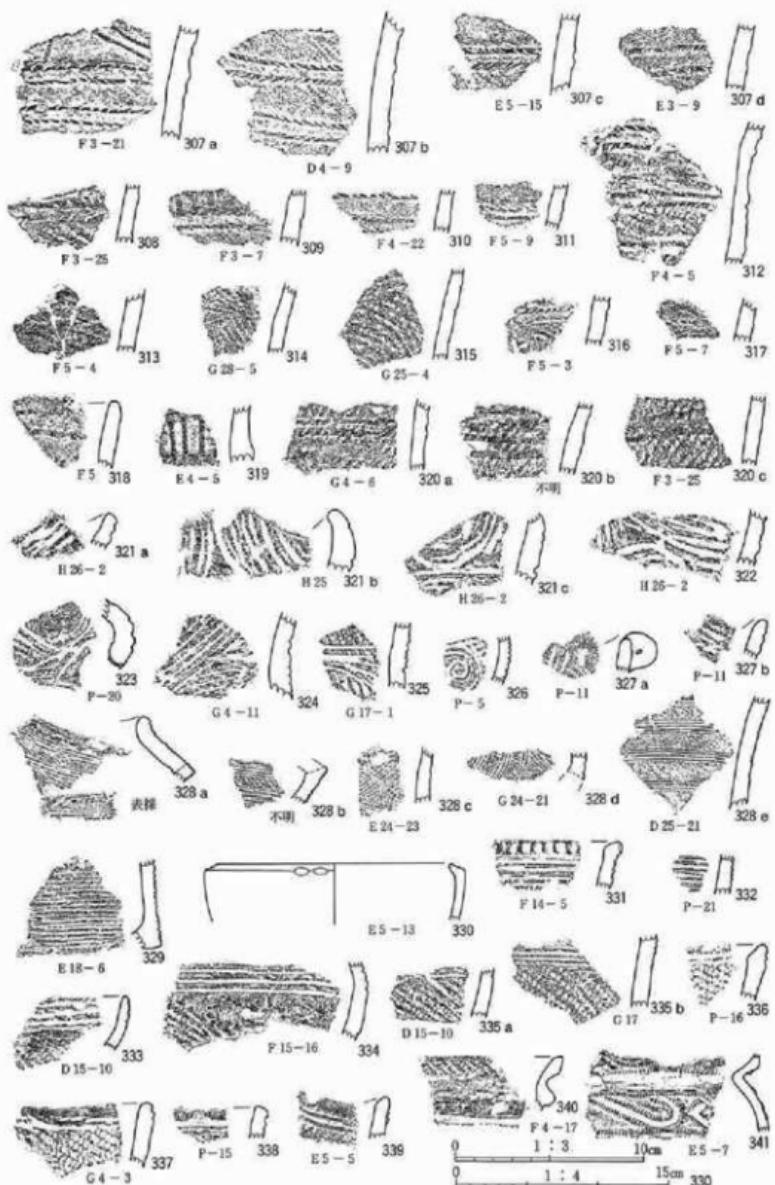
第40圖 第III群土器(5)



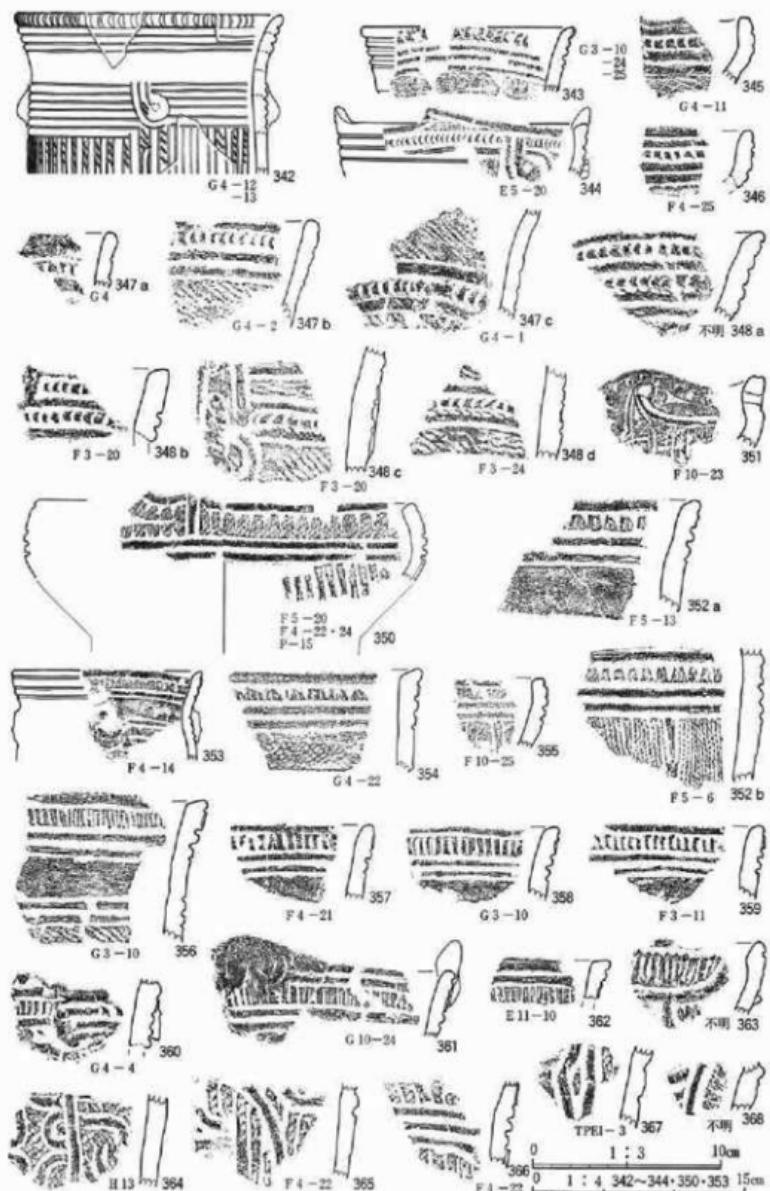
第41圖 第III群土器(6)・第IV群土器(1)



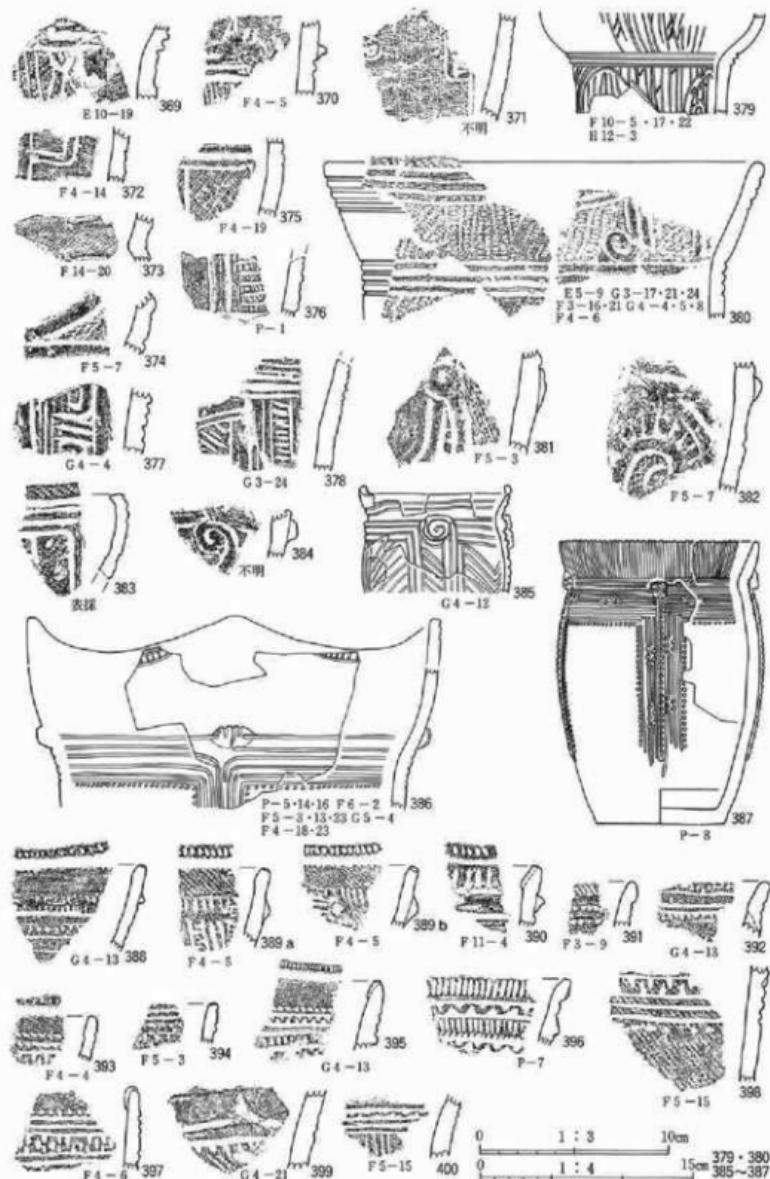
第42図 第IV群土器(2)



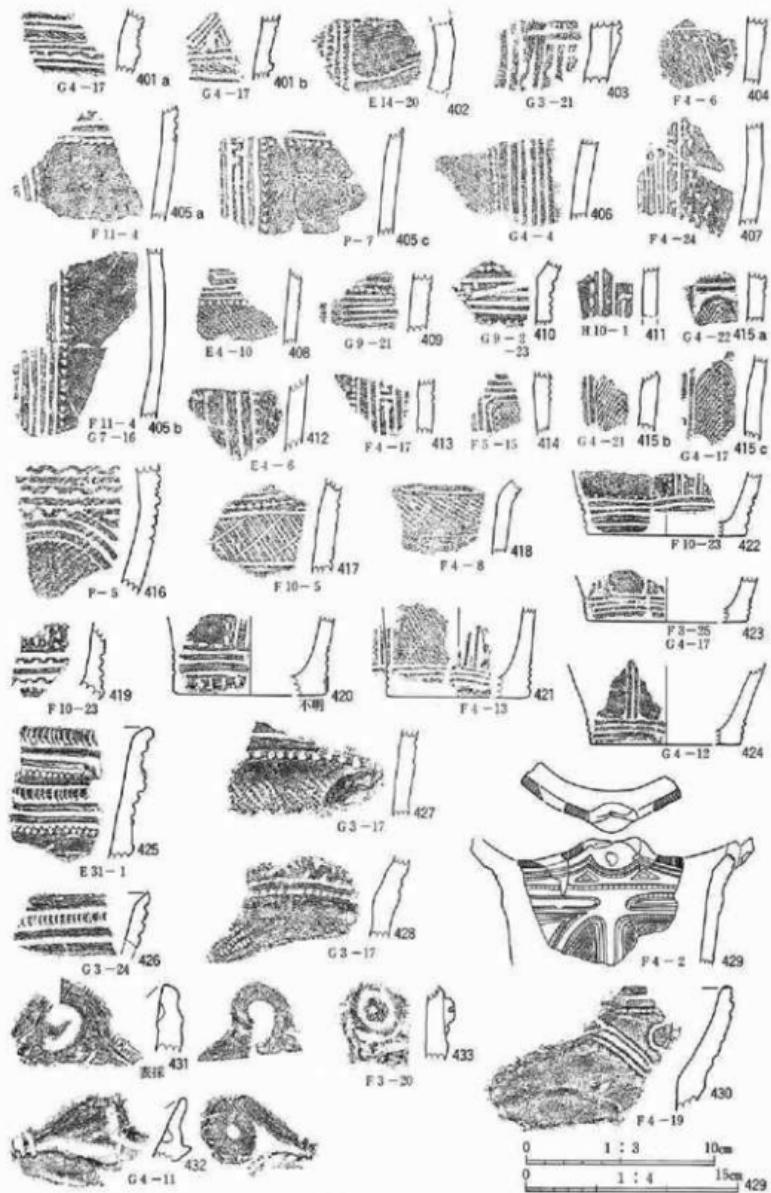
第43図 第IV群土器(3)



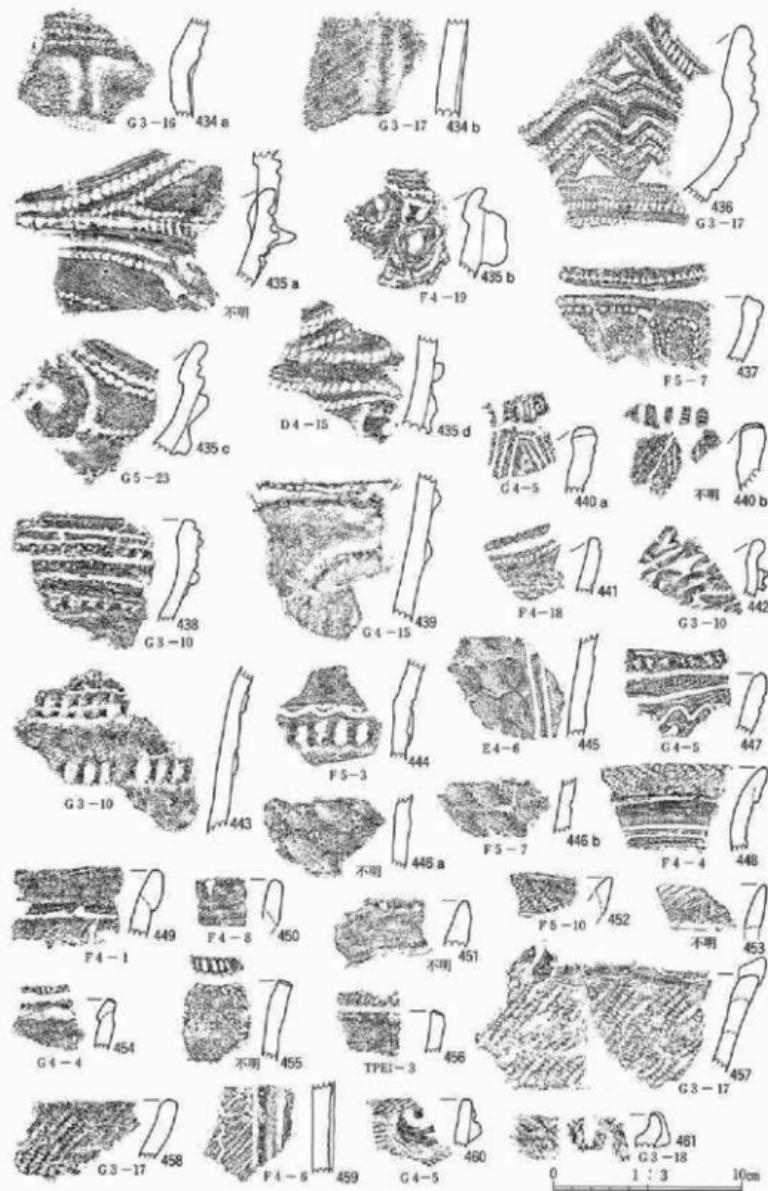
第44図 第V群土器(1)



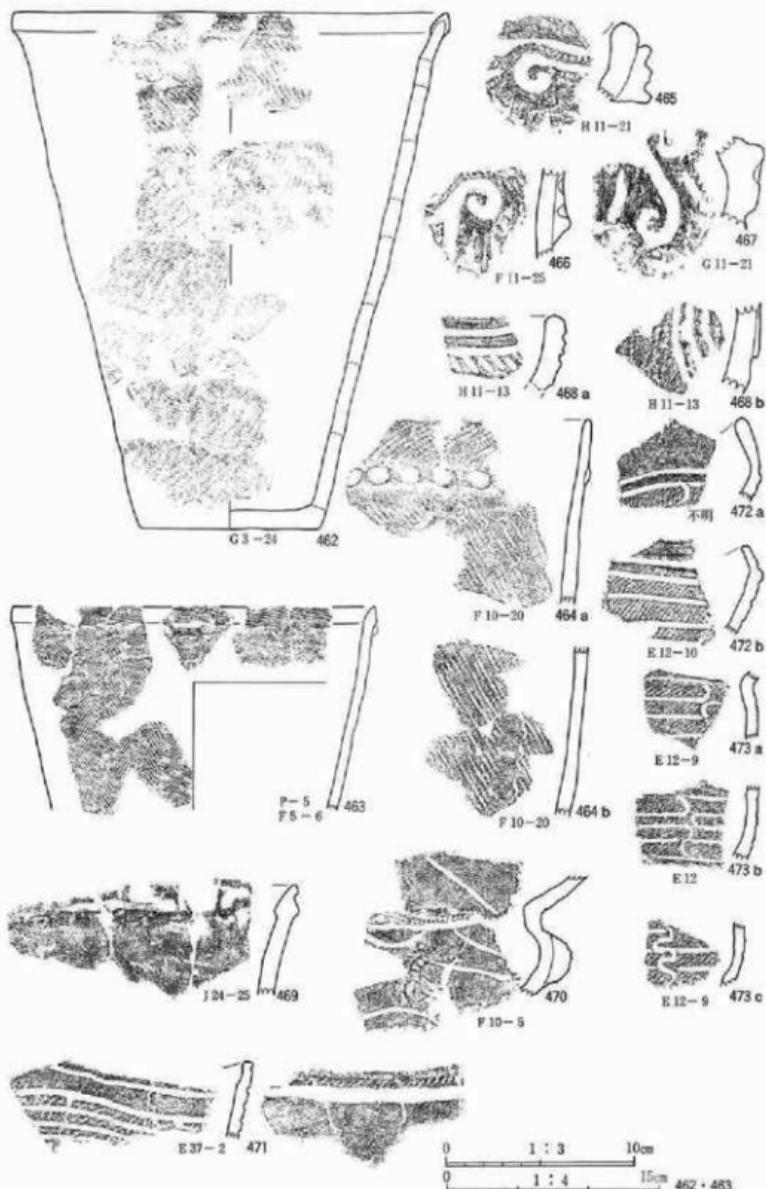
第45図 第V群土器(2)



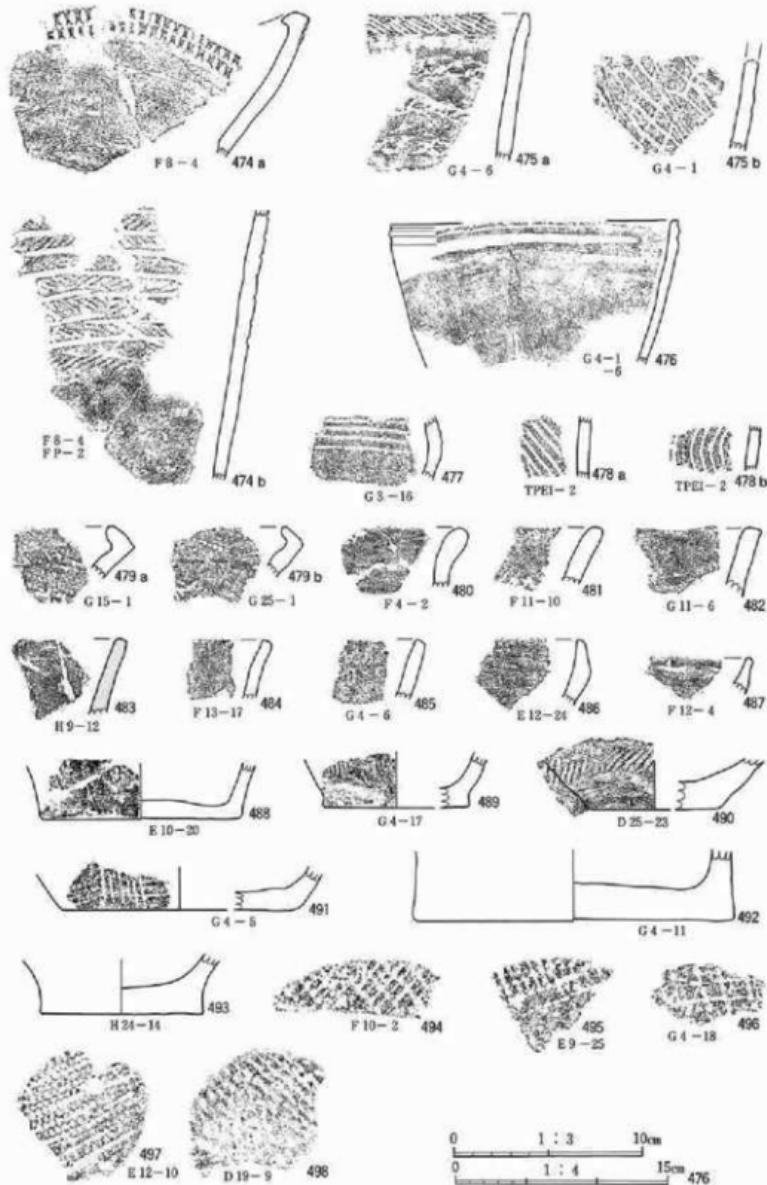
第46図 第V群土器(3)



第47図 第V層土器(4)



第48図 第V群土器(5)・第VI群土器(1)



第49図 第VI群土器(2)・第VII群土器・底部圧痕

B. 石器(第50~70回、図版30~40)

岩原I遺跡から出土した石器・剝片類は、総数5,019点に及ぶ。このうち明確に石器と判断されるものは1,515点であるが、大半は縄文時代に属するもので、ほかには旧石器時代のナイフ形石器が1点出土したのみであった。ただ、縄文時代の土器を見ると早期から後期まで検出されており、個々の石器の所属時期は明確でないものが多い。石器の分布状況(第9回)は、土器の分布域とほぼ重なって三地点に集中する傾向が認められた。このうち、台地先端部の36列以南では縄文時代早期以外の土器は数えるほどしか出土しておらず、早期の石器を考える上で参考になるものと思われる。出土状況を見るとほとんどは包含層(III・IV層)からの出土であり、遺構に伴って検出された例はごくわずかであった。

器種別の出土点数は第3表に示したとおりであるが、集計は完形品・欠損品とも1点として計算し、接合資料については接合したものを1点としている。

器種分類にあたっては、基本的には一般的に通用している器種名を使用するように努めた。しかし、この中には用途・機能によるものや形態によるものなど様々な要素による分類が混存しているため、器種認定が困難なものも当然なこととして存在していく。これらについては各器種の定義付けを明確にする中で、その個体の最も特徴的な要素を基にしていずれかに分類することとしたが、主観的な部分も多く必ずしも当を得ていないものもある。

1) ナイフ形石器(1)

断面三角形の縦長剝片を素材とした両縁調整のナイフ形石器で、上半部と基部先端は欠損している。両側縁には急斜度な微細調整が施されており、石器の右側縁に素材の縁辺を残して刃部としたものであろう。刃部の表面には光沢が見られ、裏面の所々に黒色付着物が認められる。出土層位はIII層中で、縄文時代早期の遺物に混在して検出されたものである。

2) 尖頭器(2~5)

本遺跡からは4点の尖頭器が出土しており、形態的には小形木葉形のもの(2・3)、細身で両側縁が平行なもの(4)、柳葉形のもの(5)が見られる。2は縦長剝片を素材として周縁にや

第3表 岩原I遺跡石器器種別出土数

器種	出土数	器種	出土数	器種	出土数	器種	出土数
ナイフ形石器	1	跑状石器	70	使用痕のある剝片	123	磨石	117
尖頭器	4	打製石器	118	三角錐形石器	8	石皿	3
石斧	16	磨製石器	10	疊器	54	台石	45
石錐	1	不定形剝片石器	471	石核	45	その他	16
石匙	2	楔形石器	1	特殊石器	354	剝片	3,504

や角度のある浅い両面調整を施したもので、表面には主剥離面を大きく残している。3は深形の両面調整を周縁から施した後、微細な調整によって両側縁を整形したものであろう。4・5は比較的大きな剥離を両面から施したもので、いずれも正裏面には凹凸がみられ、4は基部を、また5は先端部と基部を欠損している。出土地点を見ると2以外はいずれも台地先端部のIV-V層中で、早期の遺物とは10cm前後の無遺物層を介在させて下位から出土しており、旧石器時代末葉から縄文時代草創期に属するものであろう。

3) 石鎌(6-19)

石鎌は16点出土しており、先端部片の2点以外を図示した。19を除いて無茎鎌で、これらについて平面形態や基部の抉り込みによって分類される。6・7はいわゆる銀形鎌と呼ばれるもので、縄文時代早期の押型文系土器群に特徴的に伴出するとされている。二等辺三角形の基部に逆「U」字状の抉りを入れたような平面形態を示す。8は側縁から脚部にかけて湾曲する円脚鎌である。草創期の爪形文土器に伴出するものといわれるが、本遺跡では草創期の土器は検出されていない。9は脚部が欠損しているため詳細は不明であるが、ほかに比べて剥離が大きくて粗い。10-13は器長に比べて幅が広くなる二等辺三角形で、基部に浅い弧状の抉りを入れるもの(10・11)とほとんど平基になるもの(12・13)に分けられる。14は比較的小形の凹基鎌で、左脚部がやや長くなる。15-18は小形の三角鎌で、15は正裏面に素材の剥離面を大きく残して周縁のみに浅い調整剥離を施す。石材は赤色の鉄石英であるが、本遺跡ではほかにこの石材を使用している例はない。16-18は大きさの割に厚みを持つもので両面調整であるが、17は石器の左側縁に素材の側縁をそのまま残している。19は有茎鎌ではほかに比べて大きく(器長3.5cm)、形態的には縄文時代晩期に特徴的なものである。

4) 石錐(20)

縱長剥片を素材にしたもので、正面から連続する片面調整を施して細長い棒状の錐部を作り出している。錐部先端には回転運動によると思われる磨耗痕が観察され、穴開け具としての機能が推定される。基部は欠損しているため詳細は不明であるが、つまみ部を有していた可能性も考えられる。

5) 石匙(21・22)

本遺跡からは、図示した2点のみが出土している。21はやや大形の縱形石匙で縱長剥片を素材としており、つまみ端部に素材の打面が遺存している。刃部の調整は石器の右側縁にのみ施され、左側縁には素材の縁辺をそのまま残す。表面の風化が著しいが、正裏面には黒色付着物が認められる。22は小形の横形石匙で、黒曜石の横長剥片を素材としている。縁辺には両面か

ら浅形の調整剝離を施しており、刃部には使用痕と思われる微細な剝離が観察される。

6) 篠状石器(23~37)

東北地方北部を中心にして分布する、「石砲」もしくは「砲状石器」と呼ばれるもので、総数70点が出土している。上記以外の地域での検出例は少なく、一遺跡の出土量としては極めて多い方と思われる。平面形態的には基部から刃部に向けて聞くものを基本とし、片面調整もしくは両面調整によって整形加工されるが、裏面は基部の両側縁に浅形剝離を施して主要剝離面を大きく残す。刃部は急斜度の剝離によって作り出され、片刃になるものが大半である。刃部角は36~66度であるが、45度以上のものが多い。両面調整の打製石斧の中には、砲状石器と一見して区別のつきにくいものもあるが、平面及び刃部形態によって分類した。

平面形態によってI~VI類に分類されるが、数量的にはI類が半数以上を占める。

I類……基部から刃部に向けて大きく聞くもの(23~29)

II類……I類と同様の平面形態を示すが小形のもの(30~31)

III類……基部幅が比較的あり、長楕円形に近い形状のもの(32~33)

IV類……刃部幅と基部幅がほぼ同じで、短冊形を呈するもの(34)

V類……器長に対する刃部幅の割合が比較的大きく、台形に近いもの(35~36)

VI類……両側縁が直線的で、裏面と左側縁に原石面を残すもの(37)

刃部形態には円刃(23~24・26~27・32~34)、偏刃(25・31)、凸刃(28)、直刃(35~37)が見られるが、I類には直刃が存在せず、逆にV類は直刃のみである。また、側面観は裏面が直線的かやや内湾気味に刃部先端に至るもの(23~24・31・35~37)と、外湾するもの(その他)に分けられるが、その割合は41:29である。素材は前者では縦長剝片を利用したものが圧倒的に多く、器軸に対して素材軸が約45度傾くものも見られる。後者には縦長剝片と横長剝片があり、横長のものは打点に近い部分の湾曲をそのまま利用している。石材は打製石斧と同様で頁岩が大半を占めるが、表面の風化が著しいものが多い。ほかに珪質頁岩(23~28・33)、ガラス質安山岩(30)、砂岩、粘板岩などが見られる。使用痕を観察すると、刃部の裏面にかなり広範囲に磨耗痕(光沢)が見られるもの(28~29・33~34)、刃部先端の正裏面に磨耗痕が認められるもの(30)、裏面の刃部先端にのみ磨耗痕があるもの(37)、正面の刃部先端に微細な剝離があるもの(23)などがある。また、欠損状況は基部6点に対して刃部は1点のみで、使用痕と合わせて機能・用途を考える上で参考になろう。基部側縁にツブレが見られるもの(26~33)もある。

時期的には早期中葉から晩期までの長期間にわたって存続する石器である〔鈴木1981〕が、分布の中心である東北地方でも早期末葉から前期初頭にかけて特に多く検出されている。本遺跡では早期の土器(特に条痕文系土器)の分布傾向と同様のあり方を示し、県内でも津南町下別当遺跡〔中村1959〕など早期の土器に伴って検出される例が多いことから、該期に属するものと

考へて良いと思われる。

7) 打製石斧(38~56)

総計118点の打製石斧が出土しているが、このうち48点は欠損品である。箇状石器とは平面及び刃部形態(側面縁)で異なっており、基本的には両刃のものを打製石斧として分類した。

平面形態的には短圓形(38~45)および縱形(46~49)が最も多く、ほかに長楕円形を呈するもの(50~53)、大きく粗い剥離によって側縁が不整形になるもの(54)、幅に対して器長が著しく長いもの(55)、扁平な楕円形縁の一部に粗い剥離を施しただけのもの(56)がある。刃部形態は両刃の円刃・偏刃・直刃がいずれにも認められるが、44・47・52・53・56のように片刃を呈するものも若干存在する。47・52・53は急斜度の片刃で、裏面には素材の主剥離面および原石面を大きく残しており、箇状石器と区別のつきにくいものである。使用痕は観察されず打製石斧とするには疑問も残るが、ここでは刃部形態の違いから打製石斧として報告しておく。使用痕は刃部正裏面が著しく磨耗するもの(38・39・41・54)や、刃部先端にツブレ(45・54)や微細な剥離(39)が観察され、箇状石器の使用痕とは大きな差が認められる。また、側縁部に着柄痕と思われるツブレが見られるもの(39・45・51)がある。石材は頁岩が大半を占めるが、ほかに砂岩・粘板岩・ガラス質安山岩・花崗岩などがわずかに存在する。

8) 磨製石斧(57~62)

出土总数は10点と少なく、石器に占める割合は極めて低い。このうち完形品は3点で、ほかはすべて欠損品である。57・58は扁平な楕円形縁を素材としたもので、正裏の側縁部に浅形の調整剥離を施した後に丁寧な研磨を加えるが、剥離調整痕を明瞭に残している。刃部はいずれも両面からの研磨によって片刃状に仕上げられており、先端にはツブレ(57)や刃こぼれ(58)が観察される。このほかに同類の欠損品が4点出土している。これらは從来から「局部磨製石斧」や「櫻石斧」などと呼ばれ、関東地方の早期燃糸文系土器群に特徴的に伴う石器として捉えられてきた(早川1983)。県内では押型文系土器を主体とする津南町卯ノ木遺跡[中村1963]で類例が認められ、擦切手法の痕跡を残す磨製石斧を伴出している。また、千葉県木の根No.6遺跡[杉山ほか1981]では44点の同様な石斧が出土しており、刃部形態や使用痕の観察から手斧のような機能をもった石器と考えられている。59は綠泥片岩製で両側縁に調整剥離を施して整形加工し、裏面は研磨されている。刃部先端には使用によると思われるツブレが顕著に認められるが、剥離については刃部整形時のものか使用によるものかは不明である。60は微細底樋岩製のいわゆる定角式磨製石斧の基部片で、斧頭部には敲打痕が観察される。61・62は蛇紋岩製で丹念な全面研磨によって整形されたもの。刃部にはいずれも刃こぼれが見られ、61の刃部先端には擦痕も観察される。62は比較的小形のもので、刃部は片刃状に作り出されている。

9) 不定形剥片石器(63~125)

剥片の一部に調整剝離を施して刃部(機能面)を作り出したもので、定形的な形態を持たないものを一括して不定形剥片石器とした。従来、これらについては定形石器に比べて輕々に扱われてきた觀があるが、各期を通じて石器組成の中に占める割合は決して少くない。本遺跡でも時期的な同時性は明確ではないが石器総数の約1/3にあたる471点が出土しており、一遺跡における石器組成を考える上で重要な位置を占めるものであろう。¹⁾

また、不定形剥片石器として分類したものの中には、定形石器としての石錐や石匙などと同様の機能を有すると思われるものが含まれる。本来、機能による分類を優先させるべきかもしれない。しかし、「一定の概念で形式が定められているものと、たまたま利用されたものを、たとえ機能上的一致点があったとしても、同列に扱うと混乱が生ずる。」(橋本1975) という指摘があるように、同一機能を持ちながら機能が「かたち」として意識されている形態(定形石器)と、「かたち」が意識として存在しないもの(不定形石器)を、機能的な面だけで括るのは石器形態の系譜を考える上で問題があると思われる。このため、本書では一応分けて報告することにする。

刃部形態によって鋸歯状(I類)、抉入状(II類)、錐状(III類)、その他(IV類)の四類に大別される。この中には異種の刃部を合わせ持つものも見られるが、これらについてはより特徴的な刃部形態によっていざれかに分類した。

I類(63~69) 剥片の縁辺に連続・不連続の細部調整を施し、鋸歯状の刃部を作り出したもので、「鋸歯状石器」や「鋸歯縁石器」などと呼ばれるものに類似した刃部形態を示す。総数44点が出土しており、刃部調整から二種に細分される。

a. 連続・不連続の細かい細部調整を、片面から施して刃部としたもの(63~64)。比較的薄い剥片を素材としたものが多い。

b. 連続する比較的粗い調整によって刃部が作り出されたもの(65~69)で、刃部角は60度以上と急斜度のものが大半を占める。

素材となる剥片を見ると横長・綫長ともに存在するが、折断調整によって大きさを整えていくと思われるものが9点あるほかは、素材の形状を大きく損なう調整剝離を施しているものは見られない。また、使用痕が明瞭に観察されるものはほとんどないが、刃部形態からみてaとbでは機能・用途が異なる可能性が強い。

II類(70~75) 素材縁辺の一部に細部調整による抉入状の刃部を作り出したもので、「抉入石器」や「ノッチ」と呼ばれているものである。総数39点が出土しており、刃部調整や大きさか

1) 中島庄一氏は石器の機能研究を二つの方向に分け、その一つとして任意の遺跡における一時期の石器群全体の機能(石器組成)を明らかにして、その遺跡の性格を追及する方向を示している〔中島1983〕。そのためには単に定形石器のみではなく、剥片を含めた石器群全体の中で検討する必要性を指摘している。

ら二種に細分されるが、71のように両方の刃部を合わせ持つものもかなり見られる。

a. 一回の剥離によって幅1~2cmの比較的小さな刃部を作り出すもの(70・71・75)で、刃部角は50度以上の急斜度のものが大半である。

b. 微細~小形の剥離を連続して施すことにより、幅2cm以上の刃部を作り出すもの(72~74)で、幅に比べて抉りの深さが浅く、刃部角もaに比べてかなり緩い。

大きさは3.5~9cmと多様で、素材剥片の形状を変えずに縁辺に直接刃部加工を施すものがほとんどである。また、折断面が観察されるものが5点見られるが、いずれも5cm以下の中形品に限られ、大きさを整えるための調整の可能性が強い。使用痕は抉部の中央に、ツブレが観察されるものがaに多く認められる。なお、73は石匙の可能性も考えられる。

III類(76~79) 素材となる剥片の尖頭部に細部調整を施し、錐状の刃部を作り出したもので、石錐の一部として報告されている場合が多い。総数19点が出土しており、刃部の調整および形態から三種に細分される。

a. 素材となる剥片の尖頭部を挟む両側縁に浅形の両面調整を施したもので、刃部の断面が扁平な菱形を呈するもの(76)と、正三角形に近いもの(78)が見られる。

b. 大きな剥離によって尖頭部を大まかに作り出した後、微細な調整を行って刃部としたもので、刃部の断面は正三角形を呈する(77)。厚手の剥片を素材としたものが多い。

c. aに比べて鈍角な尖頭部を持つ素材を利用し、両面調整によって太い刃部を作り出したもの(79)。刃部の断面は、四角から橢円形を呈する。

大きさは長さ3~14cmと多様であるが、bに比較的小形のものが多い。素材となる剥片には原石面を残すものが9点あり、ほかの不定形剥片石器に比べてその割合は高い。一般的には剥突もしくは穿孔具と考えられているが、76の刃部先端には両面ともに磨耗が観察され、断面形の違いを考え合わせると異なる機能を与えたほうが良いかもしれない。また、基部側の側縁には調整が施されているもの(76・77・79)が多く、手持ちの工具として持ちやすいように整形した可能性が考えられる。

IV類(80~124) 剥片の縁辺部に連続・不連続の細部調整を施して、I~III類以外の平坦な刃部を作り出したものを本類とする。旧石器時代の「削器」や「サイド・スクレイパー」とされるものに類似しており、出土総数368点で全石器に占める割合は約24%と高い。

おもに刃部の調整方法によって四種に細分されるが、浅形の調整によるものが大多数を占める。それぞれの中でも大きさ、形態、刃部の形状・位置などには様々なものが見られ、さらに細分することも可能と思われる。また、複数の刃部を持つものも多い。

a. 片面からの急斜度の細部調整によって60度以上の刃部角を有するもの(80~86・101)。

b. 緩斜度の微細~小さな細部調整によって刃部を作り出したもの(87~100)。

c. 緩斜度の中形剥離によって刃部調整したもの(102~119)で、総数219点出土しておりIV

類の約60%を占める。

d. 比較的粗い両面調整を周縁に施したもの(120~124)で、平面形態が円形・橢円形に近いもの(120~123)と不整形なもの(124)が見られる。大形のものには、石核と区別のつきにくいものがある。

a~c では素材となる剥片の縁辺に直接刃部加工を施すものが多く、整形加工を行って素材の原形を大きく損なうものは少ない。また、刃部の位置を見ると一側縁のものが大半を占めるが、ほかに隣接する二側縁や平行する両側縁のものも存在する。使用痕が明瞭に観察されるものはごくわずかで、図示したものでは81の刃部にツブレが見られたのみである。なお、118は横長剥片を素材としたもので、整形加工によって角状に仕上げられており特異な形態を示す。

その他(125) 厚手の横長剥片を素材としたものと思われ、両側縁と下端に急斜度(80度前後)の細部調整が施されたものである。上端には原石面を残し周縁には微細な剥離が観察されるが、使用によるものなのかは不明である。

10) 楕形石器(126)

本遺跡からは図示した1点のみが検出されている。両端に剥離痕が観察されるが、両側縁には細部調整も見られ石器の未完成品の可能性も考えられる。

11) 使用痕のある剥片(128~130)

剥片の縁辺に使用によると思われる微細な剥離が観察されるもので、総数123点が確認されている。大きさや形状(素材)、微細剥離の位置には様々なものが存在し、特に規格性のようなものは認められない。出土した3,504点の剥片類の中には、軟質で風化の著しい頁岩製のものも多く、実際にはもっと多くの剥片に使用痕が残っていたものと考えられる。

12) 三角錐形石器(131~135)

本遺跡からは8点の三角錐形石器が出土したが、うち1点は表採品であり、ほかは包含層中からの検出である。ここで三角錐形石器とするものは、横断面が三角形ないし四角形で全体が錐形または錐台形を呈するものであるが、形の整ったものとあまり整っていないものを包括している。形の整っていないものには素材、加工・調整で違和感のあるものがある。素材や原石面の有無・位置などで分類されるが、以下、各観察項目について説明する。

素材 用いられた素材には、A. 碾5点、B. 石核2点、C. 剥片1点の三者があるが、AとBとは現況において原石面を残しているかどうかだけではなく、もとの碾の形を容易に復元し得るかどうかで区別した。なお、剥片素材のもの(135)がこの種の石器として認定されるべきものかどうかについては疑義が残る。

原石面の有無と位置 原石面(自然面・節理面)の有無で次のように分類した。I. 一面有するもの3点、II. 二面以上有するもの3点、III. 残さないもの2点であるが、剥離面中に残る小さな原石面は考慮していない。また、位置について見ると、①背面、②腹面、③側面、④前面に見られ、二面以上に原石面を残すものについては②+③のように記述した。

前面形 本来は横断面形を観察しようとしたが、位置によって変化するため前面(立面図)形とした。A. 四角形(1点)、B. 三角形(7点)とが存在する。

縦断面形 尾部(正面上面)の形態によって、1. 三角形(5点)と 2. 四角形(3点)とに分けられる。なお、刃部角はすべて60度以上であった。

前面の作り出し ここで前面と呼称するのは図下面(立面図)のことである。その作り出しについては、I. 腹縁側からの剥離によるもの(4点)、II. 周縁からの剥離によるもの(3点)があり、さらに刃縁が a. 片刃状のもの(1点)と b. 同刃状のもの(3点)とが認められる。なお、131は前面部が一回の加熱折断面であり、ほかの資料のように前面を設けているとはいえない。

使用痕の位置と種類 使用痕の位置は①背面、②腹面、③側面、④前面であり、それぞれ A. 面部と イ. 稼部とに分けられる。風化が著しく観察不能なもの1点を除いては、すべて複合しており、記述は②+③+④+イのようにした。使用痕の種類としては、a. 著しい磨痕(光沢)、b. 面状磨痕、c. 線状擦痕、d. ツブレ、e. カケなどが観察される。

13) 砧器(136~142)

扁平な自然礫を素材として、側縁の一部に比較的大きく粗い剥離を施して刃部を作り出したもので、礫面を複数面に残すものが多い。また、139・141のように片面に礫面を有する大形・厚手の剥片を素材にしているものも、刃部の形状などから礫器として扱うことにする。大きさは器長10~18cm前後のものが大半を占める。総数54点が出土しており、刃部調整が片面のもの(I類)と両面のもの(II類)に二分されるが、片面調整のものが41点と圧倒的に多い。

I類(136~140) 砧の一側縁に片面からの急斜度な剥離を施して刃部としたもので、刃部角が70度以上のもの(136・137・139)と60度前後のもの(138・140)に細分される。正裏面には礫面を大きく残すものが大半であるが、139のように裏面に節理面を持つものもある。

II類(141~142) 両面からの剥離によって刃部を作り出したもので、片面に大きな剥離面を有するものが多い。刃部角は50度前後でI類に比べて緩い。

136・137は厚さ3~3.5cmの扁平精円形礫の一部に急斜度の剥離を施すもので、ほかに5点出土している。刃部調整は裏面から正面に達する大振りな剥離を連続させるもの(136)と、階段状の剥離によるもの(137)のいずれかである。これらは、上林塚遺跡の礫器(I類a₁)に特徴的な形態であり、早期の礫器の一形態として認識されるものである。なお、136・139の刃縁には使用痕と思われる微細な剥離が認められ、I類の機能を考える上で注意すべきであろう。141

は両面調整によって肉厚で鈍角な刃部を作り出したもので、刃部先端から石器の左側縁にかけて著しいツブレが観察される。

14) 石核(143~146)

石核は総数45点が出土している。大きさ・形状、打面の位置などを観察すると、特に規則性のようなものは見いだせないが、しいて分ければ原石を大きく分割した後に一一数面を打面としたもの(143・144・146)と、原石からそのまま剥離を開始するもの(145)の二種が存在するが、前者のほうが圧倒的に多いようである。もともと縄文時代の剥片生産技術には、旧石器時代に比べて統一性がないものと理解されており(阿部1985)、本遺跡でもこの傾向は認められる。

15) 特殊磨石(147~182)

三角柱・四角柱・楕円柱状などの河原石(転石)を素材とし、その棱の部分に細長い機能面を有するもので、石器全体の約25%にあたる354点が出土している。従来より「擦石」「穀摺石」「特殊磨石」など地域や研究者によって様々に呼称されており、単に「磨石」の一部として扱われる場合も多い。その分布は中部山岳地域から北海道南西部にかけての広範な地域に認められ、早期中葉から後葉の土器に伴うものとされている(八木1976)。本遺跡では早期後葉の条痕文系土器(第III群土器)とほぼ同様の分布傾向を示し、該期に属する可能性が高い。

分類にあたっては、本来形態や機能面の状態などを総合して考えるべきであろうが、各個体のもつ属性が多岐にわたるため、素材(大きさ・形状)・機能面の状態・調整磨面の有無などの観察項目を設けてそれぞれで分類し、本石器の特性を考えるうえで有効と思われるものについて検討を加えることとした。なお、一個体の中に複数(二ないし三面)の機能面を持つものが72点見られるが、この場合には遺存度によって機能面に1~3のランク付けを行い、機能面1を持ってその個体の代表とし、計測は機能面1を正面として行った。以下、分類・観察の各項目ごとに説明する。

素材の大きさ・形状 折損品を除いた227点について、大きさの目安としての長さを見ると9.6~22.5cmとかなりばらつきがあるが、11.5~18cmの間に比較的集中する傾向はある。また、幅と厚さでは前者が3.3~9.8cm、後者が4.1~9.8cmとほぼ同様であるが、集中域では4~8cmと5~9cmで若干厚さの方が勝るようである。重量についても240~1,990gとバラエティーに富むが、しいて集中域を見いだすとすれば500~1,100gあたりといえよう。後述する機能面につ

1) 八木光則氏は特殊磨石を分析・検討する中で、「やや細長くずんぐりした転石の側縁部の、断面で見ると角ぼった部分にのみ集中して磨痕を残す。」ものを特殊磨石としてはかの磨石類と区別し、この磨痕を機能面と呼んだ(八木1976)。しかし、本来磨痕を有する部位に敲打痕が観察されるものも多く、本報告では単に機能面と称することにする。

いて見ると、いずれの類にも大きさ・重量にはバラエティーが見られ、これらとの間に相関関係はないようである。

素材の形状については、機能面の幅や面数を規定する上で大きな要因になると思われる断面形によって、A. 三角形、B. 四角ないし台形、C. 楕円ないし円形の三タイプに分類した。それぞれの出土数は判定不能の20点を除くと、A. 202点(約60%)、B. 31点(約9%)、C. 101点(約31%)で、断面三角形のものが半数以上を占める。

機能面の状態 I類、磨面(157点)、II類、敲打面(56点)、III類、両者を合わせ持つもの(75点)、不明(66点)に分類し、それぞれa. 機能面の側縁に剥離痕があるもの、b. 剥離痕のないものに細分した。ただし、機能面と剥離の前後関係が明瞭に判定されるものはほとんどない。I類ではさらに磨面の状態で1. 素材の表面に比べてざらざらしたもの、2. つるつるしたものに細分される。また、III類には同一機能面において磨面と敲打痕が明瞭に分かれるもの(173~179)と、敲打の後に磨りの作業が行われ、微細な凹凸の山の部分が機能面全面にわたって磨滅しているもの(180~182)が見られるが、前者の方が圧倒的に多い。

機能面の長さは素材の棱の長さにはほぼ一致するものが大半を占め、素材の長軸方向に緩く外湾する。これに対して幅は0.3~3.6cmと一様ではなく、機能面の状態(I~III類)との関係を見ても特定の類に数値的な集中が認められるというような傾向はない。また、機能面の断面での形状はほぼ水平なものとやや外湾気味のものが見られ、いずれも両側に接する縫面とは明瞭な稜を持つものが多い。ただ、152・161・173・181のように稜を持たずに漸移的に縫面へ続くものが存在することは、使用方法を考える上で注意を要することであろう。

調整磨面 機能面と隣接する縫面が磨かれて平坦面を成すものがあるが、これを調整磨面として機能面と区別する。調整磨面が認められるものは24個体(25面)であるが、全体に占める割合は約6%と低い。各類別ではI類、16点、II類、5点、III類、3点でI類に約67%が集中する。

その他の機能面 特殊磨石を特徴付ける機能面のほかに、使用痕と思われる痕跡が認められるものが82点ある。部位ではa. 縫の長軸方向の端部、b. 稼に挟まれた平坦面に分けられ、痕跡としては1. 敲石・台石などに見られるものと同様な敲打痕、2. 凹石と同様なくぼみ部に分けられる。aには敲打痕のみが見られ、両端に認められるものも存在する。また、bには1・2ともに認められる。

折損と火熱 折損品は接合により完形に復したもの(8点)も含めて127点が出土しているが、これは本石器の約36%にあたる。折損の位置は長軸のほぼ中央で、機能面に対して直交するものが多い。類別に見るとI類52点、II類32点、III類43点であるが、敲打を伴うものと考えられるII・III類を合わせると約6割となる。また、火熱を受けたものは45点確認されており、こ

1) [八木1976]による。

のうち完形品を除いた16点を見るとI類17点、II・III類14点で折損品に占める割合がI類では32.7%、II・III類では18.7%となり、磨りを主体としたと思われるI類で折損品の中で火熱を受けたものの占める割合が高い。このことは、折損がすべて使用による結果ではないことを表わしているものと考えられる。

石材を見ると斑岩が51.3%で最も多く、次いで花崗岩(28.4%)、微細斑岩(15.4%)の順でこの三種類で全体の95.2%を占めている。このほかには、安山岩・流紋岩・凝灰岩などが数点ずつ見られる程度である。

このほか、タール状の黒色付着物が機能面などに認められたものが15点存在する。

16) 磨石類(183~195)

素材となる礫(転石)の正裏面および側縁に磨痕・敲打痕・くぼみ痕などを有するもので、従来はそれぞれ磨石・敲石・凹石として器種分類されてきたものである。しかし、実際には一個体に複数の痕跡を有するために、明確に分類できないものも多い。このため、本報告では磨石類として一括し、その中で以下のように細分することとした。総数は117点出土している。

I類(183~185) 扁平な指円形もしくは円形礫の正裏面に磨痕を有するもので、60点が出土している。磨面の状態は滑らかなものとややざらつくものが認められ、正裏面に磨面を持つものもあるが片面だけのものが圧倒的に多い。

II類(186~190) 磨の一部に敲打痕を有するもので、17点が出土している。素材の形状は幅のわりに長い棒状のものが多く、189のように特殊磨石の素材となるようなものも見られる。このほかには扁平な円形礫や球形に近いものも存在する。敲打痕の位置は棒状のものでは長軸方向の端部に、そのほかでは周縁および正裏面に見られるものが多い。

III類(191~193) 扁平な指円形もしくは円形礫の正裏面にくぼみ痕を有するもので、25点が出土している。くぼみ痕は比較的浅いものから深いものまで存在し、一面に複数有するものも多い。位置的には片面のみのものと、両面に見られるものがある。

IV類(194~195) I~III類の痕跡を二~三種合わせ持つもので、15点が出土している。組み合わせとしてはI類+II類(5点)、I類+III類(7点)、II類+III類(2点)、I類+II類+III類(1点)で、痕跡の位置は各類のそれとほぼ同じ。

17) 石皿(196~198)

機能的には台石との区別は難しいが、機能面がくぼんで周囲の礫面との境に明瞭な稜を有するものを石皿とした。本遺跡からの出土は、図示した3点がすべてである。平面形態は比較的整った指円形を呈し、機能面は滑らかなもの(197)とざらざらしたもの(196)があり、196は敲打を伴っていた可能性が考えられる。198は粗い敲打痕のみで磨痕が認められないことから、未

成品の可能性が強い。

18) 台石(199~203)

機能面と裏面の境に明瞭な稜を持たず、平面形態も不整形なものが多い。45点出土しており、機能面の状態によってⅠ類、磨痕のみのもの(36点)、Ⅱ類、敲打痕のみのもの(7点)、Ⅲ類、磨痕と敲打痕を合わせ持つもの(2点)の三種類に大別されるが、Ⅰ類が全体の8割を占める。機能面の状態はⅠ類が片面のほぼ全面を機能面とするのに対し、Ⅱ類では比較的狭い範囲に敲打痕が認められるものが多い。また、素材縁の周縁や裏面を打ち欠いたもの(199・201)が存在するが、これは形状や大きさを整えるための調整加工が施された結果と考えられる。なお、200は正裏面に磨面が認められ、正面には幅2.4~3cmの溝状の長いくぼみが見られることから、砥石としての機能も有していたものであろう。

19) 砥石(204~207)

いわゆる有溝砥石と考えられるもので、比較的に大形のもの(204・205)と小形のもの(206・207)に分けられる。石材はいずれも砂岩で、5点が出土している。

20) 板状石器(208)

平板状の剥片を素材としたもので、周縁に裏面から急斜度の調整を施している。正裏面に節理面を残し、裏面は平坦に磨かれている。使用痕のようなものは認められない。本例1点のみが出土している。

21) 塊状耳飾(209~210)

滑石製の塊状耳飾で、2点出土している。209は切り込み部から左半分を欠損しているが、ほぼ円環状を呈していたものと思われる。断面形は菱形状で、正裏面および側縁には研磨時の擦痕が明瞭に残る。210は正裏面と側縁が研磨されたもので、塊状耳飾の未完成品であろう。

22) 擦切具(211~214)

いずれも砂岩製の板状剥片を素材としたもので、図示した4点がすべてである。機能面の断面は「V」字形を呈し、正裏両面ともに良く磨滅している。また、211~213のように正裏面(機能面以外)が磨かれているものがあるが、これは形状や厚さを整えるための調整痕であろう。機能的には211の機能面が、215の原石の擦切痕の形状に完全に一致することから、滑石製の原石を分割するために用いられたものと考えられる。

23) 滑石原石(215・216)

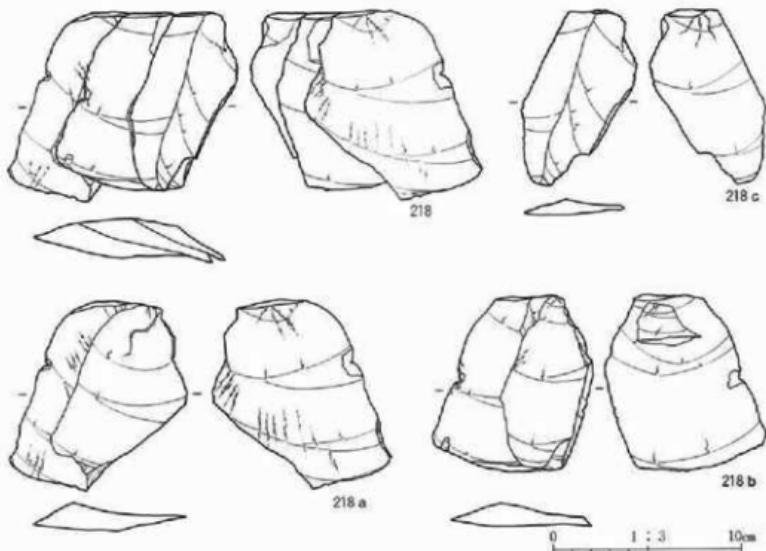
5点が出土している。215は一括で出土した5点が接合したもので、周囲から前記の捺切具を使用して切り込みを入れた後、折り取って半割したものであろう。内部はアメ色であるが、表皮は風化により黒褐色を呈している。216は分割後に一部研磨を加えたものである。

24) その他(217)

不定形剥片石器の折損品の裏面に短い線条痕が観察されるもので、風化が著しく詳細は不明であるが、線条痕の内部の風化があまり進行していないように思われる。後世の所産の可能性が強い。

25) 剥片接合資料(218)

J35-22区のIII層上面から出土したもので、それぞれの間にわずかに土が挟まっていたもののほか218のような状態で並べられていた。剥片剥離作業の後に元の状態に接合して、意識的に置かれたものと考えられる。打点をほぼ2cm間隔で移動させ縦長剥片を剥ぎ取ったもので、旧石器時代の石刃技法に似た規則的な剥離である。いずれにも刃部調整や使用痕は認められず、付近からは同一母岩から剥離された剥片が2点検出されているが、やはり調整加工などは見られなかった。



第50図 剥片接合資料

第4表 岩原1遺跡石器觀察表

四

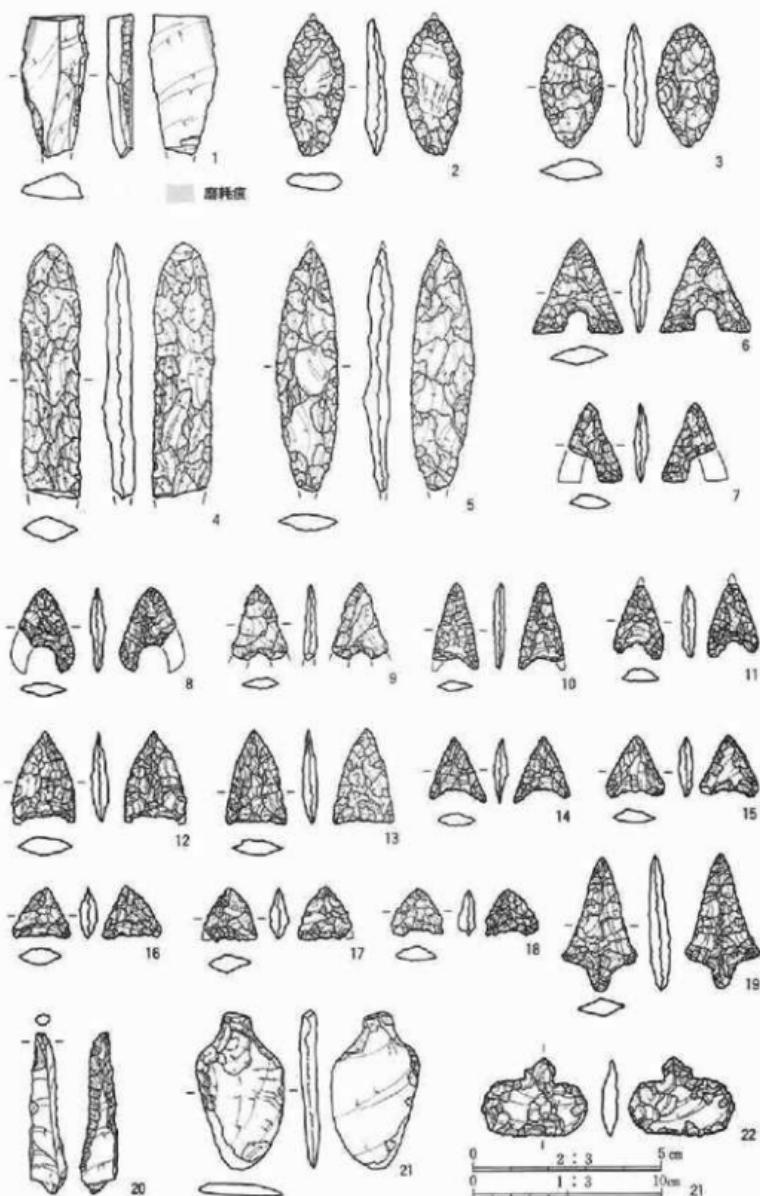
(単位はcm・°C・度、() は現存値を示す)

不定形剝片石類(2)

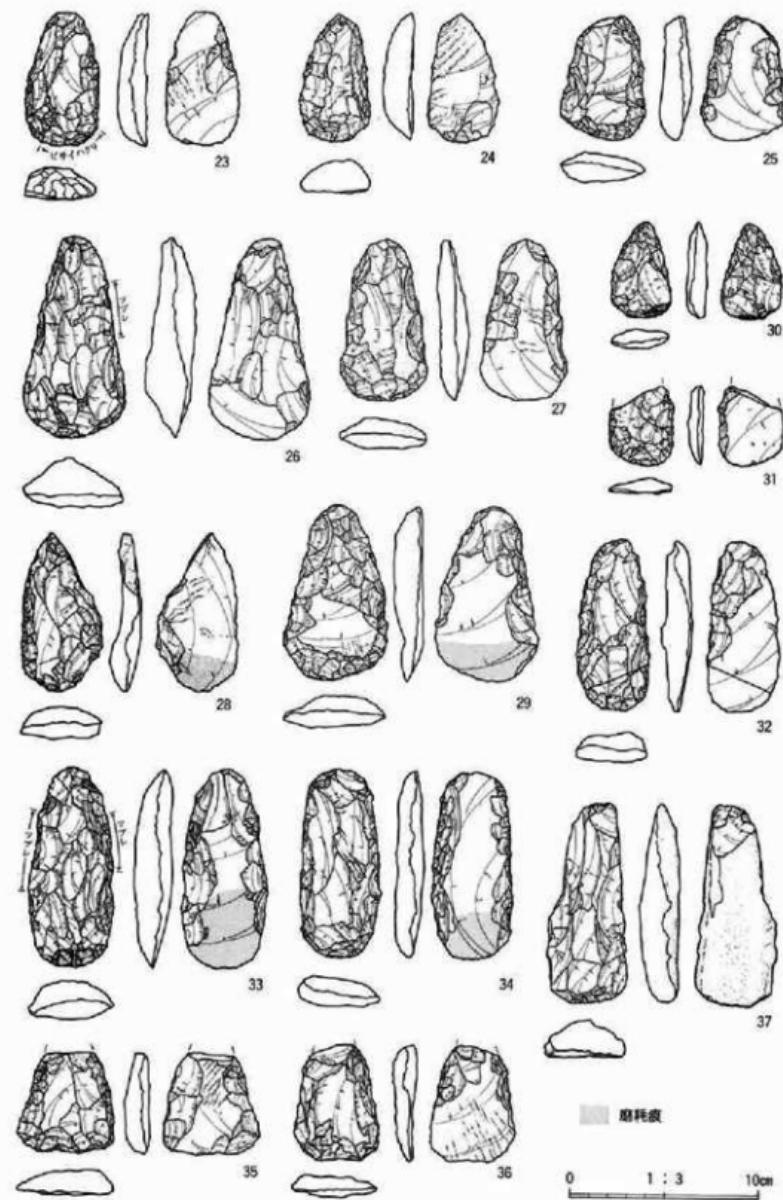
No	B1:位置	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	偏	偏	厚さ	重量	石	材	偏	偏
不定形剝片石類(3)															
No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	偏	偏	厚さ	重量	石	材	偏	偏
73	G 4-1-4	9.8	3.3	1.3	25.0	粗面凹凸				6.3	110.0	KF7			
74	G 4-2-20	6.2	4.5	1.3	55.0	粗面凹凸				7.7	300.0	KF7			
75	P 12-13	7.2	4.7	1.3	45.0	粗面凹凸				7.2	170.0	KF7			
76	P 12-14	7.6	4.9	1.3	55.0	粗面凹凸				7.2	185.0	KF7			
77	P 12-15	7.6	4.9	1.3	55.0	粗面凹凸				7.2	195.0	KF7			
78	P 12-16	10.3	4.2	1.3	73.0	粗面凹凸				7.2	212.0	KF7			
79	P 12-17	10.3	4.2	1.3	73.0	粗面凹凸				7.2	214.0	KF7			
80	P 12-18	13.3	4.2	1.3	140.0	粗面凹凸				7.2	215.0	KF7			
81	P 12-19	13.3	4.2	1.3	140.0	粗面凹凸				7.2	216.0	KF7			
82	G 1-1-6	10.8	6.6	1.8	140.0	粗面凹凸				7.2	217.0	KF7			
83	P 12-20	16.4	4.1	1.3	173.0	粗面凹凸				7.2	218.0	KF7			
84	P 12-21	16.4	4.1	1.3	173.0	粗面凹凸				7.2	219.0	KF7			
85	G 1-2-4	10.4	4.1	1.3	173.0	粗面凹凸				7.2	220.0	KF7			
86	P 12-22	16.4	4.1	1.3	173.0	粗面凹凸				7.2	221.0	KF7			
87	P 12-23	16.4	4.1	1.3	173.0	粗面凹凸				7.2	222.0	KF7			
88	P 12-24	8.3	6.6	1.9	130.0	粗面凹凸				7.2	223.0	KF7			
89	KF7	5.3	3.2	1.9	130.0	粗面凹凸				7.2	224.0	KF7			
90	KF7	5.3	3.2	2.0	130.0	粗面凹凸				7.2	225.0	KF7			
91	KF7	5.3	3.2	2.0	130.0	粗面凹凸				7.2	226.0	KF7			
92	P 12-25	17	3.9	1.6	130.0	粗面凹凸				7.2	227.0	KF7			
93	P 12-26	14	3.7	1.6	130.0	粗面凹凸				7.2	228.0	KF7			
94	E 5-20	9.9	4.4	1.4	35.0	粗面凹凸				7.2	229.0	KF7			
95	E 5-18	11.2	5.0	1.4	45.0	粗面凹凸				7.2	230.0	KF7			
96	H 1-33	9.3	2.8	1.4	25.0	粗面凹凸				7.2	231.0	KF7			
98	P 4-5	10.1	4.1	1.6	110.0	粗面凹凸				7.2	232.0	KF7			
99	P 4-6	10.1	4.2	1.6	110.0	粗面凹凸				7.2	233.0	KF7			
100	J 1-11	(8.2)	5.9	1.6	127.0	粗面凹凸				7.2	234.0	KF7			
102	G 1-53	5.1	11.2	5.5	13.5	粗面凹凸				7.2	235.0	KF7			
103	G 1-44	8	13.6	4.5	16.0	粗面凹凸				7.2	236.0	KF7			
104	E 4-10	9.3	5.3	1.6	100.0	粗面凹凸				7.2	237.0	KF7			
三角形剥石															
No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	偏	偏	厚さ	重量	石	材	偏	偏
131	J 35-6	12.0	5.6	3.1	320.0	粗面凹凸				1.3	13.0	KF7			
132	P 13-17	12.1	6.7	4.9	430.0	粗面凹凸				1.3	14.0	KF7			
133	P 12-25	10.6	6.3	5.5	365.0	粗面凹凸				1.3	15.0	KF7			
134	P 17	9.3	7.3	5.5	365.6	粗面凹凸				1.3	16.0	KF7			
特殊剥石															
No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石	材	偏	偏	厚さ	重量	石	材	偏	偏
147	KF7	12.5	6.2	6.0	70.0	波浪状	A	3	-1	0.9	1.7	KF7			
148	G 1-7	12.5	6.0	6.0	650.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.7	KF7			
149	G 1-10	(12.3)	6.0	6.0	650.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
150	P 11-30	(17.7)	4.6	6.0	650.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
151	G 8-12	12.6	6.4	7.0	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
152	KF7	10.0	6.0	6.0	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
153	P 15-24	11.2	6.5	6.5	860.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
154	H 29-33	11.2	6.5	6.5	860.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
155	P 15-17	14.9	6.1	6.1	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
156	P 16-11	13.8	6.1	6.1	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
157	P 10-22	15.5	7.0	6.1	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			
158	G 13-19	13.8	6.1	6.4	700.0	波浪状	A	3	-1	2.1	1.9	KF7			

卷之三

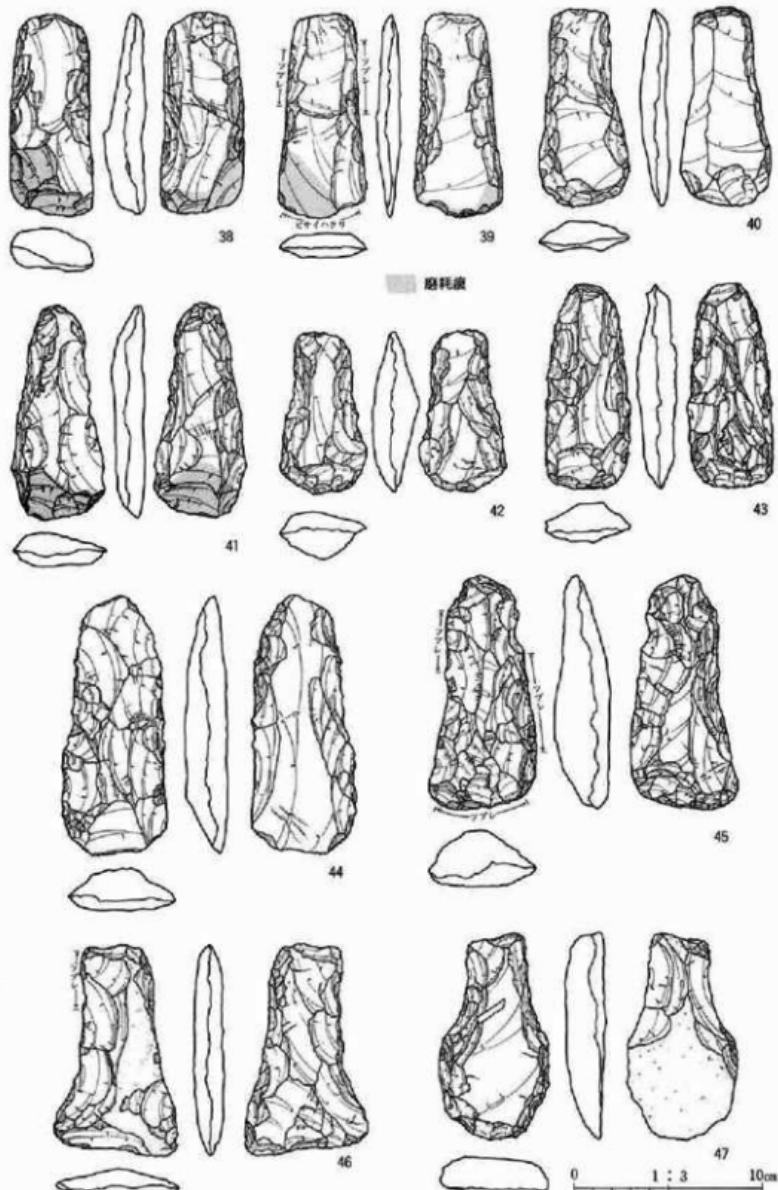
- 97 -



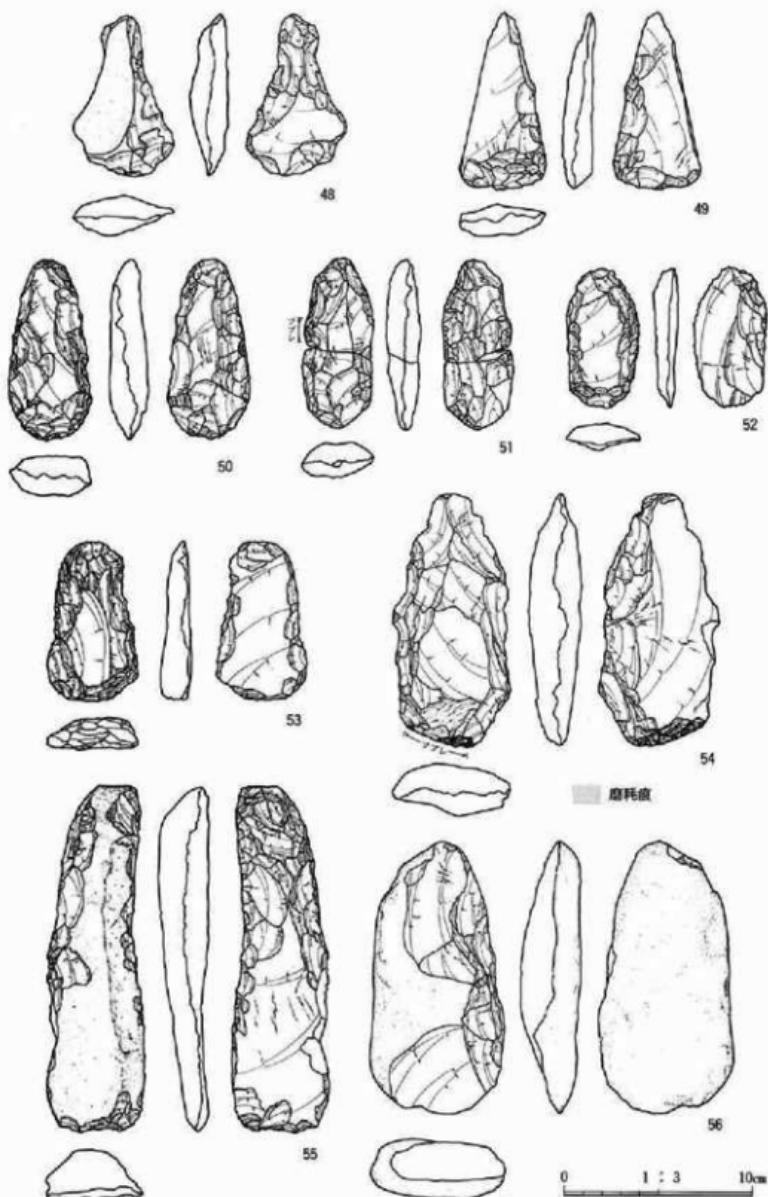
第51図 ナイフ形石器・尖頭器・石核・石片・石匙



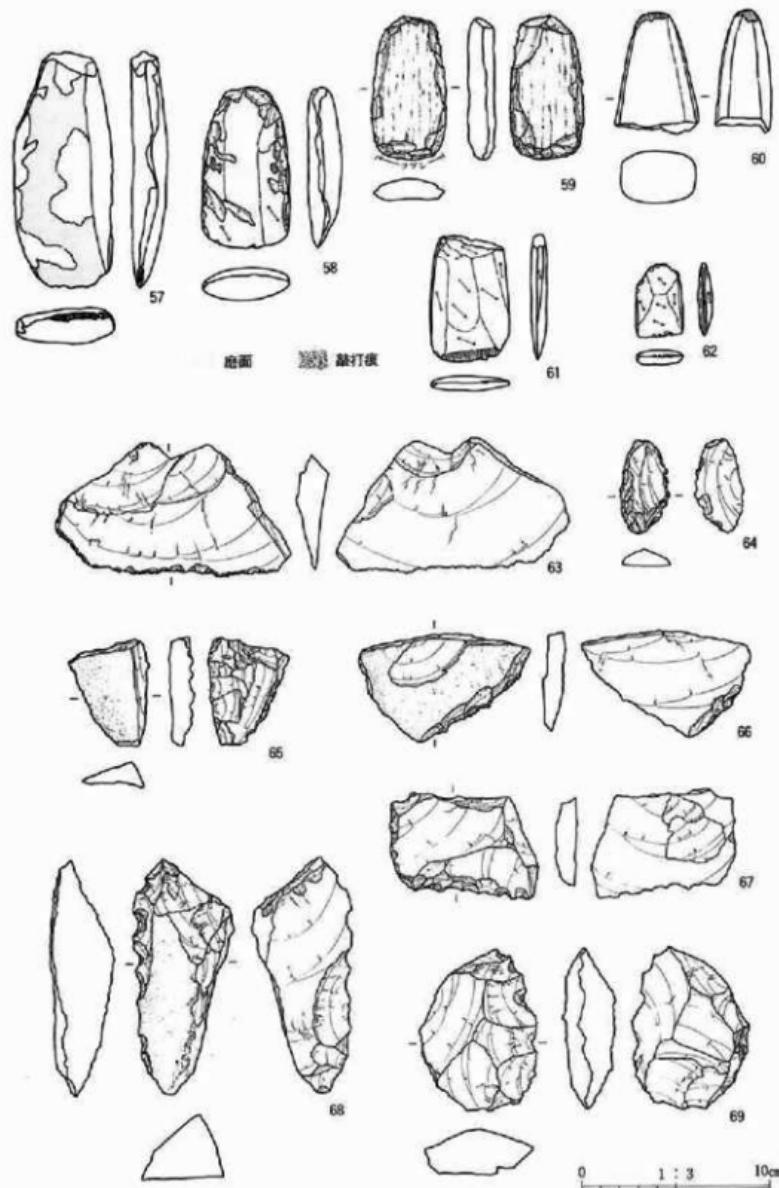
第52図 範例石器



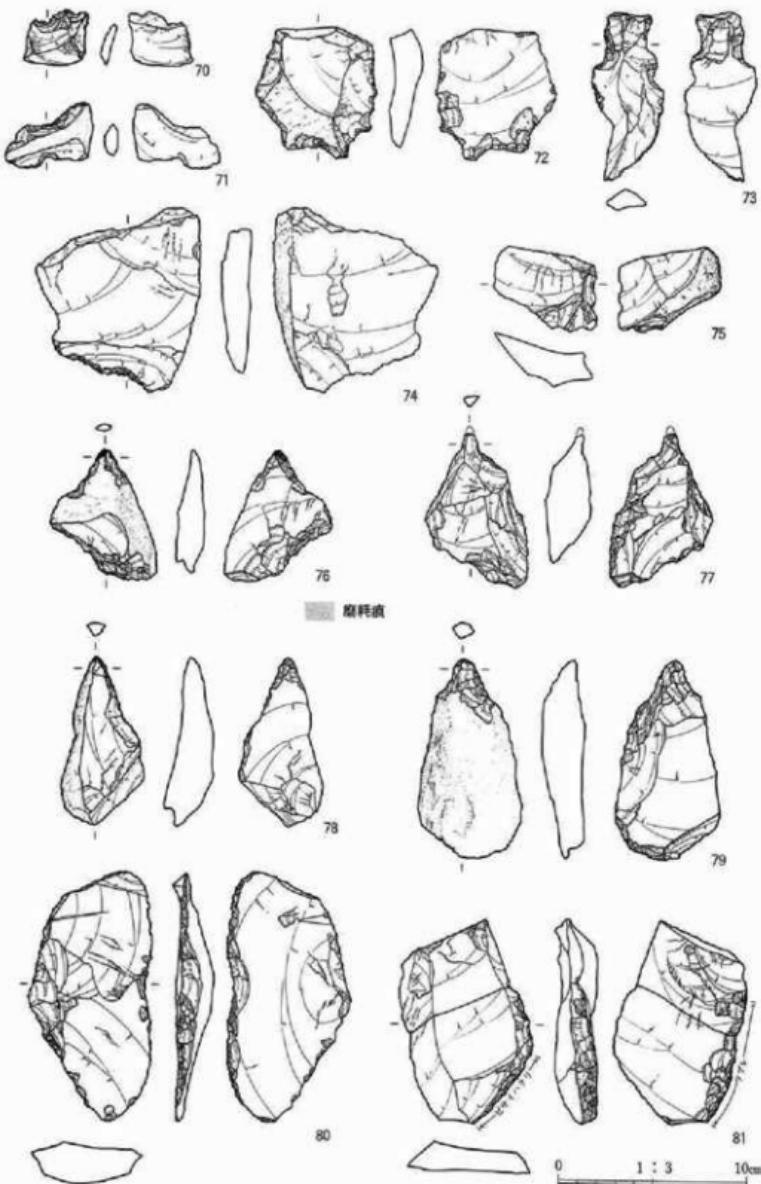
第53圖 打製石斧(1)



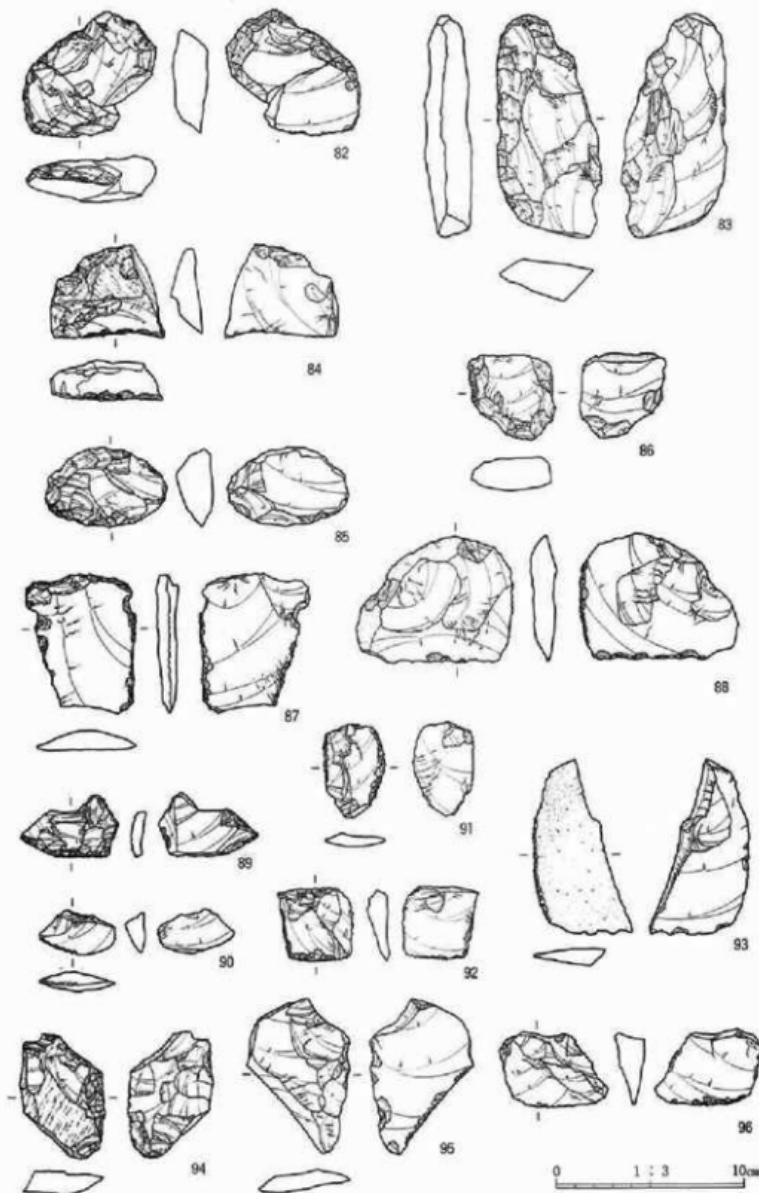
第54図 打製石斧(2)



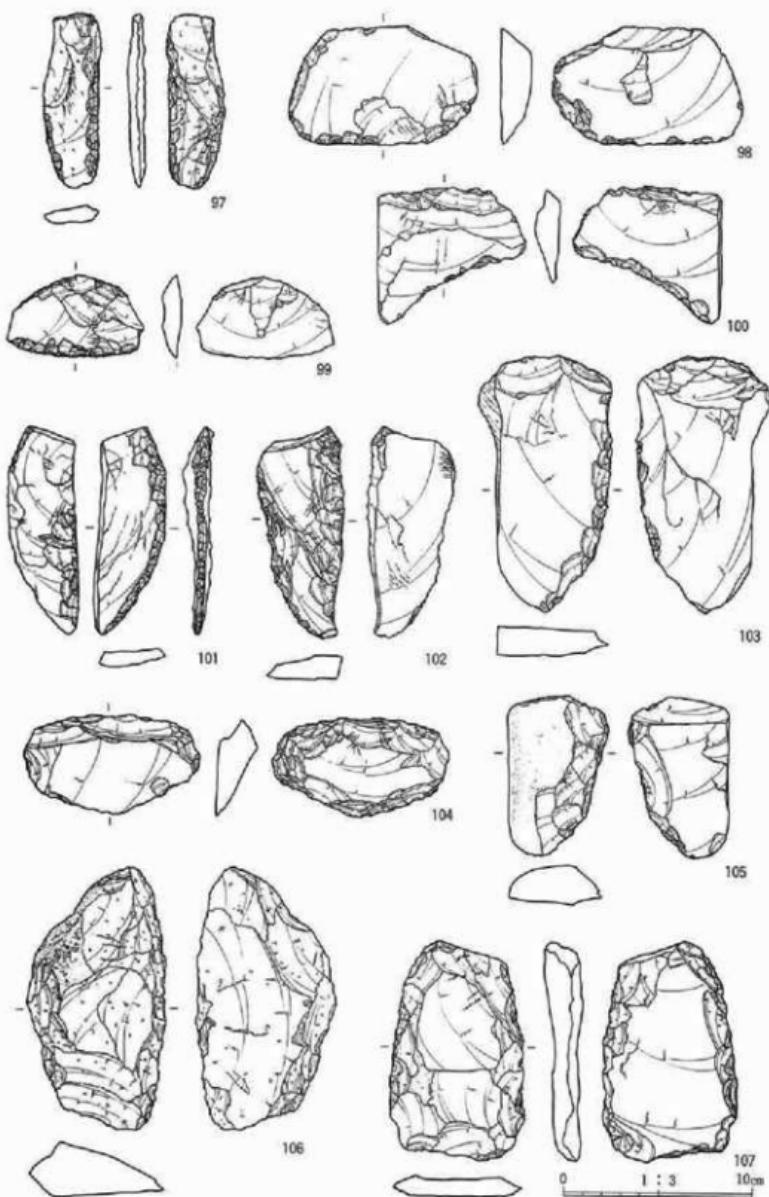
第55圖 磨製石斧·不定形刮片石器(1)



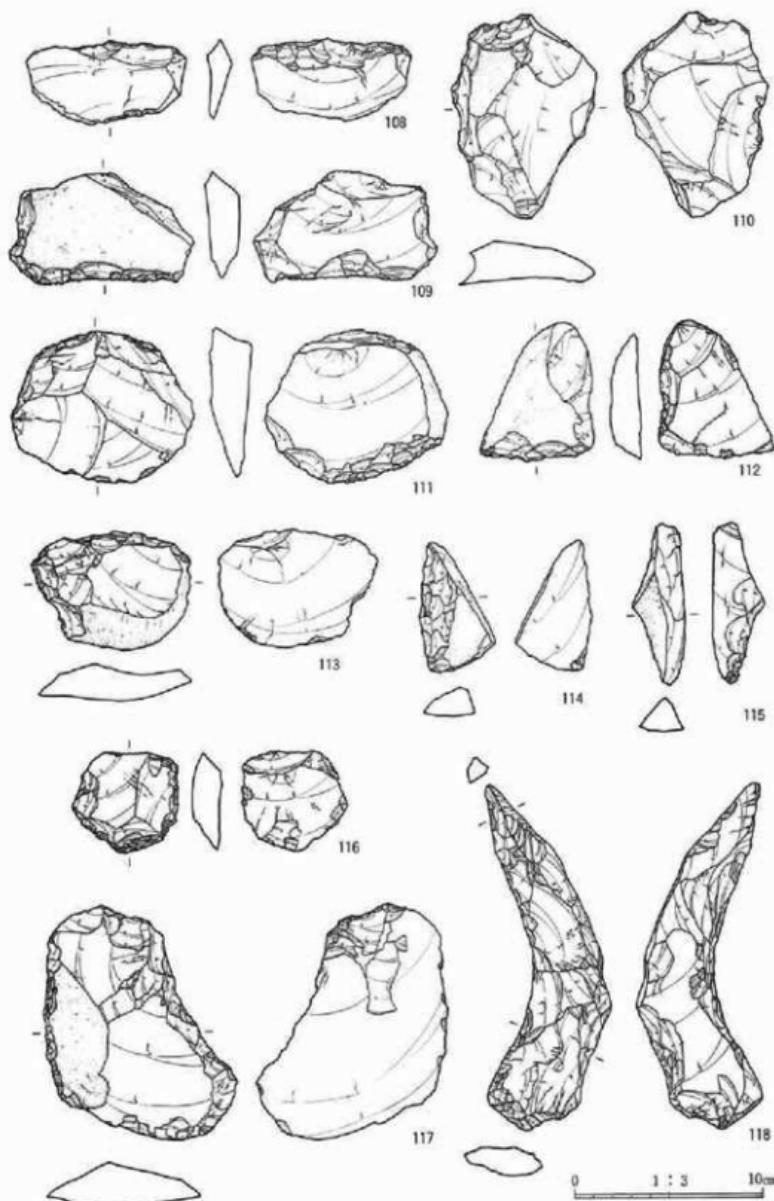
第56図 不定形剥片石器(2)



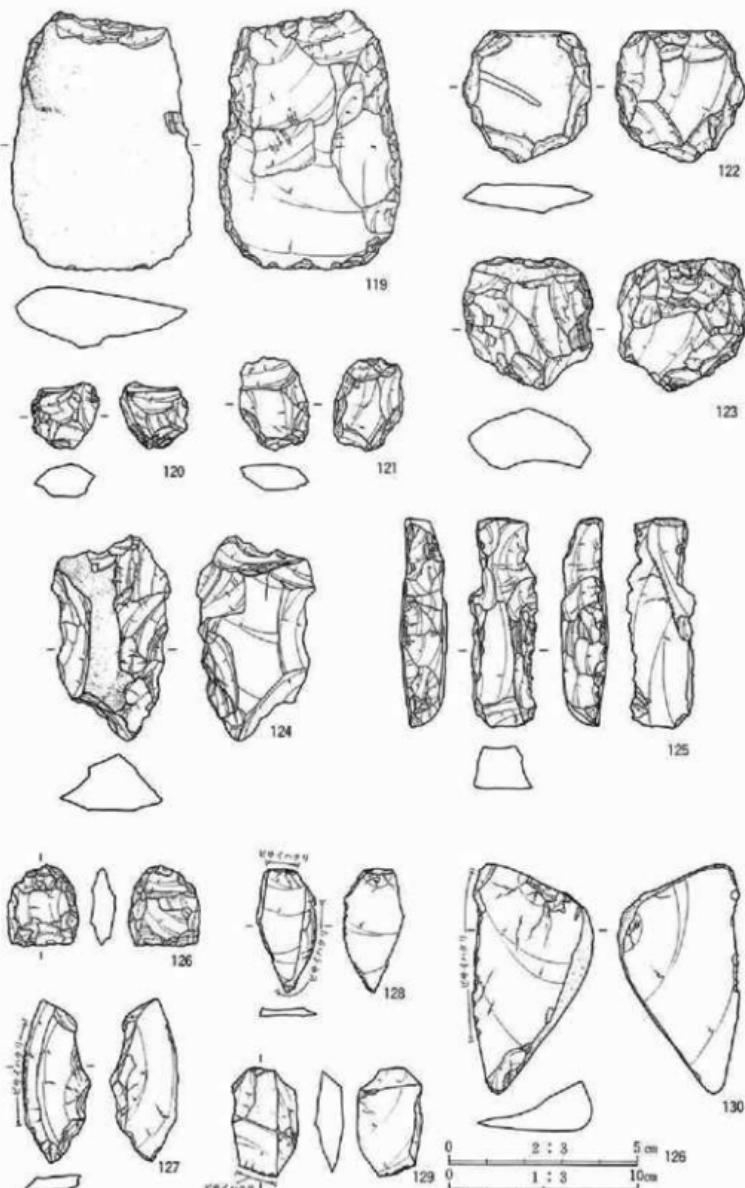
第57圖 不定形剥片石器(3)



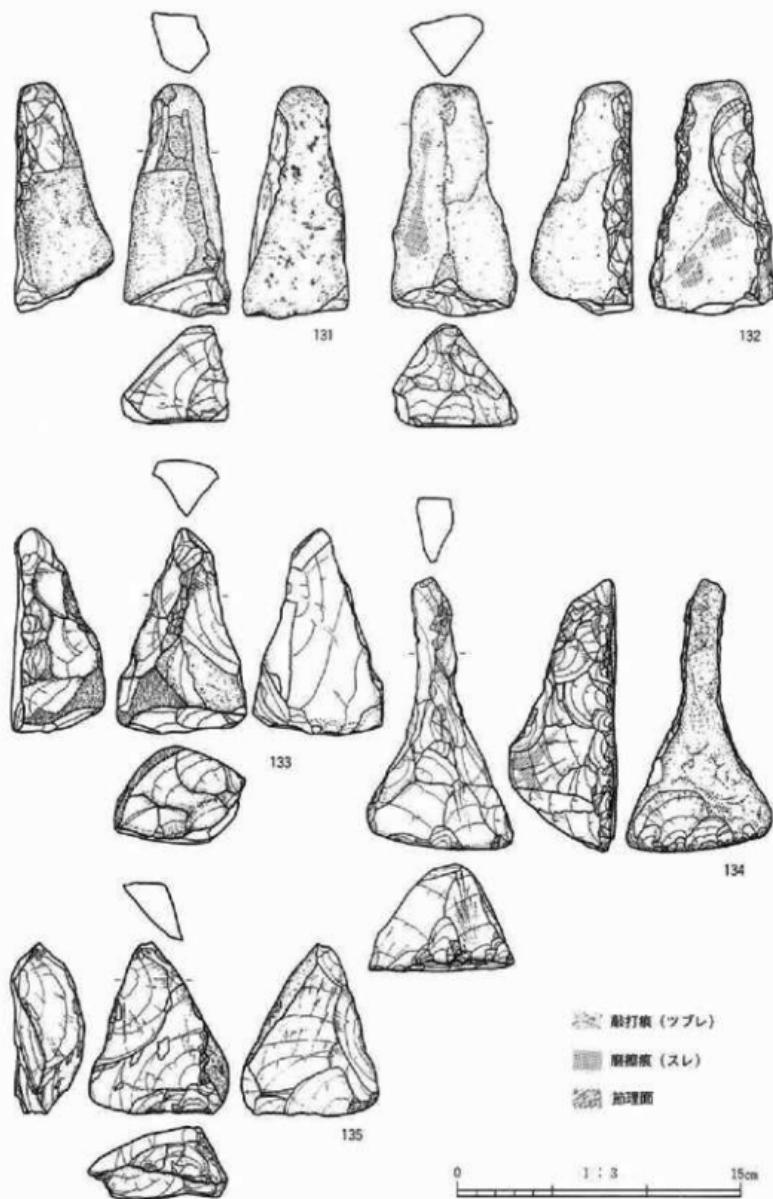
第58圖 不定形剝片石器(4)



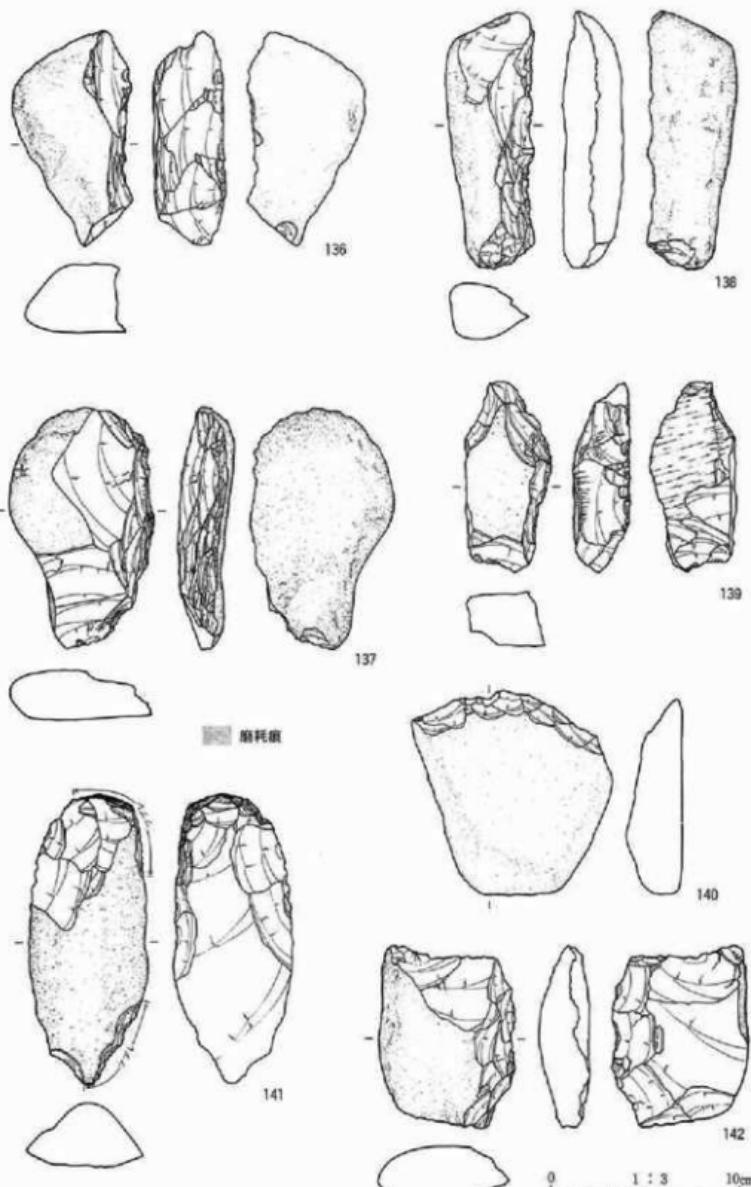
第59圖 不定期剥片石器(5)



第60図 不定期剥片石器(6)・楔形石器・使用痕のある剥片



第61図 三角錐形石器



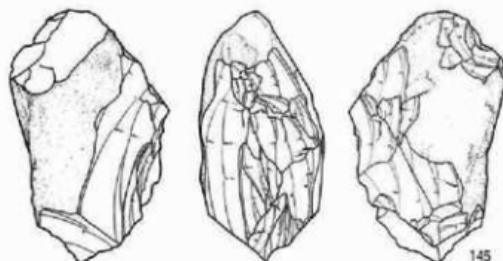
第62図 石器



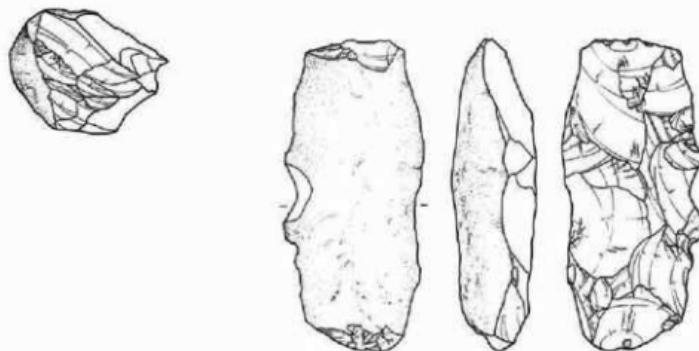
143



144



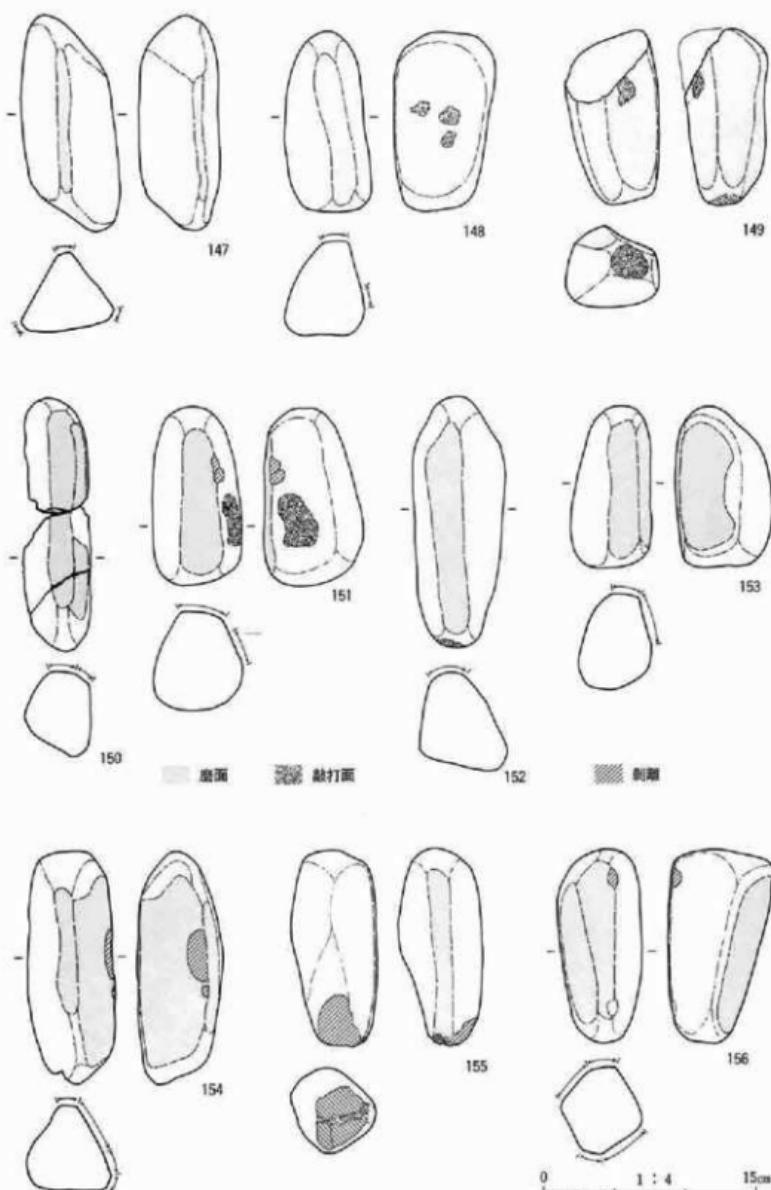
145



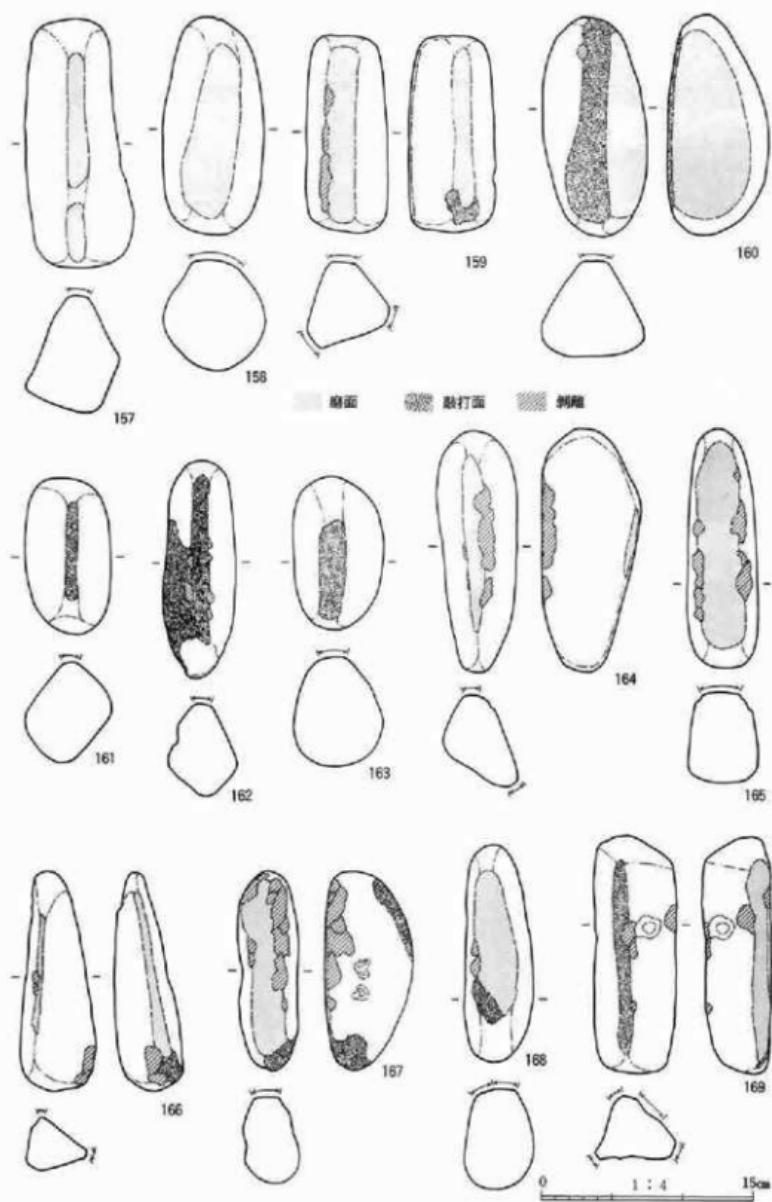
146



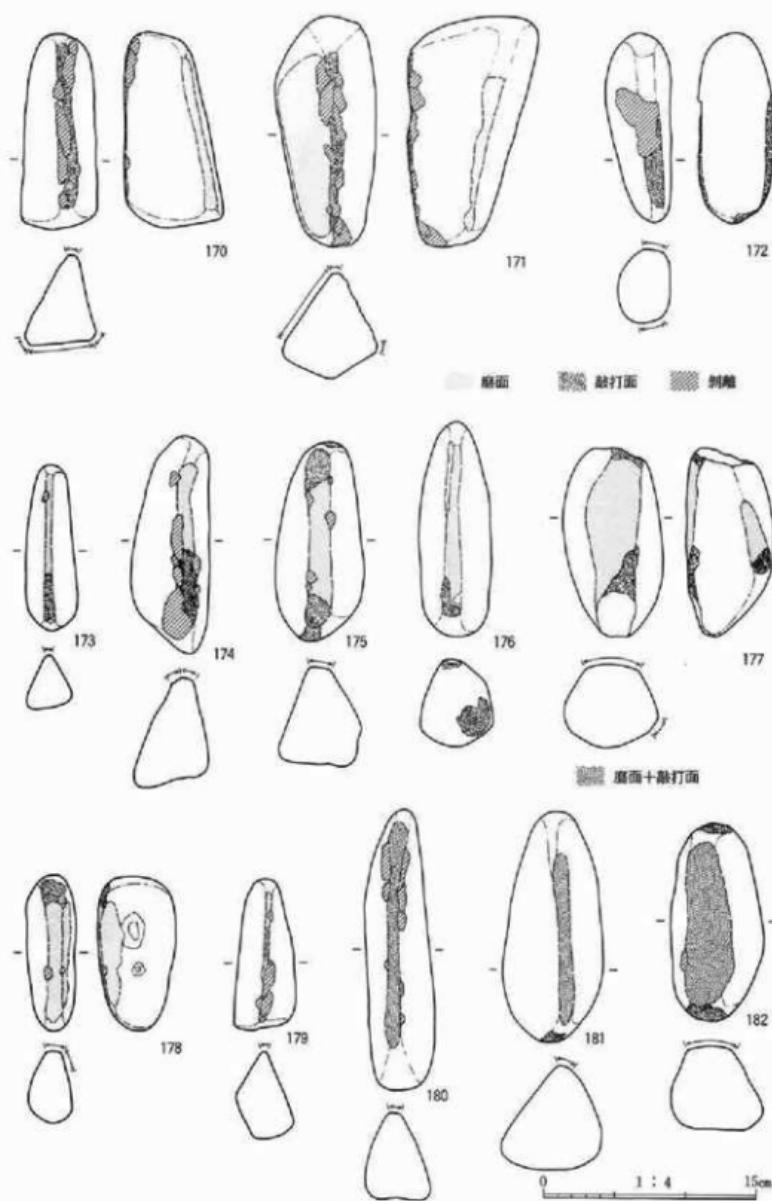
第63图 石核



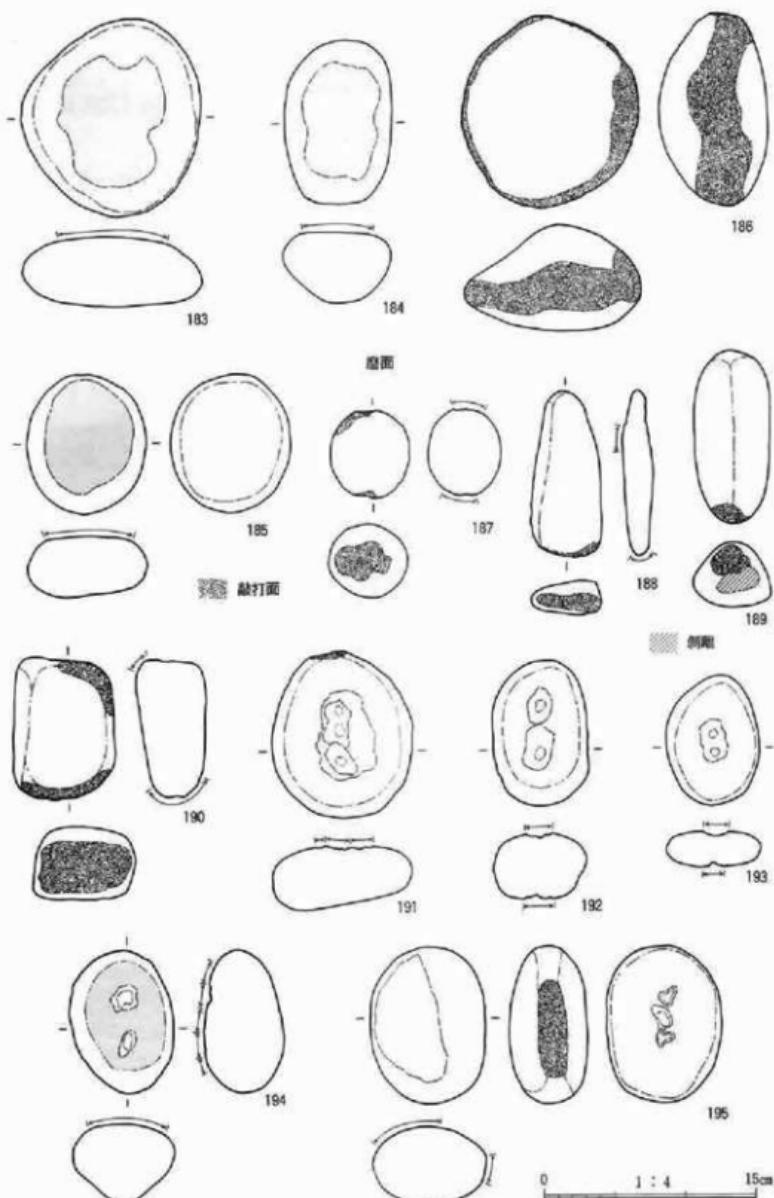
第64図 特殊磨石(1)



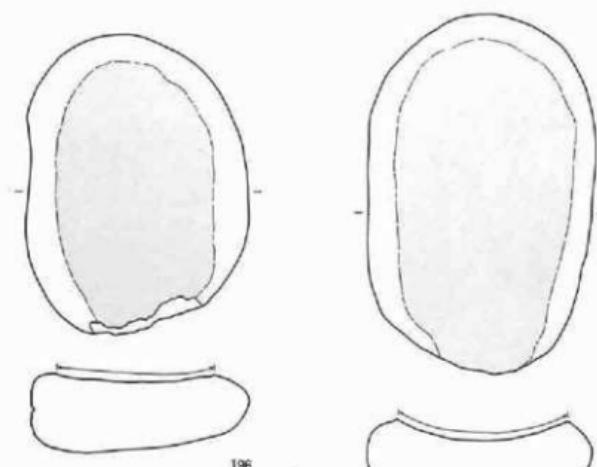
第65图 特殊磨石(2)



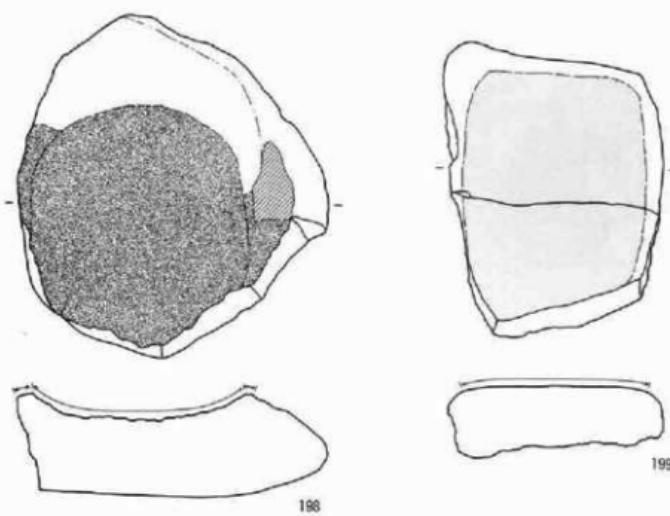
第66図 特殊磨石(3)



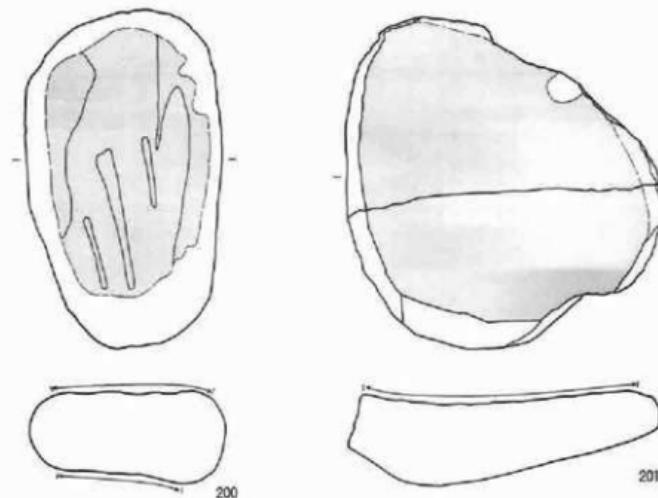
第67図 磨石類



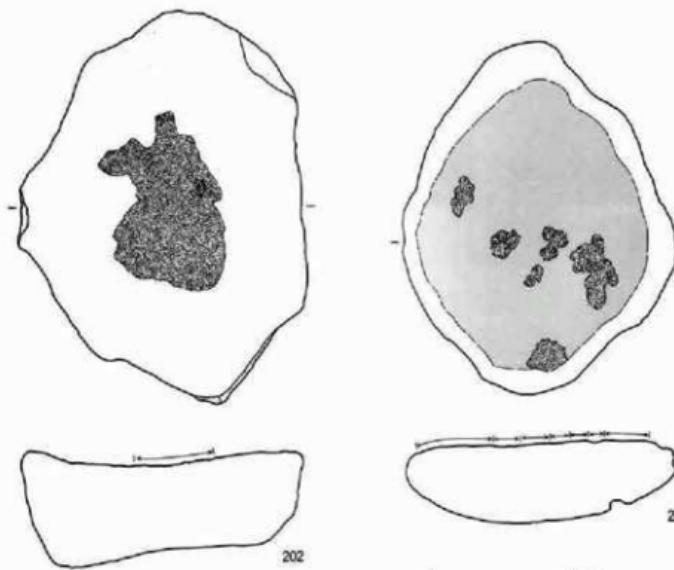
19



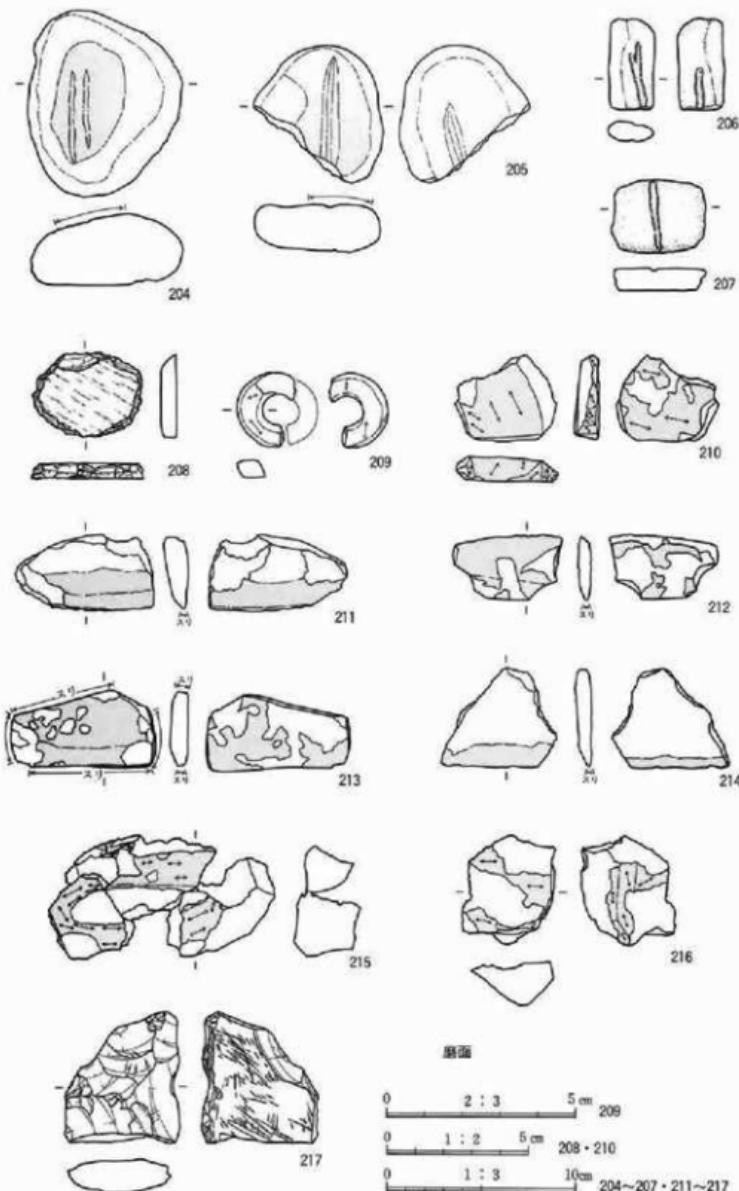
第68圖 石鼈・台石(1)



磨面 機器 磨打面



第69回 台石(2)



第70図 砥石・板状石器・块状耳飾・块状耳飾未成品・擦切具・滑石原石・その他

5. 各種分析結果

岩原1遺跡では出土した遺物や土壤の分析を通じて、遺構の年代決定や古環境復元などの可能性が考えられたため、次の資料について科学的分析を依頼し結果の報告を受けている。

A. 遺構覆土およびローム層の土壤……花粉分析による古環境の復元

B. 遺構内出土の炭化物……遺構の構築年代

C. 遺構覆土内の火山灰……遺構の構築年代とローム層の形成年代

D. 包含層出土の黒曜石……産地同定

以下に分析結果を記すが、A・Bについては結果報告の一部を、またC・Dは報告内容の要点をまとめて記述した。

A. 花粉分析(第5表)

分析者 パリノ・サーヴェイ株式会社

試料 TPA-52(輪穴状土坑)の覆土12点と、C 35グリッドの自然堆積層13点の計25点である。

分析結果 分析結果は、第5表に個体数で表示しまとめた。C 35グリッドの樹木花粉が100個体を越える試料については、樹木花粉産出数を基準として百分率を算出した。以下、分析結果について述べる。

[TPA-52]

全試料を通じそれぞれ検出個体が50個体以下と極めて少ない。コナラ属(コナラ亜属)・トチノキ属・ウコギ科・タニウツギ属・キク科・イネ科などが検出された。花粉・胞子化石がほとんど検出されないことから古環境の復元は困難である。

[C 35グリッド]

No. 32からNo. 36においては、樹木花粉がNo. 35を除いて59個以下と極めて少ない。コナラ属(コナラ亜属)・シナノキ属・ブナ属がほぼ全試料で出現し、特にNo. 32・33ではマツ属・トウヒ属が樹木花粉の少ない中でも比較的多く出現する。草本・シダ類胞子では、キク亜科(ヨモギ属を含む)・イネ科が検出された。

No. 37では、タニウツギ属・ブナ属・コナラ属(コナラ亜属)・ウコギ科が比較的高率に出現する。草本・シダ類胞子では、キク亜科が52% (全体では25%)・単条溝型胞子が30% (全体では14.4%)と高率に出現する。

No. 38では樹木花粉が83個と少ないがその中では、コナラ属(コナラ亜属)・ウコギ科・タニウツギ属が比較的多い。

No. 39からNo. 40では、タニウツギ属が高率に出現し、ほかにウコギ科・コナラ属(コナラ亜

第5表 岩原1遺跡花粉・胞子化石産出数

資料	TPA-52															C-35 Grid															
	1	2	3	4	5	6	7	9	11	12	13	15	44	45	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32						
花粉と胞子																															
モミ属																															
フグ属																															
トウヒ属	1																														
カラマツ属・トガサワラ属																															
マツ属																															
コウヤマキ属																															
スギ属																															
イネ科・ヒノキ科・スギ科																															
針葉樹花粉計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	7	6	3	5	10	3	4	3	16	9						
タリス属																															
サワダルス属																															
サナギ属																															
ハンノキ属	1												10	5	3	3	7	8	6	1	3	2	5	1							
カバノキ属																															
タマシゲ属																															
ハシバミ属																															
ブナ属																															
コナラ属(アカガシ属)																															
コナラ属(コナラ属)	1		2	2				1	1	12	1	5	12	10	22	24	17	8	25	10	6	4									
ニレ属・ケヤキ属	1																														
クワ科																															
ヤドリキ属	1																														
マメ科																															
キワダ属																															
ウルシ属																															
カニデ属																															
トチノキ属		2	1	1																											
モチノキ属																															
シナノキ属																															
ウコギ属																															
ツツジ科	2		5	1		2	1						1	26	9	6	15	10	23	12	13	2	3								
ハイノキ属																															
イボタノキ属																															
タニウツギ属	1																														
広葉樹花粉計	3	1	0	0	0	15	2	14	1	4	3	2	197	200	201	193	101	115	78	90	25	82	33	30	8						
裸本花粉計	3	2	0	0	0	13	2	14	1	4	3	2	300	201	201	200	107	118	83	100	28	86	36	46	17						
タデ属・サナエクタ節																															
ナデシコ科																															
カラマツソウ属																															
キンポウゲ科																															
タケニグサ属																															
バラ科																															
マメ科																															
フウロソウ属																															
セリ科																															
ネナシカズラ属																															
シマ科																															
オミナエシ属																															
日モギ属																															
キヤシ科	1												2	1	13	41	92	43	45	52	22	19	7	5	9						
タンボポ科													1																		
イネ科	1												4	2	1																
カセワリグサ科																															
草本花粉計	1	1	1	0	0	6	0	5	1	3	1	0	6	5	16	45	98	54	70	63	26	35	19	43	96						
三孔型花粉																															
三瓣型花粉																															
三孔型孔型花粉	2	1	1	6	4	2	1	2	2	18	8	6	5	1	5	17	13	17	22	9	20	17									
形態分類花粉計	2	1	1	1	0	6	0	6	2	1	2	2	21	8	6	6	1	5	20	14	22	28	14	24	19						
ウラボシ科																															
ヒカゲノカズラ属																															
単球型胞子													1	1	2	37	1	7	6	56	38	30	26	8	2						
三角型胞子	1												1																		
半球型胞子計	0	1	0	0	0	0	1	2	0	5	0	0	39	1	0	7	6	57	38	30	26	10	0	2	0	0	0	0	0		
合 計	6	5	2	1	0	25	3	27	4	13	6	4	266	215	223	258	212	234	211	207	102	159	69	115	132						

属)・ブナ属などが出現する。特に No. 39 では、カエデ属が樹木花粉中 28% と高率に、No. 43 ではウルシ属が同じく 13.4% と上下の試料に比べ著しく顕著に出現する。草本・シダ類胞子は、キク亜科・單条溝型胞子が下部で高率に出現するが、上部に向かって減少する。

今回の分析では広域散布をすると考えられる分類群が少なく、どちらかといえば局地性の植生を示す分類群が多いようである。当堆積物がロームであることから考えても花粉が選択的生存をした結果として考えられ、森林植生をどの程度反映しているか疑問であり、今回の結果のみでは古植生について言及しかねる。今後の検討を待ちたい。

B. 放射性炭素年代測定

分析者 学習院大学理学部年代測定室 木越邦彦

試料 陥穴状土坑やその他の土坑内から検出された炭化物 10 点について、遺構の構築年代を考える参考のために分析依頼した。このうち遺構と認定されなかった 4 点を除いて、ほかの 6 点について掲載する。

Code-No.	試 料	B.P. 年代(1950 年よりの年数)
Gak-10957.	Charred wood from Iwahara I Site.	3810 ± 130
	F 8、風倒木痕	1860 B.C.
Gak-10958.	Charcoal from Iwahara I Site.	5750 ± 110
	H 27、P-25	3800 B.C.
Gak-10959.	Peaty soil from Iwahara I Site.	8400 ± 170
	G 29、TPA-23	6450 B.C.
Gak-10960.	Charcoal from Iwahara I Site.	6470 ± 120
	H 38、竪穴状遺構	4520 B.C.
Gak-10965.	Charcoal from Iwahara I Site.	3130 ± 90
	I 39、P-26	1180 B.C.
Gak-10966.	Charcoal from Iwahara I Site.	8570 ± 250
	K 40、TPA-61	6620 B.C.

C. 火山灰分析(第 6 表)

分析者 群馬大学教育学部地学研究室 新井房夫

試料 今回の調査で検出された 133 基の陥穴状土坑のうち、D 類の 2 基の覆土中から灰白色の薄層が検出され、火山灰の可能性が考えられたため分析を依頼し、下記の結果が得られた。

なお、2 基の陥穴状土坑は TPD I-6 と TPD I-9 で、E-13・16 にそれぞれ所在し長軸方

向は台地斜面に直交する。灰白色の薄層は、覆土の中位よりやや下層に存在しており、廃棄された土坑が完全に埋まり切らない時点で堆積した状態を示している。

分析結果 堆積物は細粒(平均最大粒径、約3mm)の灰白色火山灰で、かなり高純度とみなせる。微細な白色軽石を遊離斑晶および角閃石石英安山岩質な石質岩片からなる。軽石の発泡はあまり良くなく、一種の水蒸気爆発による噴出物と考えられる。鉱物組成および本質物とみなせる火山ガラス・斜方輝石・角閃石などの屈折率特性は第6表のとおりである。

分析の結果、酸化角閃石が多く、かんらん石を伴うことや、特に屈折率の特徴から、本火山灰は浅間山や草津白根火山などに由来するものでないことは確実である。むしろ、妙高火山の中央火口丘新規火砕流(高田平野団体研究グループ1966)・大田切川火山灰(早津1972)や、焼山火山灰の特性に酷似し、それらのいずれかに対比できるものと考えられる。大田切川火山灰と焼山火山灰は、岩石記載的性質では区別できないほど類似しているが、供給源付近における分布規模や層位(年代)を考慮すると、大田切川火山灰(約4,500 B.P.)に対比できる可能性が最も大きい。

第6表 岩原I造跡土坑覆土中の火山灰分析表

地層番号 高さ A-B-C (m)	基層 高さ (m)	最大 粒径 (mm)	孔隙 風化度 保湿度 品質	基層物質化						鉱物 組成 %	屈折率 Q1 Q2 Q3 Q4 Q5 Q6 Q7 Q8 Q9 Q10 Q11 Q12 Q13 Q14 Q15 Q16 Q17 Q18 Q19 Q20 Q21 Q22 Q23 Q24 Q25 Q26 Q27 Q28 Q29 Q30 Q31 Q32 Q33 Q34 Q35 Q36 Q37 Q38 Q39 Q40 Q41 Q42 Q43 Q44 Q45 Q46 Q47 Q48 Q49 Q50 Q51 Q52 Q53 Q54 Q55 Q56 Q57 Q58 Q59 Q60 Q61 Q62 Q63 Q64 Q65 Q66 Q67 Q68 Q69 Q70 Q71 Q72 Q73 Q74 Q75 Q76 Q77 Q78 Q79 Q80 Q81 Q82 Q83 Q84 Q85 Q86 Q87 Q88 Q89 Q90 Q91 Q92 Q93 Q94 Q95 Q96 Q97 Q98 Q99 Q100 Q101 Q102 Q103 Q104 Q105 Q106 Q107 Q108 Q109 Q110 Q111 Q112 Q113 Q114 Q115 Q116 Q117 Q118 Q119 Q120 Q121 Q122 Q123 Q124 Q125 Q126 Q127 Q128 Q129 Q130 Q131 Q132 Q133 Q134 Q135 Q136 Q137 Q138 Q139 Q140 Q141 Q142 Q143 Q144 Q145 Q146 Q147 Q148 Q149 Q150 Q151 Q152 Q153 Q154 Q155 Q156 Q157 Q158 Q159 Q160 Q161 Q162 Q163 Q164 Q165 Q166 Q167 Q168 Q169 Q170 Q171 Q172 Q173 Q174 Q175 Q176 Q177 Q178 Q179 Q180 Q181 Q182 Q183 Q184 Q185 Q186 Q187 Q188 Q189 Q190 Q191 Q192 Q193 Q194 Q195 Q196 Q197 Q198 Q199 Q200 Q201 Q202 Q203 Q204 Q205 Q206 Q207 Q208 Q209 Q210 Q211 Q212 Q213 Q214 Q215 Q216 Q217 Q218 Q219 Q220 Q221 Q222 Q223 Q224 Q225 Q226 Q227 Q228 Q229 Q229 Q230 Q231 Q232 Q233 Q234 Q235 Q236 Q237 Q238 Q239 Q240 Q241 Q242 Q243 Q244 Q245 Q246 Q247 Q248 Q249 Q250 Q251 Q252 Q253 Q254 Q255 Q256 Q257 Q258 Q259 Q259 Q260 Q261 Q262 Q263 Q264 Q265 Q266 Q267 Q268 Q269 Q269 Q270 Q271 Q272 Q273 Q274 Q275 Q276 Q277 Q278 Q279 Q279 Q280 Q281 Q282 Q283 Q284 Q285 Q286 Q287 Q288 Q289 Q289 Q290 Q291 Q292 Q293 Q294 Q295 Q296 Q297 Q298 Q299 Q299 Q300 Q301 Q302 Q303 Q304 Q305 Q306 Q307 Q308 Q309 Q309 Q310 Q311 Q312 Q313 Q314 Q315 Q316 Q317 Q318 Q319 Q319 Q320 Q321 Q322 Q323 Q324 Q325 Q326 Q327 Q328 Q329 Q329 Q330 Q331 Q332 Q333 Q334 Q335 Q336 Q337 Q338 Q339 Q339 Q340 Q341 Q342 Q343 Q344 Q345 Q346 Q347 Q348 Q349 Q349 Q350 Q351 Q352 Q353 Q354 Q355 Q356 Q357 Q358 Q359 Q359 Q360 Q361 Q362 Q363 Q364 Q365 Q366 Q367 Q368 Q369 Q369 Q370 Q371 Q372 Q373 Q374 Q375 Q376 Q377 Q378 Q379 Q379 Q380 Q381 Q382 Q383 Q384 Q385 Q386 Q387 Q388 Q389 Q389 Q390 Q391 Q392 Q393 Q394 Q395 Q396 Q397 Q398 Q399 Q399 Q400 Q401 Q402 Q403 Q404 Q405 Q406 Q407 Q408 Q409 Q409 Q410 Q411 Q412 Q413 Q414 Q415 Q416 Q417 Q418 Q419 Q419 Q420 Q421 Q422 Q423 Q424 Q425 Q426 Q427 Q428 Q429 Q429 Q430 Q431 Q432 Q433 Q434 Q435 Q436 Q437 Q438 Q439 Q439 Q440 Q441 Q442 Q443 Q444 Q445 Q446 Q447 Q448 Q449 Q449 Q450 Q451 Q452 Q453 Q454 Q455 Q456 Q457 Q458 Q459 Q459 Q460 Q461 Q462 Q463 Q464 Q465 Q466 Q467 Q468 Q469 Q469 Q470 Q471 Q472 Q473 Q474 Q475 Q476 Q477 Q478 Q479 Q479 Q480 Q481 Q482 Q483 Q484 Q485 Q486 Q487 Q488 Q489 Q489 Q490 Q491 Q492 Q493 Q494 Q495 Q496 Q497 Q498 Q499 Q499 Q500 Q501 Q502 Q503 Q504 Q505 Q506 Q507 Q508 Q509 Q509 Q510 Q511 Q512 Q513 Q514 Q515 Q516 Q517 Q518 Q519 Q519 Q520 Q521 Q522 Q523 Q524 Q525 Q526 Q527 Q528 Q529 Q529 Q530 Q531 Q532 Q533 Q534 Q535 Q536 Q537 Q538 Q539 Q539 Q540 Q541 Q542 Q543 Q544 Q545 Q546 Q547 Q548 Q549 Q549 Q550 Q551 Q552 Q553 Q554 Q555 Q556 Q557 Q558 Q559 Q559 Q560 Q561 Q562 Q563 Q564 Q565 Q566 Q567 Q568 Q569 Q569 Q570 Q571 Q572 Q573 Q574 Q575 Q576 Q577 Q578 Q579 Q579 Q580 Q581 Q582 Q583 Q584 Q585 Q586 Q587 Q588 Q589 Q589 Q590 Q591 Q592 Q593 Q594 Q595 Q596 Q597 Q598 Q599 Q599 Q600 Q601 Q602 Q603 Q604 Q605 Q606 Q607 Q608 Q609 Q609 Q610 Q611 Q612 Q613 Q614 Q615 Q616 Q617 Q618 Q619 Q619 Q620 Q621 Q622 Q623 Q624 Q625 Q626 Q627 Q628 Q629 Q629 Q630 Q631 Q632 Q633 Q634 Q635 Q636 Q637 Q638 Q639 Q639 Q640 Q641 Q642 Q643 Q644 Q645 Q646 Q647 Q648 Q649 Q649 Q650 Q651 Q652 Q653 Q654 Q655 Q656 Q657 Q658 Q659 Q659 Q660 Q661 Q662 Q663 Q664 Q665 Q666 Q667 Q668 Q669 Q669 Q670 Q671 Q672 Q673 Q674 Q675 Q676 Q677 Q678 Q679 Q679 Q680 Q681 Q682 Q683 Q684 Q685 Q686 Q687 Q688 Q689 Q689 Q690 Q691 Q692 Q693 Q694 Q695 Q696 Q697 Q698 Q699 Q699 Q700 Q701 Q702 Q703 Q704 Q705 Q706 Q707 Q708 Q709 Q709 Q710 Q711 Q712 Q713 Q714 Q715 Q716 Q717 Q718 Q719 Q719 Q720 Q721 Q722 Q723 Q724 Q725 Q726 Q727 Q728 Q729 Q729 Q730 Q731 Q732 Q733 Q734 Q735 Q736 Q737 Q738 Q739 Q739 Q740 Q741 Q742 Q743 Q744 Q745 Q746 Q747 Q748 Q749 Q749 Q750 Q751 Q752 Q753 Q754 Q755 Q756 Q757 Q758 Q759 Q759 Q760 Q761 Q762 Q763 Q764 Q765 Q766 Q767 Q768 Q769 Q769 Q770 Q771 Q772 Q773 Q774 Q775 Q776 Q777 Q778 Q779 Q779 Q780 Q781 Q782 Q783 Q784 Q785 Q786 Q787 Q788 Q789 Q789 Q790 Q791 Q792 Q793 Q794 Q795 Q796 Q797 Q798 Q799 Q799 Q800 Q801 Q802 Q803 Q804 Q805 Q806 Q807 Q808 Q809 Q809 Q810 Q811 Q812 Q813 Q814 Q815 Q816 Q817 Q818 Q819 Q819 Q820 Q821 Q822 Q823 Q824 Q825 Q826 Q827 Q828 Q829 Q829 Q830 Q831 Q832 Q833 Q834 Q835 Q836 Q837 Q838 Q839 Q839 Q840 Q841 Q842 Q843 Q844 Q845 Q846 Q847 Q848 Q849 Q849 Q850 Q851 Q852 Q853 Q854 Q855 Q856 Q857 Q858 Q859 Q859 Q860 Q861 Q862 Q863 Q864 Q865 Q866 Q867 Q868 Q869 Q869 Q870 Q871 Q872 Q873 Q874 Q875 Q876 Q877 Q878 Q879 Q879 Q880 Q881 Q882 Q883 Q884 Q885 Q886 Q887 Q888 Q889 Q889 Q890 Q891 Q892 Q893 Q894 Q895 Q896 Q897 Q898 Q899 Q899 Q900 Q901 Q902 Q903 Q904 Q905 Q906 Q907 Q908 Q909 Q909 Q910 Q911 Q912 Q913 Q914 Q915 Q916 Q917 Q918 Q919 Q919 Q920 Q921 Q922 Q923 Q924 Q925 Q926 Q927 Q928 Q929 Q929 Q930 Q931 Q932 Q933 Q934 Q935 Q936 Q937 Q938 Q939 Q939 Q940 Q941 Q942 Q943 Q944 Q945 Q946 Q947 Q948 Q949 Q949 Q950 Q951 Q952 Q953 Q954 Q955 Q956 Q957 Q958 Q959 Q959 Q960 Q961 Q962 Q963 Q964 Q965 Q966 Q967 Q968 Q969 Q969 Q970 Q971 Q972 Q973 Q974 Q975 Q976 Q977 Q978 Q979 Q979 Q980 Q981 Q982 Q983 Q984 Q985 Q986 Q987 Q988 Q989 Q989 Q990 Q991 Q992 Q993 Q994 Q995 Q996 Q997 Q998 Q999 Q999 Q1000 Q1001 Q1002 Q1003 Q1004 Q1005 Q1006 Q1007 Q1008 Q1009 Q1009 Q1010 Q1011 Q1012 Q1013 Q1014 Q1015 Q1016 Q1017 Q1018 Q1019 Q1019 Q1020 Q1021 Q1022 Q1023 Q1024 Q1025 Q1026 Q1027 Q1028 Q1029 Q1029 Q1030 Q1031 Q1032 Q1033 Q1034 Q1035 Q1036 Q1037 Q1038 Q1039 Q1039 Q1040 Q1041 Q1042 Q1043 Q1044 Q1045 Q1046 Q1047 Q1048 Q1049 Q1049 Q1050 Q1051 Q1052 Q1053 Q1054 Q1055 Q1056 Q1057 Q1058 Q1059 Q1059 Q1060 Q1061 Q1062 Q1063 Q1064 Q1065 Q1066 Q1067 Q1068 Q1069 Q1069 Q1070 Q1071 Q1072 Q1073 Q1074 Q1075 Q1076 Q1077 Q1078 Q1079 Q1079 Q1080 Q1081 Q1082 Q1083 Q1084 Q1085 Q1086 Q1087 Q1088 Q1089 Q1089 Q1090 Q1091 Q1092 Q1093 Q1094 Q1095 Q1096 Q1097 Q1098 Q1099 Q1099 Q1100 Q1101 Q1102 Q1103 Q1104 Q1105 Q1106 Q1107 Q1108 Q1109 Q1109 Q1110 Q1111 Q1112 Q1113 Q1114 Q1115 Q1116 Q1117 Q1118 Q1119 Q1119 Q1120 Q1121 Q1122 Q1123 Q1124 Q1125 Q1126 Q1127 Q1128 Q1129 Q1129 Q1130 Q1131 Q1132 Q1133 Q1134 Q1135 Q1136 Q1137 Q1138 Q1139 Q1139 Q1140 Q1141 Q1142 Q1143 Q1144 Q1145 Q1146 Q1147 Q1148 Q1149 Q1149 Q1150 Q1151 Q1152 Q1153 Q1154 Q1155 Q1156 Q1157 Q1158 Q1159 Q1159 Q1160 Q1161 Q1162 Q1163 Q1164 Q1165 Q1166 Q1167 Q1168 Q1169 Q1169 Q1170 Q1171 Q1172 Q1173 Q1174 Q1175 Q1176 Q1177 Q1178 Q1179 Q1179 Q1180 Q1181 Q1182 Q1183 Q1184 Q1185 Q1186 Q1187 Q1188 Q1189 Q1189 Q1190 Q1191 Q1192 Q1193 Q1194 Q1195 Q1196 Q1197 Q1198 Q1199 Q1199 Q1200 Q1201 Q1202 Q1203 Q1204 Q1205 Q1206 Q1207 Q1208 Q1209 Q1209 Q1210 Q1211 Q1212 Q1213 Q1214 Q1215 Q1216 Q1217 Q1218 Q1219 Q1219 Q1220 Q1221 Q1222 Q1223 Q1224 Q1225 Q1226 Q1227 Q1228 Q1229 Q1229 Q1230 Q1231 Q1232 Q1233 Q1234 Q1235 Q1236 Q1237 Q1238 Q1239 Q1239 Q1240 Q1241 Q1242 Q1243 Q1244 Q1245 Q1246 Q1247 Q1248 Q1249 Q1249 Q1250 Q1251 Q1252 Q1253 Q1254 Q1255 Q1256 Q1257 Q1258 Q1259 Q1259 Q1260 Q1261 Q1262 Q1263 Q1264 Q1265 Q1266 Q1267 Q1268 Q1269 Q1269 Q1270 Q1271 Q1272 Q1273 Q1274 Q1275 Q1276 Q1277 Q1278 Q1279 Q1279 Q1280 Q1281 Q1282 Q1283 Q1284 Q1285 Q1286 Q1287 Q1288 Q1289 Q1289 Q1290 Q1291 Q1292 Q1293 Q1294 Q1295 Q1296 Q1297 Q1298 Q1299 Q1299 Q1300 Q1301 Q1302 Q1303 Q1304 Q1305 Q1306 Q1307 Q1308 Q1309 Q1309 Q1310 Q1311 Q1312 Q1313 Q1314 Q1315 Q1316 Q1317 Q1318 Q1319 Q1319 Q1320 Q1321 Q1322 Q1323 Q1324 Q1325 Q1326 Q1327 Q1328 Q1329 Q1329 Q1330 Q1331 Q1332 Q1333 Q1334 Q1335 Q1336 Q1337 Q1338 Q1339 Q1339 Q1340 Q1341 Q1342 Q1343 Q1344 Q1345 Q1346 Q1347 Q1348 Q1349 Q1349 Q1350 Q1351 Q1352 Q1353 Q1354 Q1355 Q1356 Q1357 Q1358 Q1359 Q1359 Q1360 Q1361 Q1362 Q1363 Q1364 Q1365 Q1366 Q1367 Q1368 Q1369 Q1369 Q1370 Q1371 Q1372 Q1373 Q1374 Q1375 Q1376 Q1377 Q1378 Q1379 Q1379 Q1380 Q1381 Q1382 Q1383 Q1384 Q1385 Q1386 Q1387 Q1388 Q1389 Q1389 Q1390 Q1391 Q1392 Q1393 Q1394 Q1395 Q1396 Q1397 Q1398 Q1399 Q1399 Q1400 Q1401 Q1402 Q1403 Q1404 Q1405 Q1406 Q1407 Q1408 Q1409 Q1409 Q1410 Q1411 Q1412 Q1413 Q1414 Q1415 Q1416 Q1417 Q1418 Q1419 Q1419 Q1420 Q1421 Q1422 Q1423 Q1424 Q1425 Q1426 Q1427 Q1428 Q1429 Q1429 Q1430 Q1431 Q1432 Q1433 Q1434 Q1435 Q1436 Q1437 Q1438 Q1439 Q1439 Q1440 Q1441 Q1442 Q1443 Q1444 Q1445 Q1446 Q1447 Q1448 Q1449 Q1449 Q1450 Q1451 Q1452 Q1453 Q1454 Q1455 Q1456 Q1457 Q1458 Q1459 Q1459 Q1460 Q1461 Q1462 Q1463 Q1464 Q1465 Q1466 Q1467 Q1468 Q1469 Q1469 Q1470 Q1471 Q1472 Q1473 Q1474 Q1475 Q1476 Q1477 Q1478 Q1479 Q1479 Q1480 Q1481 Q1482 Q1483 Q1484 Q1485 Q1486 Q1487 Q1488 Q1489 Q1489 Q1490 Q1491 Q1492 Q1493 Q1494 Q1495 Q1496 Q1497 Q1498 Q1499 Q1499 Q1500 Q1501 Q1502 Q1503 Q1504 Q1505 Q1506 Q1507 Q1508 Q1509 Q1509 Q1510 Q1511 Q1512 Q1513 Q1514 Q1515 Q1516 Q1517 Q1518 Q1519 Q1519 Q1520 Q1521 Q1522 Q1523 Q1524 Q1525 Q1526 Q1527 Q1528 Q1529 Q1529 Q1530 Q1531 Q1532 Q1533 Q1534 Q1535 Q1536 Q1537 Q1538 Q1539 Q1539 Q1540 Q1541 Q1542 Q1543 Q1544 Q1545 Q1546 Q1547 Q1548 Q1549 Q1549 Q1550 Q1551 Q1552 Q1553 Q1554 Q1555 Q1556 Q1557 Q1558 Q1559 Q1559 Q1560 Q1561 Q1562 Q1563 Q1564 Q1565 Q1566 Q1567 Q1568 Q1569 Q1569 Q1570 Q1571 Q1572 Q1573 Q1574 Q1575 Q1576 Q1577 Q1578 Q1579 Q1579 Q1580 Q1581 Q1582 Q1583 Q1584 Q1585 Q1586 Q1587 Q1588 Q1589 Q1589 Q1590 Q1591 Q1592 Q1593 Q1594 Q1595 Q1596 Q1597 Q1598 Q1599 Q1599 Q1600 Q1601 Q1602 Q1603 Q1604 Q1605 Q1606 Q1607 Q1608 Q1609 Q1609 Q1610 Q1611 Q1612 Q1613 Q1614 Q1615 Q1616 Q1617 Q1618 Q1619 Q1619 Q1620 Q1621 Q1622 Q1623 Q1624 Q1625 Q1626 Q1627 Q1628 Q1629 Q1629 Q1630 Q1631 Q1632 Q1633 Q1634 Q1635 Q1636 Q1637 Q1638 Q1639 Q1639 Q1640 Q1641 Q1642 Q1643 Q1644 Q1645 Q1646 Q1647 Q1648 Q1649 Q1649 Q1650 Q1651 Q1652 Q1653 Q1654 Q1655 Q1656 Q1657 Q1658 Q1659 Q1659 Q1660 Q1661 Q1662 Q1663 Q1664 Q1665 Q1666 Q1667 Q1668 Q1669 Q1669 Q1670 Q1671 Q1672 Q1673 Q1674 Q1675 Q1676 Q1677 Q1678 Q1679 Q1679 Q1680 Q1681 Q1682 Q1683 Q1684 Q1685 Q1686 Q1687 Q1688 Q1689 Q16

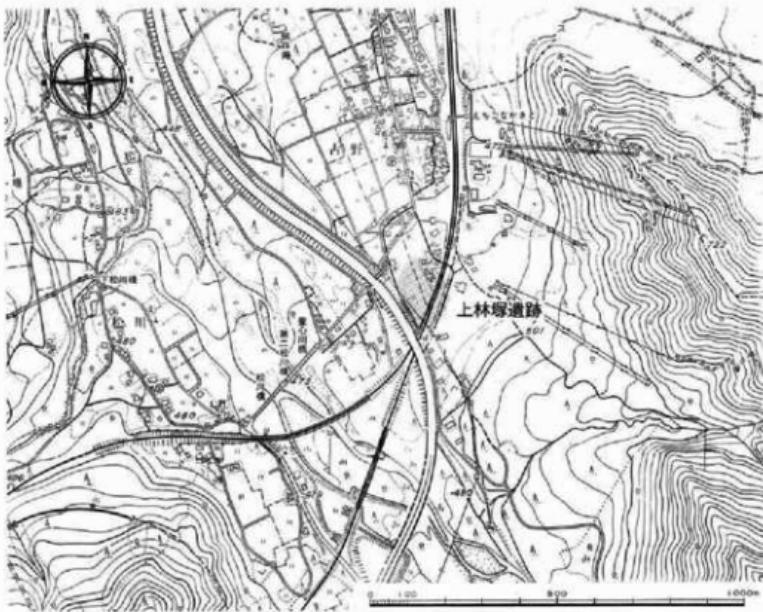
第IV章 上林塚遺跡

1. 調査の概要

上林塚遺跡は柄沢山(標高934m)から西へ流れ出す沢によって形成された、小規模な扇状地の扇端部に位置(第71図)し、西側は比高差3m前後の河岸段丘崖となっている。標高は約480mを測り、北西に向かって緩く傾斜している。過去に打製石斧や剣片などが表面採集されており、昭和54年の分布調査(県教委)では南北200m、東西80mにもおよぶ広い範囲で遺物の散布が認められ、その中でも今回の調査地点周辺でやや濃密なことが確認された。

A. 試掘調査(第73図)

試掘調査は遺跡の規模や内容を把握して本調査の積算資料を得ることを目的に、昭和56年11月10日～13日の延べ4日間にわたって実施された。試掘坑は基本的に 2×2 mとし、道路法線



第71図 上林塚遺跡周辺の地形図

南沢町役場作成 柄沢都市計画地図

1:10,000 昭和57年12月測定

内の任意の位置に計15ヶ所を設定して人力によって掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。また、遺構が検出されたものについては、適宜拡張してその規模などを把握することとした。最終的な試掘面積の総計は93.5m²で、対象地の8.5%にある。遺物は数量的には少ないがすべての試掘坑から土器片や石器類が出土し、その割合は1:5で石器類の多さが目に付いた。遺構は10Gの表土下15~20cmのII層黒褐色土中で配石が検出されたほかは、2Gで直径120cmの土坑が確認されたのみであるが、時期や性格などは不明である。この結果、約1,100m²について本調査が必要と判断された。なお、試掘坑は調査終了後にすべて埋め戻しを行った。

B. グリッドの設定(第73図)

先述のように本遺跡は北西に向かって緩く傾斜しており、調査対象地も傾斜方向に長いことを考え合わせると、調査グリッドは方位に合わせないほうが効率的な調査が可能であると考えられた。このため、北西から南東へ延びる道路法線のセンター杭No.59とNo.59+60から、ほぼ直角方向(東側)にある法線幅杭二本を結んだ線を基線としてグリッドを設定した。大グリッドは一辺10m四方とし、東西方向を西からA~Dとアルファベットで、また南北方向は北から1・2……7・8と算用数字で表わし、両者の組み合わせによって表示した。各大グリッドはさらに2m方眼の小グリッド25個に分割して、それぞれ「B5-8」「C2-25」のように呼称することとした。なお、現場での基準杭の打設および杭頂の標高算出は、測量業者に委託し6月4日までに完了している。

C. 調査の経過

上林塚遺跡の発掘調査は現地での事前準備から残務整理まで含めると、昭和56年6月4日~7月7日までの延べ27日間を費やしたことになる。この間、調査員は常時三名が専従して調査にあたり、作業員は一日平均20名前後を投入している。

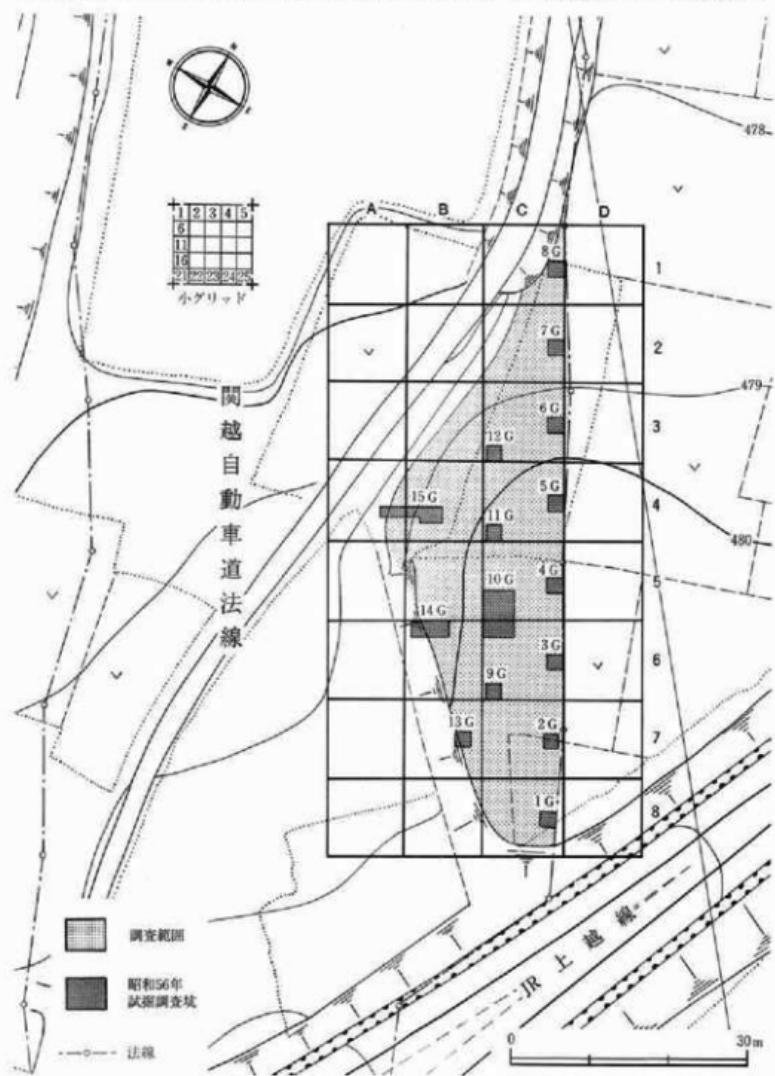
6月4日、現場事務所用のプレハブ建設に立ち合った後、公团六日町工事事務所および湯沢町教育委員会に調査開始の挨拶を行う。実質的な発掘作業は6月6日から着手したが、昭和56



第72図 調査風景

1. 調査の概要

年の試掘調査の結果を踏まえて、まず表土下10—15cmの黒褐色土上面までを排土し、配石の有無を確認することにした。その結果、B・Cの5・6区を中心とする範囲で縦の分布が認められ、配石もこの地区にのみ存在することが明らかとなった。そこで他地区については、統けて



第73図 上林塚遺跡グリッド設定図 日本道路公团新潟建設局 大村町工事事務所作成
1:500 昭和56年6月調査

II・III層を掘り下げて地山面で遺構を検出することとし、礫および配石の調査と並行して作業を行った。単独出土の礫については、全点の位置とレベルを記録した後に取り上げた。また、配石は最終的には17基確認されたが、このうちの11基については下部に土坑を伴っていることが判明し、これらの調査に手間取り6月27日によく配石の調査を終了している。このほか地山面で検出された遺構としては、溝状土坑1基、性格不明な土坑十数基などがある。

遺物はおもにII層中から出土しており、遺構内出土のものは数えるほどであった。出土地域を見ると土器・石器類とともにC4～6区を中心にかなり濃密に分布しており、そこから周間に向かうほど少くなる傾向が見られた。土器の時期を見ると縄文時代早期の押型文系土器・沈線文系土器が主体で、他時期のものは皆無に等しい。また、土器に比べて石器類の出土が非常に多いことは、試掘調査の結果と一致している。

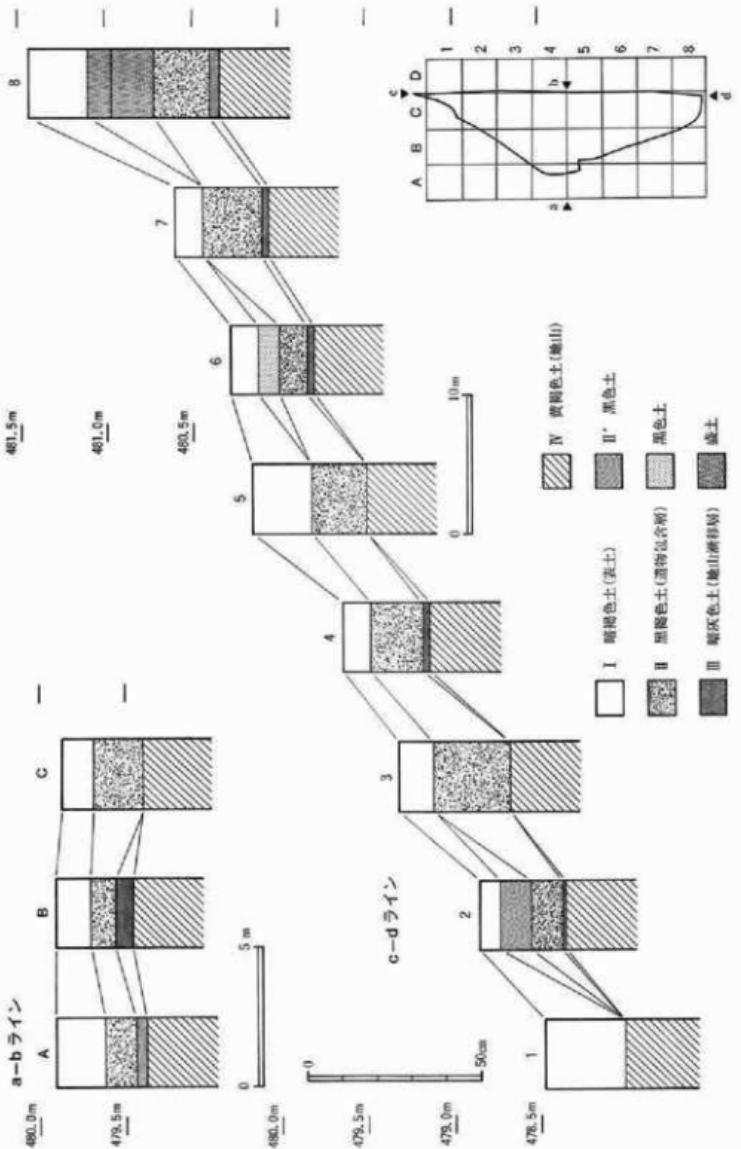
6月下旬頃から雨の日が多くなり、調査の遅れが目立ち始めた。7月4日によく遺構平面実測と完掘写真を撮影し、その後旧石器時代文化層の確認を行って、最終的には当初の予定より一週間遅れの7月7日に全作業を終了した。なお、最終調査面積は1,080m²であった。

2. 層序(第74図)

本遺跡の現況は荒地であり、公団の買収以前は長年畠地として利用されていたことから、かなりの擾乱を受けているものと予想された。しかし、実際には部分的な擾乱坑を除いて良好な遺物包含層の堆積が、調査区のはば全域で確認された。調査地点の傾斜は北へ向かって4%前後の勾配率で下っており、層序もほぼこの傾斜に一致している。また、西側は既に高速道路の盛土がなされており詳細不明であるが、C1～C8へ大きくカーブする調査区の西端で一様に土層の落ち込みが確認されており、小規模な段丘によって遺跡は限られているものであろう。

基本的な層序は以下のとおりである。

- I層：上部に草根を多く含む旧耕作土である。
 - II層：非常に綺まりが良く緻密である。微細ローム粒をごく少量含むが、ほかの混入物はほとんど見られない。縄文時代早期の遺物を包含する層で、平均層厚は13cmである。
 - III層：やや粘質を帯びており、2～3cmの厚さで部分的に存在する。いわゆる地山漸移層で、層下部には黄色バミスを比較的多く混入する。
 - IV層：本遺跡の地山となる土層で、III層との境界近くに黄色バミスを多く含み、下位と分層される可能性もあるが明確ではない。
- なお、III・IV層で見られた黄色バミスは、直線距離で約2km離れた萩原B遺跡〔佐藤1987〕でローム層上面から検出された浅間一草津黄色輕石(YPK)層に類似しており、これに対比される可能性が強い。



第74图 上林渠道路土壤柱状图

3. 遺構(第75図)

上林塚遺跡で検出された遺構は配石17基、土坑30基、風倒木痕7基などであり、発掘調査区のは全域に散在していた。時期的には遺構内からの出土遺物が極めて少ないと確証はないが、包含層出土の土器を見ると縄文時代早期中葉に属すると思われるものが中心で、それ以外の時期のものが皆無に等しいことを考えると、風倒木痕を除いた大半のものはほぼこの時期と考えて大過ないであろう。

A. 配 石(第76図)

C5区を中心とした比較的狭い範囲から17基が検出されており、このうちの11基では配石下に土坑が確認されている。配石検出面は表土下15~20cmのII層黒褐色土中で、地山面より10cm前後浮いている状態のものが多い。また、周囲には同レベルで大形扁平礫が単独で散在的に出土している。配石の規模は様々であり、構成する礫を見ると大形扁平な河原石を利用しているものが大半を占める。しかし、1・2・17号配石は小形の割石の混入する率が極めて高く、いずれも火熱を受けていることが確認されているが、ほかの14基は火熱を受けた様子は認められなかった。検出された位置を見ると火熱を受けたものは3基とも配石集中区から離れており、下部に明確な土坑を伴わない点でも共通性が認められることから、他の14基とは性格を異なる可能性が強い。

出土遺物については6号配石下の土坑内から、縄文時代早期の押型文系土器片が1点検出されたほか、配石を構成する礫の中に早期の石器として



第75図 上林塚遺跡遺構全測図

認識される特殊磨石や台石が、比較的多く混入している点で注目される。なお、配石集中区は遺物が最も濃密に分布する範囲とほぼ重なっており、配石周囲の黒褐色土中からは早期の遺物が多く検出されているが、直接配石に伴うものとは考えられない。調査時点では中世以降の埋葬施設(墓)¹⁾とも考えられたが、配石の構築レベルが早期の遺物包含層中であることや、配石を構成する礫に特殊磨石や台石が多用されていること、覆土中に黄色バミスを混入するものが認められることなどから、むしろ縄文時代早期の所産とした方が理解し易い条件が揃っているようと思われる。また、機能的には現時点では不明といわざるをえないが、6号配石に見られるように、下部に大形の土坑を伴っている点や配石が中央部でくばんでいるものがあることなどから、埋葬に係わる施設の可能性が考えられる。

以下、各配石について概略を説明する。

1号配石(第77図、図版44) C 6-18区の中央南寄りに位置し、配石の規模は長軸158cm、短軸118cmを測り、地山面より5~6cm浮いた状態で構築されていた。下部から土坑は検出されていない。配石を構成する礫は長径30cm前後の扁平な河原石から、4~5cmの小礫(割石を含む)まで様々なものが見られるが、いずれも火熱を受けている。しかし、配石下や礫間に焼土・炭化物などが認められず、この場で火を焚いたものとは考えにくい状況であった。出土遺物は配石を構成する礫の中に、二次利用と思われる特殊磨石(61)と台石がそれぞれ1点ずつ確認されている。

2号配石(第77図) 1号配石の1.6m南(C 6-22区)で検出されたもので、規模は長軸76cm、短軸44cmと比較的小形の配石であり、下部から土坑は検出されていない。1号配石と同様に小形の割石を多く含み礫はいずれも火熱を受けているが、やはり焼土や炭化物は認められなかった。遺物は出土していない。

3号配石(第77図) 配石集中区の南端(C 6-2区)に位置し、長軸150cm、短軸88cmを測る。配石を構成する礫は長径25cm以上と比較的大形であるが、その配置はまばらで複数の配石に分かれる可能性も考えられる。下部に土坑は検出されておらず、礫の火熱も認められなかった。出土遺物は見られない。

4号配石(第77図) 3号配石の北側(C 5-22・23区)に隣接して検出されたもので、配石の規模は長軸104cm、短軸44cmを測る。地山面から約8cm浮いた状態で構築されており、礫はいずれも火熱を受けていない。配石下の土坑は中央に径約40cm、深さ約30cmの円形土坑が確認された。覆土は黒灰色を呈して非常に硬く締まった単層で、径5~8mmの炭化物粒とローム粒を混入す

1) 上林塚遺跡の所在する湯沢町土樽地区では、近年まで墓石として類似の配石を構築していたという(池田亨氏の御教示)。

2) 縄文時代後・晩期の配石遺構を多数検出した中郷村龍峰道路(中島ほか1987)では、土坑内の埋葬物の腐壊により配石が土坑内に落ち込んだものと考えている。

るが、遺物の出土は認められなかった。

5号配石(第77図、図版44) 4号配石の北(C5-22・23区)に位置し、配石の規模は長軸94cm、短軸84cmを測る。様々な大きさの砾で構成されているが、火熱を受けた痕跡は認められない。配石下には長径95cm、短径78cm、深さ18cmの楕円形土坑が確認され、砾の一部は土坑内に落ち込んでいる。土坑覆土は良く練まった暗褐色土の単一層で、微細ローム粒・炭化物粒を少量含む。土坑内での出土遺物は見られなかつたが、配石を構成する砾の中から特殊磨石が1点検出された。

6号配石(第77図、図版44) C5-22区で検出されたもので、配石の規模は長軸158cm、短軸86cmを測り、比較的大形の扁平楕円形砾で構成されている。配石下には長径154cm、短径98cm、深さ約30cmで、南側の壁際に一段のテラスを有する土坑が検出された。配石は扁平な部分を上にして敷かれたように配置されているが、土坑中央部で落ち込んだようにくぼんでいる。土坑覆土は底部付近に黄色バミスを少量含んだ暗褐色土が薄く堆積しているが、以上は微細ローム粒・炭化物粒をごく少量含んだ練まりの良い黒褐色土の単一層である。出土遺物はこの黒褐色土中より継続施文の山形押型文土器片(47)が1点検出されたほか、配石を構成する砾の中に台石が1点と、砾間から使用痕のある剝片が1点出土している。

7号配石(第78図) C5-21区で検出されたもので、配石の規模は長軸71cm、短軸62cmを測る。配石下には径約45cm、深さ34cmの円形土坑が確認されたが、砾は土坑確認面から8-15cm浮いた状態で土坑内部に立て巡らすように組まれていた。覆土は硬く練まった黒褐色土の単一層で、黄色バミスを少量混入する。土坑内からの出土遺物は見られないと、配石を構成する砾の中に台石が1点認められた。

8号配石(第78図、図版44) 配石集中区のはば中央(C5-17区)に位置し、配石の規模は長軸104cm、短軸78cmを測る。配石南寄りの下部には径約60cm、深さ14cmの円形土坑が確認され、砾はこれを覆うように扁平面を上にして構築されている。土坑覆土は硬く練まった暗褐色土で、黄色バミスを少量含んでいる。土坑内からの出土遺物は見られないと、配石を構成する砾に4点の台石と1点の戴石が含まれる。

9号配石(第78図、図版45) 8号配石の北(C5-17区)に隣接して検出されたもので、配石の規模は長軸85cm、短軸55cmである。10号配石との境は明確ではないが、下部で確認された土坑によって分けた(切り合ひ関係は不明)。土坑は長径96cm、短径43cm、深さ16cmの不整楕円形で、硬く練まった黒褐色土を覆土とする。出土遺物は見られない。

10号配石(第78図、図版45) 9号配石の西(C5-12区)に位置し、南北120cm、東西100cmの範囲に砾が散在しているため配石としてのまとまりは弱い。下部には2基の土坑が検出されているが、覆土はいずれも黒褐色土の単層で切り合ひ関係は不明である。配石と土坑が本当に伴うもののか疑問が残る。土坑内からの出土遺物はないが、配石を構成する砾に台石が1点含まれてい

た。

11号配石(第78図、国版45) C5-11区で検出されたもので、径52cm、深さ37cmの円形土坑内に食い込むように立て巡らされていた。土坑内の覆土は大きくは上層(黒褐色土)と下層(暗褐色土)に分けられ、いずれも良く縮まって黄色バミス・炭化物粒を含む。土坑内からの出土遺物は見られないが、配石を構成する礫に台石が1点含まれる。

12号配石(第79図、国版45) 14号配石の北(C5-12区)に隣接するもので、大半の礫は土坑内の東半分で坑底から5~6cm浮いた状態で検出されている。土坑の規模は径約80cm、深さ24cmで不整楕円形を呈する。覆土は縮まりの良い黒褐色土の單層で、微細ローム粒・炭化物粒を中量含むが遺物の出土は見られない。

13号配石(第79図、国版45) 配石集中区の北端(C5-13区)に位置し、配石の規模は長軸69cm、短軸61cmを測る。いずれも大形扁平礫を使って、地山面から8cm前後浮いた状態で中央に扁平面を上にして1個配置し、周囲に4個斜めに立て巡らす。下部から土坑は検出されていない。出土遺物は配石内部の覆土から早期燃系文系土器の口縁部片が1点出土しているほか、配石を構成する礫に台石が2点認められた。

14号配石(第76図) C5-12・17区で検出されたもので、長さ約3mに渡って大形扁平礫を一列に組んでおり、配石の北半と南半では礫の傾きが逆になっている。複数(2基か)の配石に分けられる可能性もあるが、確証はないのでここでは1基として報告する。下部から土坑は検出されておらず、遺物の出土も見られない。

15号配石(第79図) 配石集中区の南西約3.6m(B6-9・10区)に位置し、配石の規模は長軸64cm、短軸44cmを測る小形のものである。礫の垂直分布を見ると上下で20cm前後の幅があり、レベル的にまとまっている。下部に土坑は検出されておらず、出土遺物も検出されなかった。

16号配石(第79図、国版46) B5-18区に位置し、長径128cm、短径101cmの不整楕円形土坑内に坑底から9cm前後浮いた状態で組まれていたものである。礫はいずれも大形扁平なものを使用しており、北に開く「コ」の字状を呈する。土坑は深さ22cmであるが、坑底の中央に長径40cm、短径33cm、深さ6cmの楕円形の落ち込みが見られた。覆土は硬く縮まった黒灰色で、ロームブロックを少量含む。土坑内からの出土遺物はないが、配石を構成する礫に台石が1点含まれていた。

17号配石(第79図、国版46) 16号配石の北側約1.6m(B5-14区)に位置し、規模は長軸160cm、短軸96cmと比較的大形の配石である。礫は5cm前後から40cmと大小様々なものが見られ、1・2号配石と同様の状況を示す。また、割石が多いのも特徴で、すべての礫は火熱を受けている。下部の土坑は北西寄りで配石にわずかにかかるように検出されており、径約92cm、深さ23cmを測る。また、土坑北壁寄りの坑底には、深さ10cm前後の小ピットが2基検出された。覆土は黒褐色を呈する縮まりの良い土で、ロームブロックを多量に混入する。土坑内からの出土遺物は

見られないが、配石中で蝶器 1 点と接合により完形に復した台石が 1 点検出された。本配石はほかに比べて土坑との重なりが弱く、直接伴わない可能性が高い。

B. 土 坑(第75図)

土坑は調査区全域で 29 基検出されているが、この中には径 20~30cm で深さ 30~40cm のピット状のものも含んでいる。先述のように土坑内からの出土遺物は少なく、所属時期については明確ではないが、27 号土坑を除いて概ね早期の枠内で考えても差し支えないであろう。ここでは代表的なものについて、概要を説明する。

1号土坑(第80図、図版46) 調査区北端(C 2-8・9 区)で、西側の崖の落ち際に位置している。長径 192cm、短径 118cm、深さ 25cm の不整椭円形を呈し、坑底の中央部は一段低くなっている。調査段階では 2 基の重複とも思われたが、覆土の観察でも区切ることはできず不明である。遺物は検出されなかった。

2号土坑(第80図、図版46) C 2-15・20 区で検出されたもので、径約 110cm、深さ 76cm の円形土坑である。壁は底部付近でわずかにオーバーハングするが、いわゆるフ拉斯コ状土坑ではない。覆土は五層に分けられるが、1 層以外はローム系土もしくはローム粒を多く含む層で、壁と地山の境は明瞭ではなかった。また、2~4 層中には黄色バミスを多量に混入するが、これは埋没していく段階で土坑周囲の II・III 層が流れ込んだものであろう。遺物は 1 层中から 2 点の剥片が出土している。

4号土坑(第80図、図版46) B 4-5 区に位置し、規模は長径 171cm、短径 96cm、深さ 28cm の不整長方形を呈する土坑である。覆土は三層に分けられ自然堆積を示すが、最下層にはローム系土の堆積が見られる。遺物は出土していない。

5号土坑(第80図、図版46) B 4-14 区で検出されたもので、平面形は径約 150cm の不整円形を呈する。深さは北側で最も深く 40cm を測るが、坑底は凹凸が激しく一様ではない。覆土は四層に分けられ、4 号土坑と同様に最下層でローム系土の堆積が認められる。遺物は出土していない。

13号土坑(第80図、図版47) 配石集中区の南(C 6-6・7 区)に隣接して検出されたもので、平面形は長径 144cm、短径 111cm の不整椭円形を呈するが、土層の切り合いを見ると 2 基重複しているものと考えられる。深さは北側が 86cm、南側が 24cm で 6 層を覆土とする方が新しい。出土遺物は 6 層中より剥片が 1 点検出されている。

14号土坑(第80図、図版46) C 6-14・15 区に位置するもので、長径 64cm、短径 52cm、深さ 20cm の比較的小形の椭円形土坑である。覆土は三層に分けられ、最下層にはローム系土の堆積が認められる。遺物の出土は見られない。

17号土坑(第80図、図版47) C 7-10・15 区に位置するもので、規模は長径 143cm、短径 106cm、

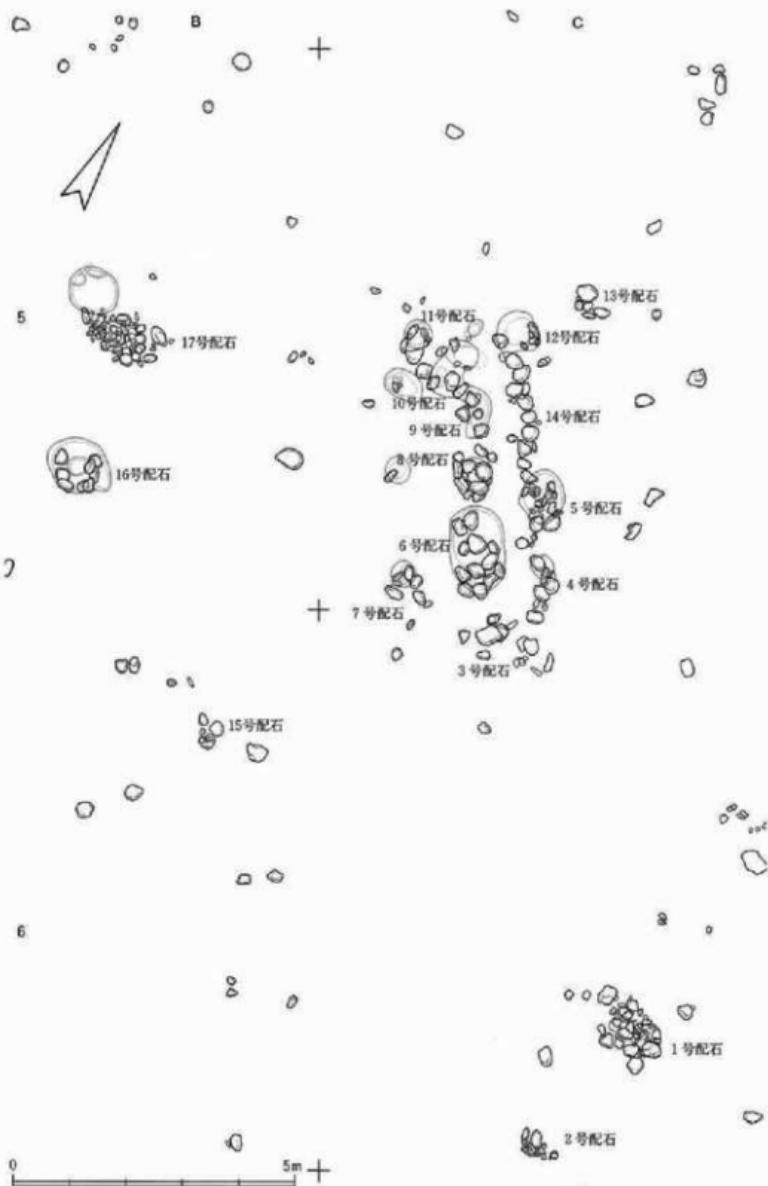
深さ88cmの指円形土坑である。覆土は九層に分けられるが、いずれも黒色系土の堆積であった。

1層中より使用痕のある剝片が1点出土している。

21号土坑(第80図、図版47) C7-23区に位置し、平面形は不整指円形を呈する。規模は長径93cm、短径75cm、深さ21cmを測るが、底面は凹凸が著しい。覆土は五層に分けられ、2・3層中に黄色バミスを多量に混入している。出土遺物は見られない。

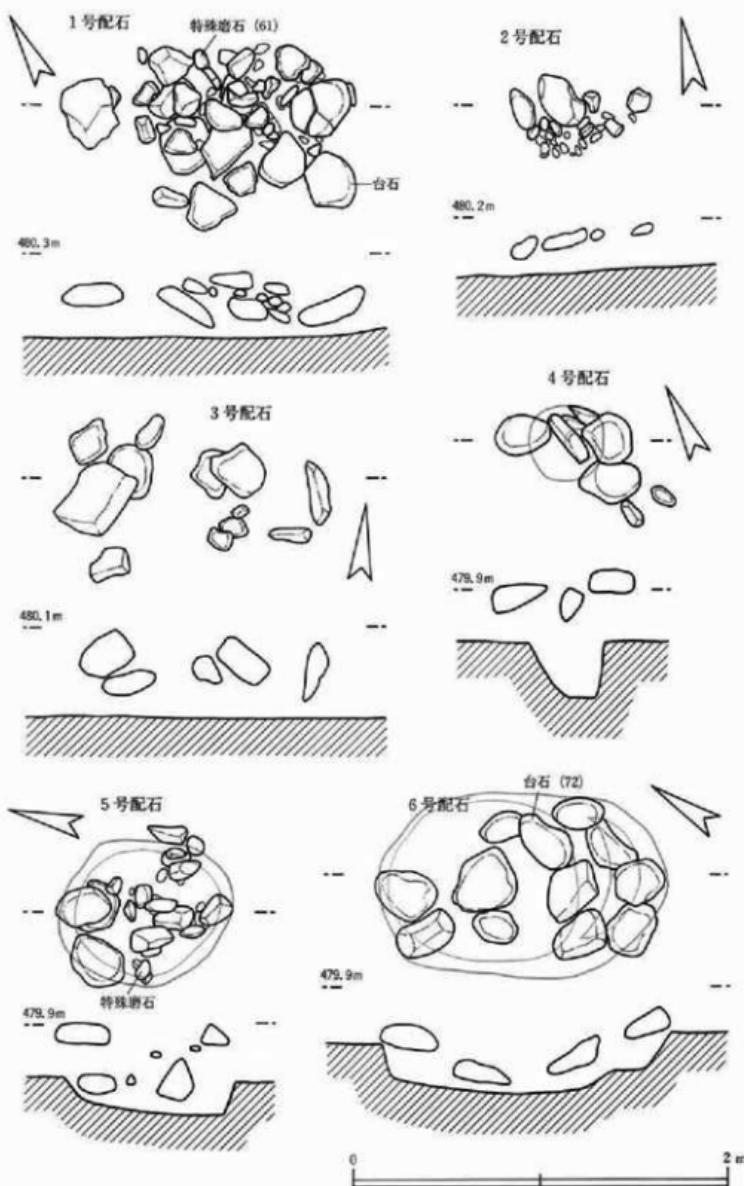
23号土坑(第80図、図版47) 調査区の南端(C8-3・8区)で検出されたもので、南側は木根による搅乱を受けて掘り形が明確ではない。平面形は指円形を呈するものと思われ、規模は長径120cm(推定)、短径81cm、深さ26cmを測る。坑底は北から南に向かって傾斜しており、わずかな凹凸を持っている。覆土は三層に分けられるが、ローム系埋土(3層)には黄色バミスを多量に含む。出土遺物は見られない。

27号土坑(第80図、図版47) C2-18・23区で検出されたもので、規模は長径365cm、短径39cm、深さ63cmを測り溝状を呈する土坑である。坑底は平坦で、小ピットなどの施設は認められなかった。遺物は検出されていない。從来から溝状土坑やTピットなどと呼ばれてきたもので、県内では板倉町峯山B遺跡〔秦ほか1986〕や塩沢町五丁歩遺跡〔新潟県教育庁文化行政課1985〕などで多数検出されている。いずれも他遺構との切り合い関係などで、縄文時代中期前葉以降の年代が与えられているが、本遺跡では明確でない。一般的には陥穴と考えられているが、このタイプの土坑は単独で機能するとは考えられず、調査区東側(法線外)で列を成して存在する可能性が高い。なお、陥穴については第V章に詳しいので参照願いたい。

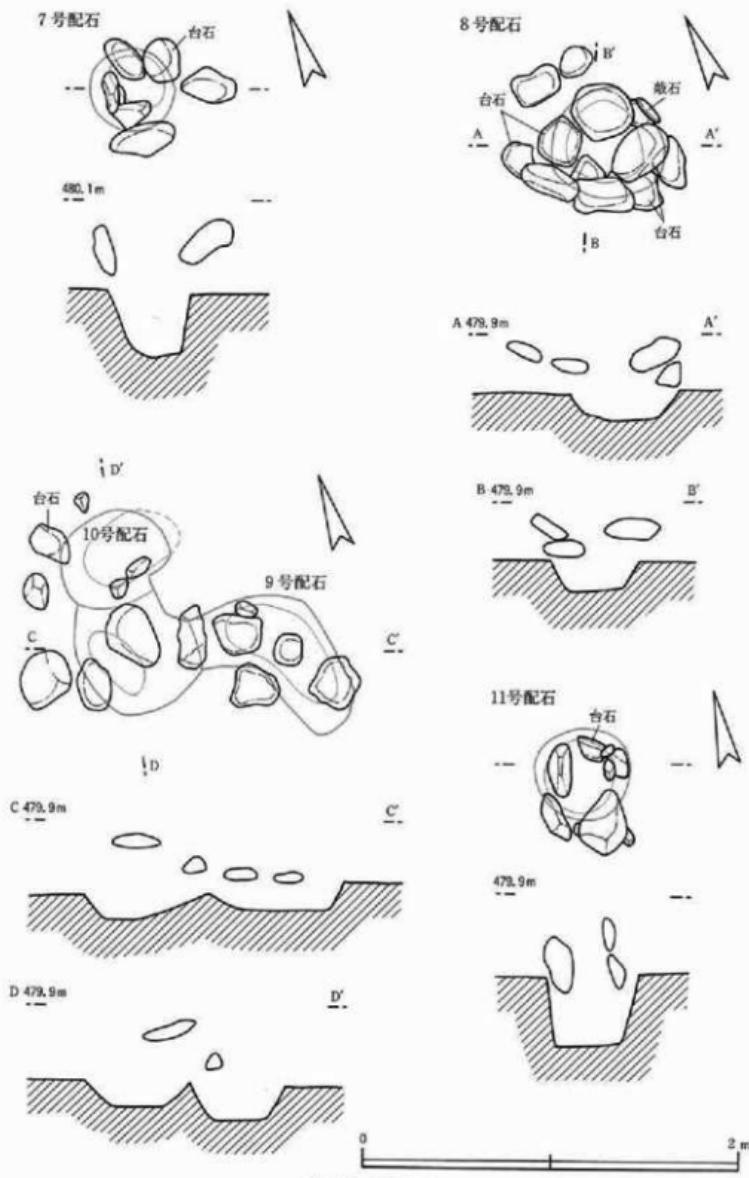


第76圖 配石集中区実測図

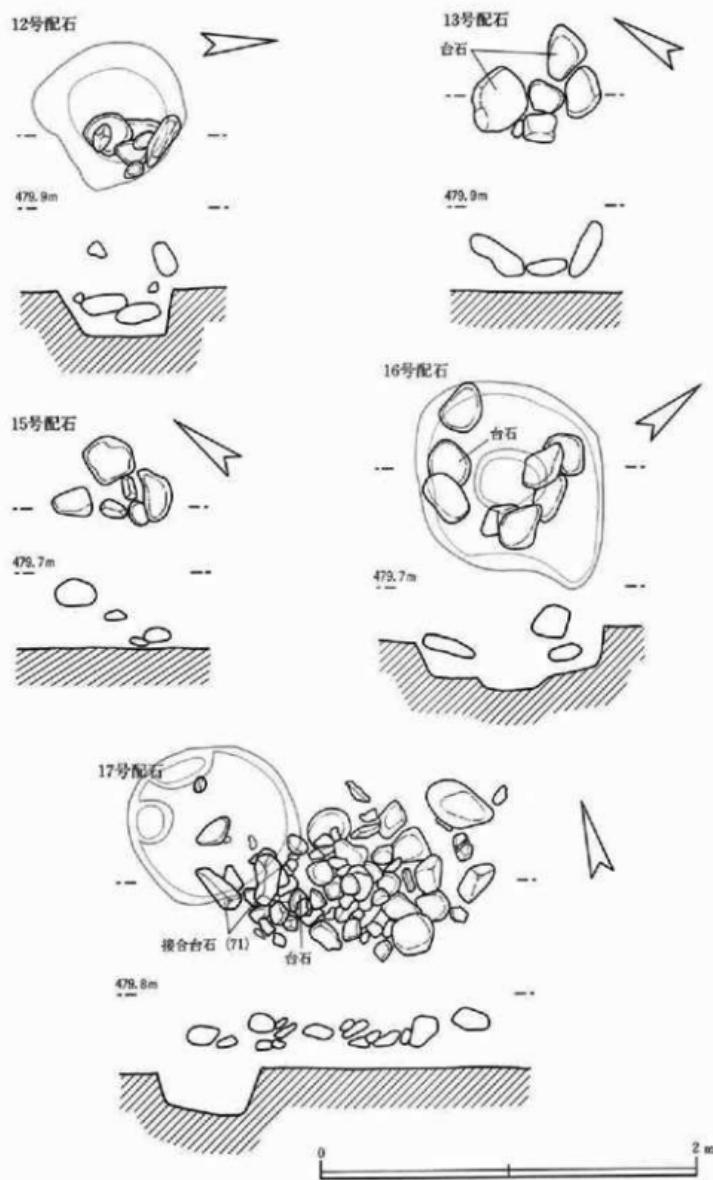
3. 造構



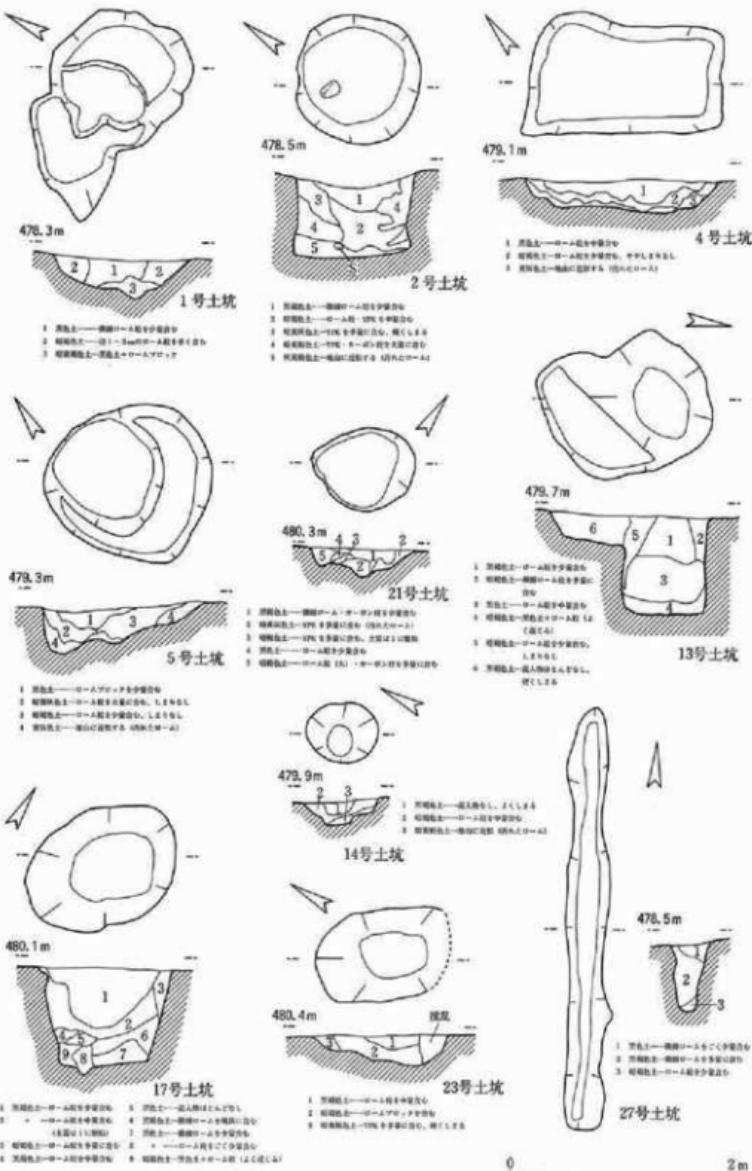
第77圖 配石(1)



第78圖 配石(2)



第79圖 配石(3)



第80図 土 坑

4. 遺 物

上林塚遺跡で検出された遺物は、土器・石器・剝片を含めて総数1,807点である。時期的には土器を見ると縄文時代早期前半から中葉に限定され、石器に関しては概ね同一時期と考えて差し支えないものと思われる。出土状況は土坑や配石などの遺構に伴うものは数えるほどで、大半は II 層(遺物包含層)中からの出土であった。また、平面的な分布状況は第82図に示したとおりであるが、これを見ると土器・石器類とともに C5 区を中心に比較的濃密に分布し、この部分から周間に向かって減少する傾向が認められる。

A. 土 器(第83~85図、図版48~51)

縄文時代早期に属するもので総数440点出土しているが、の中には文様の判別が不可能な微細・磨耗片101点も含まれる。いずれも中・小破片となっているものが大部分で、全体の器形や文様構成が判明するものは少ない。分類に際しては表出される主要な文様要素によって大別し、それぞれ必要に応じてさらに細分した。

各群の概要は以下のとおりである。

第 I 群土器……早期前半の撫糸文系土器(岩原 I 遺跡の第 I 群 1 類土器)

第 II 群土器……早期前半の押型文系土器(岩原 I 遺跡の第 I 群 2 類土器)

第 III 群土器……早期中葉の沈線文系土器(岩原 I 遺跡の第 II 群土器)

第 IV 群土器……早期の無文土器

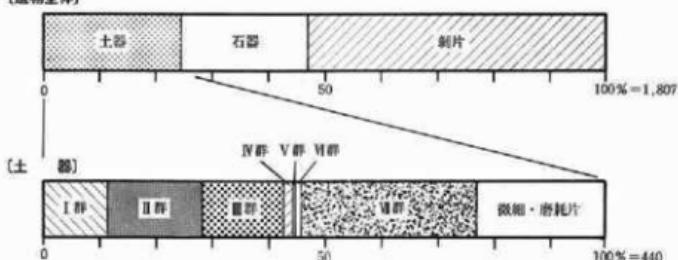
第 V 群土器……早期後葉の条痕文系土器(岩原 I 遺跡の第 III 群土器)

第 VI 群土器……底部(尖底)

第 VII 群土器……その他の土器

なお、各群別の出土割合を第81図に示したが、その他の土器(第 VII 群土器)として分類した

[遺物全体]



第81図 出土遺物の内訳および各群土器の構成比

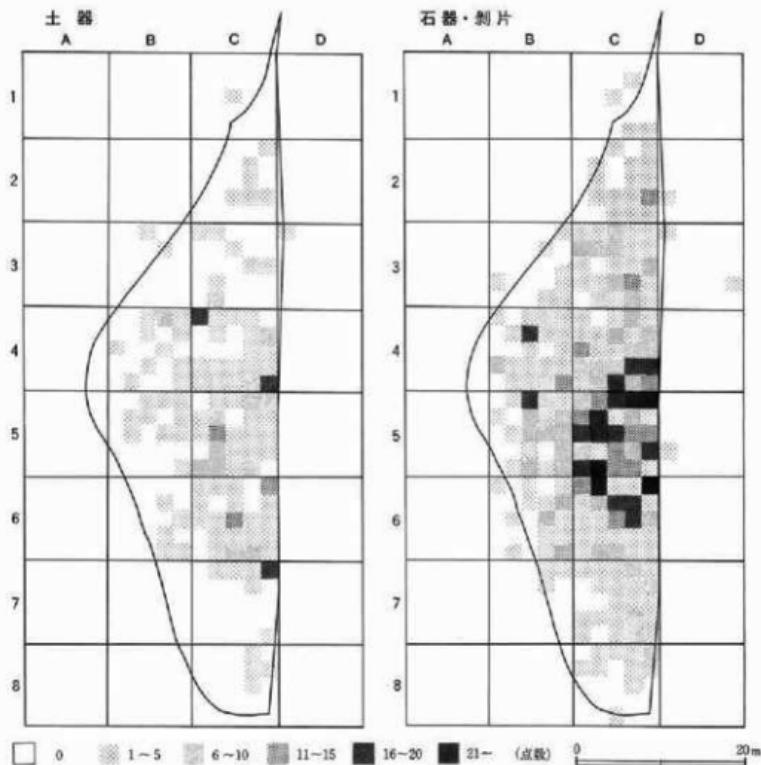
ものは無文の胴部片であり、大半は胎土・色調などから第III群土器の胴部片と考えられるが、明確に判断しえないものも多くここでは第III群に含めずに一括した。

1) 第I群土器(第83図、図版48)

早期前半の撚糸文系土器を一括して本群とする。出土総数は50点で、土器全体に占める割合は11.4%である。本群はさらに撚糸文を施文するもの(1類)と、縄文を施文するもの(2類)に分けられる。

第I群1類土器(1~4)

撚糸文を施文するもので図示した4点がすべてであるが、それぞれ異なる特徴を有する。1は撚糸文(R)が器面に対して横走するもので、器厚は約10mmとやや厚手である。胎土は緻密で白色細砂粒・黒雲母片を含み、焼成は良好である。外面暗褐色で内面は暗黄褐色を呈し、外面には炭化物の付着が認められる。また、内外面ともに比較的丁寧なナデが施され、撚糸が消さ



第83図 上林塚遺跡遺物分布図

れている部分もある。一回の施文(回転)距離は2cm前後と、比較的短いようである。横走する撫糸は、関東地方南部に分布する大浦山式土器に特徴的なもので、撫糸文末期に位置付けられるものである。2は条間隔のまばらな撫糸(L)を縱位に施したもので、器厚が13mmと厚く、内面の湾曲から考えて底部付近の破片と思われる。胎土には微細砂粒を多く含み、外面は黄褐色で内面暗黄褐色を呈する。内面には丁寧なナデ調整が施される。権荷台式土器に対比されるものであろう。3は条間が広い撫糸(R)を縱位に施したもので、条は太くて深い。胎土には微細な白色砂粒・石英粒を多く含み、外面黄褐色、内面暗黄褐色を呈する。器厚は9mmを測り、外面には炭化物の付着が著しい。4は器厚6mmとほかに比べて薄く、内外面ともに暗褐色を呈するものである。胎土には砂粒を多く含み、焼成やや不良である。文様は極めて細かい撫糸(L)を縱位に施したもので、これと斜めに交差するように条痕のようなものがかすかに認められるが詳細は不明である。外面にはわずかに炭化物の付着が認められる。

第1群2類土器(5~33)

縄文を施文するもので、計46点が出土している。胎土に白色細砂粒・石英粒・長石粒を含むものが多く、焼成が比較的良好な点を除いては共通する特徴は認められない。色調は灰褐色・褐色・暗褐色の三グループに分けられるほか、器厚にも6~12mmとばらつきが認められる。縄文原体を見るとR(6~8)、LR(5・9~24)、RL(25~32)、LRL(33)などがあり、LRが全体の74%と大半を占める。これは岩原I遺跡第I群1類Bの縄文原体に、RLが顕著に認められることは好対照である。5・25・26は口縁部資料である。5は口縁端部で薄くなつて外反するもので、口唇部から内面にかけては横方向に極めて丁寧なナデが施されている。25・26はやや外傾しながらほぼ直線的に立ち上がるもので、口唇部は平坦である。5と同様に口唇部から内面にかけてナデ調整が施される。このほか9は胎土に比較的大粒な砂粒を多く含み、内面はケズリによる砂粒の移動が顕著である。10・23・28は炭化物の付着や磨耗のため明瞭ではないが、縄文施文後に部分的に横方向のナデが施されているようで、第II群土器に見られるような無文帯を意識している可能性も考えられ、押型文土器2型(第V章2)との関係に注意を要するものであろう。なお、5・6・9・17・19・24・26~28の外面と、8・23の内面には炭化物の付着が認められる。

2) 第II群土器(第83・84図、図版48・49)

早期前半の押型文系土器を一括した。総数74点が出土しており、文様の判明するものの中では最も多い。本群はさらに山形文(1類)、指円文(2類)、格子目文(3類)の三類に分けられるが、岩原I遺跡の第I群2類Aのように異種並存タイプのものは見られない。

第II群1類土器(34~50)

山形押型文を施文するグループで、23点出土している。原体は45を除いていずれも輪の円周

に沿って山形を刻む横刻原体〔岡本1987〕で、施文(回転)方向によってさらに横位施文(A)と縦位施文(B)に細分される。なお、個々の土器の山形文や胎土などの特徴から考えて、横位施文と縦位施文を組み合わせたものは存在しないようである。

1類A(34~43) 横刻原体によって横位施文したもので、器厚は5~10mmとばらつきが認められ、胎土には微細白色粒を多く含むもの(34・36・38・39・41)とあまり含まないもの(35・37・42・43)、また褐色粒・長石粒を多く含むもの(40)が見られる。微細白色粒を多く含むものは胎土がややザラついた感じであるが、ほかは比較的緻密である。焼成は概して良好で、色調は前者が黒灰色から暗褐色を呈するのに比べ、後者は褐色系で赤味を帯びたものが多いようである。文様構成はいずれも小片のため明確ではないが、34~39・42・43は横位密接施文で、40・41は無文帶を持つ横位帶状施文であろう。34・35・39は口縁部資料で、34は外傾しながら直線的に立ち上がるるもので口唇部は角頭状を呈し、内面にかけて極めて丁寧なナデが施されている。また、外面の口唇部直下には幅約1cmの無文部を持つことから、横位帶状施文の可能性も考えられる。35・36・38・39・41・42の外面には、炭化物の付着が著しい。

1類B(44~50) 横刻原体によって縦位施文したもので、器厚は4~9mmと1類Aに比べてやや薄く、胎土には微細白色粒を多く含むもの(44・47)と微砂粒を含むものが見られる。色調は赤味を帯びたものが多く、焼成は堅緻である。44は外反しながら開く口縁部で、口唇部から内面にかけて丁寧なナデが施されている。外面の口唇部直下には施文(回転)開始位置が明瞭に観察され、縦位施文を裏付けている。また、隣接する単位文様との境には、原体における施文開始位置をずらすことによってできる四角形の文様が表出されている。45は山形の波形が緩やかで、破片の中で同じ単位の繰り返しが見られないことから、軸の長軸方向に山形を刻む縦刻原体〔岡本1987〕を横位施文した可能性が強い。47は6号配石下の土坑内から出土したもので、山形の波形がほかに比べて鋭い。50は乳房状の尖底部で、先端部付近まで山形文が施されている。器面がやや粗く明確ではないが、縦位帶状施文の可能性が強い。そのほかはいずれも小片のため確認はないが、縦位密接施文であろう。炭化物の付着は44・46・49が外面に、50は内面底部に厚く認められる。

第II群2類土器(51~87)

指円押型文を施文するグループで、押型文系土器の中では最も多い(約66%)49点が出土している。小片が多いため確認はないが基本的には横位施文と思われ、文様構成によって帶状施文のもの(A)と密接施文のもの(B)に二分される。

2類A(51~60) 横位帶状施文と思われるものである。無文部の幅は52のように15mmと広いものから58のように5mm前後と狭いものまでバラエティーがあり、一定していないようである。また、指円文はいわゆる穀粒文と呼ばれる横長のもの(52・58・60)と、円形に近いものが見られるが、原体の長さが判明するものはない。原体端部の処理は山形にカットするものが多いよ

うで、器面に表れる文様は連弧状となる。器厚は8~10mmと比較的厚く、胎土に微細白色粒を含むものは少なく、石英粒を含んだ微細砂粒を中量混入するものが多い。なお、51・52・60にはわずかに纖維を混入する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈するものがほとんどである。51は外傾しながら開く口縁部片で、端部は角頭状である。口唇部直下から梢円押型文を施文するが、施文後につけられたと思われる擦痕が斜位方向に観察される。¹⁾また、口唇部には胴部と同一原体の梢円押型文が施文されているようであるが、明確ではない。炭化物の付着は52・53・57の外面と、54の内面および56の内外面に認められる。

2類B(61~87) 横位密接施文と思われるもので、2類土器の大半を占める。器厚は6~11mmとばらつきが見られ、胎土には微細白色粒の混入が顕著なものと、微細砂粒・石英粒・雲母を含むものに分けられる。64には纖維をごく少量混入する。焼成はいずれも良好で、色調は黄灰色から灰褐色であり灰色系のものが目立つ。梢円文を見ると2類Aに見られた穀粒文はほとんど存在せず、円形や方形に近いものが大半であるが、87は断面が平坦で掘りの浅い横長の梢円文でやや特異である。85はほぼ直線的に立ち上がる厚手の口縁部片で、端部は平坦である。口唇部から内面にかけて丁寧にナデられており、梢円文は原体の長軸方向に長い。原体の長さが判明するものはないが、端部処理は確認できるものすべて2類Aと同様に山形のカットと思われる。炭化物の付着は61・63・65・73・76・79・80・87の外面と、77の内面および85の外面に認められる。

第II群3類土器(88・89)

格子目の押型文を施文するもので、図示した2点のみが出土している。88は胎土に石英粒・微細砂粒を含み、黄褐色を呈する。器厚は7mmと比較的薄手で、内面はナデ調整が施されている。89は黒褐色を呈し、胎土には微細白色粒を多く含む。焼成はやや不良でもろい。器厚は8mmで、外面には炭化物の付着が著しい。

3) 第III群土器(84~85図、図版50・51)

早期中葉に属すると思われる沈線文系土器を一括した。三戸式土器から田戸下層式土器に比定されるものである。総数64点が出土しており全体に占める割合は14.5%であるが、第VII群土器の多くが本群土器の胴部片と考えられることから、実数は増すものと思われる。本群は沈線文を主要素として文様を構成するものであるが、胎土や施文技法、文様構成などによって五類に細分される。

第III群1類土器(90~102・106)

基本的に細沈線を主体として、横位・斜位・縱位の平行沈線文や帯状格子目文、格子目文、刺突文などを組み合わせて文様を構成するもの。沈線内部に光沢を有するものが多く、粘土の

1) 長野県細久保遺跡(松沢1957)の押型文5類土器に類似が見られる。

乾燥が比較的進んだ時点で施文された可能性がある。また、胎土には微細白色粒を多く含むことが特徴的で、ほかのものとは区別される。器厚は95・101・102を除いて8~10mmで、ばらつきが少ない。色調は黒褐色、暗褐色、黄褐色など様々なものが見られるが、焼成は92を除いていずれも良好である。文様構成によってさらに細分される。

1類 A(90・92) 口縁部から胴部中ほどにかけて横位平行沈線を施した後、斜位および縦位に幅広の帯状平行沈線文〔須塚1985〕を加えて格子目文を描き出すもの。90aは平線の口縁部片で口唇部が内削ぎ状となり、内外面ともに横方向のナデが施されている。また、胴部下半(90d)には浅い太沈線が斜位に間隔をおいて施されるが、これは棒状もしくはヘラ状工具によって、器面を強くナデるようにして施文されたものと思われる。92は90と同様の文様構成をとるものと思われるが、沈線がやや太くて全体に粗い感じを受ける。焼成もほかに比べて不良でもろい。色調はいずれも黒褐色を呈し、外面には炭化物の付着が顕著に認められる。

1類 B(91・93・94) 横位平行沈線文と斜位の帯状格子目文・帯状平行沈線文の組み合わせによって文様を構成するもの。いずれも上下を横位平行沈線文によって限られた区画内に、ほかの文様を施文するものと思われるが詳細は不明である。91は帯状格子目文を斜位に施文するもので、外面には縦方向の丁寧なナデ調整痕が帯状に観察され、光沢を持つ部分もある。色調は外面が黄褐色で内面は黒褐色を呈し、外面にはわずかに炭化物の付着が認められる。93は口縁部直下に横位平行沈線文を施し、これに一部かかるようにやや不規則な幅広の帯状平行沈線文を鋸歯状に施文するものであろう。口縁部形態は平線で口唇部は角がやや丸味を帯びた角頭状を呈し、口唇部から内面にかけて横方向のナデが認められる。色調は暗褐色で、外面には炭化物の付着が著しい。94は横位の平行沈線文を区画文として、区画内に帯状平行沈線文を斜位に施文するもので、多段構成をとる可能性が高い。胎土には纖維の混入が顕著に認められる。色調は暗褐色を呈し、外面には炭化物の付着が著しい。

1類 C(97) 横位平行沈線文と交差する斜線文を組み合わせて文様を構成するもので、これらによって区画された三角形の一部に、縦位平行沈線を充填する。また、横位平行沈線文は直交する短沈線によって格子目状となる。破片下半部は磨耗が激しくて明確ではないが、格子目文から続く斜位および縦位の平行沈線文がわずかに観察される。内外面ともに縦方向のナデが施されている。色調は外面黄褐色で内面は暗灰色を呈し、内面下半には炭化物が厚く付着している。

1類 D(95) 極めて浅い細沈線によって細長い斜格子目文を描くもので、口唇部直下には幅8mmの無文部を持つ。口縁部形態はやや外傾しながら直線的に立ち上がるもので、口唇部は尖頭状になる。器厚は7mmとほかに比べてやや薄く、色調は暗灰褐色を呈する。

1類 E(99) 口唇部直下に無文部を挟んだ二段の横位平行沈線を施した後、縦位および斜位に短沈線を重ねて格子目文としたもの。口縁部形態はわずかに外反しながら立ち上がるもの

で、口唇部は角頭状となる。口唇部から内面にかけてはナデ調整が施され、色調は黒褐色を呈する。外面には炭化物の付着が著しい。

1類 F(96・100~102・106) 横位および斜位平行沈線を組み合わせて文様を構成するものであるが、A~E に比べて文様構成が明確でないもの。このうち101は 1類 B の 94 と同様の文様構成を持つ可能性がある。器厚は 101・102 が 6 mm と薄く、逆に 106 は 14 mm で底部付近のものと思われる。101・106 は胎土に纖維を混入する。また、106 の外面には整形時の擦痕が横方向に明瞭に残る。

1類 G(98) 沈線文と円形刺突文によって文様が構成されるもので、口唇部外面には右上がりの刻みが施される。沈線による文様は二本の横位沈線で区画された内部に、斜位の平行沈線を充填するが、下位の横位沈線の下にも逆方向の斜位平行沈線が認められ、多段構成をとる可能性もある。口唇部から外面にかけては丁寧にナデされている。色調は暗灰色を呈するが、内面に赤色の付着物がわずかに認められる。

第 III 群 2類土器(103~105・107~113)

横位・斜位の平行細沈線文と格子目文のみのもので、沈線は比較的浅くあまり規則性のない施文が目立つ。焼成は堅密で沈線内部に光沢を持つものが多く、粘土の乾燥がかなり進んでから施文された可能性が強い。胎土には微細白色粒はあまり含まず、大粒の砂粒を混入するものが多い。また、器厚は 9~11 mm と 1類に比べて厚手で、色調は大半が暗褐色を呈する。

2類 A(103~105・107~109) 横位平行沈線文のみを施文するもので、103~105 のように不規則施文のものと、107・108 のように規則的なものが見られる。外面はいずれも丁寧なミガキが施されるが、103~105 には光沢を持つ黒色の部分が認められる。これは沈線内部では観察されず、施文以前のミガキの段階で器面に何らかの処理がなされた可能性が強い。なお、104 の破片下半には 2類 C と同様な手法で施文されたと思われる、非常に浅い斜位の平行沈線文が観察される。

2類 B(110・111) 斜位平行沈線文を施文するもので、沈線は 2類 A に比べてやや深い。いずれも暗灰褐色を呈し、110 の外面には炭化物が厚く付着する。また、110 の胎土には纖維を混入する。

2類 C(112・113) 非常に浅い沈線で格子目文を描くもので、2類 A と同様に外面には丁寧なミガキが施されて光沢を帯びる。沈線はミガキの後に棒状もしくはヘラ状の工具により、強くナデられたようなものである。

第 III 群 3類土器(114・115)

平行沈線文と大振りな「D」字状の刺突文を組み合わせて文様を構成するもので、胎土には微細白色粒を多く含むほか石英粒の混入が特徴的である。色調はいずれも暗褐色を呈し、焼成は良好である。114 は 2 本の平行する斜位沈線間に短沈線を充填し、これに沿って両側に刺突

文を附加するものである。破片下半の無文部には、縦方向のミガキ痕が帶状に残る。115は横位の刺突列と斜位平行沈線を組み合わせたもので、胎土には纖維を少量混入する。いずれも外面には炭化物の付着がわずかに認められる。

第III群4類土器(116~120)

横位・斜位の平行沈線文のみのものであるが、2類土器とは胎土・焼成・施文技法・沈線の太さなどで明らかに異なる。器厚は5~6mmと薄く、胎土には117に微細白色粒を多く含むほかは混入物があり見られない。焼成は比較的良いが、器面にナデやミガキなどは施されていない。116・118・119の沈線は幅が一定しておらず、意図的に施文の強弱をつけた可能性が考えられる。120は沈線というより粗い擦痕のような印象を受けるものである。破片の湾曲から考えて、いずれも胴部下半から底部付近のものであろう。

第III群5類土器(121)

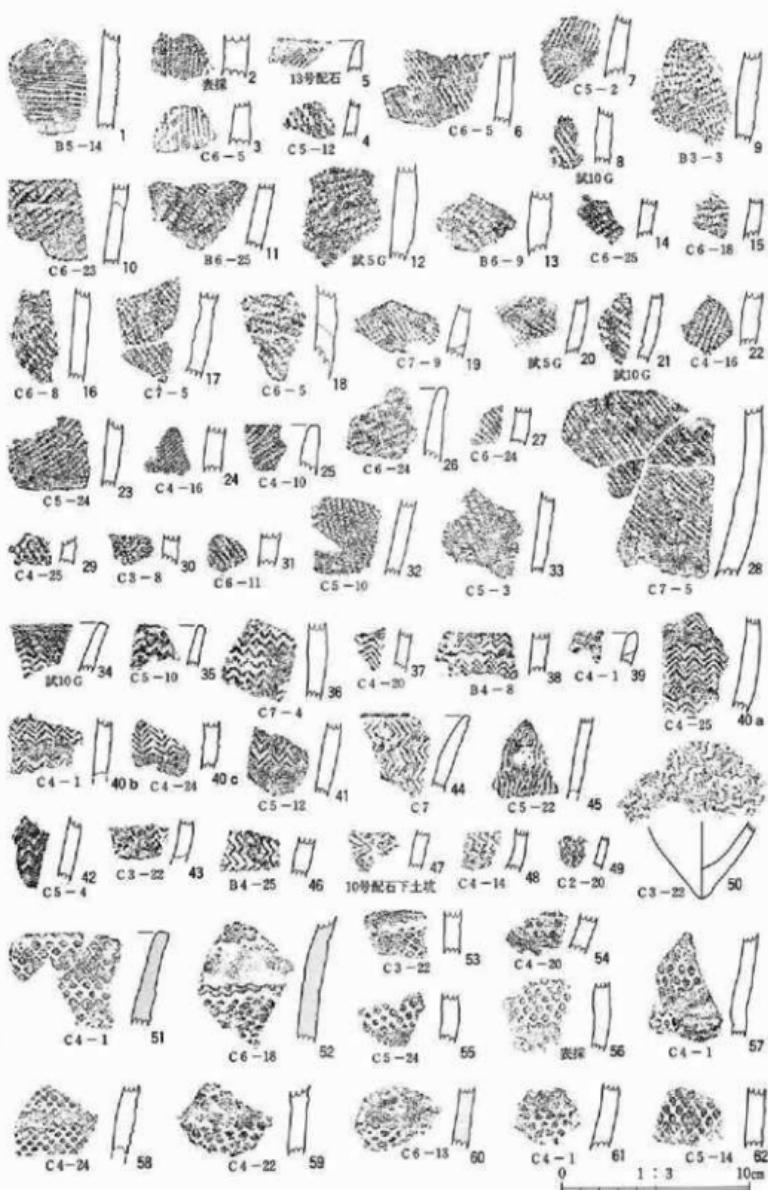
浅い太沈線を横位に平行施文するもので、本例1点のみである。胎土に長石・石英粒を多量に混入し、やや粗い感じを受ける。色調は外面が暗褐色で内面は明褐色である。口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上がるるもので、口唇部形態は角頭状を呈する。器厚は11mmと厚手である。外面の整形は横方向のケズリであるが、これに伴う砂粒の移動が顕著に認められる。また、口唇部から内面にかけては、丁寧なナデ整形が施される。沈線は太い半截竹管などの工具により器面を強くナデるように施文されたものと思われ、三段まで確認される。本遺跡では同様の胎土・整形技法を持つものがほかに数点検出されているが、いずれも太沈線文が見られない胴部片である。

4) 第IV群土器(第85図、図版51)

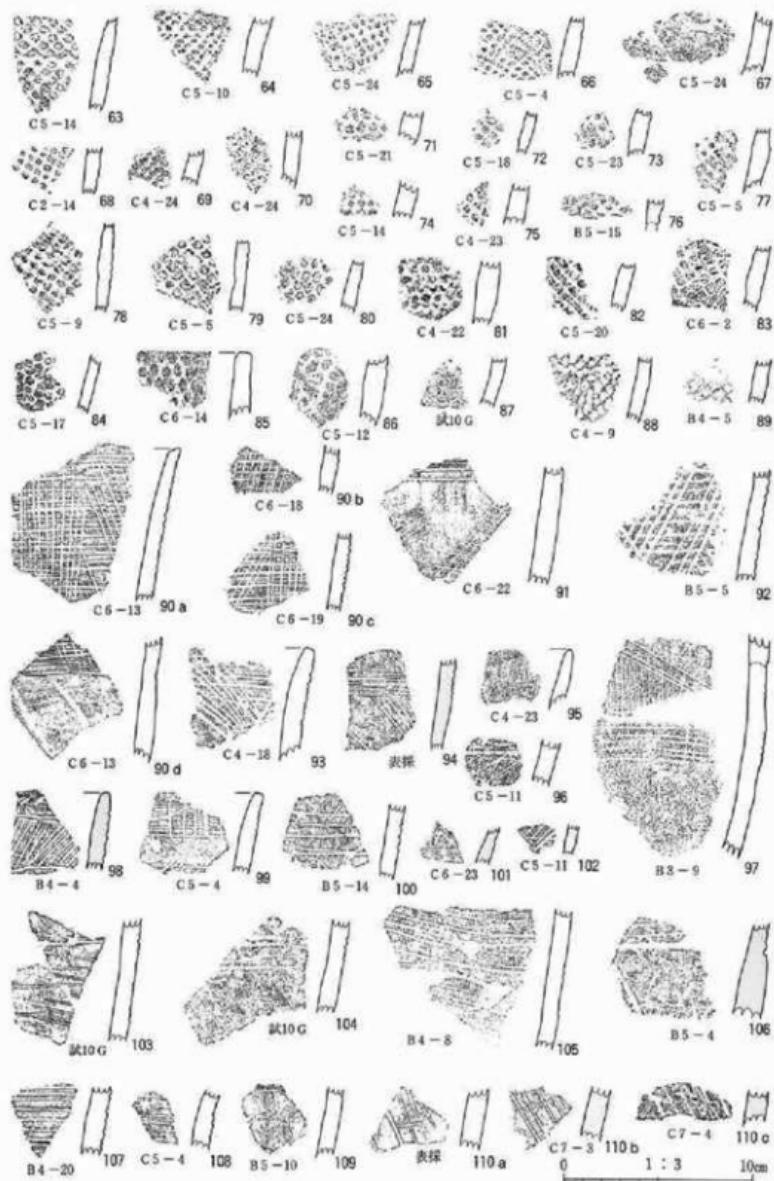
早期中葉以前に属すると思われる無文土器の口縁部を一括したが、図示した7点(122~128)がすべてである。すべて平線で口縁部形態は外傾して直線的に立ち上がるものや、外反するものなどが見られ、口唇部も円頭状、尖頭状のものが存在する。胎土には微細白色粒を多く含むもの(123・125・126・128)と、あまり混入物を含まないものに分けられるが、125は胎土・焼成とともに第I群2類土器の28に酷似しており同一個体の可能性が強い。

5) 第V群土器(第85図、図版51)

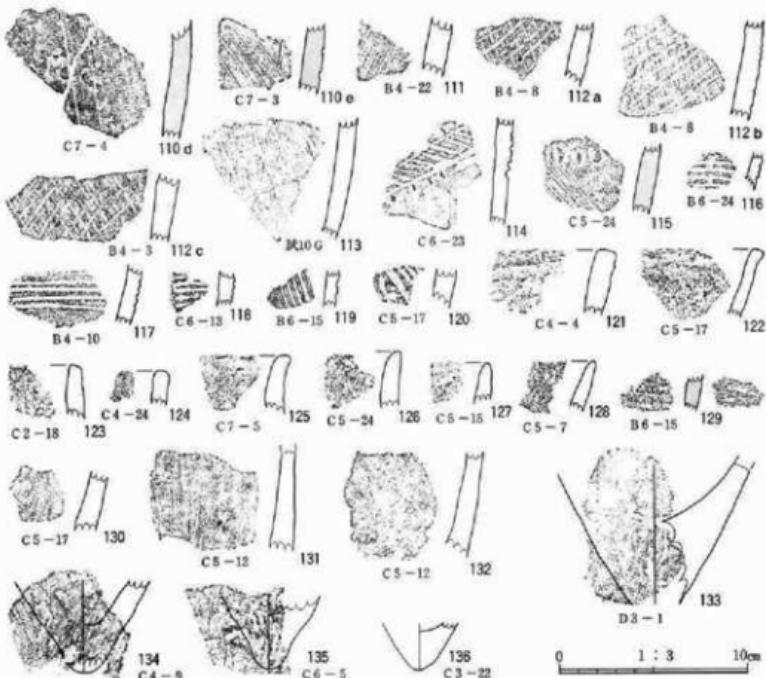
小片のため明確ではないが、内外面に条痕文を施し外面には縄文のようなものがわずかに認められる。本例1点(129)のみの出土である。胎土には微細砂粒・纖維を比較的多く混入し、暗灰色を呈する。外面には炭化物の付着が著しい。早期後葉の条痕文系土器と思われる。



第63図 第I・II群土器



第84図 第II・III群土器



第85図 第III~VI群土器

6) 第VI群土器(第85図、図版51)

第I群から第III群土器の底部および底部付近の破片を一括した(130~136)。いずれも尖底になると思われ、136を除いて焼成は良好である。131・133・134は胎土に砂粒を多く含み、内外面ともに縱方向のナデ整形痕が顕著なことなど、第III群2類土器との共通性が認められる。また、135は胎土に微細白色粒を多量に混入するもので、先端部付近まで斜位の短沈線が施文されているようである。

B. 石 器(第86~93図、図版52~55)

上林塚遺跡から出土した石器は407点で、剝片を含めると1,367点を数える。先述したように伴出した土器が縄文時代早期前半から中葉にはば限定されることから、これらの石器群も大半が該期に属するものと思われる。

器種分類(器種名)や器種内細分については、基本的に岩原I遺跡の考え方を採ることとしたので参照願いたい。なお、各器種の出土点数は第7表のとおりである。

1) 石鏃(1~3)

未成品と思われるものも含めて3点が出土している。1の石材は鉄石英で、本遺跡で唯一の完形品である。凹基無茎鏃で丁寧な両面調整によって整形されており、断面は細長い菱形を呈する。基部の抉り込みがやや浅いが、早期に特徴的な鍔形鏃の範囲で捉えてよいであろう。2・3は未成品として分類したが、3は両側縁に両面からの微細調整が施されており、他器種の可能性も考えられる。

2) 打製石斧(4~9)

14点が出土しているが、このうち4点は欠損品である。平面形態にはこれといった特徴は見いだせず、様々なものが見られる。また、刃部形態は片刃のものが大半を占め、両刃のものは6を含めて2点しか存在しない。これは、岩原I遺跡で両刃のものが圧倒的に多いことを考えると対象的である。4は幅に対して器長が著しく長く厚いもので、粗い両面調整が施され刃部は片刃を呈する。5は縦長剥片を素材として裏面に主剥離面を残すもので、裏面から石器の左側縁と刃部先端にのみ調整剥離を施すものである。6は本遺跡の中では比較的整った形態を示し、いわゆる短冊形のものである。両側縁および刃部に両面からの浅い調整を施しており、刃部正面にはわずかに磨擦痕が観察されるほか、基部の両側縁にはツブレが見られる。7は横長剥片を素材として、両側縁に大振りな剥離によって抉り部を作り出したもので、刃部調整は施されない。正面には原石面を大きく残し、刃部正面には使用によると思われる微細剥離が認められる。8は刃部角57度とほかに比べて急斜度で、調整方法や裏面のカーブが箇状石器に類似する。横長剥片を素材としたもので、バルブは一回の剥離によって除去されている。また、刃部先端にはツブレが認められる。本来は箇状石器とすべきものかもしれないが、岩原I遺跡の箇状石器には使用痕としての刃部のツブレが認められないことから、ここでは打製石斧として分類した。9は肉厚な剥片を素材としたもので、石器の左側縁には階段状剥離が顕著に認められる。裏面は周縁からの大きな剥離によって整形加工されている。石材を見ると14点中11点が頁岩で、ほかにガラス質安山岩(4)と粘板岩、微細斑構岩が各1点存在する。

3) 磨製石斧(10)

結晶片岩の板状剥片を素材とした局部磨製石斧で、本例1点のみが出土している。周縁に浅

第7表 上林塚遺跡石器種別出土数

器種	出土数	器種	出土数	器種	出土数	器種	出土数
石打製石斧	3	使用痕のある剥片	74	磨石	12	剥片類	960
磨製石斧	14	礫石	43	石台	4		
不定形剥片石器	1	特殊磨石	41	その他	42		
102		27			44		

い調整加工を施した後、刃部両面を中心に部分的に研磨を加えている。刃部形態は片刃状に仕上げられており、先端部にはツブレが観察される。また、両側縁には磨耗が認められ、着柄の可能性が考えられる。

4) 不定形剝片石器(11~34)

本遺跡では総計102点の不定形剝片石器が出土しており、石器全体に占める割合は25%と最も多い。石材を見ると頁岩が73点で7割以上を占め、ほかには珪質頁岩、ガラス質安山岩、凝灰岩などが見られる。刃部形態によって鋸歯状(I類)、抉入状(II類)、錐状(III類)、その他(IV類)に大別される。

I類(11~13) 剥片の縁辺に連続・不連続の細部調整を施し、鋸歯状の刃部を作り出したもので、計14点が出土している。刃部調整から、さらに二種に細分される。

- a. 連続・不連続の細部調整を片面から施して刃部としたもの(13)。
- b. 連続する比較的粗い調整によって急斜度の刃部を作り出したもの(11~12)。

素材となる剥片は横長・縦長とともに存在するが、大半は素材の形状をそのまま利用したもので、折断調整などによって大きさ・形状を整えたと思われるものは12のみである。また、使用痕が明瞭に観察されるものはほとんどないが、13の刃部最奥部に微細な剥離や磨耗が認められる。大きさは5~8cmと比較的ばらつきが少ない。

II類(14~16) 素材縁辺の一部に細部調整による抉入状の刃部を作り出したもので、9点が出土している。すべて一回の剥離によって幅1~2cmの比較的小さな刃部を作り出したもので、岩原I遺跡のIIa種にあたる。刃部角は50度以上の急斜度のものが大半で、刃部の最奥部にはツブレが認められるものも存在する。また、14のように複数(二ヶ所)刃部を持つものも認められる。大きさは3~9cmとばらつきがある。

III類(17~20) 素材となる剥片の尖端部に細部調整を施し、錐状の刃部を作り出したもので、8点が出土している。刃部の調整および形態から三種に細分される。

- a. 素材となる剥片の尖頭部を抉む両側縁もしくは片側縁に、浅形の片面調整を施したもので、刃部の断面が菱形を呈するもの(17)と三角形のもの(19~20)が見られる。
- b. 素材の縁辺に抉りを入れることによって尖頭部を作り出し、これに微細な調整を施して刃部としたもの(18)。断面は扁平な菱形を呈する。

使用痕が明瞭に観察されるものは少ないが、18の抉り部にはツブレが認められるほか右側縁には微細な剥離が観察され、複数の機能を有していたと思われる。大きさは2.5~6.5cmと岩原I遺跡のIII類に比べて小形である。

IV類(21~34) 剥片の縁辺部に連続・不連続の細部調整を施して、I~III類以外の平坦な刃部を作り出したもの。出土総数は71点で、不定形剝片石器の7割を占める。刃部の調整方法に

よって三種に細分される。

- a. 片面からの急斜度の細部調整によって60度以上の刃部角を有するもの(23~25)。23の右側縁から先端部にかけては、b種の刃部を合わせ持つ。
- b. 緩斜度の微細もしくは小さな細部調整によって刃部を作り出したもので、両面調整のもの(21)と片面調整のもの(22)が見られる。
- c. 緩斜度の中形剝離によって刃部調整したもの(26~34)で、基本的には片面調整であるが、33・34のように両面調整によって刃部を作り出すものもある。

素材となる剥片は大きさ・形状ともに様々なものが見られるが、折断調整などによって原形を大きく損なうものはほとんどない。刃部の位置は一側縁のものが大半であるが、隣接する二側縁や平行する両側縁のものも存在する。大きさは、2.3~15.1cmとばらつきがある。

5) 使用痕のある剝片(35~37)

剝片の縁辺に使用によると思われる痕跡が観察されるもので、総数74点が確認されている。痕跡の種類にはツブレ(35)、微細剝離(36)、磨耗(37)が見られる。素材の大きさや形状にはバラエティーがあり、特に規則性のようなものは見いだせない。

6) 碓器(38~51)

基本的に扁平な自然礫を素材として側縁の一部に剝離を施して刃部を作り出したもので、原石面を複数面に残すものが多い。総数43点が出土しており、片面調整のもの(I類)と両面調整のもの(II類)に大別されるが、片面調整のものが38点と圧倒的に多い。石材は約9割が頁岩で、ほかには微細斑駁岩、安山岩などがわずかに見られる。

I類(38~50) 磬の一側縁もしくは周縁に片面からの剝離を施して刃部としたもので、調整方法や刃部形態によって三種に分けられる。

- a. 比較的小形の扁平礫の一部に剝離を施して、急斜度(60度以上)の刃部を作り出すもの(38~45)で、22点が出土している。38のように大形厚手の剝片を利用しているものもあるが、刃部形態が類似することからここでは碓器として扱った。素材や平面形態などさらに三つに細分される。
- b. 厚手の剝片の周縁から調整剝離を施したもの(46)で、先端部には穂状剝離が顕著である。刃部角は59度を測る。
- c. 扁平礫もしくは片面に原石面を残す剝片の一部に調整剝離を施すもの(47~50)で、刃部角はa・bに比べて緩く、剝離も一側縁のもの(48・50)とほぼ周縁からのもの(47・49)がある。形態的にも様々なものが見られる。

II類(51) 両面からの剝離によって刃部を作り出したもので、計5点が出土している。51は

扁平梢円形縁の一側縁に、両面からの大振りで粗い剥離を施したもので、刃部から斜めに折損している。

ここで、本遺跡で特徴的なⅠ類aについて、少し詳しく見ることにする。

Ⅰ類a₁(40~44) 平面形態が三角形や半円形を呈するもので、Ⅰ類aを特徴付ける形態である。15点が検出されており、正裏面と側縁の境に明瞭な角を有する比較的小形の扁平縁(板状)を素材とする。大きさは長さ7.5~10.9cm、幅4.2~6.3cm、厚さ2.2~4.3cmと規格性が認められ、形態と共に素材選択の段階で強い規制が働いていたものと思われる。ただ、41・42のように一定の厚さを得られない場合には、正裏面を剥離することによって規格に合った厚さにし、これを素材にしたと考えられるものもある。刃部の調整方法を見ると、比較的大きな剥離によるもの(40・43・44)と階段状の剥離によるもの(41・42)に分けられ、刃部角は前者が70~76度に対して後者は86度以上とより急斜度である。また、刃縁の形態は円刃になるもの(40・41・43)と直刃になるもの(42・44)があるが、いずれも鋸歯状を呈するものが多い。使用痕は明瞭に観察されるものは少ないが、41・44のように微細な剥離やツブレが認められるものがわずかに見られる。

Ⅰ類a₂ 図示しなかったが厚さが幅を凌ぐものが3点存在した。全体の大きさはⅠ類a₁の規格の中に含まれるものであるが、形態は直方体状を呈するものである。刃部は比較的大きな剥離によって作り出されており、刃部角は90度前後と極めて急斜度である。

Ⅰ類a₃(38・39・45) Ⅰ類a₁・Ⅰ類a₂以外で刃部形態が類似するものをまとめた。38は大形厚手の横長剥片を素材としたもので、深形平行の剥離によって刃部を作り出している。長さ15.5cm、幅7.2cmと大形であるが、厚さは3.0cmでⅠ類a₁の範囲内である。刃部角は74度を測り円刃となる。鋸歯状の刃部の抉り部に、ツブレが観察される。39は扁平縁の一側縁に大きな三回の剥離によって刃部を作り出したもので、刃部角は61度とほかに比べて緩い。45は裏面に古い節理面を有するもので、両側縁には刃部調整が施されている。正面右上の剥離は刃部調整時に偶然入ったものと思われ、基本的には正裏面に原石面を残すものと同じと考えて良いであろう。

砾器は縄文時代各期を通じて普遍的に見られる石器であるが、早期の押型文土器に伴って特に出土量が多く、時期や地域によって様々な形態が認められるようである。しかし、定形化した形態として捉えられるものは少なく、その意味においてⅠ類a₁の素材や平面形態・刃部形態は特徴的である。このような特徴を有する砾器は、和歌山県高山寺貝塚や大分県黒山遺跡など西日本で類例が見られるようで、橋昌信氏により「砾石器」として分類され〔橋1970〕、押型文土器群の末期(高山寺式以降)の所産とされている。一方、東日本においては岩原I遺跡に7点認められるほかは、わずかに群馬県八木沢清水遺跡〔能登1988〕の1号住居で、42に類似した厚さを調整したと思われる資料が1点確認されるのみで類例は極めて少ない。しかし、時

期的には本遺跡での検出土器がほぼ早期中葉に限られる点や、八木沢清水遺跡で稻荷台式に比定される撫糸文土器や桶沢・普門寺式に比定される押型文土器に伴出していることなどから、おおむね早期前葉から中葉頃に位置付けられると思われる点で、西日本の例より時期的に先行する可能性が強い。いずれにしても現時点では類例も少なく詳細な検討は困難で、今後資料の増加を待って検討する必要のある石器であろう。

7) 石核(52-56)

石核は総数41点が出土しているが、礫器との区別は難しく判断のつかないものも含まれる。ここでは明らかに石核と思われるものを図示する。52・53は上面を打面として縦長の剥片を連續的に剥ぎ取ったもの。53には打面調整が施されており、旧石器時代の石刃技法に似た剥片剥離を行っている。54は上面からの縦長剥片と、正面左側縁の棱線上からの交互剥離による横長剥片を剥離したもの。55・56は棱線上からの交互剥離によって横長剥片を剥ぎ取ったもので、56の棱線の一部には微細なツブレが認められることから、礫器としての機能を合わせ持つものであろう。

8) 特殊磨石(57-68)

総数は27点出土しているが石器に占める割合は約7%と低く、岩原I遺跡の25%と比べて対象的である。分類基準や観察項目については岩原I遺跡に従うこととし、ここでは各項目の特徴を概観する。

素材の大きさ・形状 長さは11.2~18.5cm、幅3.6~8.5cm、厚さ5.2~8.8cm、重量380~1,310gといずれも岩原I遺跡の集中域に含まれ、本遺跡独自の特徴のようなものは見いだせない。また、素材の形状は断面形でA. 三角形(13点)、B. 四角ないし台形(7点)、C. 楕円ないし円形(7点)であり、B種の割合がやや目立つ程度である。

機能面の状態 表面の風化が著しくて観察不能の1点を除くと、I類、磨面(19点)、II類、敲打面(3点)、III類、両者を合わせ持つもの(4点)でI類が約73%を占める。このほか、機能面の側縁に剥離痕の認められるものはわずか5点と少ないが、これはI類が多いことに起因するものであろう。

調整磨面 調整磨面を有するものはわずか2点であるが、全体に占める割合は7%と岩原I遺跡のそれとはほぼ一致している。

その他の機能面 端部に敲打痕を有するものが1点(68)検出されたのみである。岩原I遺跡では82点(23%)のものに認められたことを考えると、やや様相を異にする。

折損と火熱 折損品は2点のみで、岩原I遺跡の127点(36%)に比べると極端に低い割合を示す。折損の部位は長軸のはば中央で機能面に対して直交するもの(65)と、長軸方向のものであ

る。また、火熱を受けているものは 1 点も確認されていない。

石材については花崗岩が 18 点 (66%) と最も多く、次いで斑紋岩 (15%)、微細斑紋岩 (11%) の順でこの三種で全体の 93% を占めている。三種全体の割合は岩原 I 遺跡とほぼ同じであるが、花崗岩と斑紋岩の比率が逆転しており、直線距離でわずか 3 km 余りしか離れていない両遺跡で半数以上を占める石材に差が認められることになる。このことは石材を供給する河川 (魚野川・大源太川) の河床礫組成に係わる可能性が強く、今後の検討を要するところである。

9) 磨石類 (69)

总数 12 点出土しているが、内訳は II 類 (敲打痕) 8 点、III 類 (凹痕) 2 点、IV 類 (2~3 種類の痕跡を合わせ持つもの) 2 点であり、I 類 (磨痕) は検出されなかった。それぞれの特徴は岩原 I 遺跡と同様である。

10) 石皿 (70)

4 点出土しているが、いずれも破損品 (小破片) で完形品は見られない。70 は 4 点の中では割合大きなもので、機能面は滑らかである。また、機能面に剥離が見られるが、調整痕などではなく後世のものであろう。

11) 台石 (71~74)

总数 42 点が出土しているが、石器全体に占める割合は 10.3% で岩原 I 遺跡に比べて高い比率を示す。機能面の状態によって三種類に分けられ、それぞれの出土数は I 類 (磨痕) 20 点、II 類 (敲打痕) 8 点、III 類 (磨痕 + 敲打痕) 14 点である。形態や調整加工のあり方は岩原 I 遺跡とほぼ同じである。

C. その他の遺物 (図版 55)

縄文時代早期の土器・石器のほかに、1 番 (表土) 中から近世以降の所産と思われる遺物がわずかに出土している。76 は粘板岩製の砥石、77 はやはり粘板岩製の擦切具、78 は寛永通宝であり、I・J 34 で検出された掘立柱建物と関連する遺物とも考えられる。

第8表 上木坂遺跡石器類別表

〔単位はcm・g・度、() は現存値を示す〕

石 墓									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
1	C 4-14	2.1	1.6	0.3	0.8	11.1	石英	石	片
2	C 5-5	3.7	2.8	0.3	3.7	11.1	石英	石	片
3	C 5-4	2.6	2.2	0.7	3.5	11.1	石英	石	片

打削石器									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
4	C 3-16	16.6	4.5	2.9	269.0	ガラス質安山岩	石	片	等
5	C 5-24	13.8	6.3	1.9	187.5	ガラス質安山岩	石	片	等
6	C 3-24	12.3	5.0	1.7	159.5	ガラス質安山岩	石	片	等
7	B 4-14	8.4	6.0	2.2	81.0	ガラス質安山岩	石	片	等
8	C 5-1	7.8	4.8	1.8	77.0	ガラス質安山岩	石	片	等
9	試15G	16.0	4.9	3.0	162.0	ガラス質安山岩	石	片	等

磨削石器									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
10	B 5-13	8.3	3.4	0.9	36.0	結晶片岩	石	片	等
11	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
12	C 2-6	6.8	5.7	1.5	46.0	月桂石質安山岩	石	片	等
13	C 2-24	4.2	1.8	1.8	38.0	月桂石質安山岩	石	片	等
14	C 5-1	5.1	8.0	1.7	68.5	月桂石質安山岩	石	片	等
15	C 7-14	6.7	4.5	1.7	41.5	月桂石質安山岩	石	片	等
16	C 1-24	2.8	2.7	1.6	7.0	月桂石質安山岩	石	片	等
17	C 5-23	4.9	3.7	0.7	4.5	月桂石質安山岩	石	片	等
18	試15G	6.5	4.9	1.2	34.5	月桂石質安山岩	石	片	等
19	C 3-19	5.7	4.2	2.1	38.0	月桂石質安山岩	石	片	等
20	C 3-16	6.5	5.4	2.6	146.5	月桂石質安山岩	石	片	等
21	C 5-20	6.7	3.0	2.6	14.5	ガラス質安山岩	石	片	等
22	C 5-13	8.2	4.7	0.9	45.5	ガラス質安山岩	石	片	等
23	C 2-17	5.5	3.2	1.6	27.0	月桂石質安山岩	石	片	等
24	C 7-4	6.1	4.4	1.5	37.0	月桂石質安山岩	石	片	等
25	試15G	5.5	4.4	2.4	38.0	月桂石質安山岩	石	片	等
26	C 4-11	7.3	5.3	1.5	61.0	月桂石質安山岩	石	片	等
27	試15G	9.0	8.4	2.4	222.0	月桂石質安山岩	石	片	等
28	C 5-3	9.9	6.9	2.5	139.0	月桂石質安山岩	石	片	等
29	C 3-19	9.2	5.8	2.4	155.0	月桂石質安山岩	石	片	等
30	C 6-3	12.7	7.0	3.2	280.0	月桂石質安山岩	石	片	等
31	B 4-25	7.1	6.6	2.4	78.0	月桂石質安山岩	石	片	等
32	試10G	11.0	5.9	2.9	189.5	月桂石質安山岩	石	片	等
33	C 3-3	15.1	8.6	2.9	370.0	月桂石質安山岩	石	片	等
34	C 7-19	(5.2)	5.3	1.5	(57.0)	月桂石質安山岩	石	片	等

使用のある剝片									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
35	B 5-23	7.0	8.0	2.7	5.4	1.1	石英	石	片
36	C 5-24	6.1	8.0	4.8	4.8	1.0	石英	石	片
37	C 5-14	6.1	8.0	4.8	4.8	1.0	石英	石	片
38	C 6-9	15.5	6.2	3.0	74.0	489.5	石英	石	片
39	C 5-12	12.5	6.2	3.0	36.0	61.1	石英	石	片
40	B 4-10	8.3	5.3	2.6	40.0	140.0	石英	石	片
41	B 4-20	9.1	4.9	2.1	42.0	179.5	石英	石	片
42	C 3-22	8.9	4.9	2.2	32.0	240.5	石英	石	片
43	C 5-4	10.0	5.1	2.9	4.0	7.0	石英	石	片
44	B 5-14	8.5	5.4	2.9	17.0	151.0	石英	石	片
45	C 3-5	10.7	5.1	3.1	20.0	76.0	石英	石	片
46	C 3-5	9.7	3.8	3.6	135.0	59.0	石英	石	片
47	C 7-8	10.5	8.6	3.4	389.5	63.0	石英	石	片
48	試15G	(7.6)	(8.1)	(1.5)	(121.0)	44.0	石英	石	片
49	C 5-24	8.5	5.8	3.3	195.0	70.0	石英	石	片
50	C 7-19	11.7	4.8	3.2	196.5	38.0	石英	石	片
51	試15G	(11.4)	(9.2)	(4.1)	(390.0)	64.0	石英	石	片

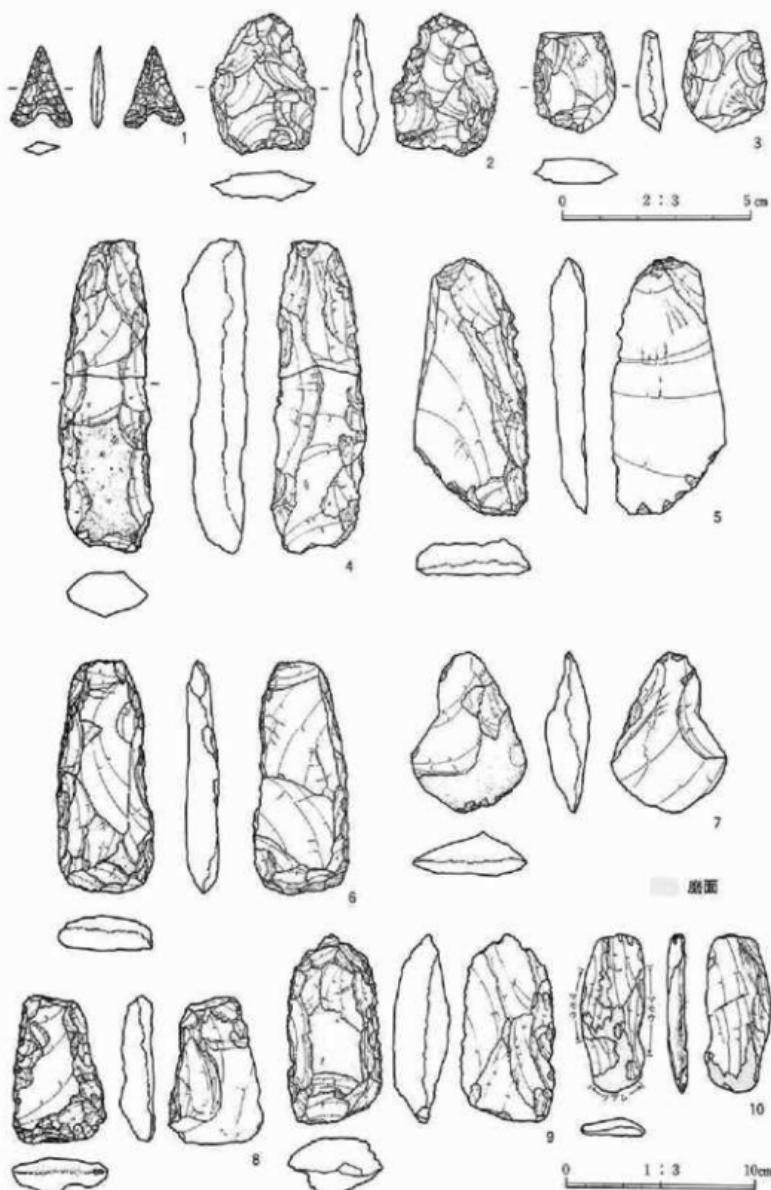
磨削石器									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
52	C 6-22	8.6	4.7	1.1	191.0	191.0	石英	石	片
53	C 7-9	6.7	4.4	1.1	137.0	137.0	石英	石	片
54	C 5-7	6.7	6.3	1.1	185.0	185.0	石英	石	片
55	C 5-7	7.0	6.5	1.1	198.5	198.5	石英	石	片
56	C 8-5	12.5	11.6	1.1	1,090.0	1,090.0	石英	石	片

石 砕・合 台									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
57	C 6-9	10.1	9.7	4.1	541.0	541.0	花崗岩	石	塊

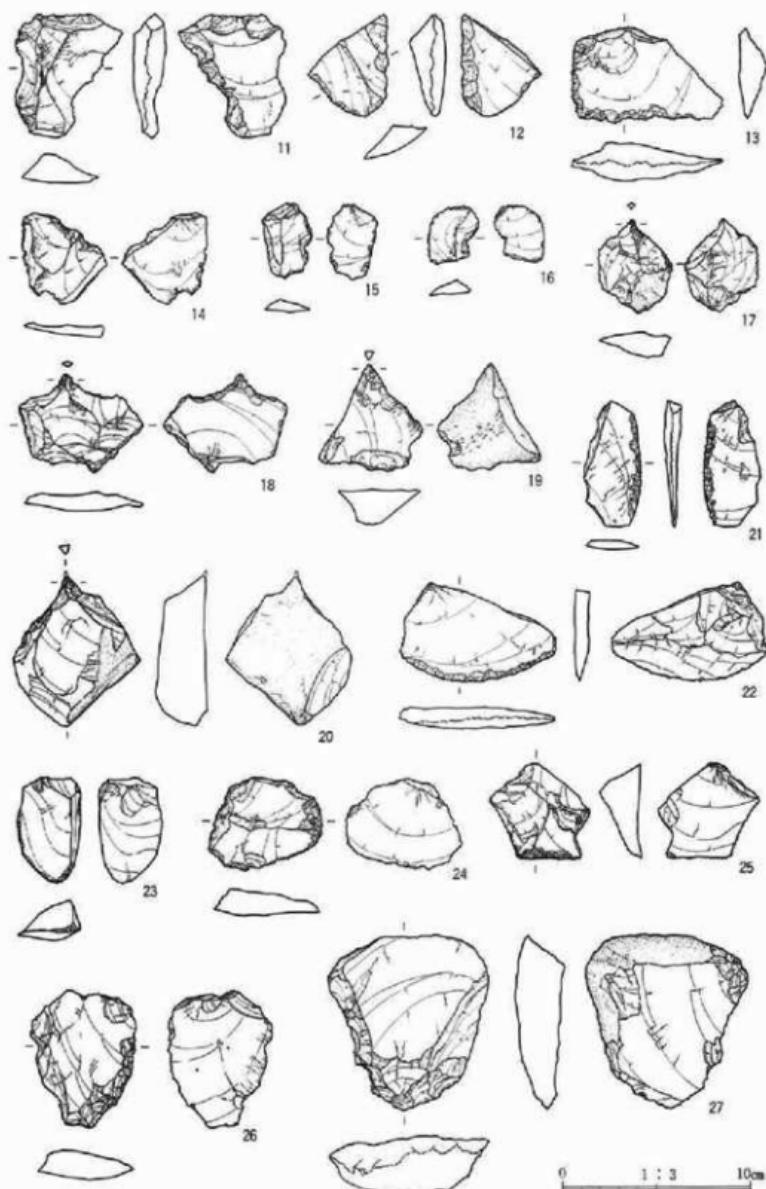
〔重量の単位はkg〕									
No.	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	量	石	材	備 考
58	C 3-5	(0.4)	(0.9)	(9.7)	2.6	(0.5)	砂岩	石	塊
59	17分岐台	(26.6)	(37.5)	(10.1)	1.1	(11.5)	花崗岩	石	塊
60	6号台	(37.5)	(37.5)	(10.1)	1.1	(11.5)	花崗岩	石	塊
61	C 4-20	39.6	31.3	12.5	24.0	24.0	花崗岩	石	塊
62	C 6-14	44.7	31.8	10.1	19.5	19.5	花崗岩	石	塊

特殊磨石

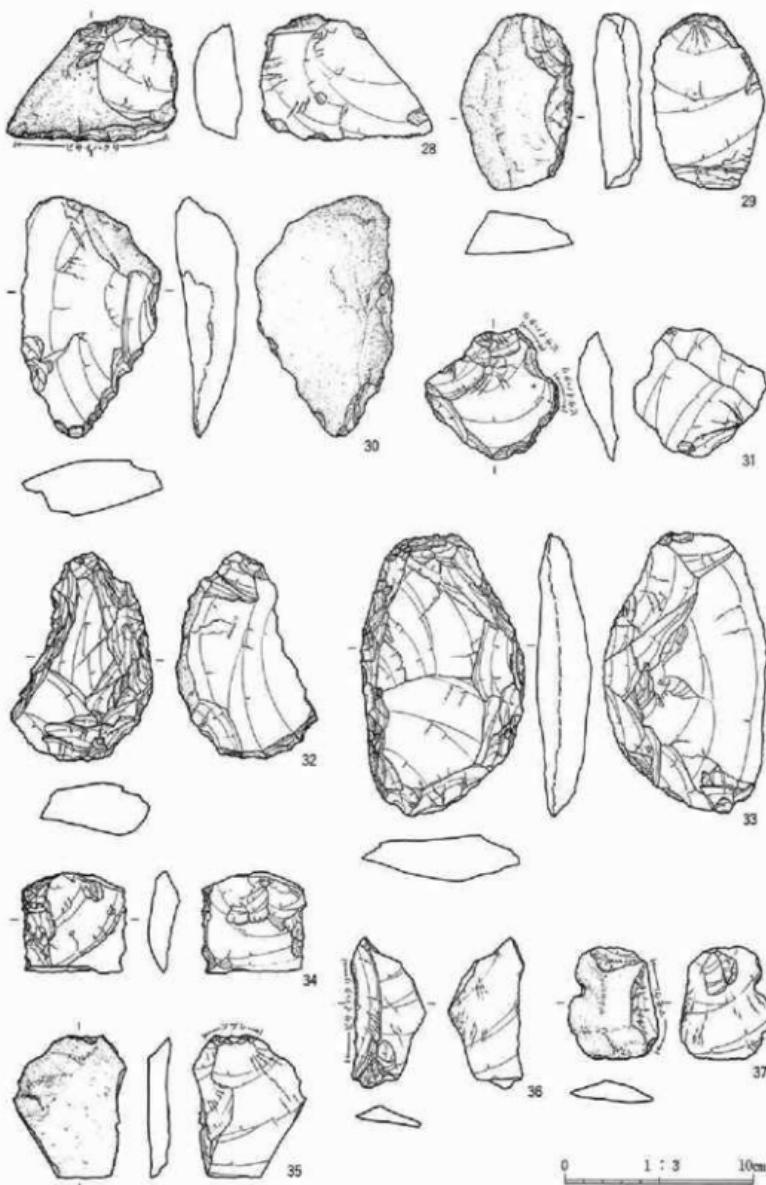
No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	木材 の形状	被付 状態	被付 幅	被付面2 状態	被付面3 状態	その他の被付面	属性 評価	火 熱 消 耗 考 査
57	C 6 - 4	18.5	5.3	2.0	980.0	花崗岩	B	I b - 1	1.3					
58	C 5 - 22	16.1	5.4	2.3	1,090.0	花崗岩	C	I b - 1	2.5					
59	C 6 - 18	13.6	5.3	2.2	530.0	花崗岩	A	I b - 1	1.4					
60	C 3 - 13	11.5	5.7	2.0	800.0	花崗岩	B	I b - 1	1.7					
61	1号B25	13.8	8.5	2.6	1,300.0	花崗岩	A	I b - 2	2.2					
62	C 6 - 9	14.5	7.2	2.3	950.0	花崗岩	B	I b - 2	1.2					
63	B 6 - 10	18.2	6.0	4.9	1,030.0	花崗岩	A	I b - 2	1.1	I b - 1	0.9			
64	C 5 - 21	15.6	6.9	4.9	1,460.0	花崗岩	A	I b - 1	1.1	I b - 1	1.0			
65	C 4 - 10	(7.9)	6.2	6.7	(300.0)	花崗岩	A	I b - 1	1.5					
66	C 5 - 19	12.2	4.2	5.2	340.0	花崗岩	A	I b - 1	0.8	I b - 2	1.3			
67	B 6 - 10	15.6	8.2	8.8	1,310.0	花崗岩	A	I b - 1	1.6	I b - 1	1.0			
68	C 6 - 9	15.0	6.3	6.4	980.0	花崗岩	A	I b - 1	1.7	I b - 1	1.9	n = 1		



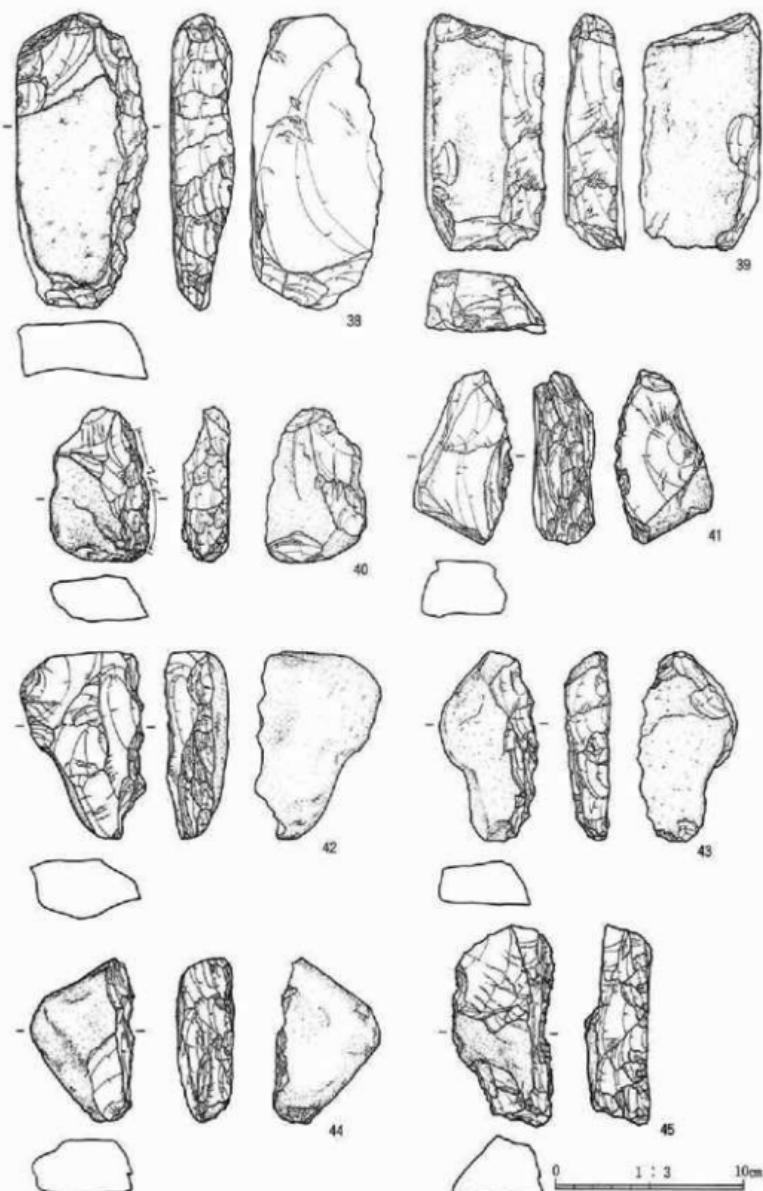
第86圖 石錐、打製石斧、磨製石斧



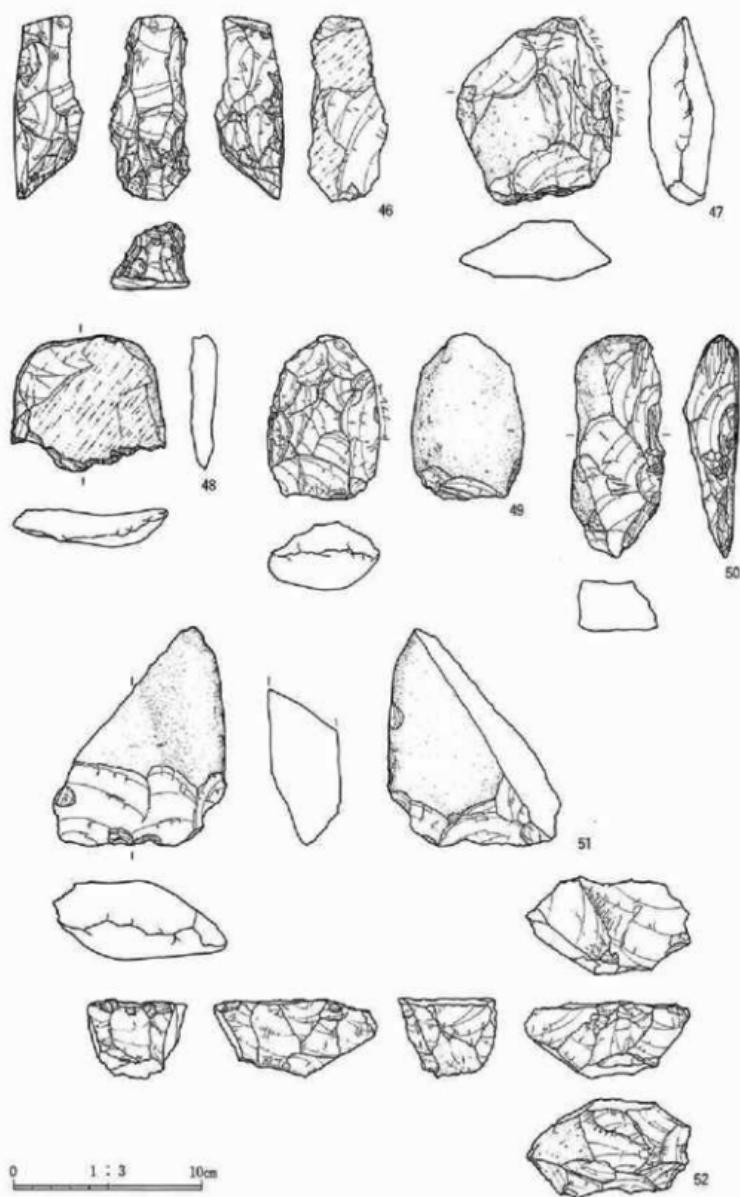
第87図 不定形剥片石器(1)



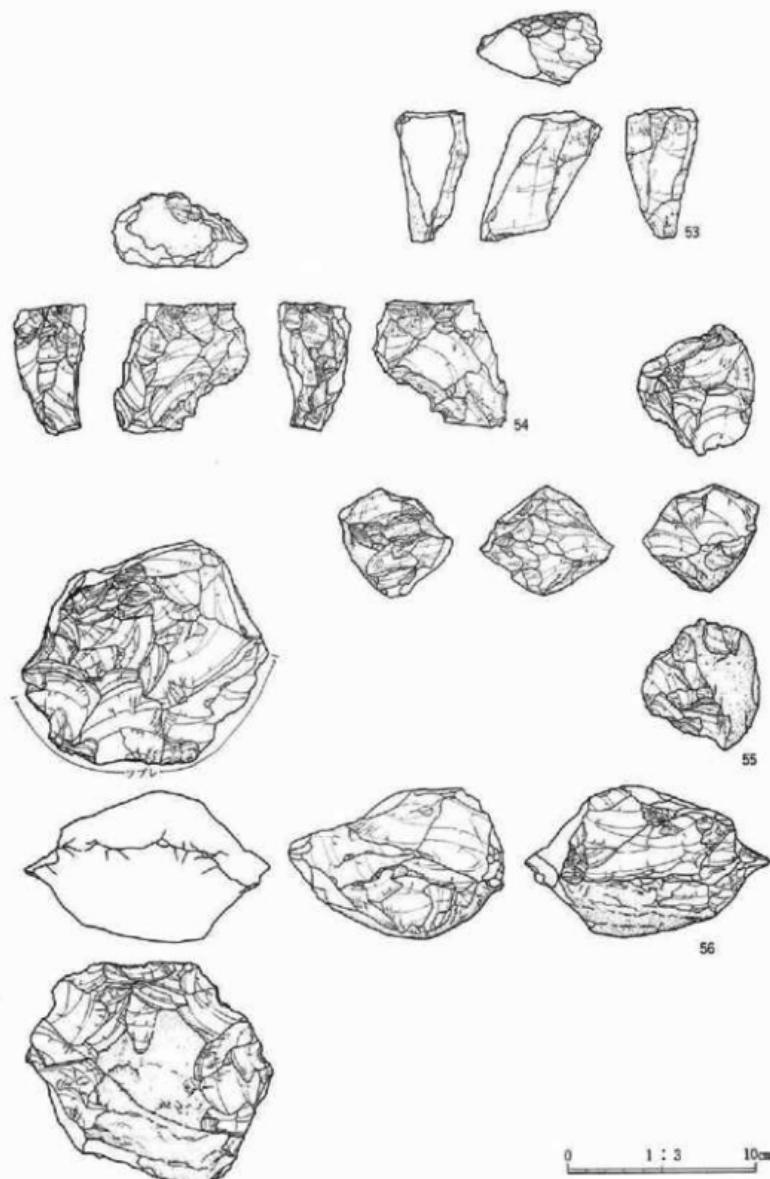
第88図 不定期剥片石器(2)・使用痕のある剥片



第89圖 遺器(1)

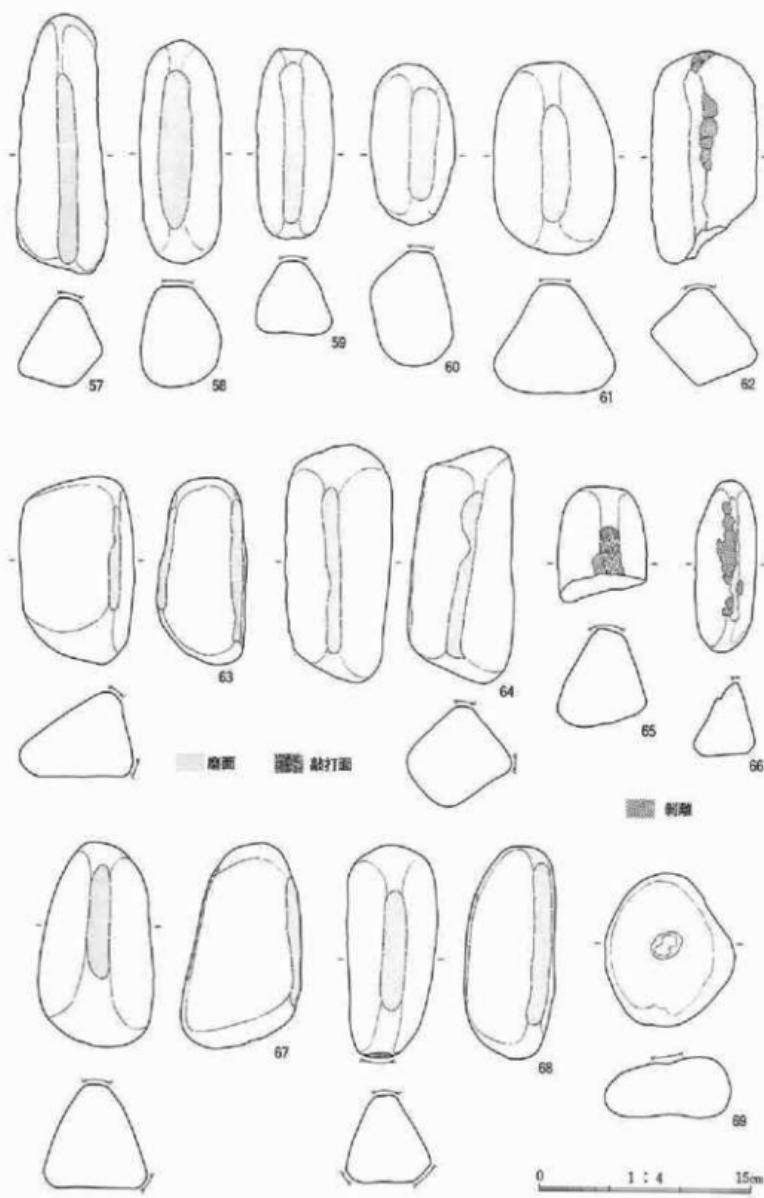


第90図 磨器(2)・石核(1)

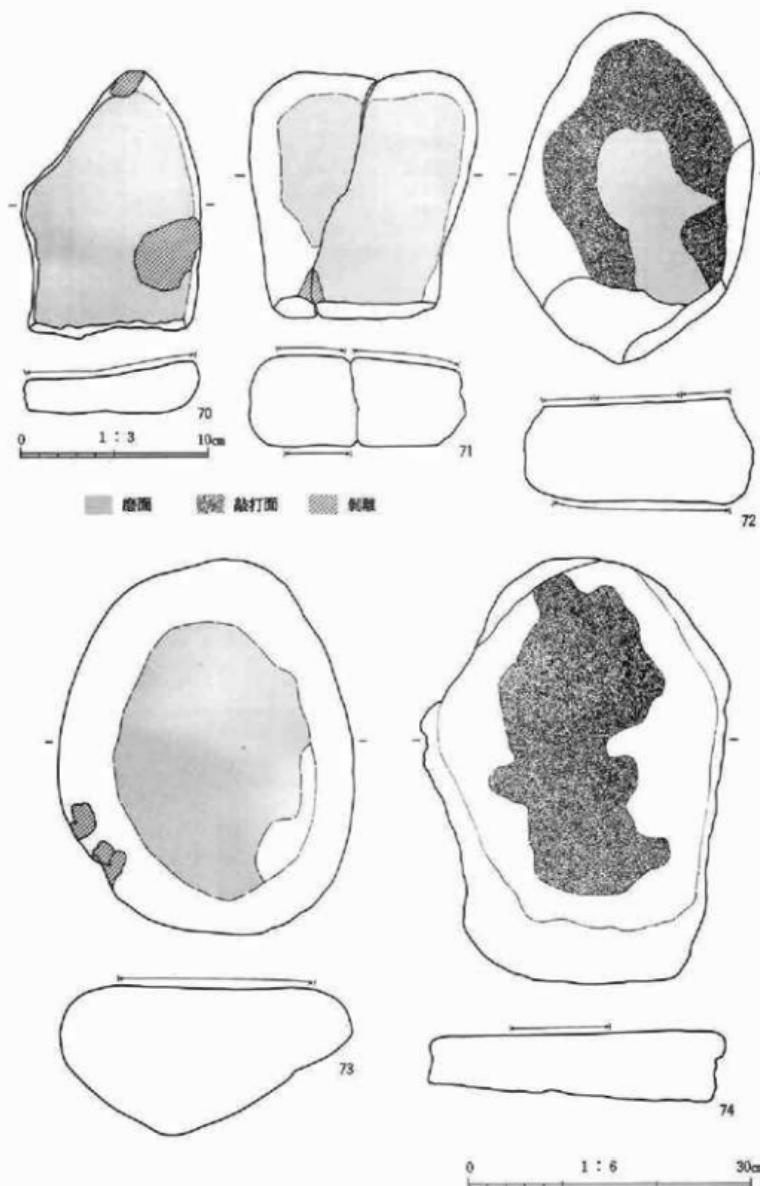


第91図 石核(2)

0 1 : 3 10cm



第92圖 特殊磨石



第93圖 石器・台石

第V章 調査の成果とまとめ

岩原I・上林塚遺跡では、前章まで述べたように旧石器時代から縄文時代後期にかけての遺物が多く出土したほか、六種類に分類された陥穴状土坑や下部に土坑を伴う配石などの遺構が検出されている。本章ではこれらのうちで両遺跡を特徴付ける遺構・遺物を取り上げて、その成果をまとめると共に若干の考察を加えることにする。

1. 陥穴状土坑について

陥穴状土坑の初見は考古学雑誌「御殿山墳墓群について」〔河野ほか1961〕であり、岩原I遺跡のF類に相当する土坑が「溝状遺構」として12基報告された。その特徴として①長さに対し巾が狭い、②上口面より溝底の両端に広がりがある、③遺物が全く発見されないなどが挙げられている。この溝状遺構がGトランプ(重力ワナ)の可能性があるとして、「Tピット」の呼称を初めて用いたのは函館空港遺跡第1地点の報文であり、その後、北海道中野遺跡〔今村ほか1977〕の報告を経て、「Tピット」という呼称が陥穴状土坑を代表する一形態(溝状遺構)として多用されるようになる。また、岩原I遺跡のD類に相当する楕円形土坑は、直良信夫氏により陥穴の可能性があると初めて指摘されて以来、民族事例などとの比較・検討が加えられ〔宮坂1968〕、神奈川県霧ヶ丘遺跡の報告〔今村1973〕を機に広く注目されるようになった。

県内では長岡市七軒町遺跡〔寺崎1978〕の報告以後、現在までに十数ヶ所の遺跡で確認・報告されている。特に板倉町峯山B遺跡〔秦ほか1986〕・湯沢町大刈野遺跡〔佐藤1988〕の報文では、検出遺構の詳細な分析と県内外の陥穴状土坑との比較・検討がなされている。

岩原I遺跡では、133基の陥穴状土坑が確認された。このなかで特徴的なことは、A・D類の土坑群が明確な列をなし確認されたことや、いわゆる「Tピット」がほとんど検出されなかつたことなどである。そこで、A・D類の土坑を中心に配列・規模・覆土などについて検討を加え、陥穴状土坑の特徴について考察したい。

A類と同型の陥穴状土坑は岩手県大堤II遺跡〔平井1987〕や大刈野遺跡をはじめ、県内外の幾つかの遺跡で確認されているが、一遺跡での検出例は少なく、本遺跡のように62基にも及ぶ土坑が列をなし確認された例は初めてと思われる。霧ヶ丘遺跡では既にA類に類似したものには検出されていたが、確認例が少なく注目されなかった。また、東北地方(特に岩手県)では「円形土坑・円筒型状陥穴」として報告されていたが、数十基にわたり列をなし確認された例はなかった。大堤II遺跡の報文ではこれらの土坑について、「現段階では積極的に陥穴でないとす

る論もない。」とし、消極的ではあるが陥穴状土坑の一形態としての可能性を指摘しているが、A類型土坑の研究はまだ日も浅くあまり注目されなかった。それは、一遺跡での検出例が少ないとから形態・配列などの全容が明らかにされず、遺跡全体からの検討が不可能であったからと思われる。また、遺物や獣骨などが検出されることがほとんどなく、陥穴かどうか決め得る十分な資料にも欠けていたのである。県内でも同様な状況であり、用途不明土坑として報告¹⁾されているものもある。

一方、D類型の陥穴状土坑は、北海道をはじめ東北・関東・中部・中国地方で多数確認されている。中には多摩ニュータウン No. 759遺跡一号土坑〔小坂井1982〕のように、土坑内から獣骨が出土した例もあり、陥穴状土坑の一形態としての資料が蓄積されてきている。

A. 配 列

A類 岩原I遺跡では南北に延びる台地を横切るように、等高線に沿って弧状をなして配列する。A類型土坑が列をなす例は岩手県内でも数例報告されているが、不明瞭な場合が多い。五庵I遺跡〔渡辺1986〕では81基の陥穴状土坑が検出されているが、このうちA類型土坑は34基確認できる。溝状タイプの陥穴状土坑が広範囲にわたり多数確認されているのに対し、A類型土坑は台地の縁辺部に偏って、約6~10m間隔で明確な列状をなさずに配置されている。また、桂平遺跡〔平井1986〕では36基の陥穴状土坑が検出されているが、A類型土坑は16基である。土坑間隔は一定せず配置にやや規則性を欠くが、沢の縁に沿うように比較的直線に並ぶ。大久保遺跡〔中村ほか1988〕では94基の陥穴状土坑が検出されており、このうち13基がA類型土坑である。傾斜地から沢への変換点で、等高線に沿うように存在する。このほか、単独もしくは複数検出されても規則性に乏しい例もある。川口I遺跡〔近藤1984〕では9基のA類型土坑が確認され、このうち7基が段丘面に対し直角に4~5m間隔で配置されているが、調査が遺跡の一部であり詳細は不明である。

他地域の例を見ると、鳥取県青木遺跡〔船越ほか1977・1978〕で75基の陥穴状土坑のうち、A類型土坑が26基確認できる。ここでも台地の縁に列をなし、台地を囲むように分布している。

県内では、大刈野遺跡でA類型土坑が10基確認できる。やはり等高線に沿うように、一列に並ぶ可能性が考えられる。

以上の例から、A類型の陥穴状土坑の配列をまとめると次のようになる。

- ① 台地縁辺部または沢を意識し、それらを囲むように配列する。
- ② 等高線に沿うように分布する。つまり、台地全体の傾斜に対し、土坑群列が直交するよう配列する。
- ③ 単独で検出される例もあるが、多くの場合、限定された地区に数基固まり存在する。

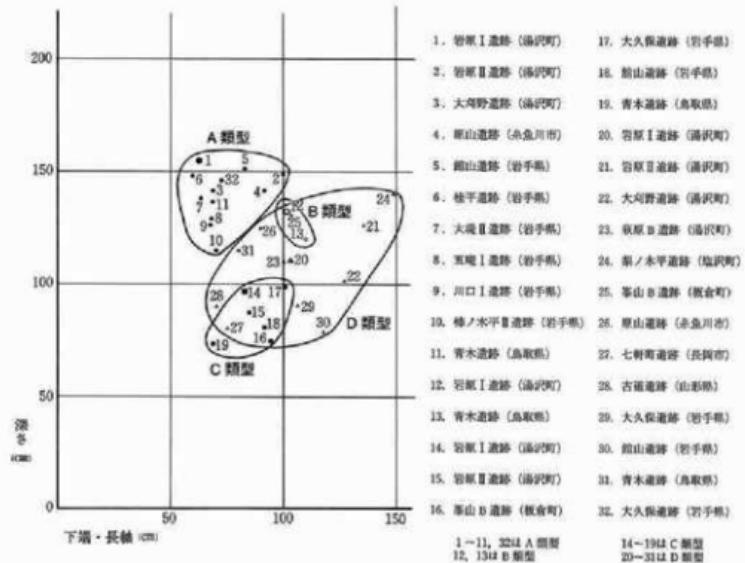
1) 糸魚川市原山遺跡〔寺崎1988〕で確認されたSK5なども、形状・配列からA類と思われる。

岩原Ⅰ遺跡の立地する台地は浅い小沢を挟んで、岩原Ⅱ遺跡〔佐藤1987b〕の乗る台地と一緒にをなし広い台地を形成している。その台地の縁辺部にあたるのが岩原Ⅰ遺跡であり、東側から傾斜してくる台地を受け止めるような位置に、A類の陥穴状土坑が配置されている。この配置は狩獵法と密接に関係するものと思われ、千葉県寺沢遺跡〔日本文化財研究所1977〕に見られる江戸時代の「大落し」のような形態であり、巻狩り式の追い込み獵用の陥穴の可能性が考えられる。

D類 D類の陥穴状土坑は岩原Ⅰ遺跡が乗る台地の西側縁辺部を、等高線の先端部のすぐ脇を結ぶように高位から低位へ(南北)一列に配置されている。しかも、土坑群列方向が、個々の土坑の長軸方向と直交する。A類の北側の一列とは並走しているが、南側の一列とは直交している。ただし切り合ってはいない。このような配列を見せる遺跡は少ないが、川口Ⅰ遺跡でD類型土坑が列をなし検出されている。やはり台地の縁辺部を等高線に沿うように、また土坑の長軸と直交するように配列されている。

県内では峯山B遺跡検出のD類型土坑が列をなすが、やはり尾根より幾分下を尾根に沿うように高位から低位に向か配列している。また、それぞれの長軸が列方向と直交する。

このように、D類型の陥穴状土坑は台地や尾根の高い所より幾分下に、長軸北側より高位から低位へ配列される。また、長軸方向が土坑群列に対し直交し、谷・沢の方向に向いている。D類型の陥穴状土坑群列を辿ると一条ないし二条のルートができる。これがいわゆる「けもの



第94図 各地における陥穴状土坑の法量分布

道」になる可能性もあり、その道に仕掛けた「ワナ」と考えられないだろうか。

B. 規 模

県内外の各遺跡で検出された陥穴状土坑について、その法量(下端長軸・深さの平均値)分布を第94図に示した。A類型は下端長軸50~100cm、深さ110~160cmの間に分布する。岩原I遺跡と岩原II遺跡を比べると、深さはほぼ同じであるが下端長軸は岩原I遺跡が半分近くである。岩原I遺跡と近い値を示すのは桂平遺跡である。B類型は検出例が少なく一般化はできないが、青木遺跡が岩原I遺跡に近い値を示す。岩原I遺跡のA類に比べやや浅いが、下端長軸は幾分高い値を示す。C類型は下端長軸・深さとともに70~100cmの間に分布する。A類型と比べると下端長軸はほぼ同じかやや大きい値であるが、深さはかなり小さい値を示している。D類型は下端長軸70~150cm、深さ70~140cmの間に分布する。深さにおいてはA類型とC類型の中間であり、下端長軸においてはA類型とC・E類型の中間である。つまり、D類型が規模において各類型の中間型といえる。¹¹⁾

各類型の陥穴状土坑の法量分布は、岩原I遺跡の分布状況と類似する。このことは、岩原I遺跡に限らず多くの遺跡において、陥穴状土坑の形態と規模の間には相関関係が存在することを物語っている。

C. 覆 土

陥穴状土坑の土層堆積を見ると、下層部でローム系埋土と黒色土系埋土が互層をなすものが見られる。この交互堆積の解釈については、人為的埋土説と自然堆積説の両者が存在する。人為的埋土の立場からは竹石健二氏〔竹石1980〕や野中和夫氏〔野中1985〕などが、坑底部の小ピットに立てられた棒状の物(逆茂木)を固定する為の埋め戻しと捉えている。これに対して菊池実氏は、自然堆積層であると把握しこの交互層が季節変化により生じたもので、陥穴状土坑が繰り返し使われた証拠であるとした〔菊池1987〕。同様の説は札幌S267・268遺跡の報文〔内村1977〕でも見られ、実際に越冬した土坑の崩落状態を観察し、寒暖の差の大きい北海道では風化が進み交互堆積が短時間に生じるとしている。

- 1) D類型は地域的な分布においても中間型といえる。D類型の陥穴状土坑が北海道から西日本まで広く分布しているのに対し、AおよびF類型は現在のところ分布が限られている。特にF類型の溝状陥穴は北海道・東北・関東の一部(D類型が多数検出されている多摩ニュータウンでF類型は確認されていない)・中部地方の一部で確認されているだけであり、西日本での検出例は今のところ認められない。この地域的偏りは時期差、狩猟対象獣の差、地域差など様々な要因が考えられるが、陥穴状土坑全般および機能との絡みで今後さらに検討が必要である。その際、分布・規模から標準型と考えられるD類型からの検討が重視されるものと思われ、同時に分布に偏りのあるF類型(溝状陥穴)にも検討を加える必要がある。

岩原 I 遺跡検出の土坑を見ると、上部のレンズ状堆積と下部の水平堆積とが区別できるもの(TPA-50など)がある。また、下部で黒色系埋土とローム系埋土が互層をなすもの(TPA-20・50、TPD I-4、TPE I-1など)もある。しかし、岩原 I 遺跡の土層観察からは人為的な埋め戻しか自然堆積か判断できるような資料は得られなかった。

D. 構築時期

構築時期を明らかにする方法としては①土坑内出土遺物、②他遺構との切り合い関係、③遺構内検出火山灰、④他遺跡との比較などからの検討が考えられる。しかし、岩原 I 遺跡では①に関しては遺構の性格から出土遺物が少ない、②に関しては遺構相互の切り合いがほとんどないという状況から、ここでは主に③・④の項目を中心検討する。

A 類は県内では岩原 II 遺跡・大刈野遺跡で検出されているが、構築時期は不明である。同類型の土坑が比較的多く検出されている岩手県内の例を見ると、五庵 I 遺跡では埋土が南部浮石(縄文早期降下とされる)や八戸浮石(旧石器時代降下とされる)を主としており、同遺跡で検出されている溝状土坑や D 類型土坑より古いとしている。また、桂平遺跡では中振浮石層(前期降下とされる)下で検出されていることから、前期またはそれ以前としている。このことは、大久保 I 遺跡でも同様である。このほか、大堤 II 遺跡の報文では、「掘り込み面が縄文前期に降下したといわれる中振浮石層より下位であり、縄文早期に降下した南部浮石層より上位であるから、縄文時代の早~中期であることは間違いない。」としている。岩原 I 遺跡では土坑内からの出土遺物は少ないと、検出される土器は早期の沈線文系・条痕文系土器が大半を占める。包含層出土の土器を見ると縄文時代早期終末から前期前葉のものが存在せず、この時期に岩原 I 遺跡の空白期の一つが存在する。陥穴状土坑という性格から考えると、この空白期は構築・使用時期に重要な示唆を与えているものと思われる。ここでは、岩手県内の例と合わせて、A 類土坑の構築時期を早期終末から前期前葉としておきたい。

次に D 類であるが、2 基(TPD I-6・9)の埋土中から火山灰が検出されており、これが大きな手掛かりとなろう。この火山灰は新井房夫氏の分析によれば「妙高山大田切火山灰」に対比され、縄文時代中期頃の降下物と考えられている。峯山 B 遺跡では D 類型の陥穴状土坑が、前期末葉~中期初頭の住居跡の地床炉下部に埋没していたことや、覆土中から前期前葉の羽状縄文土器片が出土していることなどから、前期前葉以降前期末葉の構築をしている。また、大刈野遺跡では D 類型土坑を、早期後半~中期前半の所産としている。岩原 I 遺跡では覆土中からわずかながら条痕文系土器を主体にした遺物(ほかに前期後半・中期前葉の土器が認められる)が検出されているが、絶対数が少ないと複数時期の遺物を含んでいる点で、有効な時期決

1) 早津賢二氏からは同試料を実見の結果、むしろ「妙高山赤倉火山灰」(早~前期降下)に対比される可能性が強いとの御教示を受けている。

定の材料とは成り得ない。覆土中検出の火山灰の時期決定が大きな鍵を握るが、上記他遺跡の例を合わせて早期後半から中期前葉の所産と位置付けておきたい。

C類の土坑内からは早期条痕文系土器片が出土しているが、やはり時期を決定し得る資料とはいせず、時期不明である。E類についても同様で、類例がほとんど認められない現状から、時期は不明といわざるをえない。

F類の中の溝状土坑は、県内外で多数検出されている。大堤II遺跡では「溝状陥穴は中深浮石層より上位の層から掘り込んでいることから縄文中期以降としかいえない」としている。また、A類型との関係では「A類型→溝状」としている。峯山B遺跡では前期末葉～中期初頭の住居跡を切っていることから、中期前葉以降の構築をしている。D類型との関係では「D類型→溝状」としている。十日町市つじ原B遺跡〔阿部ほか1979〕では、中期前葉と後葉の住居跡を切っている。大刈野遺跡では溝状土坑を中期前半～後期前半とし、D類型との関係を「D類型→溝状」としている。青森県鶴庭遺跡〔福田ほか1982〕では中深浮石層との関係や出土土器、住居跡との切り合いから、前期前葉～後期初頭と考えている。このように溝状土坑については、前期前葉から後期前半までの時期が与えられているが、いずれも他遺構との切り合い関係や火山灰などから、ほかの類型に比べて時期が明確な場合が多く、比較的長期にわたって使用されていた形態と考えられる。

以上、各類の陥穴状土坑の構築時期を考えてきたが、それぞれの類型が単一時期に構築されていたものと解釈するには早々にすぎる感があり、今後さらに検討していく必要があろう。

2. 縄文時代早期の土器について

岩原I遺跡・上林塚遺跡で出土した縄文時代早期の土器は多形で、いずれも県内の編年を考える上で重要な位置を占めるものと思われる。ここでは押型文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器を取り上げて、それぞれの特徴を明確にした上で編年的な位置付けを考えてみたい。なお、両方の遺跡から出土しているものについては、まとめて記述する都合で遺物No.の前に「i」(岩原I遺跡)および「j」(上林塚遺跡)を付して区別し、数字だけのものは第95図に対応する。

A. 押型文系土器

出土数は岩原I遺跡(第I群2類土器)177点、上林塚遺跡(第II群土器)74点の計251点である。それぞれの遺跡での文様種を見ると岩原I遺跡では山形文+捺円文(異種併用)、山形文、捺円文が存在するが、前二者はi24・i25のみでほかはすべて横位密接施文の捺円文(98%)である。また、上林塚遺跡では山形文(31%)、捺円文(66%)、格子目文(3%)で、前二者には横位帶状施文のものが存在するなど両遺跡での様相は著しく異なる。報告では基本的に文様の種類で分類

したが、文様構成によって以下のパターンにまとめることができる。

1型……綾位に密接施文すると思われるもの。〔上林塚遺跡第II群1類B(j44~j50)〕

2型……基本的に横位に帯状施文されると思われるもの。〔上林塚遺跡第II群1類Aの一部(j40~j41)、2類A(j51~j60)〕

3型……基本的に横位密接施文されると思われるもので、異種文様を併用するもの(a)と單一種文様のもの(b)に分けられる。〔a. 岩原I遺跡第I群2類A(j24)、b. 岩原I遺跡第I群2類B・C(j25~j53)、上林塚遺跡第II群1類Aの一部(j34~j39・j42~j43)、第II群2類B(j61~j87)、第II群3類(j88~j89)〕

新潟県内で押型文土器が検出されている遺跡は68ヶ所〔佐藤1987a〕を数えるが、文様構成の判明するものについて見ると、基本的に上記の三パターンで考えることができる。ただ発掘調査の実施された遺跡は数える程で、その大半は表採によるために資料的には安定した数を得られず、また伴出土器なども不明な場合が多い。なお、これらのパターンについては、中村孝三郎氏がA-Cの三様式として分類したもの〔中村1966〕と基本的に同じで、それぞれ1型・2型・3b型にあたる。

県内の押型文土器の様相

ここでは各パターンについて県内の様相を概観し、それぞれの特徴を明確にして見たい。

1型 上林塚遺跡以外には、卯ノ木遺跡(3)と室谷洞窟(1・2)で計3点が確認されているのみで、資料的には極めて少ない。文様種は山形文のみで、ほかのものは認められない。ほとんどが小片のため明確ではないが、口縁部資料(j44・1・2)から考えて口縁部直下から綾位に密接施文されるものと思われる。山形文の種類には山形の作る角度が直角に近いもの(j44・j46・j48・1・2)、山形の波形が緩いもの(j45)、大振りな山形で角度が鋭いもの(j47・3)が見られる。これらの土器は立野式として認識されてきた土器群の一部に相当するものと思われるが、立野式そのものの編年的位置付けが定まっておらず¹⁾、新潟県の押型文土器を考える上でも問題となるものである。

2型 宮林B遺跡〔佐藤1987a〕の復元土器(4)や、卯ノ木遺跡の一条・二条の連続菱目文土器(16~18)に代表されるもので、桶沢式および細久保式土器の一部に相当すると思われる。文様種には山形文(j40~j41・4・5)、格子目文(6・7~11・穴川遺跡〔胸形はか1988〕など)、梢円文(j51~j60・12・柳田遺跡・下蟹沢遺跡・下原遺跡〔新潟県1983〕など)、連続菱目文(14~25)の四種が確認されるが、異種文様を併用するものは見られない。また、無文帶の幅が一様でなく比較的狭くなる傾向が認められ、原体の長さは1.5~2cmと短い。実際に算出したわけではないが、3b型と共に資料数が多いようである。

1) 片岡 勝氏〔片岡1972〕などに代表される立野式→桶沢式とする説と、岡本東三氏〔岡本1982〕などに代表される桶沢式→立野式→細久保式とする説に大きく分けられる。

3a型 卵ノ木遺跡の併用押型文土器として分類されたもの(26)に代表され、異種文様の横位密接構成を持つものである。ほかには岩原I遺跡(i24)、通り山遺跡(27)、松ヶ峰遺跡(29・30)で検出されている。口縁部からの文様構成が判明する例(26・i24)を見ると、楕円文→山形文が二回繰り返されるものと思われ、原体の長さは5~6.4cmと2型に比べて長い。このほかの文様組み合わせとしては、楕円文+水平条痕文の土器が卯ノ木遺跡(31)や下蟹沢遺跡(32・33)がわずかに認められる。3a型は細久保式の古段階に比定されている。

3b型 基本的に單一種文様による横位密接施文で、山形文(i34・j35・j36など)、格子目文(j88・j89・松ヶ峰など)、楕円文(i26・i48b・j63・j64・37・桜田・穴川など)、ネガティブの楕円文(通り山)が見られるが、楕円文が圧倒的に多い。ただ、細片が多く3a型の胴部片をかなり含んでいる可能性も考えられる。細久保式土器を構成する要素の一部に相当する。

このほか、上記のパターンに含まれないものとして、長表遺跡出土の楕円文土器(28)が上げられる。報告では不規則走行の楕円文として捉えているが、楕円文の横位密接施文の後に、異なる原体の楕円文(原体は短い)を複数に帶状施文しているものと思われる。埼玉県西大宮バイパスNo.4遺跡〔山形ほか1986〕や如来堂C遺跡〔宮崎ほか1980〕で確認されている程度で、類例は極めて少ないものである。また、東北地方の日計式押型文土器が通り山遺跡(39)と犀山遺跡(40)で1点ずつ検出されている。

編年的位置(第95回)

新潟県内で検出されている押型文土器の中で、数量的に中心を占める2型・3a型・3b型については、いずれも橿沢式・細久保式土器を構成する要素に含まれることから、ほぼ橿沢式→細久保式の時間枠の中で整理されるものであろう。押型文土器の編年位置付けは、沢・橿沢式→細久保式についてのみ考えれば、研究者の間で現在ほぼ一致した見解として認められているものである。しかし、これらの土器型式には共通する文様構成が認められることなど、再検討の必要性や細分の可能性が指摘されてきた。中島宏氏は文様構成や施文原体の変遷から、従来の橿沢式および細久保式土器を再編成している〔中島1986〕。それによれば、橿沢I式：横位および直交する帶状構成で無文部を大きく残すもの。従来の沢式土器〔大野ほか1967〕をマルクマールとする。原体長は1.5cm前後にまとまる。橿沢II式：文様構成はI式と同様であるが、無文部が狭くなり密接化の傾向を強めたもの。新たに無文部をわずかに残す横位帶状構成ものが見られるようになる。原体長は2~3cmと長くなる。細久保式：従来の細久保式の中で全面密接施文するもの。基本的には横位施文であるが、不規則施文のものも見られる。卯ノ木遺跡

1) 水平条痕文について報告〔中村1963〕では、「楕円文原体を廻転せずに斜横に押引きしたもののように見られるが判然としない。」とされている。写真および拓本を見る限りは、平行線を刻んだ原体を回転施文したように見受けられ、直接現物を観察された小熊博史氏からも上記の可能性が強いという見解を伺っている。下蟹沢例も同様であろう。

の異種文様を横位密接施文する土器などもここに含めて考えており、原体長は3cm以上とさらに長くなる。これらは、桶沢遺跡や橋原岩陰遺跡などの層位的事実によっても裏付けられており、全体の流れから見れば型式学的にも妥当なものと考えられる。¹⁾

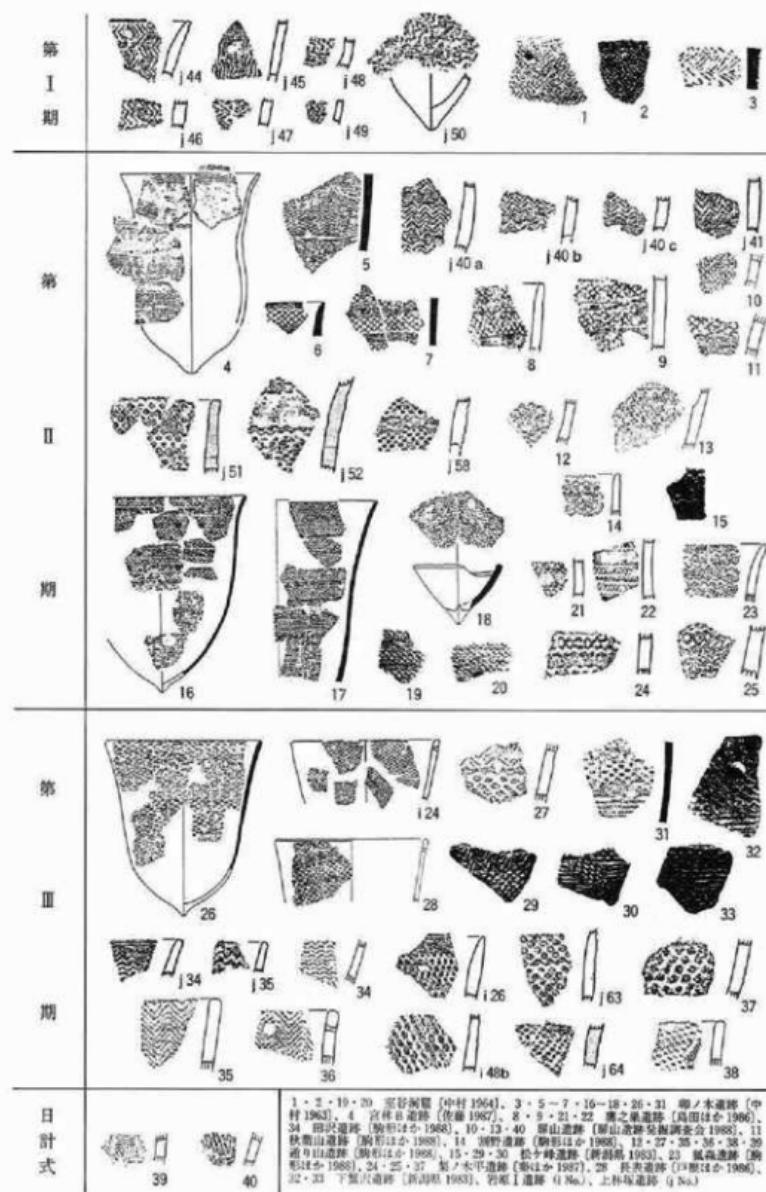
以前、佐藤雅一氏は県内の押型文土器を、資料的にまだ不十分としながらも第Ⅰ期：発生期としての立野式段階、第Ⅱ期：拡散期としての桶沢式段階、第Ⅲ期：地域特性の認められる細久保式段階の三期として大枠で捉えている〔佐藤1987a〕が、各期の具体的な内容には触れていない。ここで岩原I・上林塚遺跡を加えた県内の資料によって、各期を検討して見たい。

第Ⅰ期 山形文の縦位密接施文を持つ1型をもって本期とする。いうまでもなく、山形文の縦位密接構成は立野式を特徴付ける重要な要素の一つであり、j44のように帯状部の接する部分に四角形の文様を描き出すやや特異な山形文は、立野遺跡〔松島1957〕でも顕著に認められるものである。しかし、立野式を構成する文様要素の一つとしての市松文などが、現時点において県内では明瞭に認められることや、1型自体の資料数も極めて少ないと問題が多い。先にも述べたように、立野式そのものの編年的な位置付けが研究者間で定まっていない現時点で、本土器群をもって第Ⅰ期とすることに疑問を感じないわけではない。しかし、静岡県若宮遺跡〔馬飼野ほか1983〕や長野県福沢遺跡〔小林ほか1985〕などの調査例では、桶沢式の帯状構成を持つ土器群の下層から、縦位密接構成の山形文土器が検出されるという層位的事実が明らかになっていることや、奈良県大川遺跡の帯状構成土器の位置付けに関する考察〔松田1989〕などから立野式→桶沢式という編年関係を支持したい。一応1型をもって第Ⅰ期としておくが、今後資料の増加を待って再検討しなければならないであろう。

第Ⅱ期 横位帯状施文の2型をあてる。中島氏のいう桶沢Ⅱ式の一部に相当するが、直交する帯状構成のものが認められない。最近、長野県八雲遺跡の報告において立野式から細久保式に至る山形文の変遷を、縦から横構成への変化として捉える仮説が示された〔近藤1988〕。これに従えば無文部の幅が狭くなる桶沢Ⅱ式の中でも、より後出的なものと考えることができよう。ただ、宮林B遺跡例は無文部の幅がほかに比べて広いことや、口縁部内面にも山形文を横帯施文することなどから、桶沢Ⅰ式の影響を強く残しているものと思われる。

さて、ここで問題になるのが卯ノ木式として理解されてきた、一条・二条の連続菱目文土器編年的位置付けと系譜であろう。従来、卯ノ木式の編年については異なる二つの見解が示されている。駒形敏朗氏らは文様の組み合わせにおいて、楕円文を主体とする遺跡が多いことや貝殻文土器を伴う例が多いことなどから、桶沢式から細久保式へ変遷する中での、細久保式の特殊例として理解する意見を支持している〔駒形ほか1986〕。文様種組成の中で楕円文の占める割

1) 桶沢Ⅱ式に含めた細久保式の一部(無文部を残すもの)については、「桶沢式に見られる構成法であるが、桶沢式そのものではないといえよう。」という指摘〔松島1957〕があるように、細久保式から安易に引き離して型式名を設定することには疑問を感じる。



第95図 新潟県内における押型文土器変遷(案)

縮尺不同

合が大きいことは、細久保式の特徴の一つとして知られており、大枠としての位置付けでは賛同できる。ただ、集成では連続菱目文を格子目文に含めてほかの文様種との組み合わせを考えているが、より細かな編年的位置を考える場合には有效とはなり得ないであろう。むしろ帶状施文を意識として強く残していることの方が重要であり、しかも無文部の幅が0.6~3.6cmと不規則で、より密接化の傾向を強めていることなどの観点から考えるべきであろう。ここでは、第II期の中でも山形文の横位帯状構成を持つ宮林B遺跡例の次の段階として考えたい。絶対的な資料数が不足している現時点では難しいとも思えるが、実際には卯ノ木遺跡や鷹之巣遺跡での文様種組成を見ると、横位帯状施文の格子目文・梢円文を伴う例が多いようであり、文様構成を踏まえた文様種の組成について検討する必要があろう。

次に連続菱目文土器の系譜について考えると、先に挙げた帯状構成から非帯状構成へという文様構成の変遷の中から、はたして発生し得るものか疑問である。むしろ横位帯状構成の文様種としての格子目文や梢円文などからの変化と考えられないだろうか。上林塚遺跡の出土土器中に、原体長が1.2cmと非常に短い横位帯状施文の梢円押型文土器(151)が1点認められる。梢円文そのものは菱形に近いもので二段確認され、梢円文間のネガタイプな部分は格子目状を呈する。一見すると卯ノ木遺跡の一条連続菱目文土器に似た印象を受け、松ヶ峰遺跡や割野遺跡で認められる変形梢円文ともいえる土器(14・15)を経て、連続菱目文土器へ移行していく可能性を考えたい。押型文土器文化の中心地である中部高地や、近年資料数の増加している関東地方の北西部でも、上林塚遺跡例や松ヶ峰・割野遺跡例は確認できず、連続菱目文土器自体が新潟県内でのみ検出されているという事実から、本県を中心とした比較的狭い地域で発生・展開したものであろう。明確な根拠はないが、ひとつの可能性として指摘しておく。

第III期 横位密接構成の3a型および3b型をあてる。従来の細久保式の中で中段階に位置付けられる学問型類型(片岡1982)に相当するもので、格子目文については單一種で密接施文するもの(3b型)は認められない。

3a型の土器については長野県下や群馬県・埼玉県でもわずかに認められるが、資料数は非常に少ない。橋沢遺跡[戸沢ほか1987]の梢円文Gタイプに見られる、口縁部に山形文を横帯施文して以下に梢円文を横位帯状施文するものが、横位密接化する中で変化した[中島1986]と考えるのが妥当であろう。しかし、文様効果としては單一種文様の横位密接構成(3b型)に比べて、より帯状を意識させることから3b型に先行する要素が強いものとも考えられる。

また、長表遺跡例(28)は一見すると、橋沢I式の直交する帯状構成の系譜を引くように感じられるが、梢円文の横位密接施文を基本とする点で異なる。報告では卯ノ木遺跡(3a型を指す

1) 可見通宏氏は施文原体の分析から、山形文→連続菱目文→格子目文という変遷過程を考えられている[可見1969]。しかし、この考えには橋沢式→細久保式→立野式という編年觀が前提として存在する点で、大きな問題を含んでいると思われる。

のか?)より古く位置付けているが、橢円式から細久保式への文様構成の変化を帶状→密接→不規則と考えれば、むしろ不規則施文化の前段階として捉えられるのではないか。ここでは、第III期でも3a型の次に位置付けておきたい。

伴出土器は不明な場合が多いが、岩原I遺跡では平面的な分布傾向として田戸下層式土器との共通性が認められている。

以上、県内の押型文土器を三期に分けて概観してきたが、資料的にも少なく層位的裏付けもない現状から、あくまで文様構成に主眼を置いたものであることを明記しておく。しかし、押型文土器様式は橢円式から細久保式については、各段階を通じて地域を越えて比較的齊一性が強いもの〔中島1987〕として認識されており、長野県下での層位的事実から考えても第II期と第III期が逆転するほど大きな変更はないものと思われる。ただ残された問題は多く、たとえば橢円式(中島氏の橢円I式)に特徴的な直交する帯状施文や、細久保式の新段階と考えられている橢円文の不規則密接施文のものが、現時点で明瞭に認められないことは、県内の押型文土器の消長を考える上で注意を要することである。また、各期の一部が時間的に併行(卯ノ木遺跡の一括性など)する可能性は十分考えられ、今後資料の蓄積と層位的事実の裏付けおよび沈線文系土器など伴出遺物の検討によって再考していく必要があろう。

B. 沈線文系土器

ここでいう沈線文系土器とは、関東地方の初期沈線文土器としての竹之内式、およびそれに続く三戸式・田戸下層式・田戸上層式土器を指すものである。現在、各型式内での細分やその前後関係はともかくとしても、大枠の編年関係ではほぼ一致した見解と考えて良いであろう。

岩原I・上林塚遺跡では合計633点の沈線文系土器が出土しているが、県内で初めて明確な形で竹之内式・三戸式土器が捉えられたほか、田戸下層式に比定されると思われる土器群が比較的まとまって出土するなど、その持つ意味は大きい。ここでは、両遺跡において文様要素や施文技法などによって分類したものを、共通する特徴毎にまとめてその編年的位置について考えて見るが、いずれも県内の類例に乏しいため他地域との対比を中心に検討する。

竹之内式期 岩原I遺跡の第II群1類(A(i54))が、本期に比定されるものと思われる。竹之内式土器は、従来稲荷原型三戸式土器〔山田ほか1981〕として捉えられていたものを、三戸式と分離してその直前に一型式を設定したもの〔馬目1982〕で、文様の特徴は平行沈線文を区画文とする横位多段構成にある。区画文の内部には格子目文や斜線文などが充填され、口唇部の断面は円頭状や外削ぎ状となるものがある。竹之内遺跡では直交する帯状施文の山形押型文土器(押型文第II期併行)とセット関係にあったと認識されている。i54は基本的な文様構成や比較的浅い細沈線による施文、胎土などは竹之内式土器と共にるものであるが、いくつかの点で相違が認められる。まず、口縁部直下に沈線と爪形の刺突列を交互施文する点であるが、竹之内式

ではほぼ例外なく三~四条の平行沈線文帯になっており、刺突などを加える例は見られず、次の三戸式段階〔岡本編1982〕になって口唇部直下に、平行沈線文と刺突列を交互施文するものが出現していく。次に、横位平行沈線文によって区画された内部の施文について見ると、鋭いタッヂの細沈線によって比較的密に文様を充填するものが多いのに比べ、本例は表面が磨耗していることを差し引いても、全体にやや間延びした印象を受ける。しかし、竹之内式と三戸式を峻別する概念規定の中で、横位多段構成が主な要素としてあげられていることから、竹之内式段階に比定することには問題がないと思われる。ただ、三戸式段階に出現する文様要素を合わせ持つことを考えると、より三戸式土器に近い段階の可能性も考えられる。

三戸式期 上林塚遺跡の第III群1類A~E(j90~j95・j97・j99)と、第III群5類(j121)が本期に比定されよう。1類土器はいずれも胎土に微細白色粒を多く含むことや、器厚が7mm前後と薄いこと、内外面のナデ調整が比較的丁寧なことなどを特徴とする。口唇部の断面形態は内削ぎ状のもの(j90)、円頭状のもの(j95)、角頭状のもの(j99)が見られすべて平縁である。これらの口唇部形態はいずれも三戸式土器に存在しており、特に内削ぎ状のものは三戸式土器に特徴的なものとして捉えられている。文様構成によって五種に分類されるが、1類Bと1類Cは上下の横位平行沈線文によって区画された内部に施文する点から見れば、同一種と考えても良いであろう。この結果、1類Eを除いて大きくは区画文を持たないもの(1類A・D)と、区画文を持つもの(1類B・C)に分けられる。文様の種類では前者に帶状平行沈線文と斜格子目文が、後者には帶状格子目文・平行沈線文が見られる。領塚正浩氏は三戸式土器を細分する中で、三戸式土器に特徴的な文様として帶状の格子目文・平行沈線文・斜線文をあげられている〔領塚1987b〕。この中で格子目文と斜線文は区画内文様として単独で用いられるが、平行沈線文については単独で用いるものと、区画文を持たずに横位平行沈線文を地文とするものが存在すると指摘されており、上林塚遺跡例もこの傾向に一致するものである。

1類D(j95)は細沈線によって細長い斜格子目文を描き出すもので、千葉県庚塚遺跡の第I類1e種〔栗田ほか1987〕に類例が見られ、比較的小形の土器に多いようである。また、1類E(j99)は口唇部直下の横位平行沈線文に、縦位の平行沈線を加えることによって格子目状を呈しているが、基本的には区画文と考えられ1類Bと同様な文様構成をとるものであろう。第III群5類土器は、一見すると粗い器面調整を施した無文土器のように見えるものである。従来、凹線文土器などと呼ばれて三戸式土器の中でも、細沈線文を主体とする土器と区別されてきたものであるが、石橋宏克氏は千葉県中山遺跡出土の三戸式土器を考える中で、文様の特性などから太沈線文土器という呼称を提唱し、その特徴をまとめている〔石橋1988〕。そのうち、特に胎土に長石・石英粒を多量に混入する点や、内外面の整形技法、沈線の施文技法などにおいて

1) 現に当初は無文土器として分類していたものであるが、石橋宏克氏(千葉県埋蔵文化財センター)の御教示により沈線文系土器群としたものである。

本例との共通性が認められる。胎土については、本遺跡のほかの三戸式土器が微細白色粒を多く含む点で特徴的なものに対して、極めて対象的である。先にも述べたが沈線の浅いものは無文土器として、またやや深いものは田戸下層式土器として分類される可能性もあり、今後注意を要する土器であろう。

県内の三戸式土器の検出例は、室谷洞窟の第3層で細片が2点ほど確認されている〔中村1964〕のみであるが、このうちの1点は内削ぎ状の口縁部で、文様は1類A(j90・j92)もしくは1類Bの一部(j93)に類似するものと思われる。

田戸下層式期 岩原I遺跡 第II群1類B(j55~j62)、第II群2類(j63~j66)、第II群3類A(j67~j93・j103・j104)と、上林塚遺跡の第III群1類F・G(j96・j98・j100~j102・j106)、第III群2~4類(j103~j105・j108~j120)が本期に相当するものと思われる。竹之内式期や三戸式期の土器に比べて、やや大粒の白色砂粒を含むものやはとんど含まないものなどが見られ、胎土からも区別される。口縁部形態では平縁のほかに小波状を呈するものが現われ、器厚も8~11mmと厚くなるものが多い。文様構成は破片資料のため明確ではないが、大きくは横位の区画文を持つもの(岩原I遺跡第II群1類Bや上林塚遺跡第III群1類F)と区画文を持たないもの(岩原I遺跡第II群3類Aや上林塚遺跡第III群2類)に分けられる。

田戸下層式土器の細分については、従来の文様要素や施文手法重視の傾向から、文様構成を中心とした考えに変化してきた。特に文様帶の消長に視点を置いてその細分を試みた、西川博孝氏〔西川1987〕や領塚正浩氏〔領塚1987a〕の論考は、細部では異なるものの文様帶の捉え方など基本点ではほぼ一致しており注目されるものである。それによれば、j57・j58のように区画文としての横位平行沈線間に刺突を加えることや、区画内に鋸歯状の沈線を施文し、これによってできた空間に刺突文を充填することなどは、田戸下層式の新段階の特徴の一つとして考えられている。また、区画文を持たないグループは千葉県新東京国際空港No.14遺跡〔西山ほか1983〕や千葉県城ノ台北貝塚〔吉田1955〕などの、器面全体に縱位に展開する鋸歯状の沈線文から変化してきたものであろうか。

県内における田戸下層式土器は、室谷洞窟第3層から比較的まとまって出土しているほかには、中魚沼郡を中心とする山間部などでわずかに見られる程度である〔胸形ほか1987〕。

田戸上層式期 岩原I遺跡 第II群3類B・Cおよび第II群4~5類を本期とする。いずれも胎土に白色細砂粒の混入が少ないと、褐色を呈するものが多いことなどから先行する各期のものとは明瞭に区別される。また、分布域においても先行型式のものとは、200m以上距離をおいて分布している事が判明している。

新潟県内における田戸上層式期の土器は、先行する各期に比べると多くの遺跡で検出されているが、いずれも資料数は少なく伴出土器なども不明な場合が多い。田戸上層式土器の文様の特徴としては、細沈線や隆線・刺突などによる入組み状や藤手状の曲線文があげられるが、こ

これは北海道を除く関東地方以北の東日本に、広汎な分布を示すもの〔原塚1978〕といわれている。しかし、本県では一部(卯ノ木遺跡など)を除いて曲線的な文様は発達しておらず、第II群3類Cや糸魚川市岩野E遺跡〔高橋ほか1986〕の第II類-aに代表されるように、基本的に直線文の組み合わせによる幾何学的な文様が多いことで様相を異にする。また、第II群4類は田戸上層式併行期もしくは直後段階に位置付けられるもので、平行沈線間に貝殻腹縁文を充填することを特徴とする。室谷洞窟の報告以来、県内では貝殻腹縁文イコール常世I式とする傾向が強く、その後資料数が少ないこともあって詳細な検討がなされることはなかった。佐藤雅一氏は川口町西倉遺跡の第II群土器を考える中で、県内の田戸上層式期の土器と常世I式とを比較していくつかの相違点をあげ、貝殻腹縁文を施文する土器を安易に常世式に比定することに対して、暗に注意を促した〔佐藤1988〕。確かに常世I式では刺突を伴った平行沈線文で区画された内部に、長めの貝殻腹縁文を充填するものが主体で、それに比べて第II群4類は幅の狭い平行沈線間に充填されており、それ自体が区画文となったり幾何学文様を描く要素となるように見受けられる。ただ、i132のように常世I式に類似する施文手法を持つものが存在することも事実で、先の第II群3類Cの例と合わせて本期の複雑な土器様相の一端を示しているものと考えられる〔佐藤1988〕。ちなみに、第II群3類Bは二本同時施文の平行沈線文を主体とし、貝殻腹縁などによる刺突文を伴わない点などから西倉遺跡の第II群土器に類似するもので、在地系の土器群として認識されている。

C. 条痕文系土器

岩原I遺跡の中心的位置を占める土器群(第III群土器)で、総数1,698点が出土している。関東地方では子母口式・野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式の順で型式名が設定されている前半期と、南関東を中心とする打越式・神之木台式・下吉井式などに代表される後半期に分けられている〔岡本1982〕。最近では資料の増加に伴い主に型式学的な観点から文様の変遷を捉え、それぞれの中での細分が検討されてきている。岩原I遺跡ではこのうちの前半期に属すると思われるものが主体で、縦条体圧痕文土器の中にわずかに後半期に位置付けられるものが見られる程度である。報告では基本的に文様を構成する要素によって分類し、さらに施文技法や工具によって細分してそれについて説明を加えたが、ここで胎土などを含めて共通要素を有するものをまとめ、その特徴を明確にした上で編年的位置付けを考えてみたい。

第III群1類土器 縦条体圧痕を施文することで特徴的なものであるが、文様や胎土などの諸特徴から明瞭に二分される。①1類A・Bのように胎土に多量の纖維を混入し、器厚が8~11mmと厚手となるもの。文様の特徴からさらに、縦条体圧痕文で文様を構成する加飾性の強いもの(B)と、口唇部を中心に施文しそれ自体で文様を構成しないもの(A)が見られるが、器面に現われる圧痕の幅はいずれも6~11mmと太い。②1類C~Eのように胎土に纖維を全く混入しない

か混入してもごく少量で、器厚が5~7mmと薄いものである。圧痕の幅は2~3mmと細く、①に比べて繊細な感じを受ける。

絡条体圧痕文はその文様自体が非常に特徴的なこともあって、山内清男氏の『日本先史土器図譜』における子母口式の説明〔山内1941〕以来、子母口式土器を代表する文様要素として認識される結果となり、多くは詳細な検討もなされないまま子母口式に比定される傾向が強かった。しかし、1960年代以降その型式内容や絡条体圧痕文の系統などについて、様々な観点からの再検討が多くの研究者によってなされた。また、長野県下や南関東における近年の発掘成果によって、早期末葉の東海系土器を伴う絡条体圧痕文土器の存在が明らかとなつたことなどから、現在では子母口式・野島式段階と茅山下層式以降の二時期に絡条体圧痕文土器が存在すると考えられている。新潟県内でも最近の開発に伴う発掘調査によって、魚沼地方を中心とする早期末葉に比定される絡条体圧痕文土器の検出例が増加しており、これらについて佐藤雅一氏〔佐藤1987c〕や小熊博史氏〔小熊1989〕などによる論考が発表されている。特に中魚沼地方の資料を整理して、長野県や関東地方との比較・検討によって県内の絡条体圧痕文土器の編年を考えた小熊氏の論考は、それ自体に注目される内容を含んでいることはもちろん、新潟県内の早期土器の一様式について初めて体系的にまとめた点でも大きな意味を持つものであろう。

ここで小熊氏の編年的位置付けに従って、岩原1遺跡の絡条体圧痕文土器の①について考えて見る。まず氏は県内の早期末葉の絡条体圧痕文土器を、型式学的な見地から初現の段階(堂尻タイプ)、展開の段階(穴川タイプ・駒返り十二社タイプ)、終末の段階(屋敷田タイプ)の三段階に分け、文様や条痕調整・胎土などの変遷を明確にしている。これによれば1類Bの中でもi150~i153は、絡条体圧痕文がタスキ状の構図をとらず斜位施文のみであることや、圧痕や条痕調整がややラフになっていること、口唇部から垂下する隆帯を貼り付ける点などで駒返り十二社タイプの特徴を有している。また、1類Aやi154・i155は器厚がやや薄くなる点や、巻き上げる捲紐が細く曲線的圧痕が見られること、胎土への繊維混入が少ないと見られるものとしている。ただ、県内の資料は底部形態が基本的に平底を呈するのに比べて、i148・i149は明瞭な丸底であることや、口縁部に山形の突起を有する点などで異なり、長野県内の資料との関連が考えられるものである。これらは、東海系の上ノ山式から入海II式以降にかけての時期に位置付けられている。

次に②とした土器群についてみると、先述のように①の土器群とは諸特徴で明確に区別されるもので、早期末葉の絡条体圧痕文土器の特徴には含まれていない。i156・i157の口縁部は外削ぎ状を呈し、この部分に細かい絡条体圧痕文を施すもので、胎土は繊維を全く混入しない緻密なものである。口縁部直下には垂下する細隆起線文が貼り付けられており、横走する平行細沈線文と共に特徴的なものである。これらの諸特徴から野島式の成立期として捉えられてい

る土器群〔坂塚ほか1987〕との関連が考えられ、千葉県吉田馬々台遺跡〔古内1980〕や茨城県奥山C遺跡〔小河1986〕など関東地方中西部に類例が報告されている。また、i159～i161は極めて細い纖維を軸にやや間隔を開けて巻いたものを、外面および口唇部に押圧施したもので、東京都小山田遺跡群〔安孫子1982〕や野島式土器の標式遺跡である神奈川県野島貝塚の貝層直下出土土器〔赤星1948〕の中に類似するものが存在する。野島式の最古段階もしくは直前に位置付けられよう。

第III群2類土器 細隆起線を区画文として区画内に集合細沈線を充填する手法は、野島式・鶴ヶ島台式土器に共通して認められる手法として理解されている〔関野1980〕。本例は細片のため明確な判断はできないが、胎土に纖維を混入しないことや比較的薄手な点〔岡本1961〕などから、野島式に比定される可能性が強い。

第III群3類土器 様々な沈線により文様を描くものであるが、明瞭に文様帯を構成するものとそれ以外のものに分けられる。ここでは、器形復元のできた前者(i164)について考えてみたい。まず特徴を再確認すると、頸部で屈曲して開く器形と、口縁部文様帯に見られる縦位の平行沈線と交差する斜線文が上げられる。文様構成そのものについては、野島式の中段階に見られる太沈線によるタスキ状の区画と、区画内を細沈線によって充填する手法に類似性が見いだせる。しかし、本例は縦位平行沈線を施した後に交差する斜線文を加える点で充填手法とはいはず、描き出される文様のみを踏襲したと考えられることから、より後出的なものとして捉えられよう。また、野島式では基本的に口縁部文様帯のみで構成されるものがほとんどであり、本例のように胴部文様帯を持つものは見られない点でも違いが認められる。胴部文様帯の出現は野島式の新段階に求められ、鶴ヶ島台式になって普遍化するもの〔関野1980〕と考えられていることなどから、一応野島式の新段階としておきたい。なお、頸部で屈曲する器形は一般的ではないが、埼玉県明花向遺跡〔金子1984〕のA区出土土器に類例が見られる。

第III群4～6類土器 第III群3類のうちi164を除いたものも、胎土や器形などの特徴からここに含める。条痕文系土器の中でも数量的には量も多く、分布の中心はF～Hの9～12に存在する。胎土への纖維の混入が特に顕著で、器厚は9～15mmと厚いものが多い。器形的にはやや外傾しながら直線的に開くものが多いが、i178・i186・i191のように頸部に縦い段を有するものもわずかに存在する。口縁部の形態は平線のものと波状のものがほぼ同様な比率で存在するが、口唇部にキザミを施すものは極めて少ない。また、文様的には沈線文・押し引き文・刺突文を主な要素として、これらの組み合わせもしくは単独で文様を描くもので、特に多種多様な刺突列点文によるものが圧倒的に多い。文様構成は明確ではないが、胴部上半(頸部以上を中心に)に上記文様要素によって、直線・曲線などを組み合わせた文様を描くものと推定される。

早期後業の中で刺突文によって文様を構成する手法は、鶴ヶ島台式の新段階から茅山上層式

の中に普遍的に認められるが、特に茅山下層式の段階で多様な刺突列点文による三角形・円形など幾何学的な文様構成として発達する〔赤星ほか1957〕。関野哲夫氏は茅山下層式土器の器形や文様帯、文様の変遷などを分析し、古段階・中段階・新段階の三段階に細分する案を示している〔関野1985〕。それによれば、全体的に前型式である鶴ヶ島台式の強い影響が見られ、器形的には頸部から胴部にかけて二段のくびれを有するものが一般的であるが、新段階になって縦い一段のくびれのものが出現し、それ自体もしだいに退化する傾向が認められる。また、文様帯はくびれによって規定され(口縁部文様帯と胴部文様帯)、段の退化傾向と共に口縁部文様帯のみのものが多くなり、茅山上層式段階の幅の狭い文様帯の口縁部への集約に繋る。文様は鶴ヶ島台式の沈線による区画状文が刺突に置き換わり、区画状文自体もしだいに幾何学的な文様に変化していく。文様要素としては、刺突文・凹線文・押し引き文などが見られる。岩原I遺跡の資料をこれらの特徴に照らし合わせれば、多様な刺突を中心として口縁部文様帯のみに施文されると思われる点などで、茅山下層式の中でも新段階の特徴を有していると思われる。しかし、茅山下層式の口唇部断面形態が内削ぎ状を特色としている点で大きく異なり、また岩原I遺跡が基本的には直線的な器形を呈することなどを考えると、より後出的な要素も含まれているようだ、ここでは茅山下層式から上層式の時間幅の中で捉えておきたい。

第III群7類土器 内外面に条痕のみを施文するもので、器形的には直線的に開く単純な器形を呈するものと思われる。口縁部は平線のものと波状を呈するものがほぼ同数見られ、いずれにも口唇部にキザミを施すものが多い。条痕が比較的明瞭な点で第III群4~6類と異なり、焼成も良好なものが多い。内外面に条痕のみを施文し口唇部にキザミや刺突を施す単純な器形の土器は、野鳥式土器に伴ってしばしば認められるものであるが、鶴ヶ島台式や茅山下層式に全く伴わないとは断言できないという指摘〔岡本1961〕もあり、粗製土器としてある程度の時間的な幅を考える必要があろう。

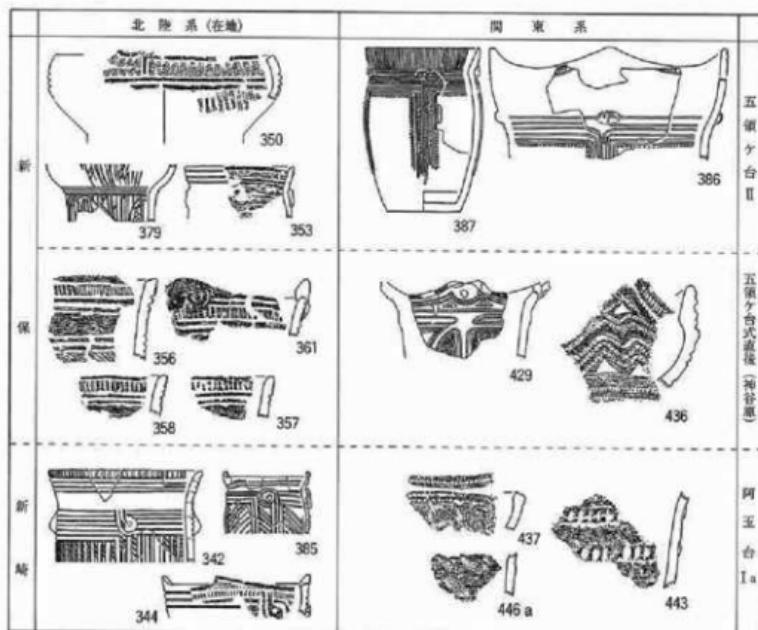
以上、岩原I遺跡・上林塚遺跡で出土した縄文時代早期の土器について、それぞれ編年的位置付けを中心に考えてきた。戸田下層式以前の沈線文系土器や野鳥式に比定される条痕文系土器の検出は、今まで県内の早期編年を考える上で空白であった部分を埋めるもので、検出自体に大きな意味を持つものといえよう。しかし、本報告での検討はあくまで他地域との比較による概略的なものでしかなく、残された問題は多いと思われる。今後、資料の増加を待って再検討したい。

3. 縄文時代中期の土器について

岩原I遺跡出土の縄文時代中期前半を主体とする第V群土器について、その編年的位置を検討してみたい。まず1類とした北陸系土器は、県内では剣野E式〔金子1967〕および田上町

古屋敷遺跡段階〔中島1976〕とされているもので、1類 A・E・F にその特徴がある。1類 A はキャリバー形で三角形陰刻による蓮華文を持つもので、県内でも広く認められる。また1類 E も同様の文様構成を持つ。1類 F としたものは、口縁部横帯区画内に継位集合沈線を入れるもので、これを横の沈線で切ると北陸地方のいわゆる軌軸文となる。この軌軸文の県内での出土例は少なく、上越方面に一部認められるのみで客体的な存在である。1類 F の継位集合沈線には二種類が認められる。一つは、ヘラ状工具で沈線を引くもの(356・361・362)、一つは半隆起線によるもの(357~359)である。北陸地方では、ヘラ状工具による細沈線のようである。軌軸文は、石川県徳前 C 遺跡〔西野ほか1983〕で第4群とされているもので、真脇報告〔加藤1986〕では第8群 IV 期にあたり、新保式の最終段階としている。県内において当遺跡と同じような在り方を示しているのが巻町豊原遺跡〔前山ほか1988〕の第 VI 群土器である。この VI 群土器では三角形陰刻の蓮華文が主体を占め、軌軸文はほとんど見られず、また爪形文も使用頻度が極端に少ない。このほか津南町上野遺跡〔江坂1962〕、古屋敷遺跡、出雲崎町タテ遺跡〔高橋1985〕、吉川町長峰遺跡〔岡田ほか1984〕、糸魚川市三屋原 B 遺跡〔山本1988〕などで同類の土器が出土している。

次に1類 C・D としたものであるが、爪形文の付されるものである。県内での新保式段階に



第96図 岩原I遺跡における中期土器編年(案)

縮尺不同

おける爪形文の使用頻度は非常に低く、爪形文の採用は次の新崎式段階に向けての新しい傾向といふことができる。また1類Hとしたもの(385)についても縄文を使用せず、342と同様の文様構成を持っていることから、新しい傾向とすることができます。

五領ヶ台系とした2類であるが、県内での五領ヶ台系土器の出土はそう多くはない。今回の出土は、まとまった好資料と言える。まず2類Aとしたものは、五領ヶ台II式〔今村1985〕とされているものであり、三上分類〔三上1988〕では、沈線文系IIc類にあたると考えられる。2類BについてはAと同じ文様構成をとるものと思われ、同時期とすることができます。その他としたものは、関東地方の五領ヶ台式に広く見られるものであるが、全体の器形や文様構成は不明である。2類Cは五領ヶ台式直後型式、神谷原式などと呼ばれている一群である。角押文(有節沈線)を有するもので、Aとは文様構成などが全く異なる。三上氏の指摘のとおり系統差として捉えることは可能であるが、縄文系の中でも沈線のみのものと区別されるもので、新しい傾向として認めることができます。前述の沈線文系と縄文系とは明らかに系統が異なるものであり、東北地方で出土している五領ヶ台系土器の多くは縄文系である。その意味では、広く両系統を検討して見る必要がある。

3類とした土器群は、いわゆる阿玉台式系土器である。県内で出土している阿玉台式系土器のほとんどはIb~II式段階〔高橋1989〕のものであるが、今回出土したもののうち437などはI¹⁾a式段階に入るものであり、県内では清水上遺跡に次いで二例目である。ほかの阿玉台式系としたものについてもIa段階のものと考えられる。

以上第V群土器を系統別に検討したが、出土地点や出土状況から考えてこれらは継続的に使用されていたものと思われる。関東系の土器については2類A(五領ヶ台II式)→2類B(五領ヶ台式直後型式)→3類(阿玉台Ia式)という変遷が考えられ、この変遷に北陸系の1類がどのように対応したかは判断し得ないが、あえて段階を区分するならば1類A・E→1類F→1類Bということになろう。

県内における関東系土器の出土分布は、魚沼地方に濃密であり、上越地方の山間部では信州経由で認めることができる。中期初頭から前半にかけては、広く汎北陸的な土器が主体的であるが、魚沼地方においては関東系の土器を見のがすわけにはいかず、その割合もかなり高い。関東的な土器の出土は縄文時代前期後半の諸磧式土器についても同様の傾向が認められる。この魚沼地方にあって当該期の集落跡は明確でなく、今回の出土資料の各系統土器の共伴関係は確定できないので、上記の分類については可能性の問題として提示するに止めた。

1) 土器については長野県埋蔵文化財センターの寺内隆夫氏より御教授を得た。

要 約

岩原I遺跡

1. 岩原I遺跡は南魚沼郡湯沢町大字土櫛字巾上に所在する。遺跡は飯士山から派生する広大な台地先端部で、標高約470~510m、東西を小沢に限られた平均傾斜度10%の、南に向かって傾斜する尾根状の台地に立地する。
2. 発掘調査は関越自動車道建設の為の盛土採取に伴い、昭和57年4月19日から11月5日にかけて実施した。調査面積は台地上の平坦面を中心に約23,000m²におよび、遺跡の全容をほぼ明らかにできたものと思われる。
3. 調査の結果、旧石器時代から縄文時代後期にかけての土器・石器や、陥穴状土坑・フラスコ状土坑などの遺構が多数検出された。
4. 遺構で最も注目されるのは、台地全体に散在して検出された133基におよぶ陥穴状土坑である。これらは形態の特徴などから六種類に分類され、それぞれ配置に差異が認められるところから時期や狩猟法の違いが考えられた。
5. 出土遺物は総数9,563点にのぼるが、このうち土器は縄文時代早期を中心とするが、初期沈線文土器である竹之内式に対比されるものや野鳥式土器は、県内で初めての検出例として注目されるものである。また、石器は剣片類を含めると5,019点であるが、釜状石器や特殊磨石など早期に属すると思われる石器が多い。

上林塚遺跡

1. 上林塚遺跡は南魚沼郡湯沢町大字土櫛字川原に所在する。遺跡は岩原I遺跡の約3km南に位置し、魚野川右岸の標高約480mの河岸段丘上に立地している。
2. 発掘調査は関越自動車道の建設に伴って、昭和59年6月4日から7月7日にかけて実施した。調査面積は1,080m²であるが、遺跡の範囲は東側の道路法線外に広がっているものと思われる。
3. 遺構は配石(下部に土坑を伴うものを含む)17基のほか、土坑などが30基検出された。配石は検出層位や出土遺物から、縄文時代早期の埋葬施設の可能性が考えられた。
4. 出土遺物は土器・石器を合わせて1,807点であり、土器から見るかぎりでは縄文時代早期前半から中葉と比較的限定された時期に営まれた遺跡と思われる。
5. 土器は総数440点と少ないが、無文帯を残す押型文土器や三戸式土器などが検出されており、県内の早期中葉の土器編年を考える上で重要な資料となるものである。
6. 石器は剣片を含めて1,367点を数え、遺物全体に占める割合が大きい。縄文時代早期の石器組成の一端を示すものと思われ興味深い。

引用・参考文献

- ア赤里直忠 1948 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』第1冊 東京考古学会
- 赤星直忠・岡本 勇 1957 「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告』人文科学 第1号 横須賀市博物館
- 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」『東京考古』1 東京考古談話会同人
- 阿部明彦ほか 1983 「水木田遺跡」 山形県教育委員会
- 阿部朝嗣 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」『法政考古学』第10集 法政考古学会
- 阿部恭平ほか 1979 「十日町市文化財調査報告14 つづじ原B遺跡」 十日町市教育委員会
- イ銀坂博・森島正明 1987 「考察」『遺跡調査会報第7冊 丸山遺跡』 野田市遺跡調査会
- 石岡憲雄 1980 「所謂「Tピット」について」『土曜考古』第2号 土曜考古学研究会
- 石原正敏・小熊博史 1988 「新潟県の研究動向」『第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題』 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 石橋宏克 1988 「中山遺跡出土の三戸式土器について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』 佐原地区(1) 財団法人千葉県文化財センター
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土城群に関する考察」『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団
- 今村啓爾 1982 「諸式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器! 雄山閣
- 今村啓爾 1983 「階穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2 生業 雄山閣
- 今村啓爾 1985 「五頭ケ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- 今村精一・千代 雅 1977 「Tピット」「面館空港第4地点 中野遺跡」 両館市教育委員会
- ウ内村真澄 1977 「札幌S267、268遺跡の土城群」『札幌市文化財調査報告書XIV』 札幌市教育委員会
- エ江坂勝郎 1962 「上野遺跡」 津南町教育委員会
- オ野政雄・佐藤達夫 1967 「岐阜県沢渡跡調査予報」『考古学雑誌』53-2 日本考古学会
- 岡本勇 1961 「三浦市鶴ガ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告』人文科学 第5号 横須賀市博物館
- 岡本勇輔 1982 「関東・中部地方」『縄文土器大成』第1巻早・前期 講談社
- 岡本東三 1982 「神宮寺・大川式押型紋土器について」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』
- 岡本東三 1987 「押型文土器の技法と起源をめぐって」『越沢押型文遺跡調査研究報告書』 長野県岡谷市教育委員会
- 小河邦男 1986 「奥山C遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告第31集 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡』 財団法人茨城県教育財團
- 奥野茂生 1989 「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号 土曜考古学研究会
- 小船博史 1989 「縄文時代早期終末における葬条件変遷土器の一種相」『信濃』41-4 信濃史学会
- カ片岡 肇 1972 「神宮寺式土器の再検討」『考古学ジャーナル』No.72 ニュー・サイエンス社
- 片岡 肇 1982 「押型文土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器! 雄山閣
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1986 「因縁 石器の基礎知識I・II 先土器(上)・(下)」 柏書房
- 加藤三千雄 1986 「縄文時代の遺物」『真鍋遺跡』 石川県能登町教育委員会
- 可見通宏 1969 「押型土器の変遷過程」『考古学雑誌』55-2 日本考古学会
- 金子拓男 1967 「新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土遺物について」『信濃』19-2 信濃史学会
- 金子直行 1984 「明花向遺跡A区の調査」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- キ菊池 実 1987 「縄文時代の陥穴調査法と試生する諸問題」『研究紀要』4 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ク栗田則久・石橋宏克ほか 1987 「庚塙遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書III』 大栄地区(2) 財団法人千葉県文化財センター
- コ河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』46-4 日本考古学会
- 小坂井孝修 1982 「東京都埋蔵文化財センター調査報告2集 多摩ニュータウン遺跡 一昭和56年度一」 財団法人東京都埋蔵文化財センター
- 小林康男ほか 1985 「堂の前・福沢・青木沢」 塩尻市教育委員会
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1986 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(3)」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1987 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(4)」『長岡市立科学博物館研究報告』第22号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・小熊博史 1988 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(5)」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号 長岡市立科学博物館

- 近藤尚義 1988 「八塙遺跡」『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』 塩尻市内その1 長野県教育委員会・動長野県埋蔵文化財センター
- 近藤宗光 1984 「陥し穴状遺構」『岩手県埋蔵文化財調査報告書第83集 川口I 遺跡発掘調査報告書』 財團法人岩手県埋蔵文化財センター
- サ奇藤弘道 1984-1986 「茨城の縄文時代草創期・早期の土器群について(一)~(三)」『年報』3-5 財團法人茨城県教育団
- 佐藤雅一 1987 a 「宮林B遺跡」『湯沢町埋蔵文化財報告第6輯 川久保遺跡II・宮林B遺跡』 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1987 b 「湯沢町埋蔵文化財報告第7輯 岩原II遺跡」 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1987 c 「湯沢町埋蔵文化財報告第8輯 萩原B遺跡」 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988 a 「湯沢町埋蔵文化財報告第9輯 大刈野遺跡」 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988 b 「川口町埋蔵文化財報告第2輯 西倉遺跡」 川口町教育委員会
- シ島田清久ほか 1986 「新潟県中魚沼郡中里村文化財調査報告書第3集 鳥之巣遺跡」 新潟県中魚沼郡中里村教育委員会
- ス杉山晋作ほか 1981 「No.6遺跡」「木の根」 財團法人千葉県文化財センター
- 鈴木道之助 1981 「圓錐 石器の基礎知識III」 縄文 柏書房
- セ瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」『紀要』I 岩手県埋蔵文化財センター
- 瀬川裕市郎 1982 「子母口式土器再考」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1
- 間 雅之ほか 1984 「長峰遺跡II」 吉川町教育委員会
- 間野哲夫 1980 「萬ガ鳥台式土器細分への覚書」『古代探叢』I 早稲田大学出版部
- 間野哲夫 1985 「茅山下扇式土器について」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- タ高橋 保ほか 1985 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第39 タテ遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保ほか 1986 「岩野E遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集』 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 高橋雄三 1981 「子母口式土器研究史における問題点」『福島考古』第22号 福島県考古学会
- 竹石健二 1980 「所謂土坑の機能についての一考察」『史叢』第25号 日本大学史学会
- 橋 昌信 1970 「押型文土器文化の標器」『古代文化』22-11 財團法人古代学協会
- テ寺内隆夫 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 寺崎祐助 1978 「土墳について」『埋蔵文化財調査報告書』七軒町遺跡・本村金塚』 長岡市教育委員会
- 寺崎祐助 1988 「原山遺跡 の他の遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集』 新潟県教育委員会
- ト戸沢光則 1955 「勝沢押型文遺跡」「石器時代」第2号 石器時代文化研究会
- 戸沢光則 1978 「押型文土器群編年研究素描」『中部高地の考古学』 長野県考古学会
- 戸沢光則ほか 1987 「勝沢押型文遺跡調査研究報告書」 長野県岡谷市教育委員会
- 戸根与八郎・田辺早苗ほか 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第43 長表遺跡」 新潟県教育委員会
- 屏山遺跡発掘調査会 1988 「縄文早期屏山遺跡発掘調査報告書」『北越考古学』創刊号 北越考古学研究会
- ナ中島栄一 1976 「古屋敷遺跡」 南蒲原郡田上町教育委員会
- 中島栄一・國島 啓ほか 1987 「龍峰遺跡発掘調査概報」 新潟県中頃城郡中郷村教育委員会
- 中島庄一 1983 「使用痕」「縄文文化の研究」7 道具と技術 雄山閣
- 中島 宏 1986 「誓門寺遺跡の押型文土器について」『利根川』7 利根川同人
- 中島 宏 1987 「中部日本における押型文土器編年」『塔玉の考古学』 新人物往来社
- 中島 宏 1988 「関東地方における押型文土器の様相」『縄文早期を考える』 帝塚山考古学研究所
- 中村孝三郎 1959 「新潟県中魚沼郡津南町清津縄文早期下期当遺跡」『NKH』2の1 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1963 「卯の木押型文遺跡」『長岡市立科学博物館研究調査報告第5冊 卯の木押型文遺跡・貝坂遺跡』 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1964 「長岡市立科学博物館研究調査報告第6冊 室谷洞窟」 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1966 「長岡市立科学博物館研究調査報告第8冊 先史時代と長岡の遺跡」 長岡市立科学博物館
- 中村五郎 1983 「東北地方南部の縄文早期後半の土器編年試論」『福島考古』第24号 福島県考古学会
- 中村五郎 1986 「東北地方の古式繩紋土器の編年」『福島県の研究』I 地質・考古篇 清文堂出版
- 中村良一・工藤利幸 1988 「大久保遺跡 陥し穴状遺構」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第121集 大久保遺跡・西大久保遺跡』 財團法人岩手県文化振興事業団
- 名久井文明 1982 「貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器1 雄山閣

- ニ新潟県 1983 「新潟県史 資料編 1」 原始・古代 1
 新潟県教育庁文化行政課 1985 「新潟県埋蔵文化財調査だより」 No. 1
 西川博孝 1980 「三戸式土器の研究」「古代探査」 I 早稲田大学出版部
 西川博孝 1987 「田戸下層式土器」「古代」第83号 早稲田大学考古学会
 西野秀和ほか 1983 「龍島町能前 C 遺跡調査報告(IV)」 石川県立埋蔵文化財センター
 西村正衛 1976 「阿玉台式土器発掘年の研究の概要」「早稲田大学研究科紀要」 18
 西山太郎・野口行雄ほか 1983 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 III No. 14 遺跡」 財团法人千葉県文化財センター
 日本文化財研究所 1977 「日本文化財研究所文化財調査報告 4 寺沢遺跡」
 ノ能登健・石坂茂 1988 「八木沢水道跡」「群馬県史 資料編 1」 原始・古代 1 群馬県
 野中和夫 1985 「縄文土坑についての再検討」「研究紀要」 第31号 日本大学人文科学研究所
 ハ芳賀英一 1975 「常世遺跡の早期縄文式土器に就いて」「遮光器」 9号 みちのく考古学研究会
 芳賀英一 1981 「常世式土器の再検討(一)」「福島考古」 第22号 福島県考古学会
 橋本正 1975 「石器の機能と技術」「日本の旧石器文化」 I 緯論編 雄山閣
 奉繁治・岡本郁栄 1986 「板倉町埋蔵文化財報告第1 嶺山B遺跡」 板倉町教育委員会
 奉繁治・佐藤雅一 1987 「塙沢町埋蔵文化財報告書第6 輪 梨ノ木平遺跡」 塙沢町教育委員会
 早川正一 1983 「磨製石斧」「縄文文化の研究」 7 道具と技術 雄山閣
 ヒ平井進 1986 「陥し穴」「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第110集 桂平遺跡」 財團法人岩手県文化振興事業団
 平井進 1987 「陥し穴」「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第119集 大堤II遺跡」 財團法人岩手県文化振興事業団
 フ福田友之ほか 1982 「おとし穴・溝状ピット」「青森県埋蔵文化財調査報告書第76集 鶴庭遺跡」 青森県教育委員会
 船越元四郎ほか 1977 「青木遺跡発掘調査報告書 II C・D 地区」 鳥取県教育委員会
 船越元四郎ほか 1978 「青木遺跡発掘調査報告書 III A・B・E・H 地区」 鳥取県教育委員会
 古内茂 1980 「吉田馬ヶ台遺跡」 岩崎村教育委員会
 マ前山精明ほか 1988 「巻町原原遺跡の調査」「巻町史研究」 IV 新潟県巻町
 馬飼野行雄ほか 1983 「若宮遺跡」「静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会
 松沢亜生 1957 「縄久保遺跡の押腹式土器」「石器時代」 第4号 石器時代文化研究会
 松島透 1957 「長野県立野の捺型文土器」「石器時代」 第4号 石器時代文化研究会
 松田真一 1989 「遺物についての考察」「大川遺跡」 山添村教育委員会
 馬目順一ほか 1982 「いわき市埋蔵文化財調査報告第8番 竹之内遺跡」 福島県いわき市教育委員会
 ミ三上徹也 1988 「梨久保式土器再考」「長野県埋蔵文化財センター紀要」 1
 宮坂英次 1968 「小堅穴群は落し穴か」「尖石」 学生社
 宮崎朝雄ほか 1980 「如意堂 C 遺跡の発掘調査」「埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 甘粕山」 埼玉県教育委員会
 ヤ八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について」「信濃」 28-4 信濃史学会
 八幡一郎 1936 「越後中魚沼郡芋坂の土器略報」「人類学雑誌」 51-12 東京人類学会
 山形洋一ほか 1986 「大宮市遺跡調査会報告第16集 西大宮バイパス No. 4 遺跡」 大宮市遺跡調査会
 山田昌久・岡本勇ほか 1981 「鴨居上ノ台遺跡」 上ノ台遺跡調査会
 山内清男 1941 「日本先史土器図譜」 第1部 第12輯 先史考古学会
 山本典幸 1988 「五領ケ台式土器様式」「縄文土器大観 3」 中期 II 小学館
 山本聰ほか 1988 「三屋原 B 遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第52集」 新潟県教育委員会
 ヨ吉川国男 1975 「土器底痕痕文」「埼玉県埋蔵文化財調査報告第5集 高井東遺跡」 埼玉県教育委員会
 吉田格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」「石器時代」 第1号 石器時代文化研究会
 リ領塚正浩 1987 a 「田戸下層式土器部分への貢書」「土器考古」 第12号 土器考古学研究会
 領塚正浩 1987 b 「三戸式土器の再検討」「東京考古」 5 東京考古談話会
 ワ渡辺洋一 1986 「陥し穴状遺構」「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集 五庵 I 遺跡」 財團法人岩手県文化振興事業団





遺跡遠景
南(中里スキー場)から



遺跡遠景
西(湯沢高原)から



遺跡と東側の沢
北から



E-I 1-16付近
完掘状況 北から



O-K 24-35付近
完掘状況 南から



D-F 24-37付近
完掘状況 南から



1 調査風景(D-F)
24~37) 北から



2 土層(G4)



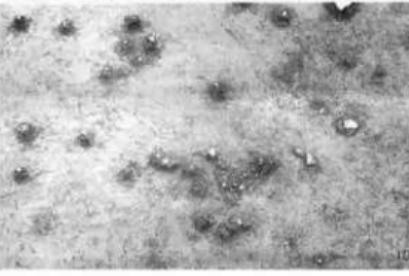
3 土層(F13)

4 土層(G24)



5 土層(F38)

6 ローム土層(C35)



7 旧石器時代文化
層確認状況
(E-F38)

8 遺物出土状況

(G4)

9 遺物出土状況
(G38)

10 遺物出土状況
(G38)

1 遺物出土状況
(H38)



2 F-H1～5付近
発掘状況 南から



3 壁穴状遺構
発掘状況 東から



5 I号掘立柱建物跡
東から



6 陰穴状土坑A類配
列状況
(D-F 24～28)
南から

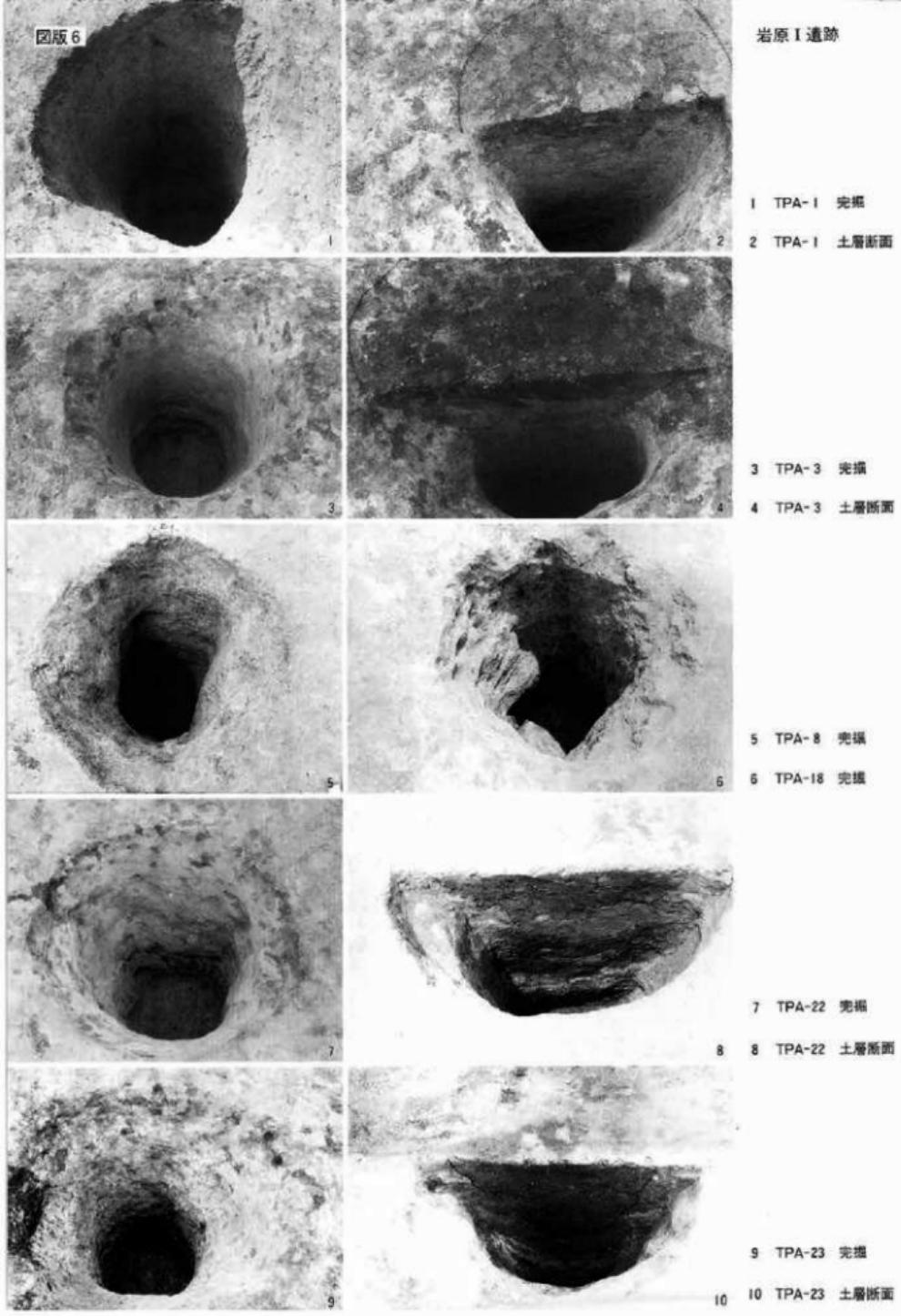


7 陰穴状土坑A類配
列状況
(G-H 36-37)
南東から



8 陰穴状土坑A類配
列状況
(G-K 24-25)
北西から

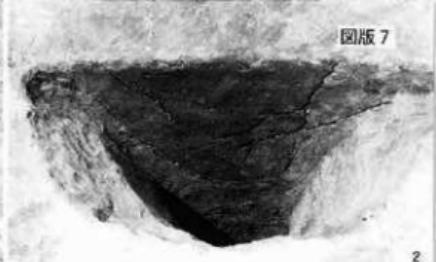




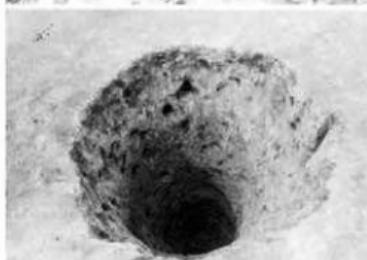
1 TPA-28 完掘



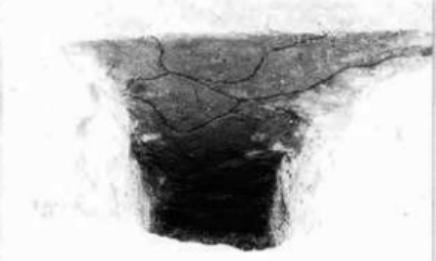
2 TPA-28 土層断面



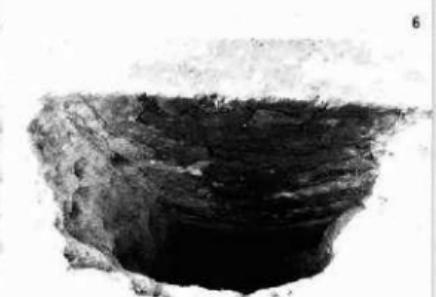
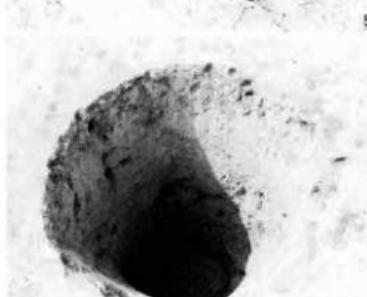
3 TPA-31 完掘



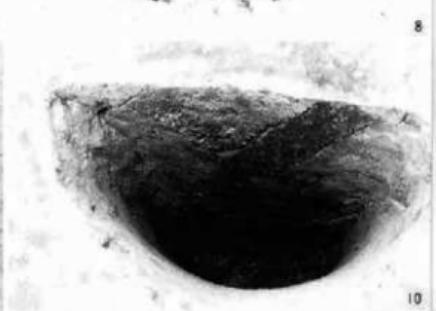
4 TPA-31 土層断面



5 TPA-32 完掘



6 TPA-32 土層断面



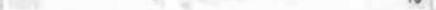
7 TPA-40 完掘



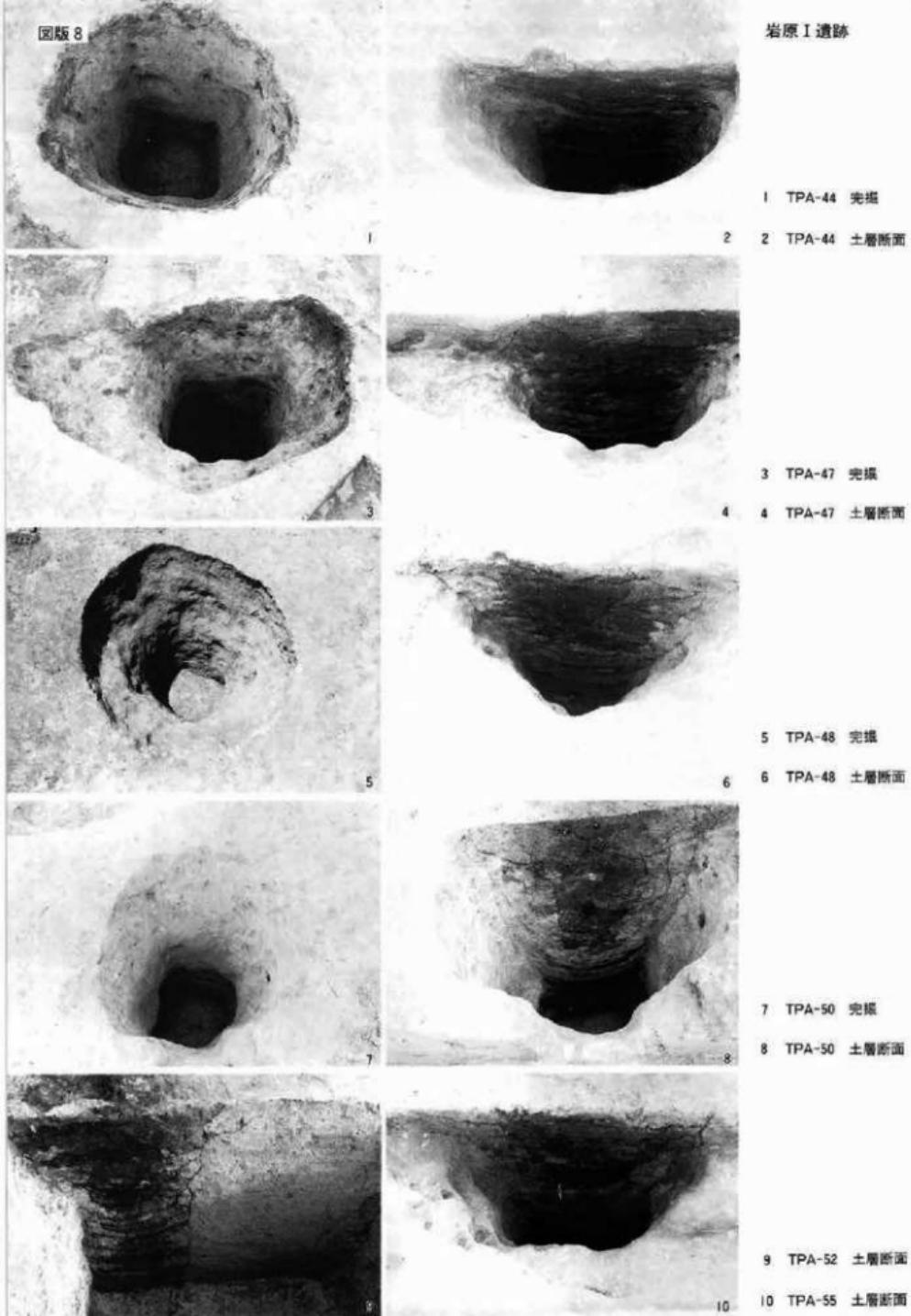
8 TPA-40 土層断面



9 TPA-43 完掘



10 TPA-43 土層断面



1 TPB-2 完掘



2 TPB-2 土層断面



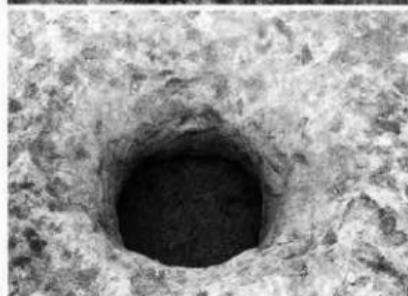
3 TPB-3 土層断面



4 TPB-4 土層断面



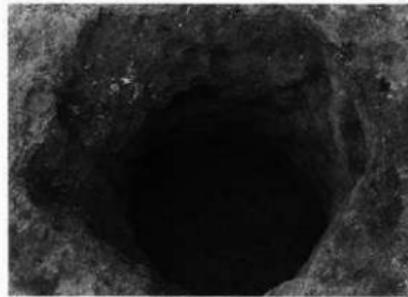
5 TPB-5 完掘



6 TPB-5 土層断面



7 TPB-6 完掘



8 TPB-6 土層断面

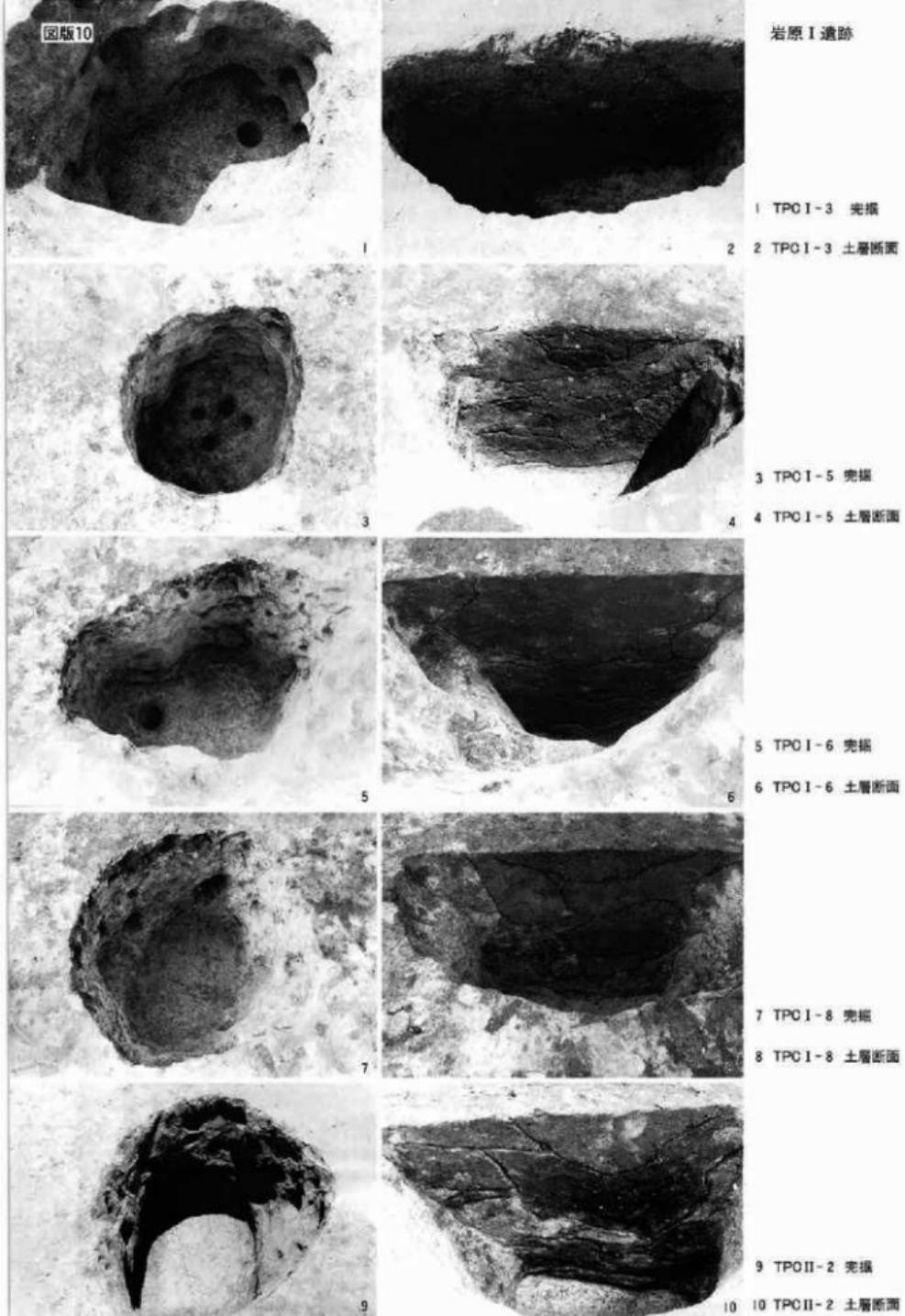


9 TPB-7 完掘



10 TPB-7 土層断面





1 TPD I-1 完掘



2 TPD I-1 断面



3 TPD I-4 完掘



4 TPD I-4 土層断面



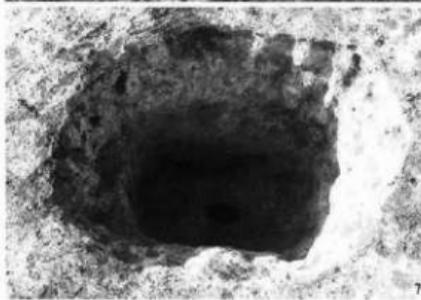
5 TPD I-6 完掘



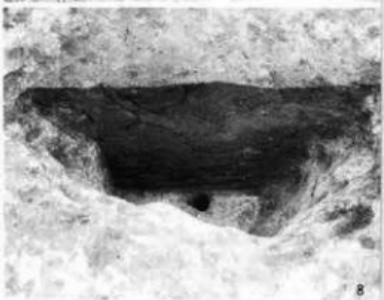
6 TPD I-6 土層断面



7 TPD I-8 完掘



8 TPD I-8 土層断面

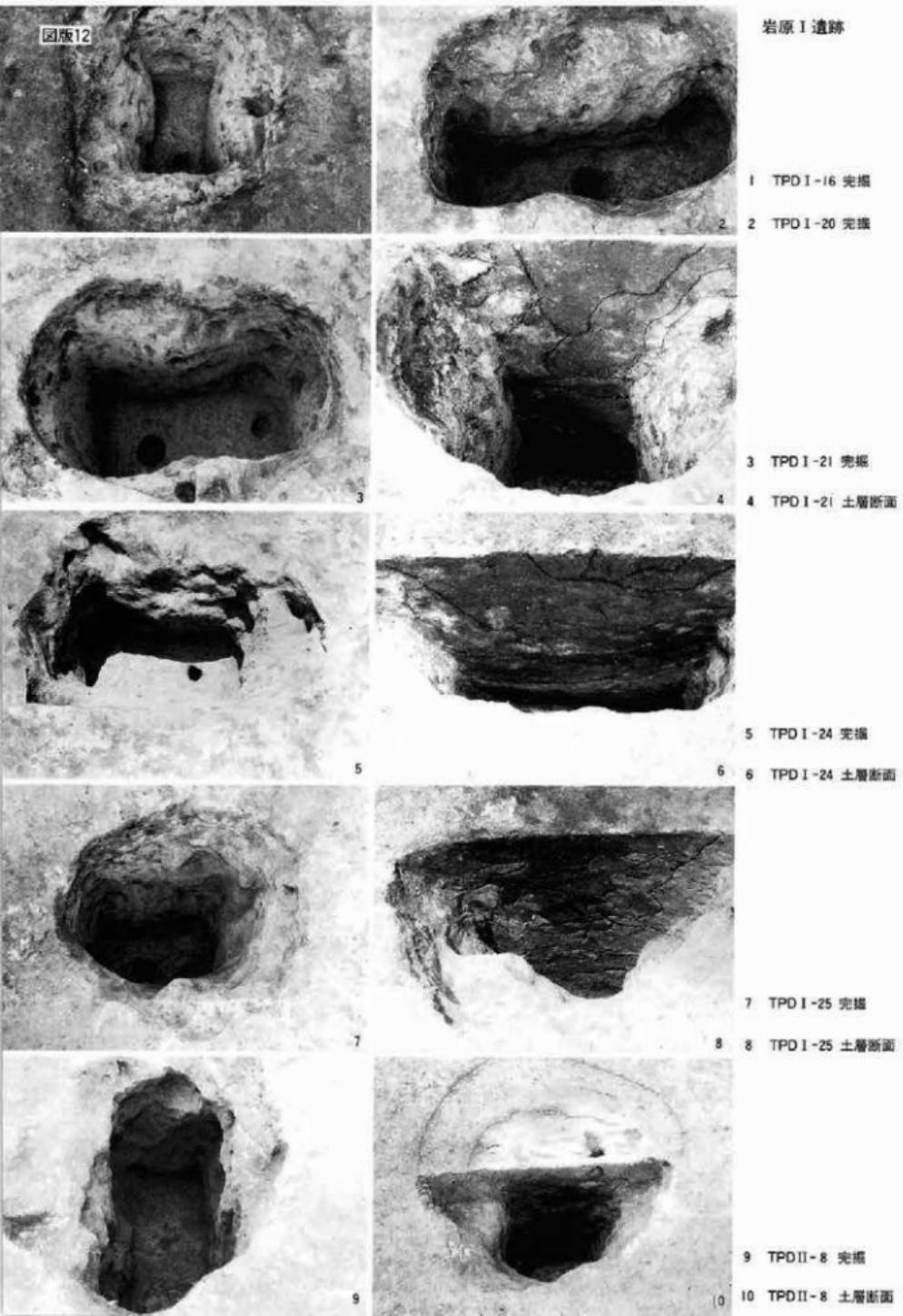


9 TPD I-13 完掘



10 TPD I-13 土層断面

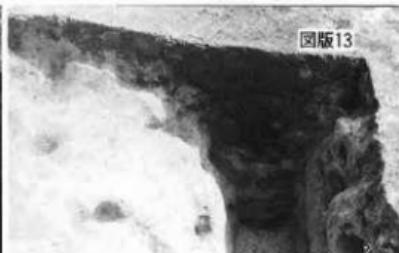




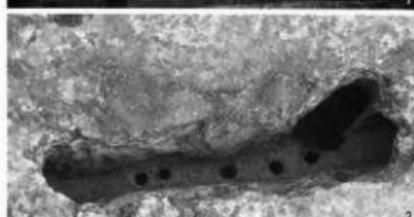
1 TPE I-1 断面



2 TPE I-1 土層断面



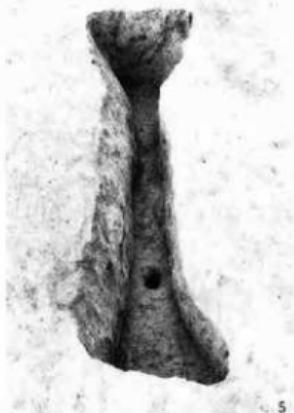
3 TPE I-2 完掘



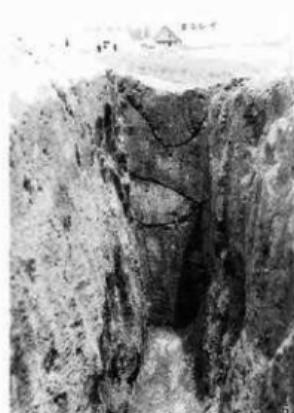
4 TPE I-3 完掘



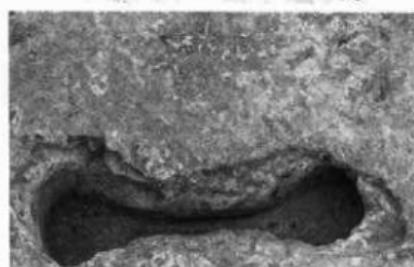
5 TPE I-6 完掘



6 TPE I-6 土層断面



7 TPE II-1 完掘



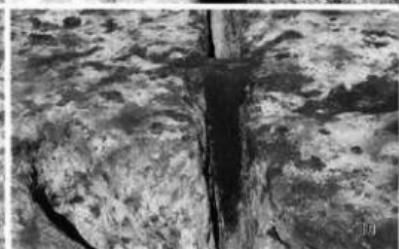
8 TPE II-1 土層断面

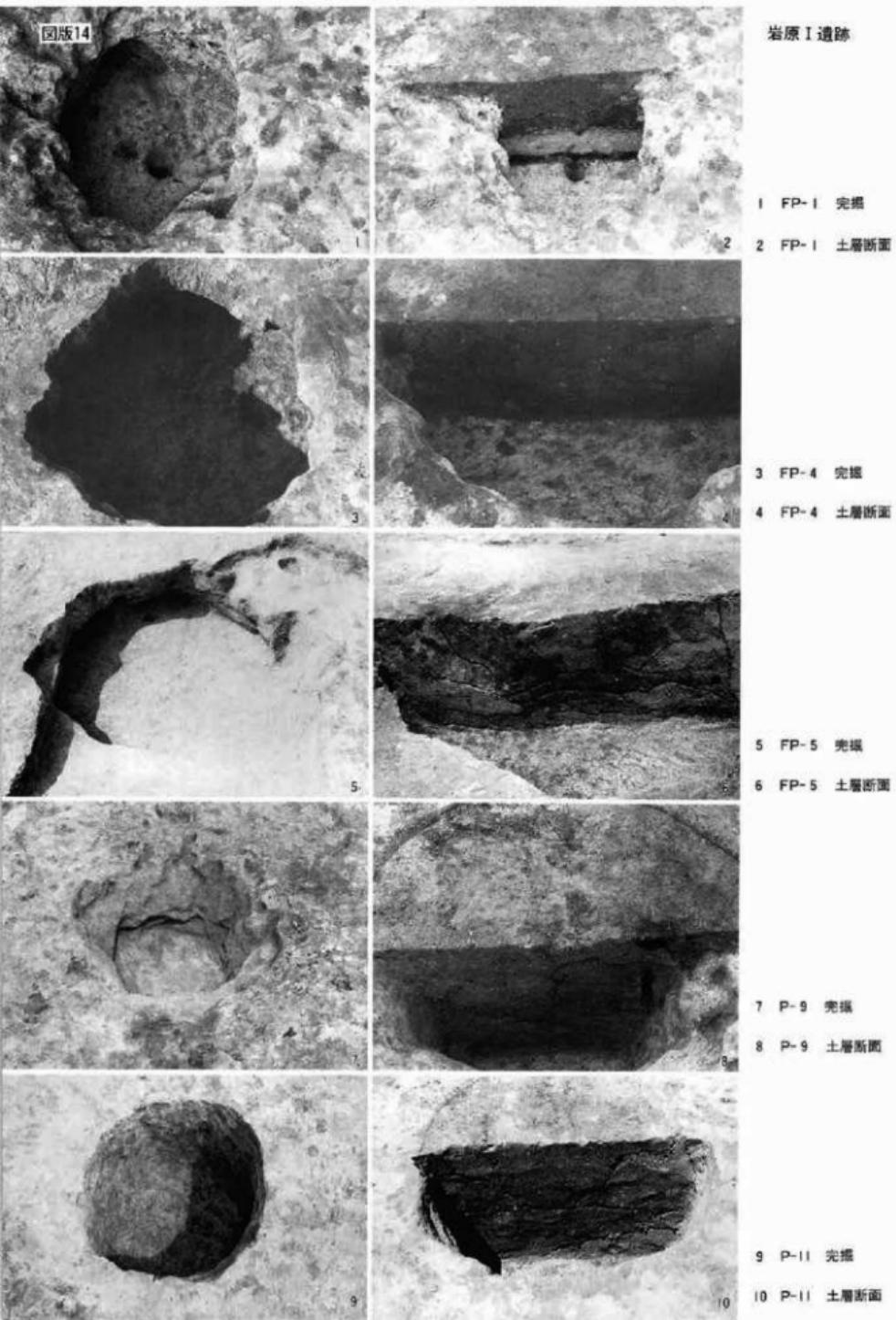


9 TPF-I-2 完掘

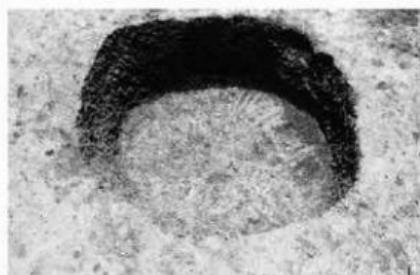


10 TPF-I 土層断面





1 P-12 完掘



2 P-12 土層断面



3 P-8 土器出土状況



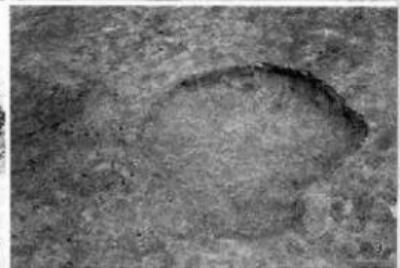
4 P-8 土器出土状況

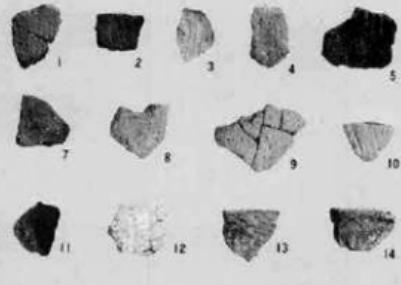
5 P-8 土器出土状況
土層断面

6 P-13 集石土坑



7 P-13 集石土坑

8 P-13 集石土坑
土層断面9 P-13 集石土坑
完掘



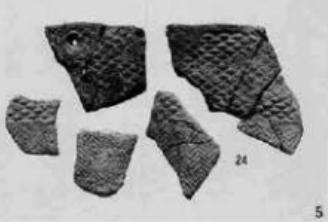
1-2 第1群1類A
(1:3)



3



3-4 第1群1類B
(1:3)



5



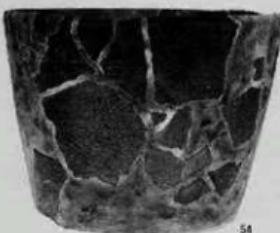
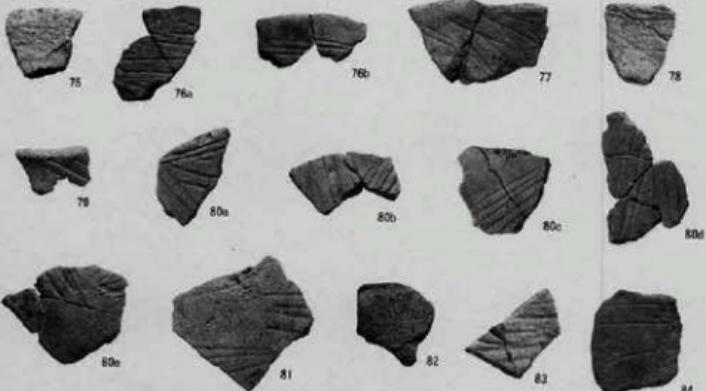
50

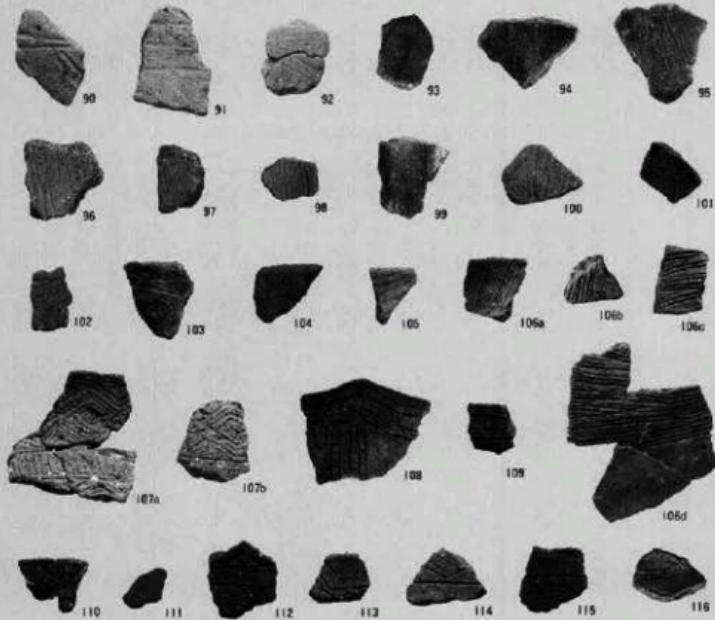


5 第1群2類A
(1:3)

6 第1群2類B-C
(1:3)

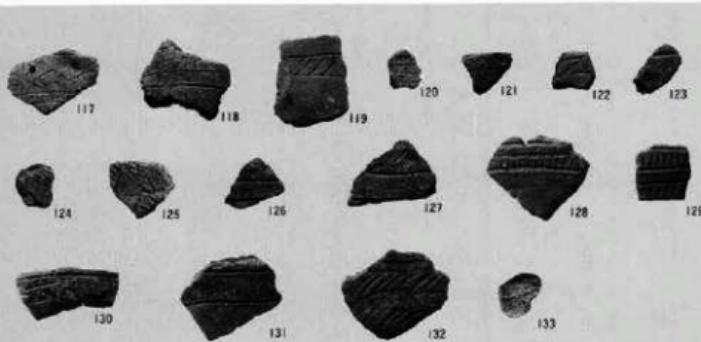
6

1 第II群1類A
(1:4)2 第II群1-3類
(1:3)3 第II群3類
(1:3)



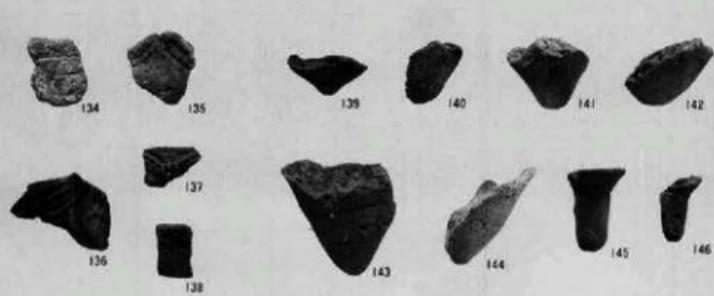
1 第Ⅰ群 3類

(1:3)



2 第Ⅱ群 4類

(1:3)

3 第Ⅲ群 5類
第Ⅰ・Ⅱ群底部

(1:3)

1 ミニチュア土器
(1:2)



147

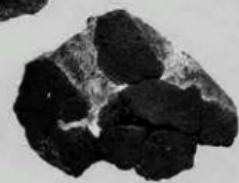
(口唇部)

1

2 第四群Ⅰ類A
(1:3)

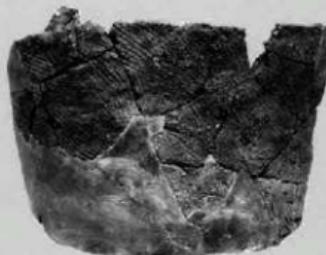


148



2

3 第四群Ⅰ類A
(1:3)



149



(口唇部)



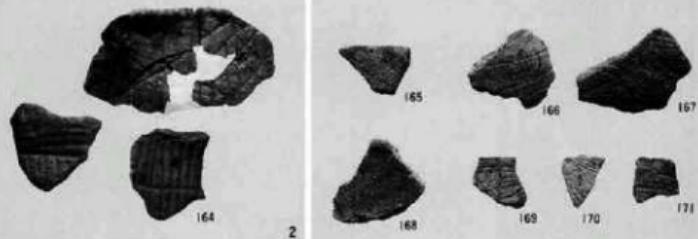
3

4 第四群Ⅰ類B
(1:3)

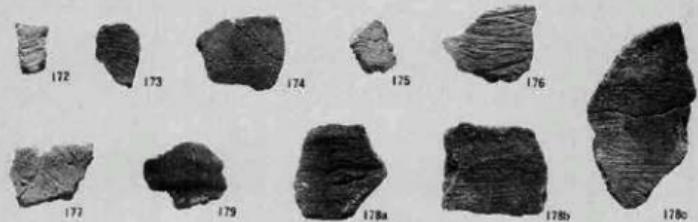
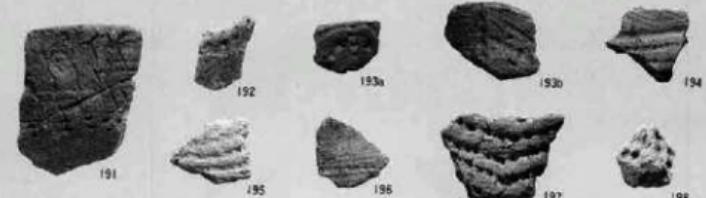


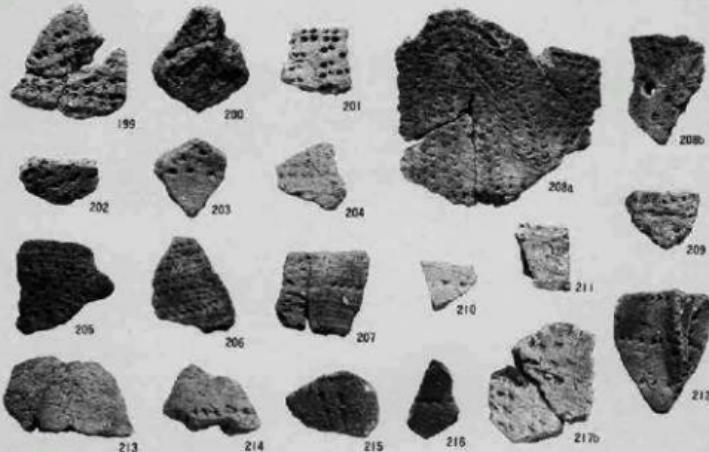
150

4

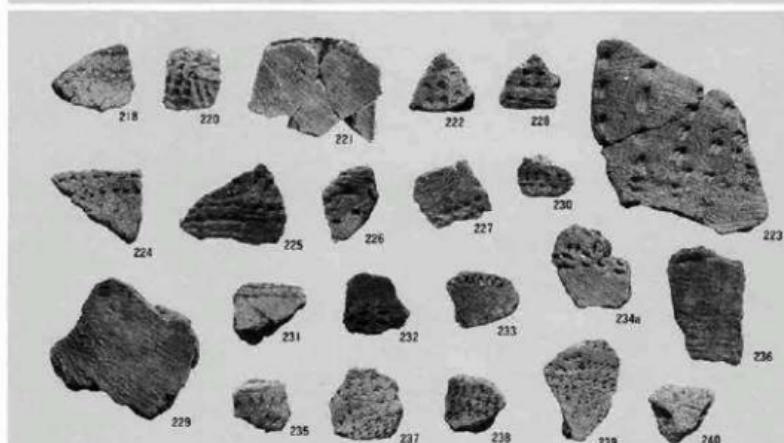
I 第田群1-2類
(1:3)

2

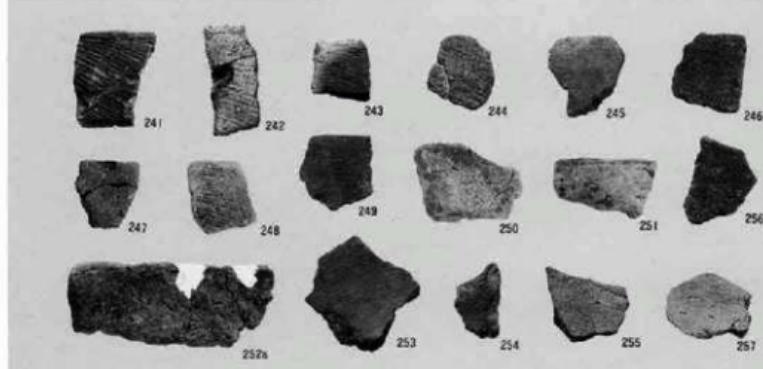
2-3 第田群3類
(1:3)4 第田群4-6類
(1:3)



1 第三群 6 類
(1:3)



2 第三群 6 類
(1:3)



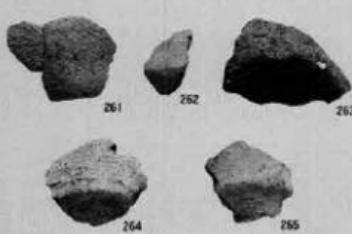
3 第三群 7 類
(1:3)



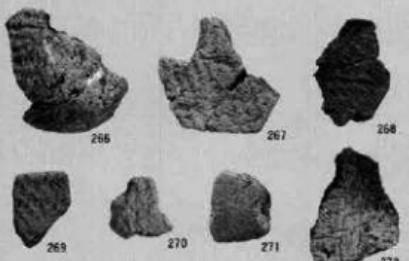
1



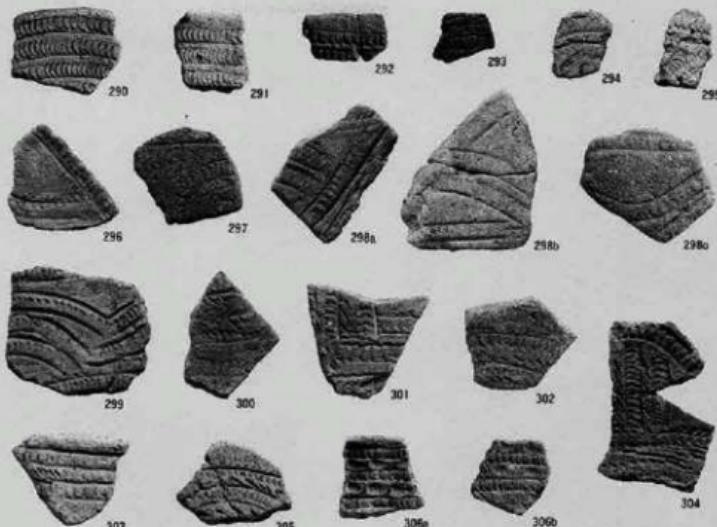
2



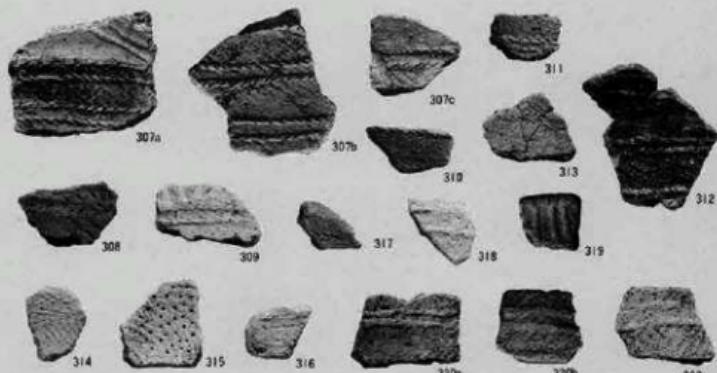
3

3 第III群底部
(1:3)4 第V群4類
(1:3)5 第IV群1-3類
(1:3)

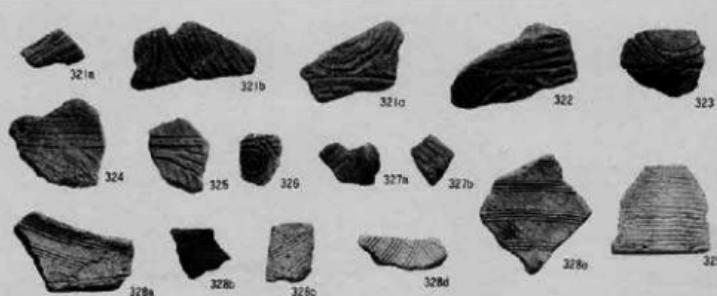
5



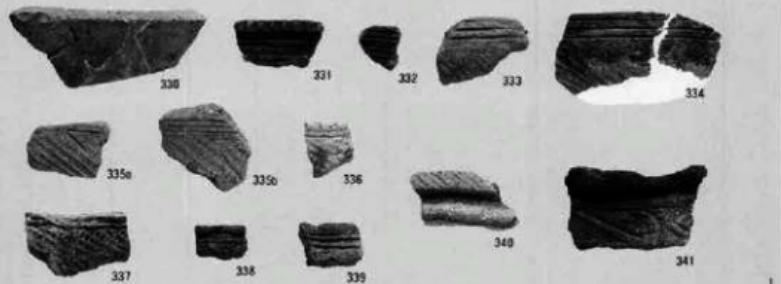
1 第Ⅳ群4類
(1:3)



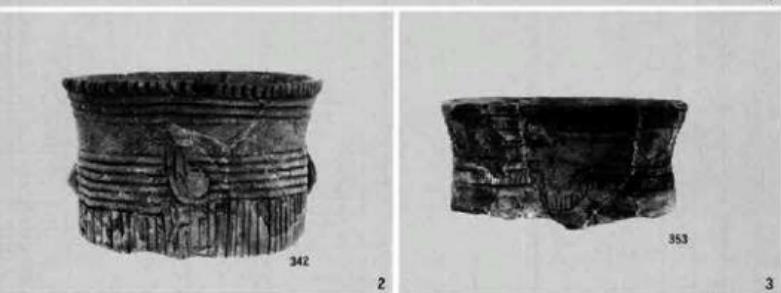
2 第Ⅳ群5類
(1:3)



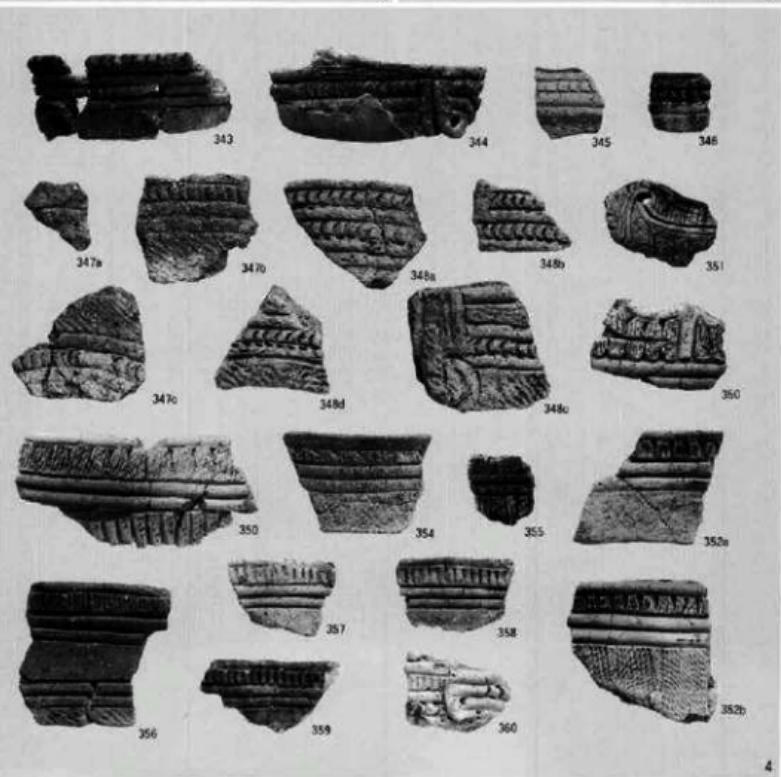
3 第Ⅳ群6-7類
(1:3)



1 第IV群8-11類
(1:3)

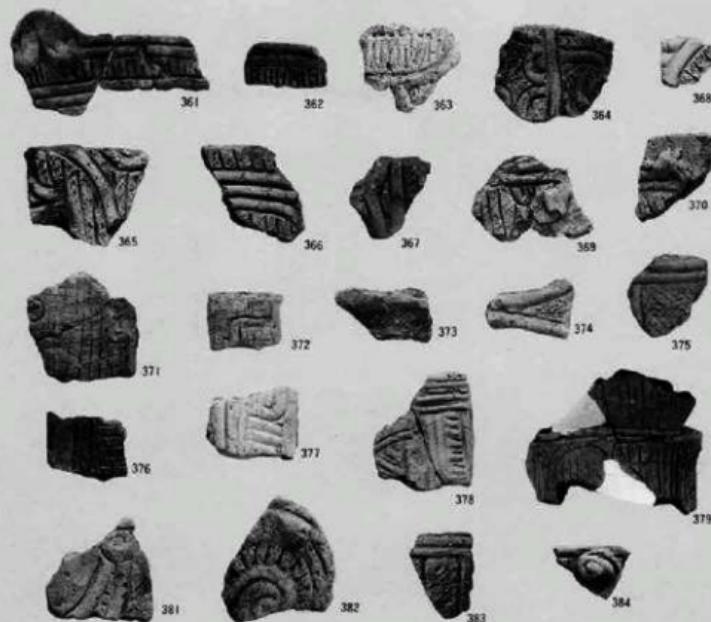


2 第V群1類D
(1:4)



3 第V群1類E
(1:3)

4 第V群1類
(1:3)



1 第V群I類

(1:3)

2 第V群I類G

(1:4)

3 第V群I類H

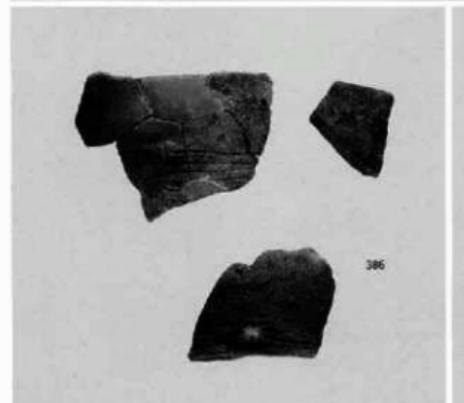
(1:3)

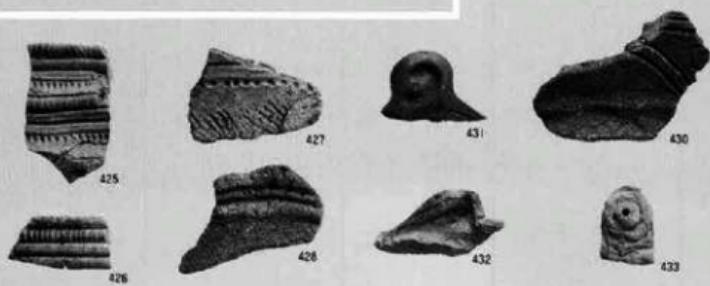
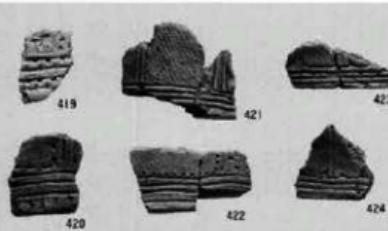
4 第V群2類A

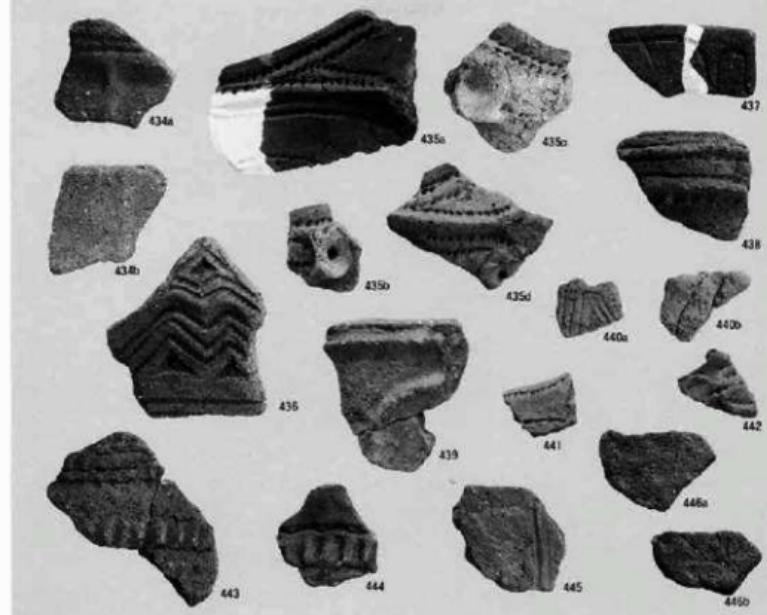
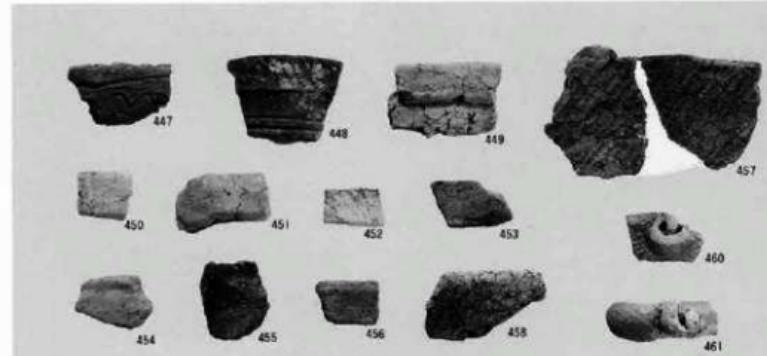
(1:4)

5 第V群2類A

(1:3)



1 第V群2類
(1:3)2 第V群2類
(1:3)3-4 第V群2類
(1:3)

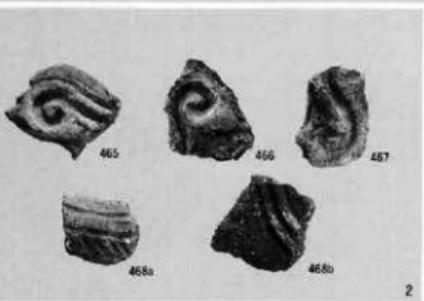
1 第V群2・3・5類
(1:3)2 第V群4類
(1:3)3 第V群4類
(1:3)



462

1 第V群4類

(1:4)



465

466

467



468a



468b

2



469



474a



470



471



472a



472b



475a



473a



473b



475b



474b

2 第V群6類

(1:3)

3 第VI群 (1:3)

3

I 第Ⅴ群 (1:4)



476



488



477

478a

478b

479a

479b

480

481

482

483

484

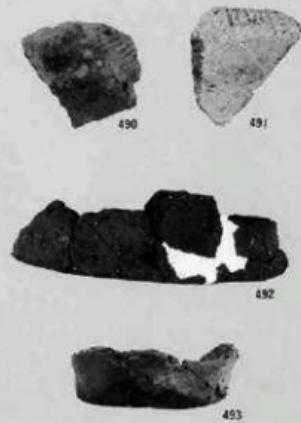
485

486

487

I

2-3 第Ⅵ群 (1:3)



490

491

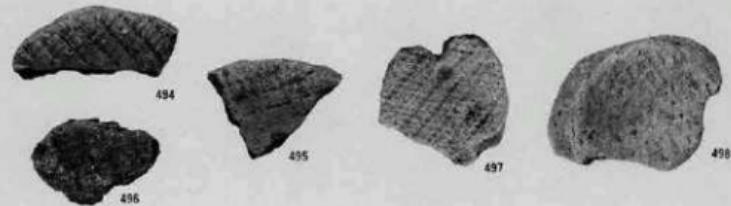
492



493

3

4 底部圧痕 (1:3)



494

495

497

498

496

4

5 路条体圧痕文陽型
(縮尺不同)

148



150



152



157



159



161

5



1



2



3



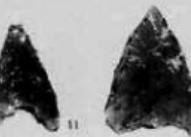
4



2



6



10



18



3



20



21



22



24



25



26



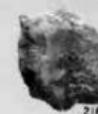
27



28



29



30



31

1 ナイフ形石器 (2:3)

2 尖頭器 (2:3)

3 石鏃 (1:1)

4 石鏃(20)
石匙(20)
(22) (1:1)

5 橢形石器 (1:1)

6 塊状耳飾 (1:1)

7 板状石器 (206)
塊状耳飾未成品
(210) (1:2)

8 擦切具 (1:3)

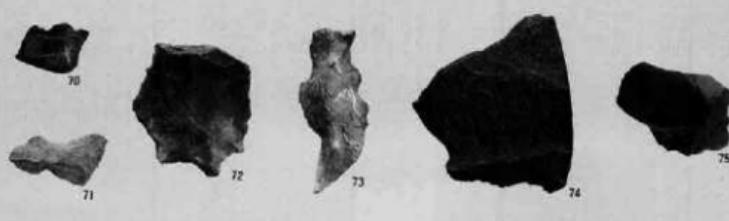
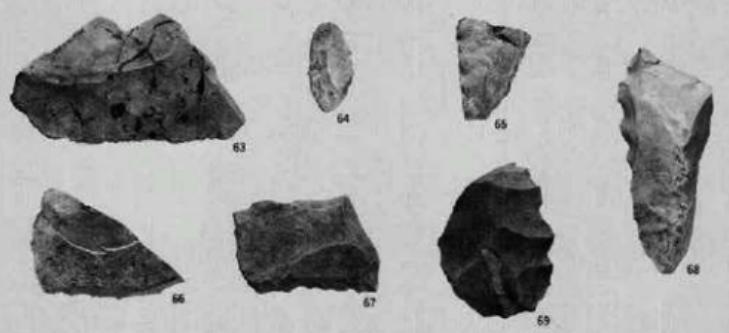
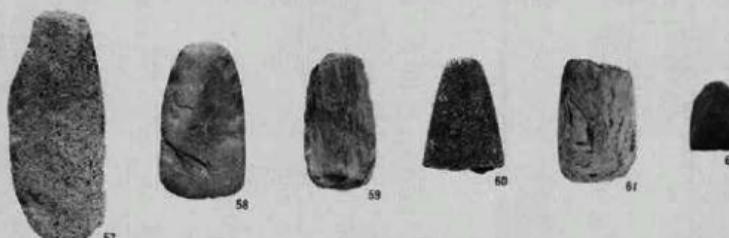
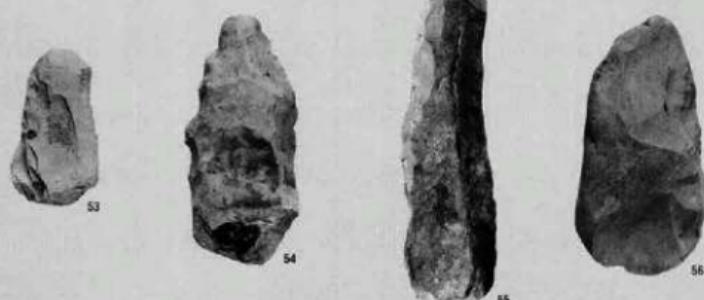
9 滑石原石 (1:1)



1 篦状石器 (1:3)



2 打削石斧 (1:3)



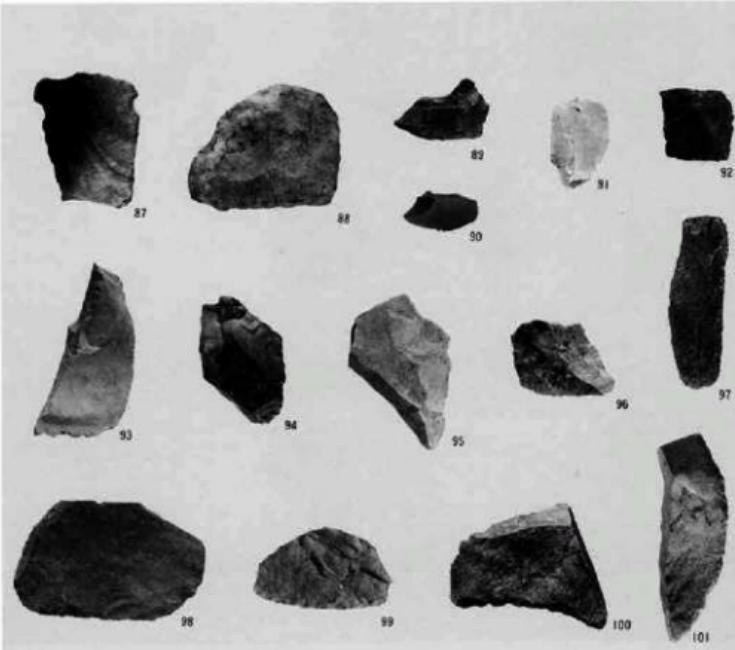
1 不定期制片石器
Ⅲ類 (1:3)

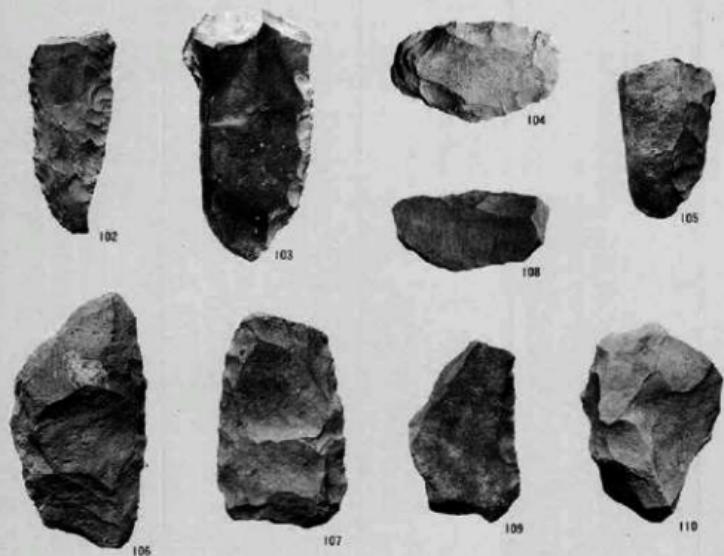


2 不定期制片石器
Ⅳ類a (1:3)

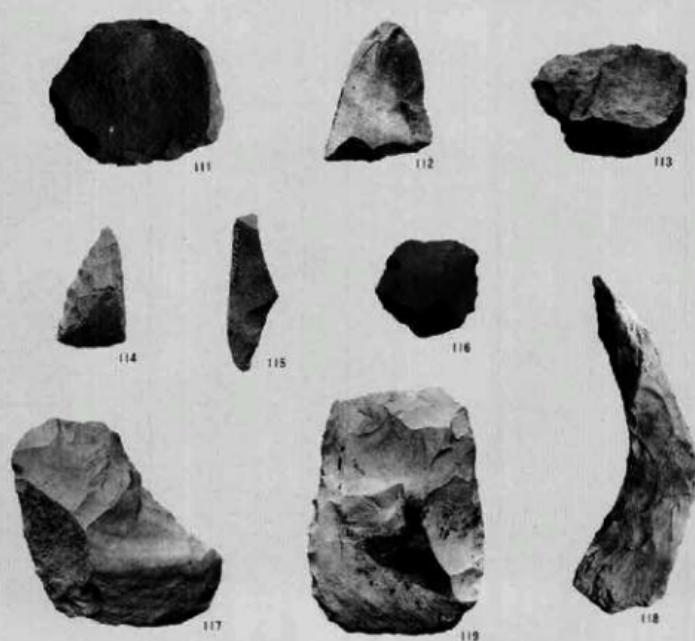


3 不定期制片石器
Ⅳ類b (1:3)





1 不定形剥片石器
Ⅳ類c (1:3)



2 不定形剥片石器
Ⅳ類c (1:3)



1 不定期剥片石器
IV類d (1:3)

121

122

123

124

121



125



127



128



129



130

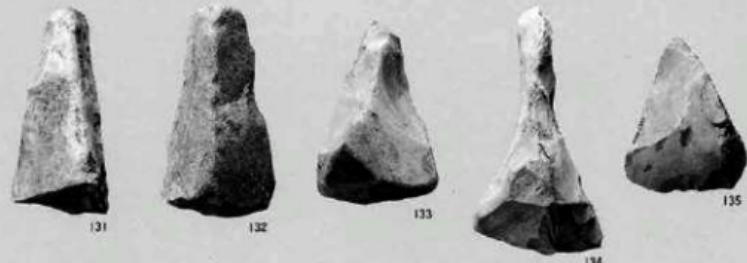
2 不定期剥片石器
その他 (1:3)

2

2

3

3 使用痕のある剥片
(1:3)



131

132

133

134

135

4 三角錐形石器
(1:3)

4



136

138

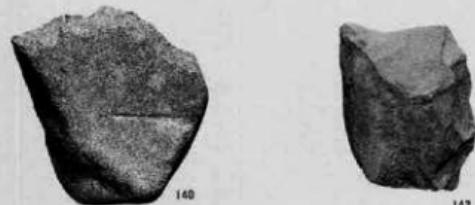
137

139

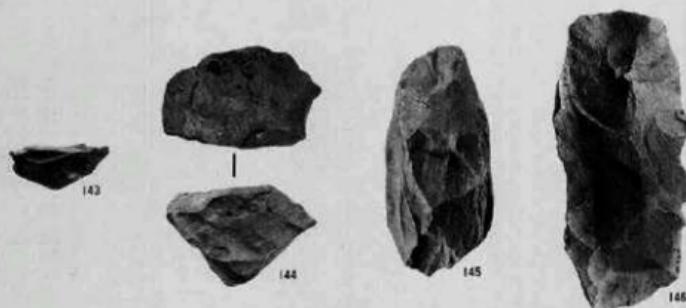
141

5 磨器 (1:3)

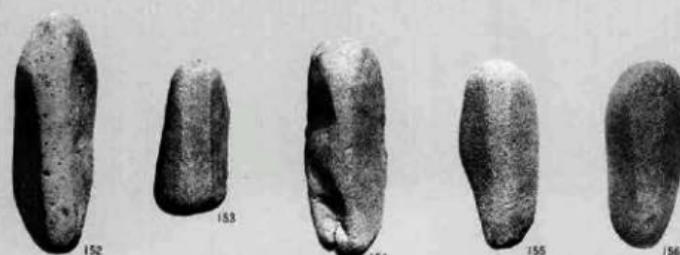
5



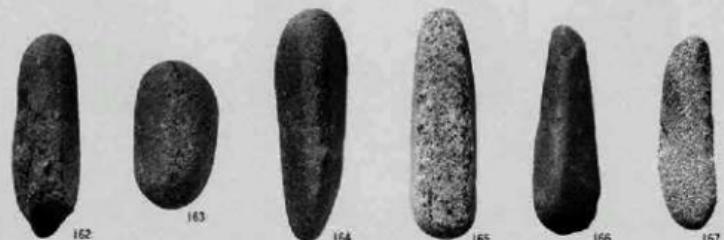
1 破片 (1:3)



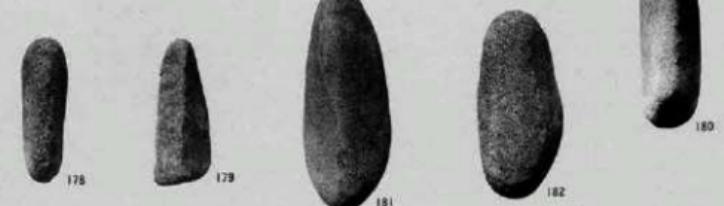
2 石核 (1:3)



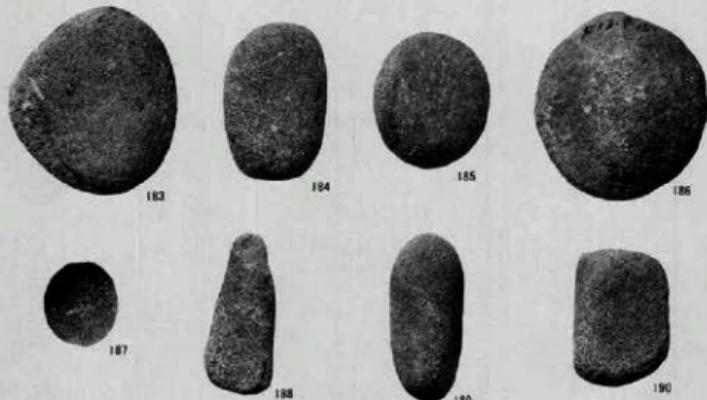
3 特殊磨石 (1:4)



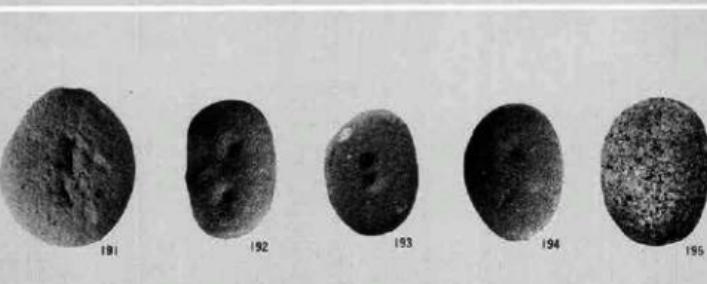
1 特殊磨石 (1:4)



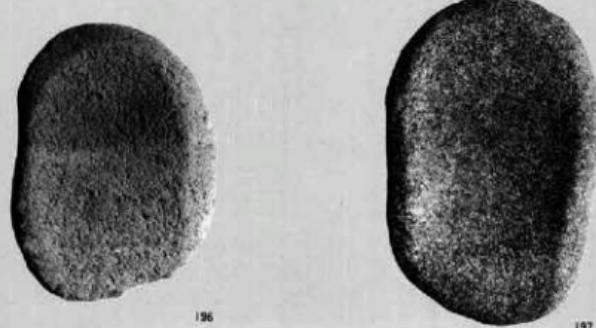
2 特殊磨石 (1:4)



1 磨石類 I-II類
(1:4)



2 磨石類III類
(1:4)



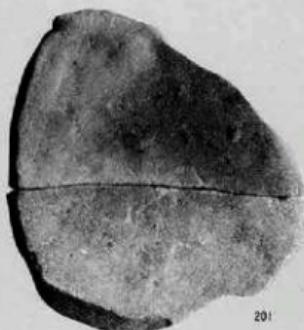
3 石皿 (1:6)

1 石皿未成品
(1:6)

2 台石 (1:6)



3 台石 (1:6)

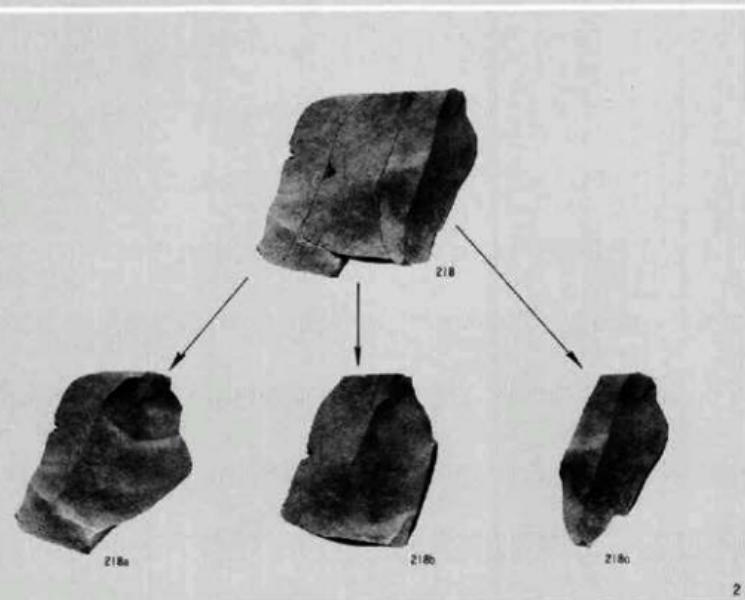


4 台石 (1:6)





1 砧石
(204-205)(1:4)
(206-207)(1:3)



2 鋸片接合資料
(1:3)



遺跡遺景
東(中里スキー場)から



確認調査風景



発掘調査風景



配石群・礎突出状況

南東から



遺構完掘状況

南東から



05 配石群

南東から



1 C5配石下土坑群
北西から



2 土層(D2)



3 土層(B4)



4 土層(D6)



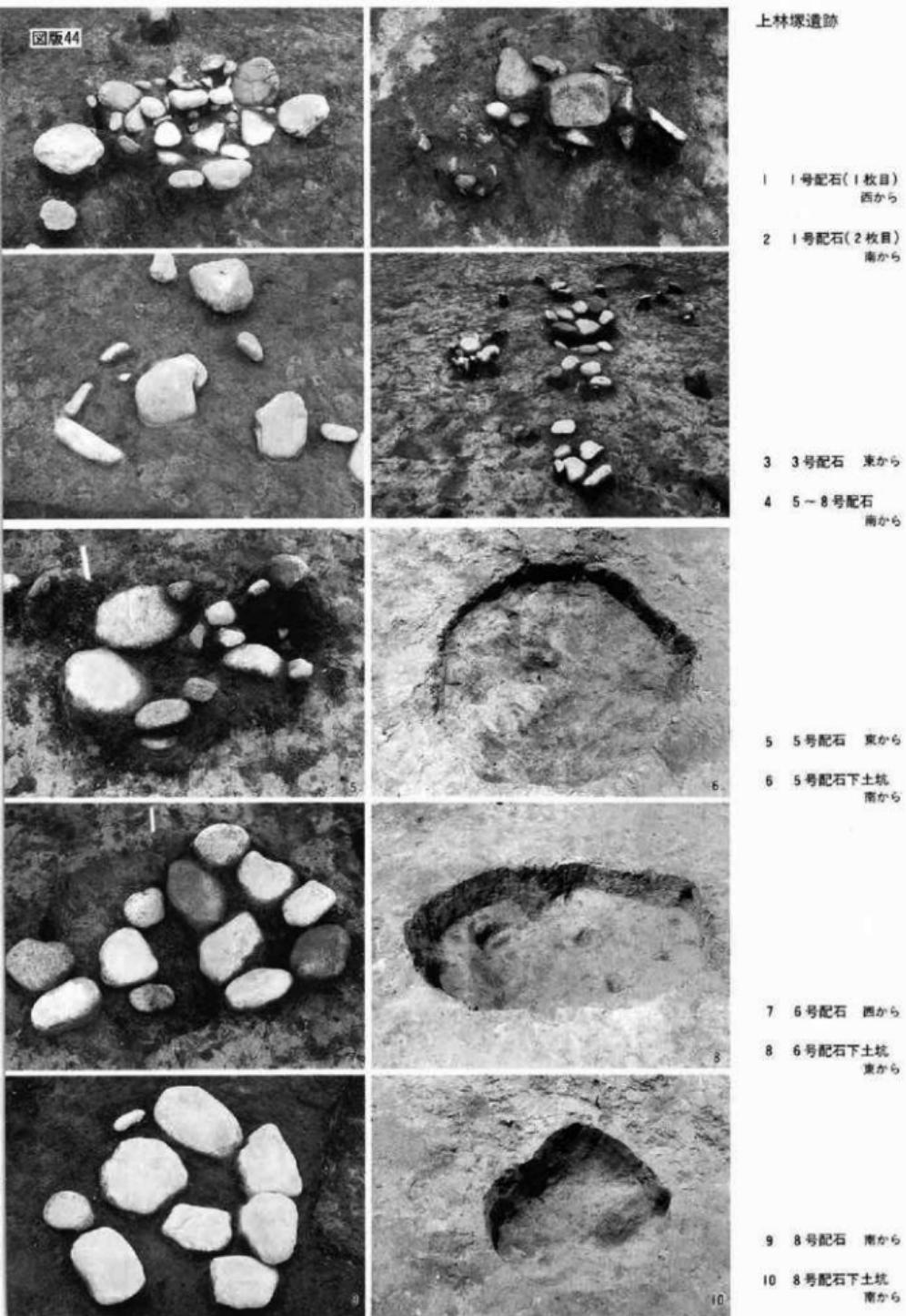
5 土層(D8)



6 旧石器時代文化層
確認状況 南から



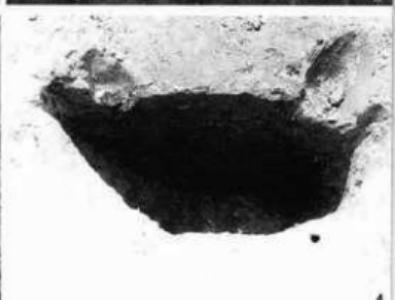
7 旧石器時代文化層
確認状況
南西から



1 9号配石 東から

2 10号配石
北東から

3 11号配石 西から

4 11号配石下土坑
土層断面 北から5 11号配石下土坑
南から

6 12号配石 東から

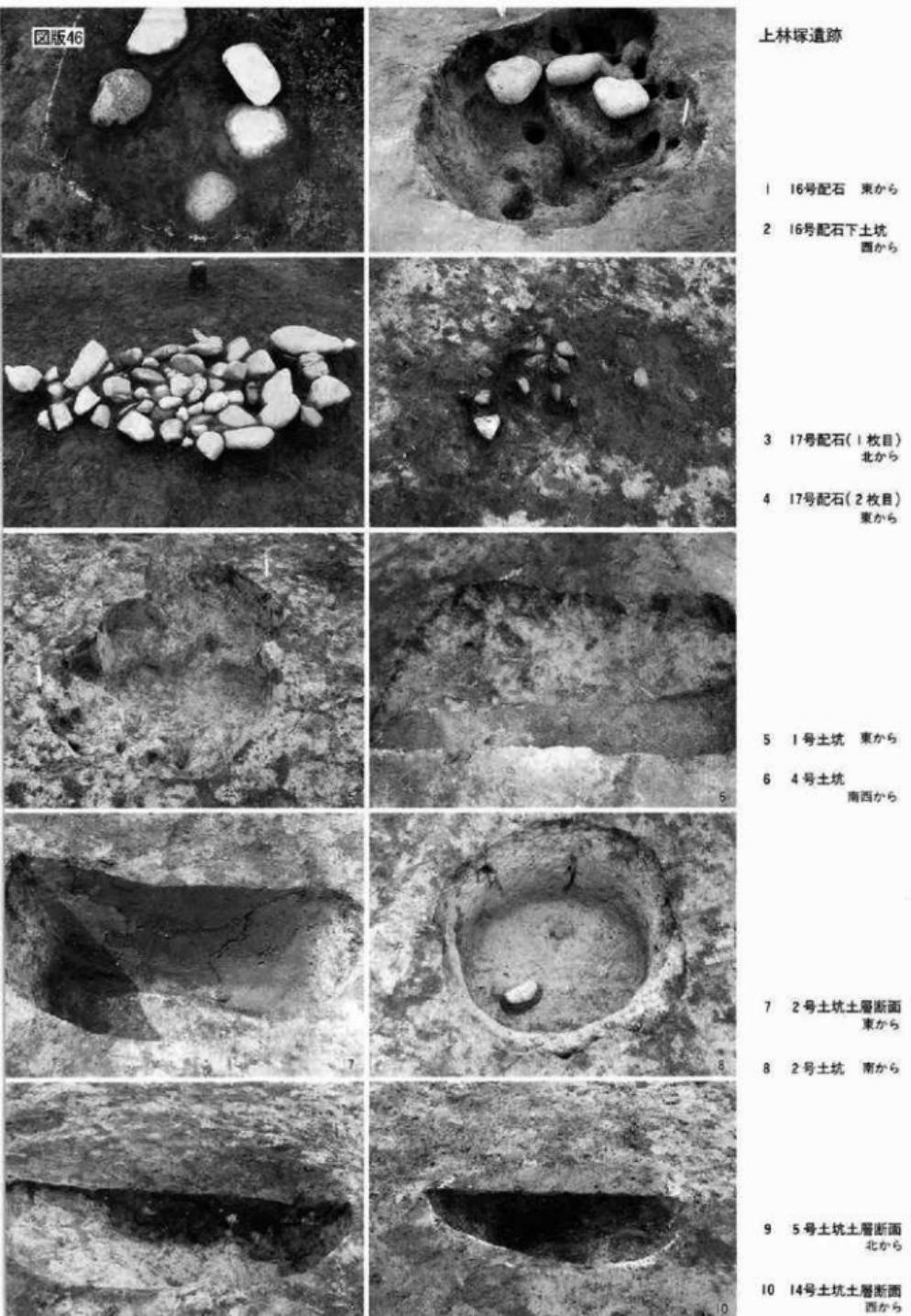
7 12号配石下土坑内
礫出土状況
西から8 12号配石下土坑
南から

9 13号配石 南から



10 13号配石 東から





1 9号土坑 西から



2 11号土坑 南から

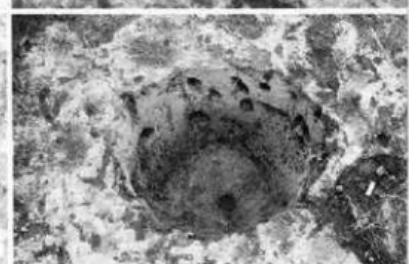
3 13号土坑土層断面
東から

3

4 13号土坑 南から



4

5 17号土坑土層断面
南から

6 17号土坑 北から



5

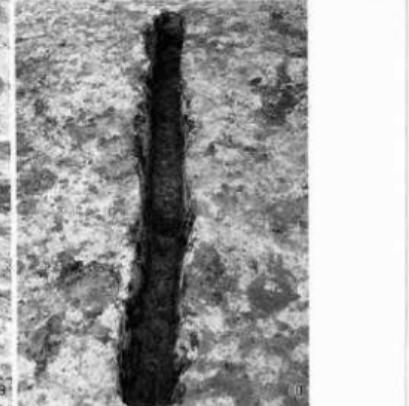
7 21号土坑土層断面
南から8 23号土坑土層断面
北から

6

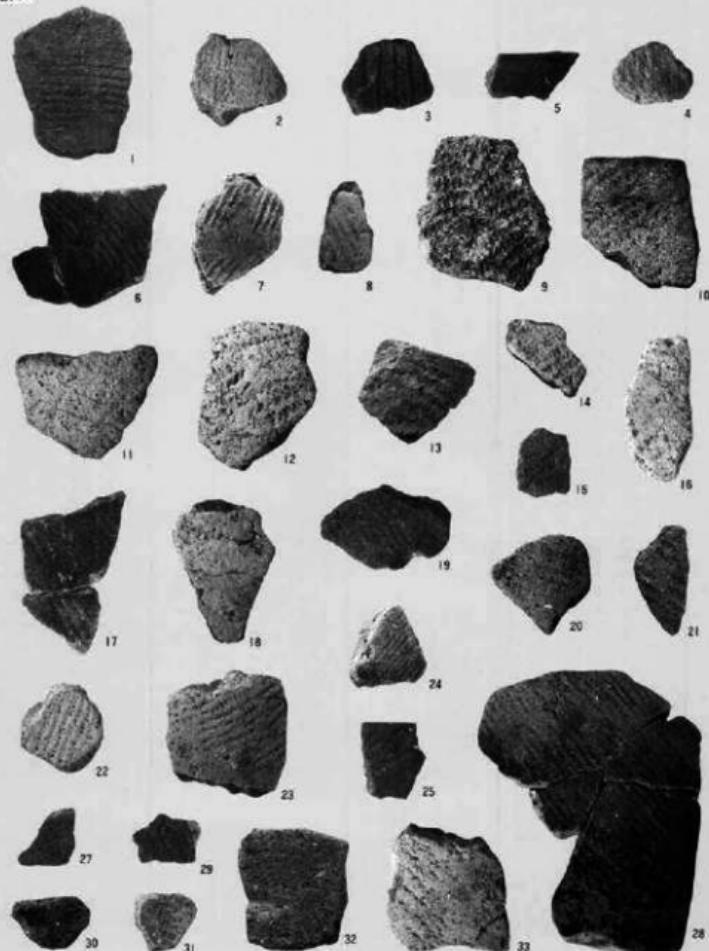
9 27号土坑土層断面
南から

7

10 27号土坑 南から

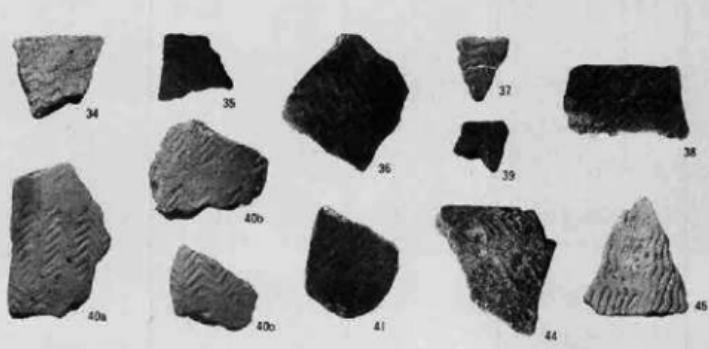


8



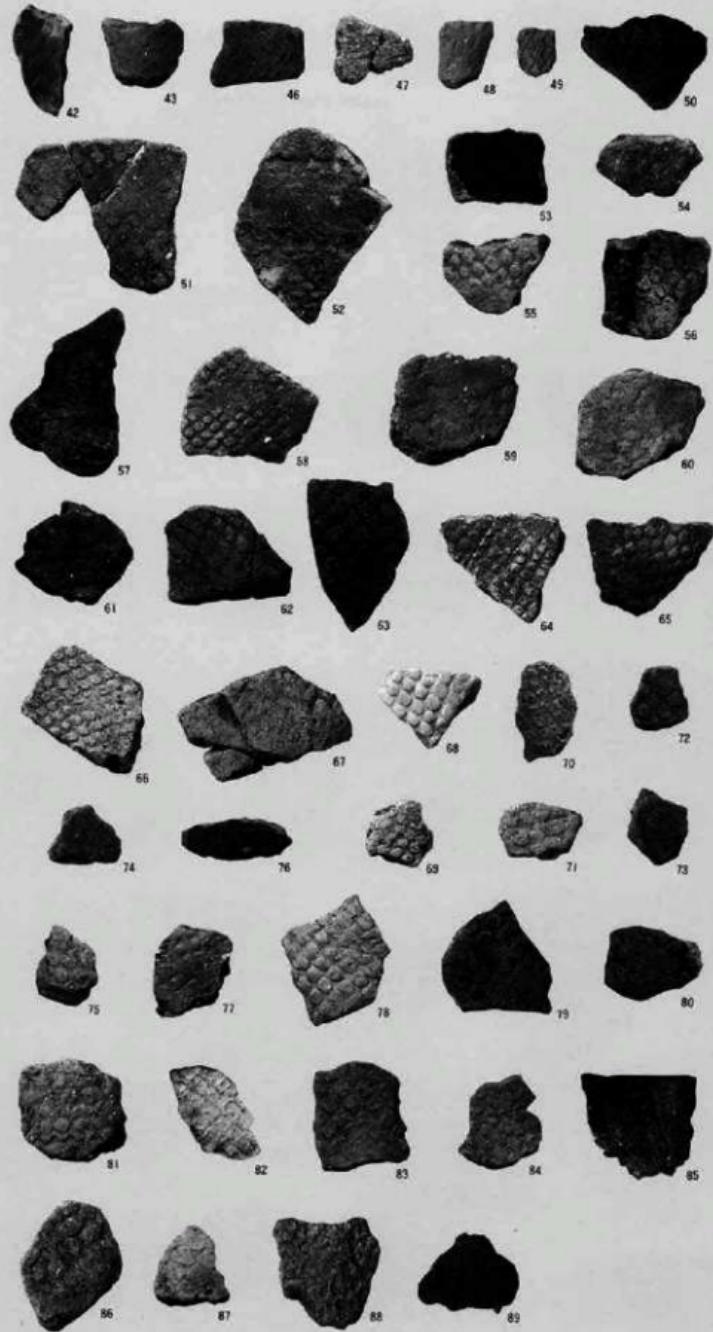
1 第Ⅰ群1・2類

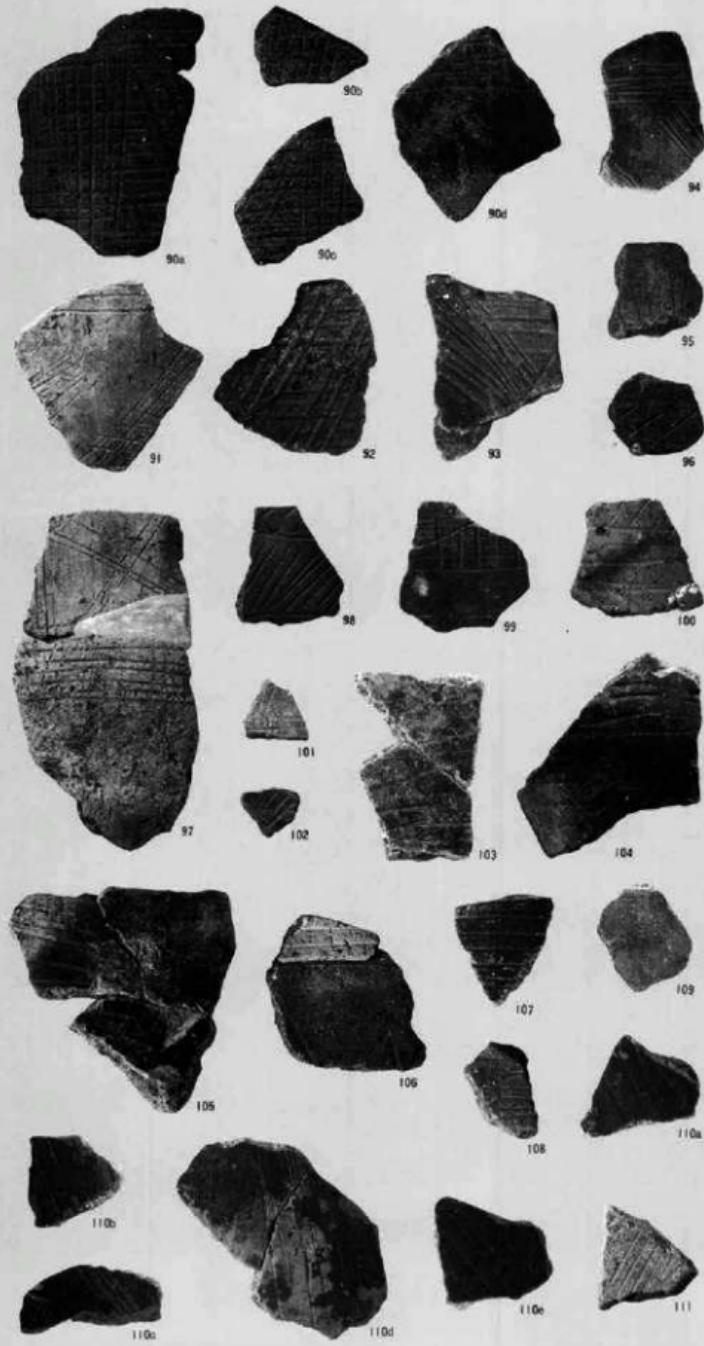
(1:2)



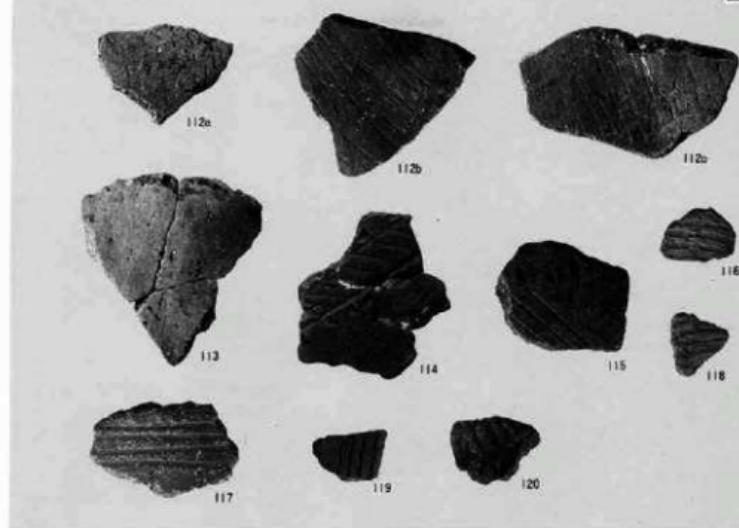
2 第Ⅱ群1類

(1:2)

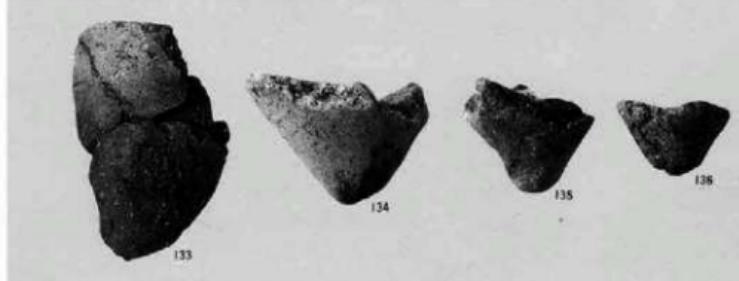




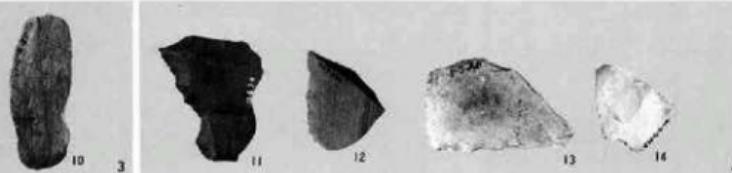
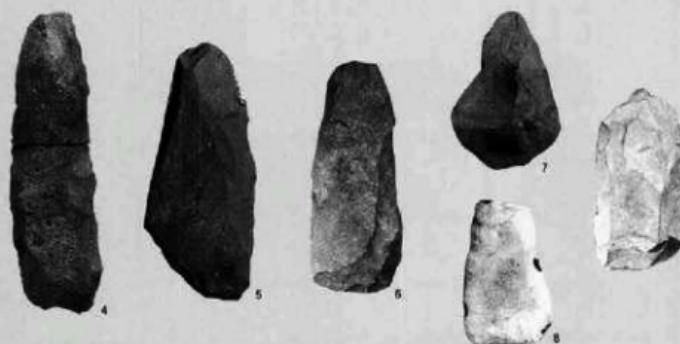
1 第III群 2~4類
(1:2)



2 第III群 5類(121~125)
第IV群(126~128)
第V群(129)
(1:2)



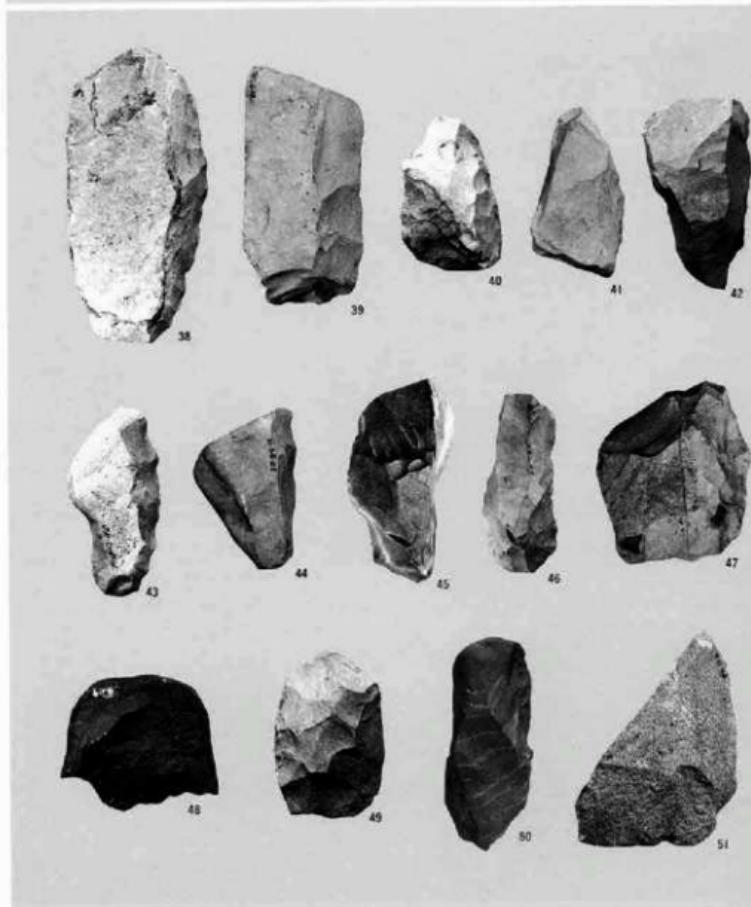
3·4 第VI群 (1:2)



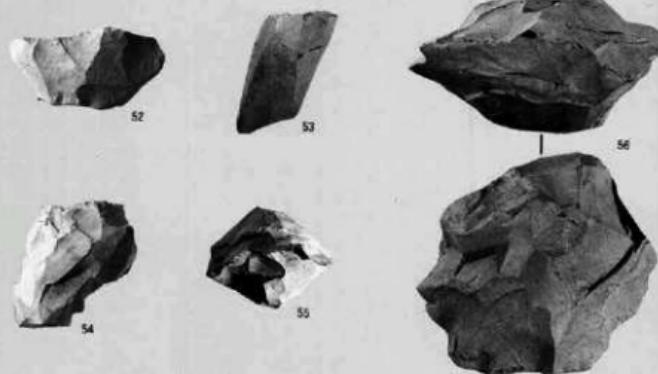
6 不定形剥片石器
IV類 (1:3)



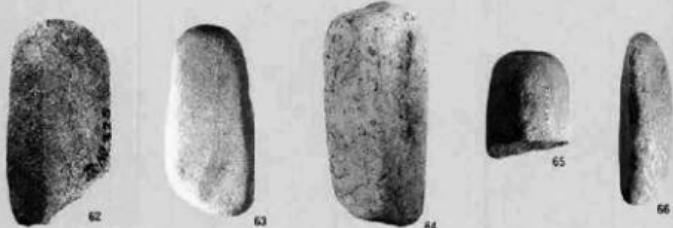
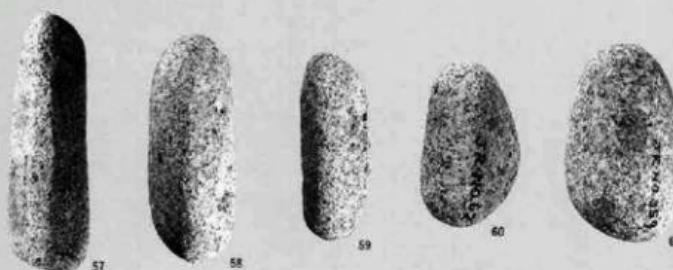
1 不定形剥片石器
Ⅳ類・使用痕のある剥片 (1:3)



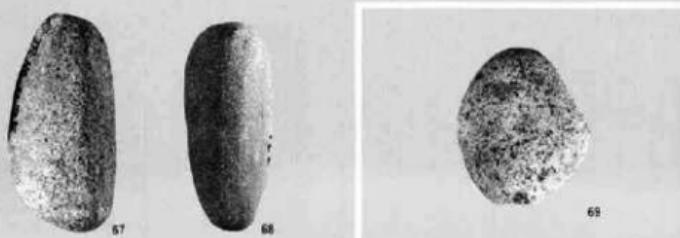
2 工具 (1:3)



1 石核 (1:3)



2 特殊磨石 (1:4)



3 磨石 (1:4)



70



71

1 石皿 (1:4)



72



73

2 合石 (1:6)



74



75



76



77

3 その他の遺物
(拡尺不同)

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第56集

関越自動車道関係発掘調査報告書

岩原 I 遺跡

上林塚 遺跡

平成2年3月25日印刷 発行 新潟県教育委員会
平成2年3月31日発行 新潟市新光町4-1

電話 (025)285-5511

印刷 長谷川印刷

新潟市学校町通1-6

電話 (025)228-3309